小　川

－県営ほ場整備事業宮保地区に係る発掘調査報告書－

1992

石川県立埋蔵文化財センター

小　川

－県営ほ場整備事業宮保地区に係る発掘調査報告書－

石川県立埋蔵文化財センター

(1)　平成元年度調査　第１号井戸（南から）

(2)　平成２年度調査　ブシャデン地区出土の糸枠

(1) 加賀地方の凝灰岩分類1

(2) 加賀地方の凝灰岩分類2

例　言

1　本書は石川県松任市小川町に所在する小川遺跡・小川新遺跡・伝小白山社跡地の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本調査は、石川県農林水産部耕地整備課施行の県営ほ場整備事業宮保地区小川工区に係り、同課の依頼により石川県立埋蔵文化財センターが実施したものである。費用は、石川県教育委員会、石川県立埋蔵文化財センターとの協議に基づく石川県耕地整備課の費用負担と、文化庁の補助金による。事前協議および発掘調査の実施に関しては石川県耕地整備課、石川県松任土地改良事務所、小川工区長はもとより、小川町の方々の協力を得た。記して感謝したい。

3　発掘調査は文化財保護法の主旨に基づき、埋蔵文化財の保存に影響が生じる排水路設置箇所等に限定し、その対象とした。田面部に存在する遺跡については、石川県立埋蔵文化財センターが実施した事前の分布調査をもとに、盛土工法の措置をとって遺跡の現状保存をはかっている。また伝小白山社跡地については、当初この措置によっても保存に影響が生じたため発掘調査の対象としたが、調査実施中に現状のまま保存されることとなり、周辺部の小トレンチ調査を実施するにとどめた。

4　現地調査の期間、面積、担当者は次のとおりである。また、調査員として藤重　啓、浅井武、中村繁和の協力を得た。

平成元年度調査　　平成元年６月26日～同年９月21日　1,850㎡　三浦純夫、川畑　誠

平成２年度調査　　平成２年８月６日～同年９月14日　　260㎡　松山和彦

5　出土遺物の整理作業は平成２、３年度に社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。また資料整理、写真撮影、図版作成等の作業については、藤重　啓、中村繁和、松田英博、田畑　弘（以上、調査員）の協力を得た。

6　本書の編集は川畑が担当し、次のように分担して執筆した。

第１章	宮本直哉
第２章、第３章第１節～第５節、第５章第１節	川畑
第３章第６節、第５章第３節	三浦
第４章、第５章第２節	松山

7　本書における挿図等の扱いは次のとおりである。

(1) 挿図中で指示した方位はすべて真北である。また、断面図の水準線に付した数値は海抜高（単位ｍ）である。

(2) 分担執筆としたため、用語等の統一はおこなっていない。

(3) 写真図版の出土遺物に付した番号は挿図の番号に一致する。

8　調査によって得られた資料（遺物、写真、スライド等）は、石川県立埋蔵文化財センターが一括して保管している。貸出しを行っているので有効に利用していただきたい。

目　次

例　言
第１章　位置と環境…… 1
　第１節　位置と地理的環境 …… 1
　第２節　歴史的環境…… 3
第２章　調査に至る経緯と経過…… 9
　第１節　調査に至る経緯 …… 9
　第２節　調査の経過…… 9
　　１．平成元年度調査…… 9
　　２．平成２年度調査…… 10
第３章　平成元年度調査 …… 13
　第１節　調査の概要…… 13
　第２節　第1、2トレンチ …… 15
　　１．調査区と土層層序…… 15
　　２．遺構・遺物…… 15
　第３節　第３トレンチ調査区と土層層序…… 15
　第４節　第３トレンチ１～12区 …… 20
　　１．１区…… 20
　　２．２～12区…… 20
　第５節　第３トレンチ13～14区 …… 21
　　１．調査概要…… 21
　　２．竪穴状住居…… 23
　　３．井戸…… 23
　　４．土坑…… 32
　　５．落ちこみ状遺構…… 43
　　６．溝…… 51
　　７．その他の遺構…… 52
　　８．包含層出土遺物…… 58
　第６節　伝小白山社跡地の調査 …… 75
　　１．調査の結果…… 75
　　２．遺物…… 75
　　３．若干の所見…… 79
第４章　平成２年度調査 …… 81
　第１節　小川新遺跡ブシャデン地区の調査…… 81

1．立地…… 81
2．層序…… 81
3．遺構の概要…… 81
4．西部の遺構と遺物 …… 81
5．東部の遺構と遺物 …… 89
6．調査区周辺採集資料 …… 90
第2節　小川遺跡アブラデン地区の調査 …… 91
第3節　まとめ …… 92
第5章　考　察 …… 101
第1節　平成元年度出土遺物の検討…… 101
1．中世陶磁器類についての若干の検討 …… 101
2．石製品の産地に関する一考察 …… 104
3．漁具について …… 118
第2節　小川新遺跡ブシャデン地区出土の糸枠について…… 121
第3節　中世の小河とその周辺—河と道と白山宮— …… 127

図 版 目 次

巻頭図版1　(1)平成元年度調査　第1号井戸（南から）　(2)平成2年度調査　ブシャデン地区出土の糸枠

巻頭図版2　(1)加賀地方の凝灰岩分類1　(2)加賀地方の凝灰岩分類2

図版1　調査区周辺空中写真
(1)1969年10月14日撮影　(2)1988年4月15日撮影

図版2　第1、2トレンチ　遺構1
(1)第1トレンチ完掘状況（西から）　(2)第2トレンチ完掘状況（南から）

図版3　第1、2トレンチ　遺構2
(1)第1トレンチ表土除去作業風景（東から）　(2)第1トレンチ第1～3号溝（東から）　(3)第1トレンチ第4号溝（東から）

図版4　第3トレンチ　遺構1
(1)調査前風景（東から）　(2)1区完掘状況（東から）

図版5　第3トレンチ　遺構2
(1)1区第1号堀（東から）　(2)1区第2号溝（東から）

図版6　第3トレンチ　遺構3
(1)2区完掘状況(西から)　(2)3区完掘状況(東から)　(3)4区完掘状況(東から)
(4)5区完掘状況(東から)　(5)6区完掘状況(東から)　(6)7、8区完掘状況(東から)

図版7　第3トレンチ　遺構4
(1)9区完掘状況（東から）　(2)10区完掘状況（東から）　(3)調査風景

図版8　第3トレンチ　遺構5
(1)13区完掘状況（西を望む）　(2)13区完掘状況（東を望む）

図版9　第3トレンチ　遺構6
(1)13区完掘状況（西を望む）　(2)13区完掘状況（西から）

図版10　第3トレンチ　遺構7
(1)14区完掘状況（東から）　(2)14区完掘状況（西を望む）

図版11　第3トレンチ　遺構8
(1)第1号竪穴状住居（西から）　(2)第1号竪穴状住居炉状配石（東から）

図版12　第3トレンチ　遺構9
(1)第1号井戸（南から）　(2)第3号井戸（南から）

図版13　第3トレンチ　遺構10
(1)第4号井戸（北から）　(2)第5、6号井戸（南から）

図版14　第3トレンチ　遺構11
(1)第5号井戸（北から）　(2)第6号井戸（北から）

図版15　第3トレンチ　遺構12
(1)第8号井戸（北から）　(2)第9号井戸（南から）

図版16　第3トレンチ　遺構13
(1)第1号土坑（南から）　(2)第5号土坑（南から）　(3)第6、9号土坑（南から）

図版17　第3トレンチ　遺構14
(1)第7号土坑（南から）　(2)第8号土坑（南から）　(3)第10号土坑（北から）

図版18　第3トレンチ　遺構15
(1)第11号土坑（北から）　(2)第18～20号土坑（西から）

図版19　第3トレンチ　遺構16
(1)第16号土坑（南から）　(2)第17号土坑（南から）　(3)調査風景

図版20　第3トレンチ　遺構17

(1)第21号土坑（南から）　(2)第22号土坑（南から）　(3)第24号土坑（南から）
図版21　第３トレンチ　遺構18
(1)第４号溝（北から）　(2)第５、６号溝（西から）
図版22　第３トレンチ　遺構19
(1)第５号溝遺物出土状況（南から）　(2)第７号溝遺物出土状況（南から）　(3)第７、８号溝（東から）
図版23　第３トレンチ　遺構20
(1)第１号落ちこみ状遺構（東から）　(2)第２号落ちこみ状遺構（東から）
図版24　第３トレンチ　遺構21
(1)第１号落ちこみ状遺構遺物出土状況（南から）　(2)第２号落ちこみ状遺構管状土錘出土状況（北から）　(3)第３号落ちこみ状遺構（南から）
図版25　第３トレンチ　遺構22
(1)第４号落ちこみ状遺構東端（西から）　(2)第４号落ちこみ状遺構西端（東から）
図版26　第３トレンチ　遺構23
(1)第４号落ちこみ状遺構東端田下駄出土状況（西から）　(2)13区石硯出土状況　(3)14区五輪塔水輪出土状況
図版27　伝小白山社跡地調査区　遺構１
(1)全景（東から）　(2)全景（西から）
図版28　伝小白山社跡地調査区　遺構２
(1)第１、２トレンチ完掘状況（南から）　(2)第１トレンチ完掘状況（東から）
図版29　伝小白山社跡地調査区　遺構３
(1)頂部の石柱　(2)第１、２トレンチ完掘状況（北西から）　(3)調査風景
図版30　伝小白山社跡地調査区　遺構４
(1)第３トレンチ完掘状況（東から）　(2)第４トレンチ完掘状況（北から）　(3)第５トレンチ完掘状況（西から）
図版31　第３トレンチ　出土遺物１
図版32　第３トレンチ　出土遺物２
図版33　第３トレンチ　出土遺物３
図版34　第３トレンチ　出土遺物４
図版35　第３トレンチ　出土遺物５
図版36　第３トレンチ　出土遺物６
図版37　ブシャデン地区　遺構１
(1)調査風景（西から）　(2)調査風景（東から）
図版38　ブシャデン地区　遺構２
(1)西部の遺構群　(2)第５号溝
図版39　ブシャデン地区　遺構３
(1)東部の遺構群　(2)第２号溝・第１号落ちこみ・第１号土坑（手前から）
図版40　アブラデン地区　遺構１
(1)調査風景（南から）　(2)調査区全景（南から）
図版41　ブシャデン地区　出土遺物１
図版42　ブシャデン地区　出土遺物２

挿　図　目　次

第１図　松任市の位置 …… 1
第２図　松任市小川町周辺の地形（縮尺１／20000） …… 2
第３図　小川遺跡・小川新遺跡とその周辺の遺跡（縮尺１／25000） …… 4

第４図　中世の手取川扇状地（縮尺１／100000）…… 6
第５図　平成元年・２年度調査位置図…… 11
第６図　平成元年度調査区全体図（縮尺１／4000）…… 14
第７図　第１、２トレンチ全体図（縮尺１／200）…… 16
第８図　第１、２トレンチ土層層序・遺構実測図…… 17
第９図　第３トレンチ土層層序実測図…… 18
第10図　第３トレンチ１区遺構実測図…… 19
第11図　第３トレンチ１区包含層出土遺物実測図（縮尺１／３）…… 20
第12図　第３トレンチ13区全体図（縮尺１／200）…… 21
第13図　第３トレンチ14区全体図（縮尺１／200）…… 22
第14図　第３トレンチ第１号竪穴状住居遺構・出土遺物実測図…… 24
第15図　第３トレンチ第１号竪穴状住居出土遺物実測図（縮尺１／５）…… 24
第16図　第３トレンチ井戸実測図(1)（縮尺１／30）…… 27
第17図　第３トレンチ井戸実測図(2)（縮尺１／30）…… 28
第18図　第３トレンチ井戸出土遺物実測図(1)（縮尺１／３）…… 29
第19図　第３トレンチ井戸出土遺物実測図(2)（縮尺１／３）…… 30
第20図　第３トレンチ井戸出土遺物実測図(3)（縮尺１／５）…… 31
第21図　第３トレンチ土坑実測図(1)（縮尺１／60）…… 35
第22図　第３トレンチ土坑実測図(2)（縮尺１／60）…… 36
第23図　第３トレンチ土坑実測図(3)（縮尺１／30）…… 37
第24図　第３トレンチ土坑実測図(4)（縮尺１／60）…… 38
第25図　第３トレンチ土坑実測図(5)（縮尺１／60）…… 39
第26図　第３トレンチ土坑出土遺物実測図(1)（縮尺１／３）…… 40
第27図　第３トレンチ土坑出土遺物実測図(2)（縮尺１／３）…… 41
第28図　第３トレンチ土坑出土遺物実測図(3)（縮尺１／５）…… 42
第29図　第３トレンチ落ちこみ状遺構実測図(1)（縮尺１／60・１／30）…… 45
第30図　第３トレンチ落ちこみ状遺構実測図(2)（縮尺１／60）…… 46
第31図　第３トレンチ落ちこみ状遺構出土遺物実測図(1)（縮尺１／３）…… 47
第32図　第３トレンチ落ちこみ状遺構出土遺物実測図(2)（縮尺１／３）…… 48
第33図　第３トレンチ落ちこみ状遺構出土遺物実測図(3)（縮尺１／５）…… 49
第34図　第３トレンチ落ちこみ状遺構他出土遺物実測図（縮尺１／５）…… 50
第35図　第３トレンチ溝実測図(1)（縮尺１／60）…… 53
第36図　第３トレンチ溝実測図(2)（縮尺１／60）…… 54
第37図　第３トレンチ溝出土遺物実測図(1)（縮尺１／３）…… 55
第38図　第３トレンチ溝出土遺物実測図(2)（縮尺１／３）…… 56
第39図　第３トレンチ溝出土遺物実測図(3)（縮尺１／６）…… 57
第40図　第３トレンチピット出土遺物実測図（縮尺１／３）…… 57
第41図　第３トレンチ石製品群出土遺物実測図(1)（縮尺１／３）…… 58
第42図　第３トレンチ石製品群出土遺物実測図(2)（縮尺１／５）…… 59
第43図　第３トレンチ石製品群出土遺物実測図(3)（縮尺１／５）…… 60
第44図　第３トレンチ包含層出土遺物実測図(1)（縮尺１／３）…… 61
第45図　第３トレンチ包含層出土遺物実測図(2)（縮尺１／３）…… 63
第46図　第３トレンチ包含層出土遺物実測図(3)（縮尺１／３）…… 64
第47図　第３トレンチ包含層出土遺物実測図(4)（縮尺１／３）…… 66
第48図　第３トレンチ包含層出土遺物実測図(5)（縮尺１／３）…… 67
第49図　第３トレンチ包含層出土遺物実測図(6)（縮尺１／３）…… 68
第50図　第３トレンチ包含層他出土銅銭実測図（縮尺１／１）…… 68

第51図　第３トレンチ包含層出土遺物実測図(7)（縮尺１／５）…… 70
第52図　第３トレンチ包含層出土遺物実測図(8)（縮尺１／５）…… 71
第53図　第３トレンチ包含層出土遺物実測図(9)（縮尺１／３）…… 72
第54図　調査区周辺表採遺物実測図（縮尺１／３）…… 72
第55図　伝小白山社跡地トレンチ実測図（縮尺１／80）…… 76
第56図　伝小白山社跡地測量図（縮尺１／200）…… 77･78
第57図　遺物実測図（縮尺１／３）…… 79
第58図　ブシャデン地区位置図（縮尺１／3000）…… 82
第59図　アブラデン地区位置図（縮尺１／3000）…… 82
第60図　ブシャデン地区全体図（縮尺１／150）…… 83
第61図　アブラデン地区全体図（縮尺１／150）…… 83
第62図　ブシャデン地区第５号溝実測図（縮尺１／60）…… 86
第63図　ブシャデン地区第４・６号溝実測図（縮尺１／60）…… 86
第64図　ブシャデン地区第３号溝実測図（縮尺１／60）…… 87
第65図　ブシャデン地区土層柱状図（縮尺１／60）…… 87
第66図　ブシャデン地区第１号土坑実測図（縮尺１／60）…… 87
第67図　ブシャデン地区第２号溝・第１号落ち込み実測図（縮尺１／60）…… 88
第68図　ブシャデン地区第１号溝実測図（縮尺１／60）…… 88
第69図　ブシャデン地区第３・４・５号溝出土遺物実測図（縮尺１／３）…… 94
第70図　ブシャデン地区第５号溝出土遺物実測図（縮尺１／３）…… 95
第71図　ブシャデン地区第５号溝出土遺物実測図（縮尺１／３）…… 96
第72図　ブシャデン地区第５・６号溝出土遺物実測図（縮尺１／３）…… 97
第73図　ブシャデン地区第６号溝出土遺物実測図（縮尺１／３）…… 98
第74図　ブシャデン地区第１号土坑・第１号落ち込み・第２号溝出土遺物実測図（縮尺１／３）
… 99
第75図　ブシャデン地区周辺採集遺物実測図（縮尺１／３）…… 100
第76図　行火・石鉢分類図 …… 105
第77図　加賀地方の石切り場分布図 …… 109
第78図　小川新遺跡石製品の流れ模式図 …… 115
第79図　県内出土の糸枠実測図(1)（縮尺１／３）…… 123
第80図　県内出土の糸枠実測図(2)（縮尺１／３）…… 124
第81図　手取川扇状地の河（中世）と道（中・近世）…… 128
第82図　「岩高く、瀬早き大河」を渡る他阿上人一行と川岸の武装集団…… 130

表　目　次

第１表　第11号土坑出土管状土錘一覧表 …… 41
第２表　第２号落ちこみ状遺構出土管状土錘一覧表 …… 48
第３表　包含層出土管状土錘一覧表 …… 65
第４表　出土陶磁器類破片数一覧表 …… 102
第５表　出土陶磁器類の割合 …… 102
第６表　日常用器（壺・甕・鉢）の産地と割合 …… 102
第７表　加賀地方石切り場一覧表 …… 108
第８表　加賀地方の凝灰岩分類試案 …… 111
第９表　遺跡出土石製品の石質分類 …… 114
第10表　遺跡出土管状土錘形態分類図 …… 117
第11表　管状土錘形態分類図 …… 117

第12表　遺跡出土管状土錘法量分布図 …… 117
第13表　遺跡出土管状土錘重量分布図 …… 117
第14表　中世史料にみる小川周辺の通過地名 …… 131

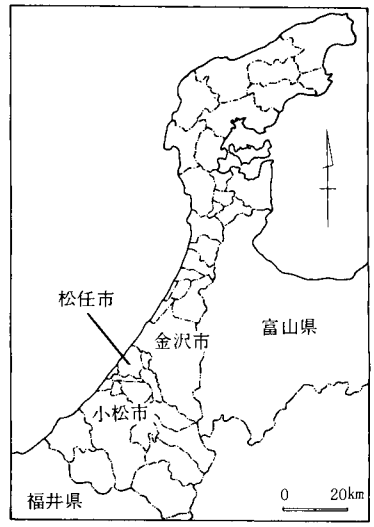
史　　料

史　料　小河および神符社（小白山社）関係史料 …… 129

第1章　位置と環境

第1節　位置と地理的環境

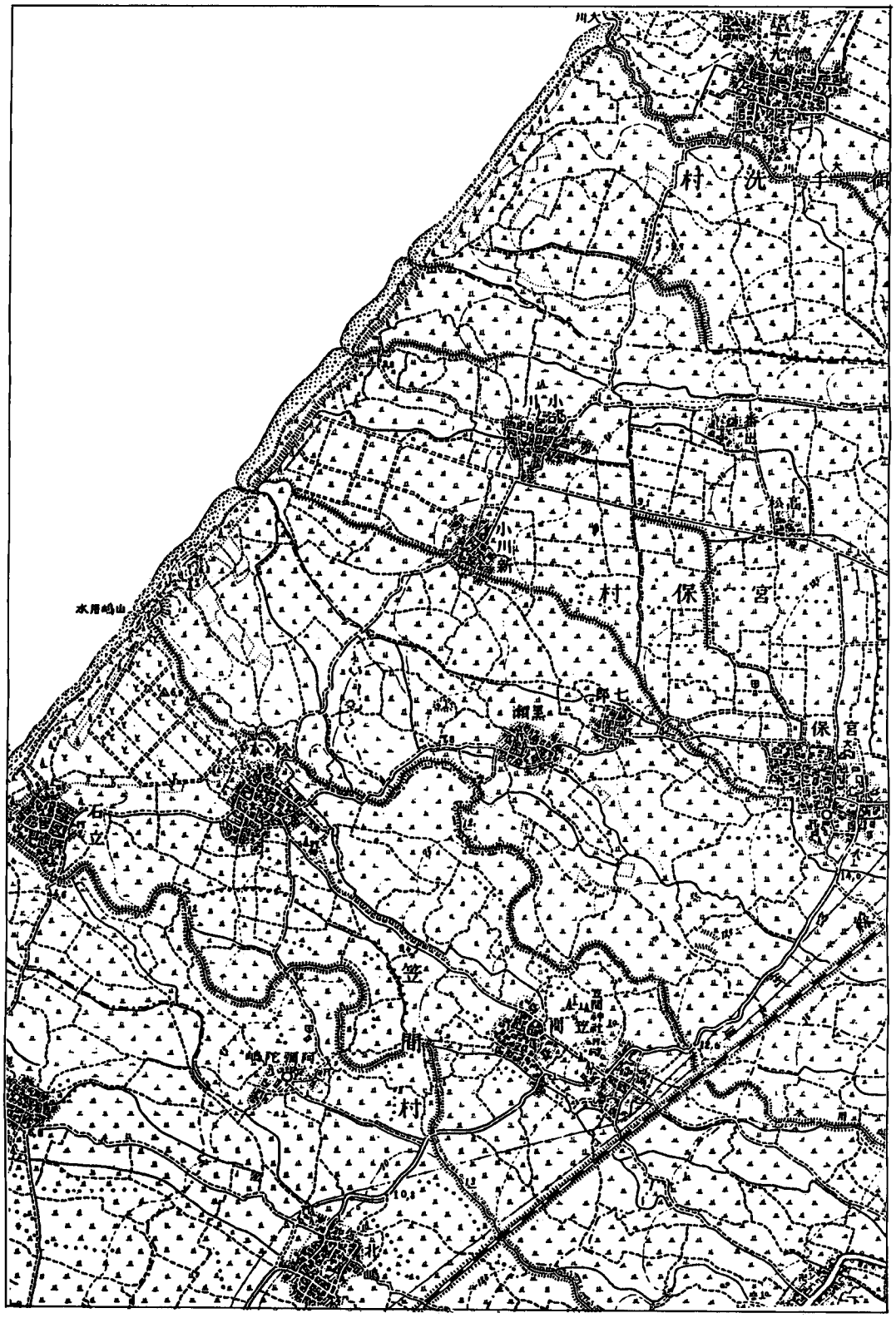
小川遺跡・小川新遺跡・伝小白山社跡地は石川県松任市小川町・上小川町に所在する。松任市は、金沢市に隣接し、白山を源流とする手取川によって形成された手取川扇状地中央部の扇央部から扇端部を占める。市域の中央を国道8号線とＪＲ北陸線が横断し、市の中央部から放射状に道路網が形成されている。市の面積は約59.75㎢、人口約6万人を有する。その市域は、昭和29～31(1954～1956)年にかけて行われた町村合併によって確定した。現在の松任市は一部に工業団地を形成しているが、基本的には金沢市のベッドタウンとしての位置付けられ、全ての面で金沢市の影響下にあるといっても過言ではない。松任市小川町・上小川町は、市中心部の西に位置し、日本海に面した旧宮保村の大字であった。明治中頃までは沿岸漁業や小規模海運業も盛んであったが、現在は稲作を主とする兼業農家が住民の大部分を占める。



第1図　松任市の位置

本遺跡の形成に不可分の手取川は、白山に源を発し、尾添・直海谷・大日などの水を集めて北流し、石川郡鶴来町に至って西に流れを変じて同郡美川町にて日本海に注ぐ。その流程は70kmを測る石川県内最長の河川である。「手取川はその水路を七度変えた」との如く、この川は暴れ川として知られ、残存する限られた文献からだけでも、本遺跡付近と現在の手取川との間を激しく流路を変えた様子が確認できる。

この手取川の長年の作用の結実が、標高約90ｍの鶴来町を扇頂とし北西方向に110度･半径約12kmの手取川扇状地である。ここでの地形の容貌は、帆立貝の貝殻のような形になっていることで、その微高地部分は紡錘のような島状を呈している。その低い部分には、手取川の旧流路といわれ、この扇状地を潤すために形成された七ケ用水と呼ばれる用水網、すなわち富樫･郷･中村･山島･大慶寺･中島･新砂川の各用水が流れており、本遺跡付近の水田は山島用水が潤している。このような扇状地内の地形の様相は、扇状地内に散見される「島」地名にも反映されている。扇状地内の大まかな島地形の検出は、現在でも標高40ｍ付近までは可能とされ、それ以下の標高では不明確となってしまう。しかし、現在の水田面の観察からでもかなりの高低差が認められ、また、近年の発掘調査によって細かな谷と微高地とが検出される事例がよく報告されている。したがって、本遺跡付近の現地形は平坦ではあるが、それは自然と人間の長きにわたる営みの結果であり、実際には微高地と微低地が複雑に入組んだ地形であったと考えるのが妥当であろう。そして、本遺跡を含む周辺の多くの遺跡が、そうした水の流れに沿って形成された微高地に営まれている。(1)



第２図　松任市小川町周辺の地形（Ｓ＝1/20000、明治42年測図）

第2節　歴史的環境

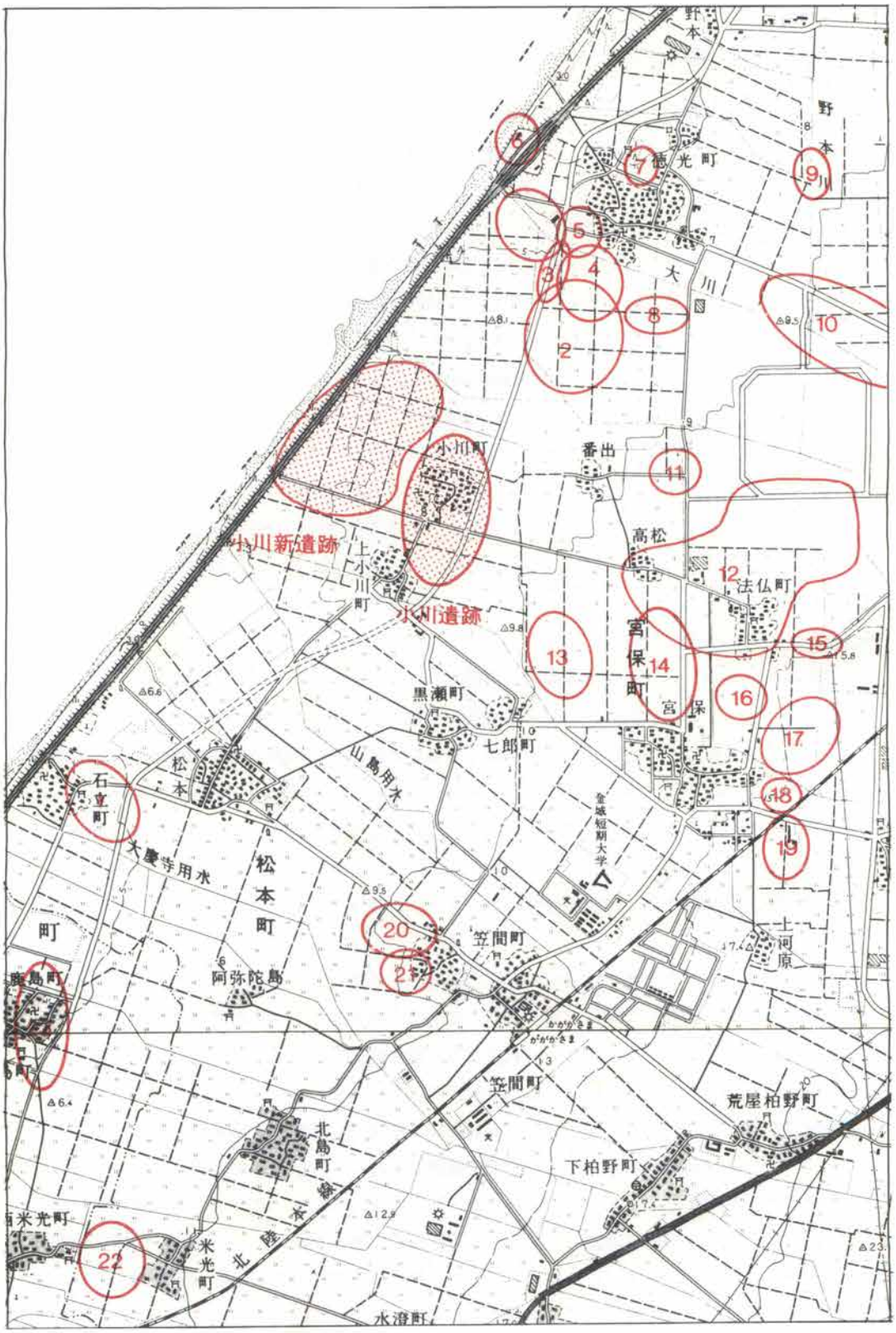
古墳時代以前　本遺跡付近での古墳時代以前の遺跡分布は極めて希薄である。縄文時代の遺跡は、松任市徳光町の最も海岸線沿いで包含地として確認されている徳光遺跡があるが、現在までに調査された集落としては、本遺跡の北東約5.5kmの旭遺跡群が最も近いものである。弥生時代に至っても、徳光ジョウガチ遺跡で前期・後期～終末、徳光ヨノキヤマ遺跡では中期～後期といった遺跡が確認されているに過ぎないが、徳光遺跡の北、松任市相川町に至るとかなりの遺跡分布が確認できる。これらは、いずれも手取川扇状地の扇端部の縁辺に位置する低湿な地下水自噴地帯に営まれている。また、松任市徳光町付近を南限とした海岸線に沿って存在する泥炭(ボカ)層には、主として弥生時代終末～古墳時代前期の遺物が包含されていることが知られている。古墳時代には、扇端部及びやや扇央部に近い地域では、遺跡数が飛躍的に増加する。しかし本遺跡付近で確認されているものは、後期の徳光古屋敷遺跡をかぞえるのみである。

古代　弘仁14(823)年6月に加賀国が立国されると、石川郡と能美郡とがこの手取川扇状地地域の管郡として成立する。郡の下に郷が設置されていたことは周知の事であるが、本遺跡付近は「和名類聚抄」記載郷のうち笠間郷内に比定される。笠間郷の北には椋部郷、南には山下郷、東には中村郷が位置していたことが、おおまかに推定されている。また延喜式内社に推定される笠間神社が松任市笠間町に鎮座する。

本遺跡付近の奈良・平安時代の代表的な遺跡としては、北安田北遺跡・法仏遺跡があげられる。この両遺跡とも奈良時代の竪穴住居、平安時代を盛期とする掘立柱建物が多数検出されており、県内有数の集落遺跡である。一部未報告もありその全体像は不明であるが、両遺跡ともこの地域の基幹集落として位置付けられている。この両遺跡の近辺には、第2図の範囲外ではあるが、ほぼ同時期の平木B遺跡、源波遺跡、中村ゴウデン遺跡、道村遺跡があって、小規模な集落跡として確認されている。これらの遺跡で検出された集落はいかなる関係にあったのか、文献史料からのアプローチである編戸制・班田制研究とあいまって、集落の構造・変遷等の集落史研究には欠かせない対象となろう。

8世紀後半になるとさまざまな要因で農民の階層分化が進行し、班田制は崩れ、富裕農民層が没落農民の労働力を吸収して墾田を拡大して、諸王・中央貴族と結ぶものさえ現れる。また国司の役割も官物を中央政府に進納するだけを請負う立場に変貌する。この時期になると一般に国家的勧農は終局を迎え、在地諸階層による比較的小規模な再開発へ移行する段階に入る。そして、国家機構に依存して開発経営を行ってきた8世紀後半に成立した初期庄園も、やはりこの時期に衰退している。上記の遺跡の盛衰もその中で位置付けられるのではないかと思う。

中世　律令制が弛緩した平安時代、国司として地方に下向した中央貴族は、国司権能を生かし、あるいは地方豪族との婚姻を通じて、武力を結集し在地に勢力を張るようになる。所謂武士団の形成である。特にこれらの階層が荒廃した耕地を再開発する強力な担い手となる傾向が強い。浅香年木も、手取川扇状地の再開発は一旦荒廃した条里制施行地区内での水田を在庁・郡司層が再



第３図　小川遺跡・小川新遺跡とその周辺の遺跡（S＝1/25000）

第3図　遺跡名一覧

1石立城・狩野隠岐館跡(室町)　2徳光聖興寺遺跡(中世)　3徳光ヨノキヤマ遺跡(弥生・中世)　4アベノ願証寺跡(不詳)　5徳光遺跡(不詳)　6徳光遺跡(縄文)　7大和隼人遺跡(不詳)　8徳光古屋敷遺跡(古墳)　9平木B遺跡(弥生後期・平安)　10北安田北遺跡(弥生～平安)　11番田・高松遺跡(平安・中世)　12法仏遺跡(弥生～平安)　13宮保C遺跡(奈良・中世)　14宮保鶴丸遺跡　15法仏南遺跡　16赤松次郎宮保本陣跡(室町)　17宮保光明寺遺跡(中世)　18宮保館跡(中世)　19宮保B遺跡(不詳)　20賢徳寺跡(不詳)　21笠間兵衛家次館跡(室町後期)　22米光万福寺遺跡(中世)　23鹿島遺跡(中世)

開発し、私領化したケースとしている(2)。「芋粥」の説話で知られる鎮守府将軍藤原利仁の後裔と称する加賀斎藤氏の一族は、その開発の有力な主体であり、石川郡拝師郷を名字の地とする林氏と同郡富樫郷をそれとする富樫氏とに分流して発展を遂げる。また、道君の系譜を引くという上道氏の一族も重要な役割を果たす。その配置は第4図に示したが、本遺跡付近は上道氏の一族である宮保氏・米永氏・笠間氏・柏野氏らがその勢力を張っていた地域に該当する。宮保館跡の調査では13世紀の方形の堀を検出しており、宮保氏の館の可能性を有する。手取川扇状地内では、こうした館の伝承地はかなり存在するが、その多くは考古学上の実態が明らかでない。

承久3(1221)年の承久の乱で加賀国内は関東に本拠を置く外来地頭が優勢となり、守護も北条氏一門が補任されている。この中にあって富樫氏は守護使を務めるなどしてその命脈を保ち、南北朝期には足利尊氏に従い、建武3(1336)年には念願の加賀守護となる。しかし一時期、斯波・赤松氏にその地位を奪われ、また半国守護設置など、富樫氏の地位は安定したものではなかった。また、加賀は室町将軍直属の奉公衆が多く、幕府料所も畿内近国に匹敵するほど存在していた。したがって富樫氏は、その管国に、支配の及ばない多くの人と土地を抱えるという、大名となるには致命的な悪条件を所持していたのである。

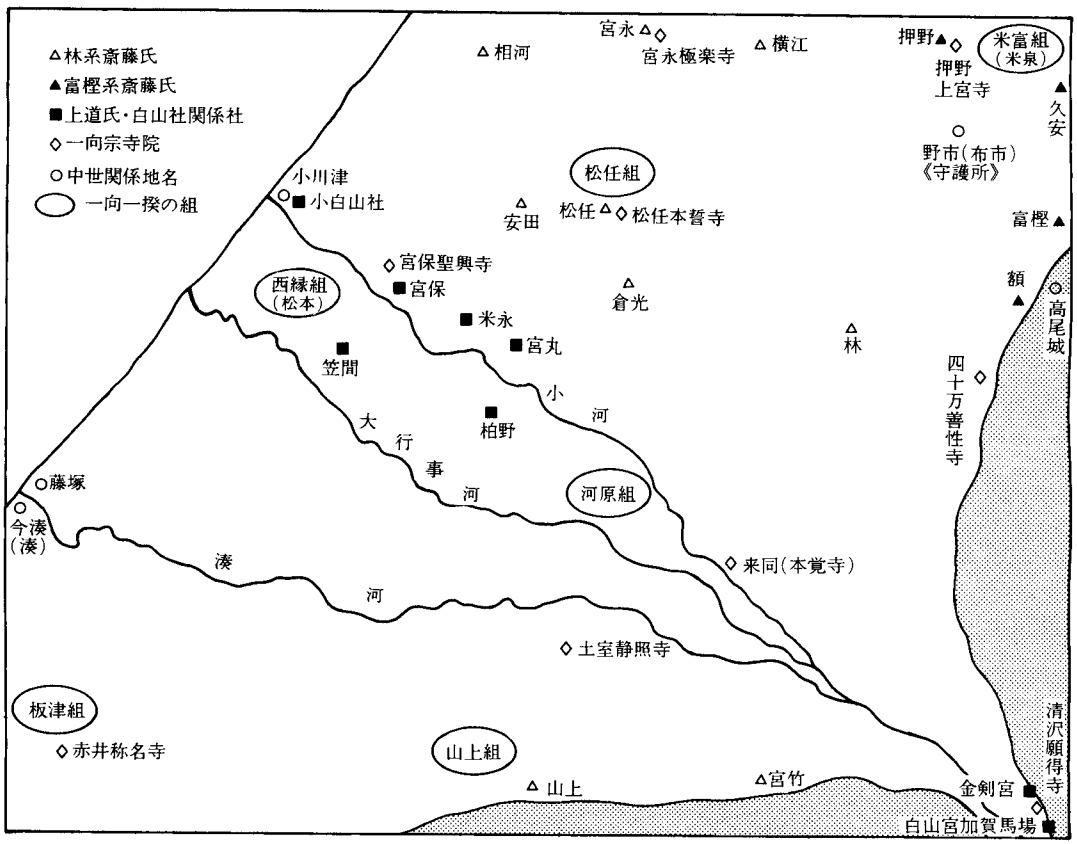
中世前期の加賀では、白山社加賀馬場勢力は、白山社による国司解任にまで発展した安元事件に代表さるごとく強大であり、富樫氏をはじめとして、その一族を白山社に入れて関係強化を図っている。本遺跡付近は白山社家上道氏の一族が名字の地とし、そのためか白山社領が各地に散在している。また、『白山之記』には小河に小白山社(神符社、別山の大行事を勧請)があり、「国之八社」の一として白山「惣門」の所在地であったという。本遺跡調査地点に隣接して、小川小白山神社の旧跡があり、小字として「北社」・「中社」・「小中社」・「大宮」・「馬場」・「総門」が残っている(3)。近年発見された「医心方紙背文書」には、大治2(1127)年に「小川津」の存在が確認されたが(4)、白山社自身の物資運搬はもちろんであるが、律令制弛緩後の白山社の加賀における政治経済力を考慮に入れれば、白山社による交通要衝の掌握という一面も無視できまい。この地域の中世遺跡においては、白山社関係に充分注意を払う必要があろう。

さて、中世交通路および手取川の旧河道に関しては、断片的な記録が残るのみその正確な復元は困難であるが(5)、確認できる範囲を示しておきたい。古代においては、天平勝宝7(755)年東大寺に施入された幡生庄の四至記載の比楽河が、現在の手取川にあたる。その河口部には「和名類聚抄」記載の能美郡比楽駅が設置され、安宅駅からの海岸線を通る古代北陸道が内陸の田上駅

へ転じる交通の要衝となっていた。比楽の比定地は美川町平加付近とされる。8世紀には比楽河が手取川の本流として機能していたようである。[6]

鎌倉時代後期の正応4(1291)年加賀を旅した一遍について、今湊(美川町湊に比定)・藤塚(美川町中心部に比定)を経て宮腰(金沢市金石に比定)へ向う道すがら「小川といふ名のミにして岩高く瀬早き大河あり」と『遊行上人縁起絵』[7]の詞書は記している。また「三宮古記」には「河ヨリ南方、寺井、安宅、福富」とあって福富(松任市福留に比定)の北に河道が存在していたことがわかる。[8]『源平盛衰記』には「小川大行事の洪水」との記載があるが、平安末から中世前期にかけては小河・大行事河(現在の大慶寺川)が手取川の本流機能を担っていたようであり、河口部には小川津があって、日本海流通路と接点を結んでいたと考えられる。

室町時代後期の延徳3(1491)年、冷泉為広の加賀通路の旅程について「越後下向日記」では、河口部で渡河した「ミナト河」のほかに、「カサバ」(松任市笠間)の註に「河」と記しており、二本の河川が存在していたようである。したがって、この時期までには手取川本流は南遷して河口部では現河道とほぼ重なる「湊河」となり、その他に「河」(小河か大行事河)が流れていたようである。さて、冷泉為広の旅程は「ミナト河(湊)－テフヤ(長屋)－エナミヂ(米光)－カサバ(笠間)－宮ノホウ(宮保)－ヤスダ(安田)－マツタウ(松任)－トクマ(徳丸)－ナガオキ(中興)－イサリ野(稲荷?)－布イチ(布市・野市)」[9]であるが、この経路は、木曽義仲の進軍



第4図　中世の手取川扇状地(S＝1/100000)

路との伝承を持つ木曽街道とほぼ一致する点が興味深い。おそらく中世後期には、湊河を渡河するため河口部付近の道と河口部より約3㎞上流の後の北国街道とが併用されていたのではないだろうか。

守護富樫氏を倒した一向一揆は、室町後期から戦国期にかけての加賀で欠かせない要素であり、「百姓の持ちたる国」とも称されている。長享2(1488)年、守護富樫政親は反政親派の国人・土豪に本願寺門徒が加わった連合軍に攻められ、高尾城で敗死する。これが長享一揆である。以後も富樫氏の一族が守護となるものの、史料上からその実像が殆どうかがえなくなる。ところで、長享一揆の背景には、その10余年前の文明年間には既に形成されていた在地土豪層の地縁的結合である「組(与)」とその郡単位の連合体たる「郡」の実力向上があった。

永正3(1506)年以後、本願寺実如は細川政元という幕府有力者の要請もあって、増大した門徒層を背景に、若松本泉寺・波佐谷松岡寺・山田光教寺(賀州三ヶ寺)という法主の血脈を中心に置き、「郡・組」を本願寺の加賀支配組織として組込んでいった。ただ「郡・組」は本来弱小の在地土豪層が外圧に対抗し得る実力を所持するために形成されたものであり、寄合を行い、領域内にふりかかる諸問題を処理するものである。したがって、「郡・組」にとって本願寺は組織の政治的な外護者という立場であったと考えたい[10]。

享録4(1531)年、賀州三ヶ寺と越前国から亡命した藤島超勝寺・和田本覚寺との間で抗争が始り、後者が勝利して、以後本願寺主導の下加賀教団の直参化が図られるとともに、「郡・組」への支配も強化される[11]。しかし、天文15(1546)年金沢御堂の成立によってはさしたる変化は見られない。本願寺が自らの内衆を金沢御堂の坊官として下向させ、加賀の直接支配の乗り出すのは、元亀2(1571)年に至ってからである。この時期になると金沢御堂内の対立のほか、御堂衆と「郡・組」との抗争が表面化し、内部矛盾が広がっている[12]。天正5(1577)年に入ると、柴田勝家を将とする織田軍が進攻し、南加賀は一気に制圧されてしまう。一揆勢は越後上杉謙信と結び抵抗を示すが、天正8(1580)年には北加賀も、鳥越・二曲城を拠点とした白山麓の山内衆を除いて織田軍の手に落ちる。

さて、本遺跡付近は一向一揆では石川郡の管轄に入り、西縁(松本)組の領域であった。その組の旗本の館と推定されるのが笠間兵衛家次館跡であるが、考古学的な実体は不明である。また寺院としては宮保聖興寺が文献史料上散見され、その伝承地が徳光聖興寺遺跡である。伝承の基礎となった寺伝は「天文日記」(本願寺法主証如の日記)などと矛盾する点も多く、その内容を単純にあてることはできないが、中世の良好な遺構・遺物を検出している。このほかの中世遺跡としては、米光万福寺遺跡があり、東福寺末寺という文献史料の裏付けがとれている。鳥越城以外には、一向一揆を彷彿とさせる遺跡は、これまでのところ確認されていないが、一向一揆関係寺院跡と推定されている所はかなり存在する。

註

(1) さて、旧石川郡安原村(現金沢市)ではじまった耕地整理事業は、明治末～大正にかけて手取川扇状地のほとんどで行われている。この事業によって、今回の圃場整備事業にかかわりなく、旧地形や地割りの多くが失われたことは否めない。しかし、短期間の内に、手取川扇状地という一定のまとまりを持った地区の大部分が一区画最大1ha余の水田に変貌してしまう対象となった今、失われていない或いは復元可能な目に見えない文化遺産に関する調査を行うべきでなかったのか。昭和53(1978)年の地方史研究協議会大会において提起された「圃場整備に対する宣言」では、水田そのものの記録保存について、学際的な多角調査の必要性が強く訴えられたが、石川県内の圃場整備事業に関しては、埋蔵文化財には一定の配慮がなされたが、その他に関しては充分応え得るとは言い難い。

(2) 浅香年木「古代における手取川扇状地の開発」『古代地域史の研究』法政大学出版局　1978。

(3) 「白山之記」(金沢大学日本海文化研究室『白山史料集 上』石川県図書館協会　1979)。小字に関しては、宮保村史編輯委員会『宮保の歴史』(松任市宮保公民館　1971)を参照した。

(4) 加能史料編纂委員会『加能史料　平安Ⅳ』石川史書刊行会　1989。

(5) 第4図は手取川扇状地内の中世の主要な地名などを示したものである。但し、中世全般を書込んだため、全てが同時期に存在していたわけではないことを、お断りしておく。紙幅の都合とは言え、判読しづらい図を作成したことをお詫びしたい。なお。河道復元に関しては、三浦純夫氏が「中世米光の検証」(『米光万福寺遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　1987)で示された図を利用させていただいた。

(6) 「東大寺諸国庄々文書并絵図等目録」(「東大寺文書」『加能史料　平安Ⅱ』)。なお、比楽河には「渡子」が置かれていた(『日本三代実録』貞観11年2月23日)。

(7) 『新集日本絵巻物全集　23巻』角川書店　1979。

(8) 金沢大学日本海文化研究室『白山史料集 上』石川県図書館協会　1979。

(9) 小葉田淳「冷泉為広卿『越後下向日記』と加賀の旅路」『日本歴史』472　1987。この記録は地名等の錯綜のほか、通過したのか遠望したのか判別不能の部分もあるが、中世の代表的交通路を示すものであろう。

(10) 「郡・組」の指導者層が本願寺門徒であったことは史料上も確認できる。また、在地の農民層の門徒化を考えたとき、本願寺の宗教的権威の利用を考える必要があろうが、本来この種の一揆組織は宗教をその形成原理にしているものはない。「組」が宗教奉仕のための組織として形成されたと考えるのは、この時期の多地域の同種の組織を見る限り容易に肯定することはできない。

(11) 浅香年木氏は享録錯乱以後の状況を「超・本両寺体制」として、超勝寺と本覚寺とが賀州三ケ寺の役割を果したように評価されている(『小松本覚寺史』能登印刷出版部　1989)。確かに加賀教団の直参化の中にあって、両寺とも自らの門徒集団を増やしているものの、「郡・組」に対する命令は本願寺から直接行われており、本願寺の代理者としての位置付けは無理ではないか。

(12) 「郡・組」はその形成原理と離れて、本願寺と織田政権との対立に巻き込まれようとするにあたって、本願寺の意志を代弁する御堂衆と対立したのではないか。鈴木良一氏の「本願寺と一向一揆は別もの」(「戦国の争乱」『岩波講座日本歴史　中世4』　1963)という考えを今一度思い起こす必要があろう。

第２章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

県営ほ場整備事業宮保地区小川工区は松任市南西部の小川町地内に位置し、昭和58年度に計画策定がなされた。事業の主管は石川県農林水産部耕地整備課であり、担当は石川県松任土地改良事務所である。事業対象地区は大正年代に一筆６～８ａに区画整理がされている。今回、現況の水田を一筆30ａに大型化し、用排水路の分離、農道の整備等を行い、農地の集団化を図り、大型機械の導入により労力の節減とともに農業経営の近代化を推進する目的で事業が実施された。

石川県立埋蔵文化財センターは県営ほ場整備事業に関する埋蔵文化財の保護に対して、事前に分布調査を実施、埋蔵文化財の存在する区域では基本的に田面を盛土施工とし、埋蔵文化財が保存されるよう関係機関と協議を進めてきた。そして、やむを得ず埋蔵文化財が影響を受ける排水路等で発掘調査を実施するよう対応してきた。同事業地区においても、昭和61年度秋に次年度事業対象地区約70haを踏査および重機による試掘の方法で分布調査を実施、約４haに埋蔵文化財の存在を確認、協議のうえ田面の盛土保存の措置をとっている。また、昭和62年度には次年度事業対象地区約12haを踏査および重機による試掘で分布調査を実施し、埋蔵文化財が存在しないことが確認されている。平成元年度および２年度事業対象地区においても同様な分布調査を実施し、関係機関との協議の上、排水路等にかかる箇所についてのみ、本書に報告するように発掘調査を実施した。

第２節　調査の経過

１．平成元年度調査

本遺跡は松任市小川町の西に位置する古代末～中世の集落遺跡である。昭和63年度秋に事業対象地区約13haについて、踏査および重機による試掘の方法で分布調査を実施し、全域にわたり埋蔵文化財の存在が確認された。その結果をもとに協議を進め、田面は盛土施工により埋蔵文化財を保存すること、水田中に存在する伝小白山社跡地および排水路部分計約1,850㎡を対象として発掘調査を実施することになった。発掘調査は平成元年６月26日～同年９月21日にかけ、三浦純夫、川畑誠が担当して実施した。それにより調査区内、第３トレンチ西側を中心にして良好な中世の集落遺跡が確認されている。また、伝小白山社跡地は水田中に小丘として残っており、近年まで祠が存在、『白山之記』にみえる「小河神符社」との関連で注目されていた。調査中に地元および松任土地改良事務所等と協議をおこない、その歴史的重要性もかんがみ、現状のまま保存することとなった。そのため調査も伝小白山神社跡地周辺の小トレンチ調査を実施するにとどめた。この保存措置については工区長をはじめ地元の方々には大変な尽力をいただいた。記して感謝する次第である。

なお、調査参加者、調査日誌抄は以下のとおりである。

職　員　三浦純夫、川畑　誠、平田天秋、中島俊一、安　英樹

調査員　藤重　啓、浅井　武

作業員　北川勝雄、北川一枝、小西文雄、清水信文、竹田みよ、
中野清子、中川須摩子、西野幸平、二本外喜子、橋本松良、
橋本和江、菱田沢子、宮崎元子、宮永正則、村西良雄、
米田幸平、米田幸子

6・26～6・27　第1、2トレンチ表土除去作業。プレハブ設置と発掘機材搬入作業。

6・29～7・4　第1、2トレンチ遺構検出、遺構実測作業。第3トレンチ表土除去作業。

7・5～7・13　第1、2トレンチ遺構実測作業。第3トレンチ1～12区遺構検出作業、杭打ち作業。1区を除き地山に礫層があらわれ、遺構はほとんど存在しないと思われる。

7・14～7・17　第3トレンチ1～12区遺構、土層実測作業。

7・18～7・19　排水作業。第3トレンチ13区表土除去作業および杭打ち作業。地山が砂層に変わり、遺物も出土する。思わず安堵。

7・20～7・26　第3トレンチ13区遺構検出。掘り下げ作業および遺構実測作業を進める。井戸の実測作業に苦しむ。

7・27　伝小白山社跡地にて小川町主催の御祓いを挙行。発掘調査の無事を祈る。

7・28～7・31　第3トレンチ13区遺構掘り下げ、遺構実測作業を進める。

8・1　現場にて松任土地改良事務所と打ち合せ。調査区の一部引き渡し。

8・2～8・11　センター職員の協力を得て、遺構実測作業を進める。感謝。遺構掘り下げ、実測作業は続行。

8・17～8・24　第3トレンチ13区の遺構実測作業を引き続き進める。同14区遺構検出作業に入る。

8．25　伝小白山社跡地の保存について松任土地改良事務所と打ち合わせ。地元の方々の御協力により、現状のまま保存、付近のトレンチ調査を実施することになった。深謝。

8・28～9・7　第3トレンチ13区下層掘り下げ作業、引き続き遺構実測作業をおこなう。併せて14区遺構掘り下げ作業を進める。

9・8　伝小白山社跡地除草作業。第3トレンチ14区遺構実測作業に入る。

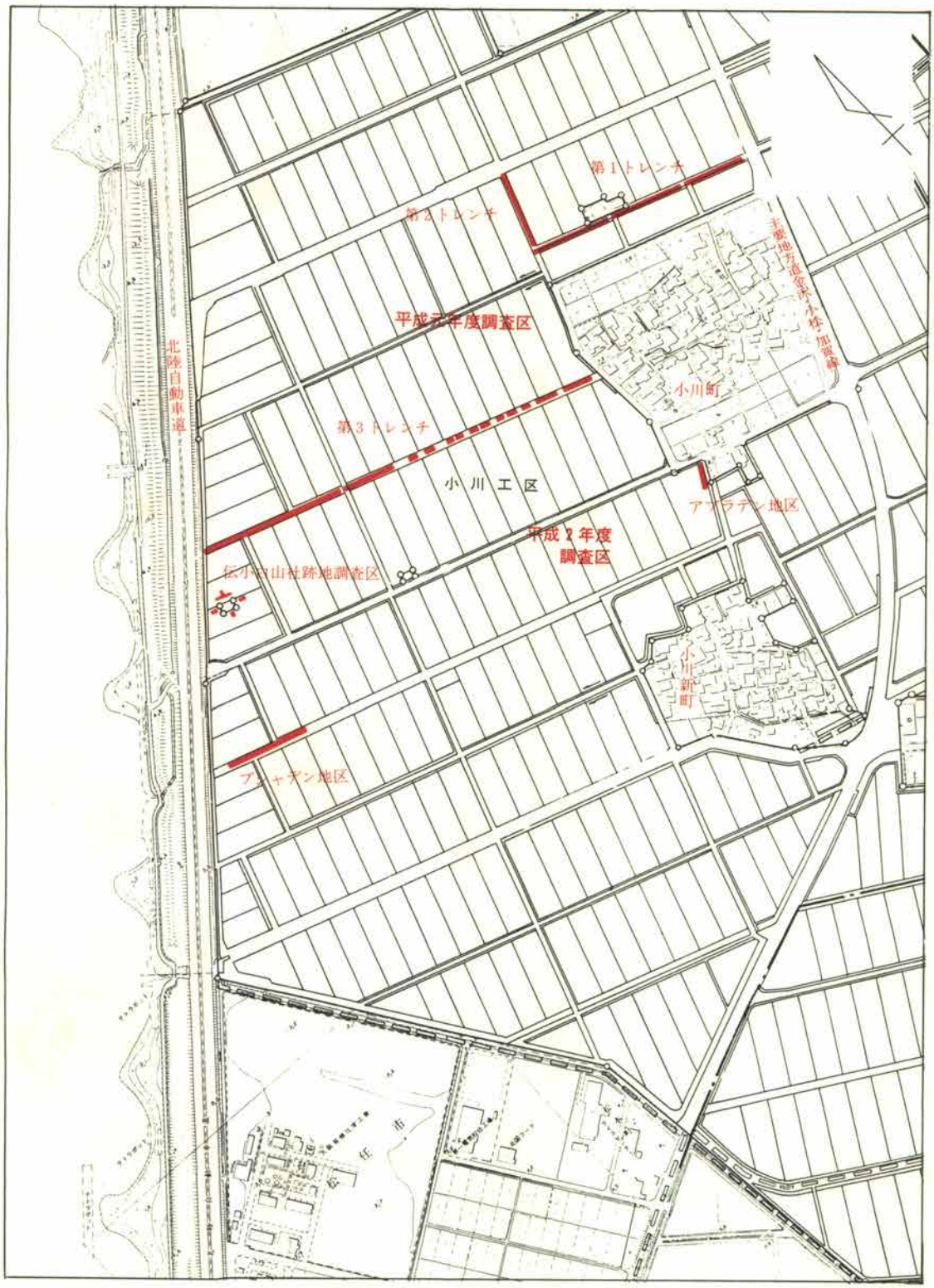
9・11～9・12　伝小白山社跡地周辺に1～5区を設定し、掘り下げ作業、トレンチ実測作業を進める。第3トレンチ遺構実測作業は続行。

9・14～9・20　伝小白山社跡地平板測量を実施するが雷雨が続き、作業が遅れる。併せて機材整理作業、撤去作業を実施。

9・21　平板測量を完成し、現地調査終る。

2．平成2年度調査

平成2年度調査区は平成元年度調査区の南側に位置する。平成元年度秋に次年度事業対象地区約18haについて踏査および重機による試掘の方法で分布調査を実施し、対象地区北側および南東側、あわせて約2haにわたり埋蔵文化財の存在が確認された。その結果をもとに協議を進め、水田は盛土施工により保存すること、北側の埋蔵文化財存在範囲中、排水路設置により影響を受ける箇所について発掘調査を実施することになった。発掘調査対象面積は約260㎡であり、平成2年8月6日～9月14日にかけて松山和彦が担当し、調査を実施した。それにより、中世の溝等が検出され、木製品が出土した。調査区については、『宮保の歴史』等から小字名をとり、それぞれ「ブシャデン地区」、「アブラデン地区」とした。以下、調査参加者、調査日誌抄を記す。



第5図　平成元年・2年度調査位置図

職　員　　松山和彦

調査員　　中村繁和、藤重　啓

作業員　　大岸百合子、北川一枝、竹田みよ、中野清子、中川須摩子、
橋本和江、菱田沢子、米田幸子

8．6	松任土地改良事務所と現地にて打ち合せ。
8・7～8・9	調査区の設定および表土除去作業。
8・10～8・27	杭打ち作業。地元との連絡および機材準備作業をおこなう。中途盆休み。
8・28	プレハブ設営。
8・29	発掘機材搬入作業。ブシャデン地区の排水作業を実施して後、遺構検出作業を始める。
8・30～9・3	遺構検出、堀り下げ作業。木製品出土。
9・4～9・10	遺構掘り下げ作業。併せて遺構実測作業を進める。
9・11	ブシャデン地区遺構実測作業を実施し、当地区の調査終了。引き続きアブラデン地区調査に入る。
9・12	ブシャデン地区の遺構検出。掘り下げ作業と同時に遺跡実測作業を進める。
9・13～9・14	遺構実測作業完了。機材整理作業の後、撤収。現地調査終了。

写真1　平成元年度分布調査

第３章　平成元年度調査

第１節　調査の概要

小川遺跡、小川新遺跡、伝小白山社跡地は松任市小川町地内に所在する。これらの遺跡は県下最長の手取川によって形成された手取扇状地の扇端部に位置する。周辺の地形は基本的に東側から西側に向けて傾斜し、調査区付近の水田の標高は3.7～８ｍを測る。また小川新遺跡周辺は地下水の季節的自噴地帯となっており、近年までその自噴が確認されていた[1]。なお調査区西端は北陸自動車道を挟んでわずかに残存する海岸砂丘に接し、その西側には日本海に広がっている。

調査区は排水路予定箇所３箇所（調査区幅約２ｍ）と事業実施により削平を受ける伝小白山社跡地に設定した（第６図）。第１、２トレンチは小川町の集落北側の水田部に、第３トレンチ、伝小白山社跡地の調査区は集落西側の水田部に位置する。第１、２トレンチはそれぞれ長さ250ｍ、約100ｍを測り、第２トレンチ南端は第１トレンチ西端と直交する。また第３トレンチは長さ約493ｍを測り、東側から順に１区～14区に細分している。北陸自動車道東側に小丘状に残る伝小白山社跡地の調査区は、第２章で述べたとおり調査実施中に現状のまま保存することとなった。そのため測量調査および周辺の小トレンチ調査を行うにとどめた。各調査区ごとの主軸線、起点等については後述する。

土層層序も各トレンチごとに詳述するが、おおむね以下のとおりである。まず第１、２トレンチおよび第３トレンチ１、２区(以上、小川遺跡)では、地山面まで30～70㎝の厚さをもち、地山は黄褐色シルトまたは灰褐色砂質土と安定した様相を示す。それに対して第３トレンチ３区～14区では、多数の遺構が検出された12区～14区東側部分(小川新遺跡)を除き、地山面までの土砂の堆積は比較的薄く、地山も河川により運ばれた砂礫土となる。すなわち地山が砂質土となる範囲にのみ遺構が確認された。なお遺跡全体の地山土の変化は一様ではなく、複雑なあり方を示すことが分布調査の結果から予想される。

調査の結果、小川町の集落とほぼ重複して存在する小川遺跡の一部として第１トレンチでは溝４条（時期不明)、第２トレンチでは西方向に流れる河川跡、第３トレンチ１区では近世初頭を中心とする時期の堀等を検出した。第３トレンチ２区～11区では遺構は検出できなかった。第３トレンチ12区～14区東側では井戸、土坑、溝等多数の遺構を検出した。これらは小川町の集落西側の水田一帯にひろがる古代末～中世にかけての集落遺跡である小川新遺跡の一部にあたり、そのうち調査区は15～16世紀を中心とする時期に営まれた集落部分と考えられる。伝小白山社跡地の調査区は限られた範囲の調査のため遺跡の全体を把握できなかったが、小川新遺跡と並行する時期と考えられる溝等の遺構を検出している。

第6図　平成元年度調査区全体図（S＝1/4000）

第2節　第1、2トレンチ

1．調査区と土層層序（第7、8図）

第1、2トレンチは事業地区内の小川町の集落北側に敷設される排水路予定箇所に設定した。第1トレンチは長さ約250mを測り、基点は予定排水路中心線上で、主要地方道金沢・小松・加賀線西側の既設の排水路中心線より1.50m西側に設定した。調査区の主軸線の方位はN－72.5°－Wを測る。第2トレンチは長さ約100mを測り、基点を第1トレンチ主軸線上249mの地点に設定した。調査区主軸線の方位はN－17.5°－Wを測り、調査区の主軸線は予定排水路中心線に一致する。なお両トレンチとも農道、用排水路等で未発掘部分がある。

次に第1トレンチの土層層序は上層より第1層耕土、第2層床土、第3層包含層（黒灰色強粘質土）、第4層地山（黄褐色シルト）となり、調査区東側では第2、3層の間に灰黄粘質シルトが堆積する。また地山面の標高は調査区東端で約6.6m、西端で約6.0mを測り、東側から西側に向けて緩やかに傾斜している。第2トレンチの土層層序は基本的に第1トレンチと同じだが、東西方向に流れる3本の河川跡により複雑な様相を呈する。地山面の標高は約5.95mを測る。

2．遺構・遺物（第7、8図）

第1トレンチで小川遺跡の一部と考えられる溝4条、第2トレンチで河川跡3本を検出した。いずれも出土遺物がないため時期不明だが、河川跡は比較的新しい時期のものと考えられる。なお、河川跡は調査区幅の制約により未掘である。

第1号溝

第2～4号溝と異なり、黒灰色強粘質土をベースとする。幅80～100cm、深さ14cmを測る。覆土は灰褐色～灰白色の強粘質土である。

第2号溝

幅50～100cm、深さ10～40cmを測り、調査区北側で一段深くなる。覆土は暗灰色砂質土である。

第3号溝

幅30～45cm、深さ20～25cmを測り、覆土は暗灰色粘質土の単層である。

第4号溝

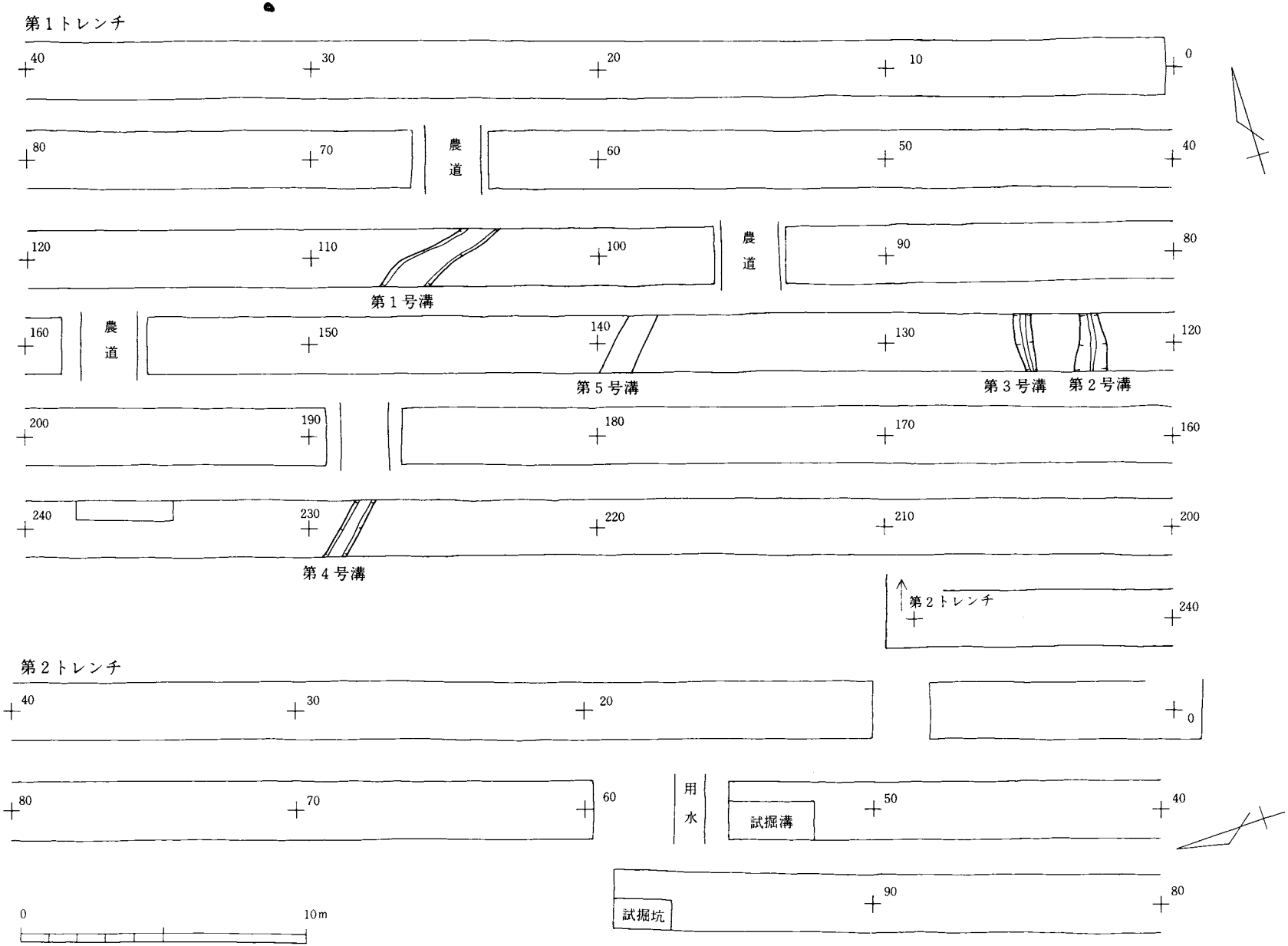
幅60～70cm、深さ約10cmを測る浅い溝で、覆土は暗灰色砂質土の単層である。

包含層出土遺物

古代の須恵器、土師器小片が若干量出土した。そのうち須恵器杯蓋は辰口産と考えられ、8世紀後半代に位置付けられる。

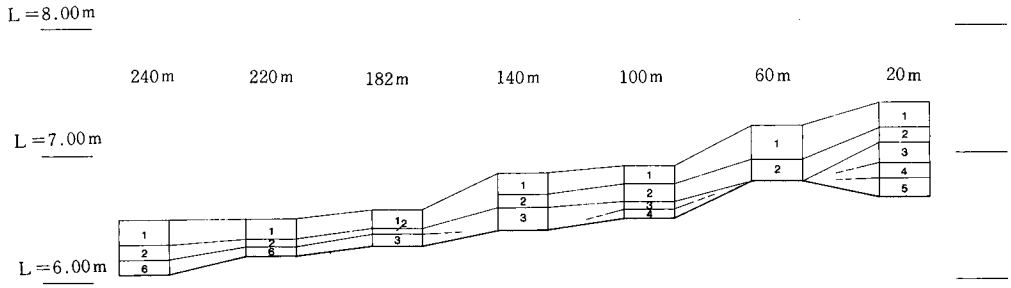
第3節　第3トレンチ調査区と土層層序

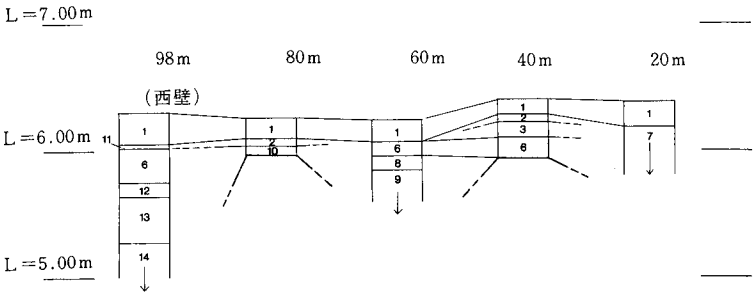
第3トレンチは事業地区内の集落西側に敷設される排水路予定箇所に設定され、長さ約493mを測る。基点は予定排水路中心線上で小川町の集落西側を走る道路肩部から1.20m西側の地点に設定した。また調査区主軸線の方位はN－72°－Wを測り、予定排水路中心線に一致する。第3ト



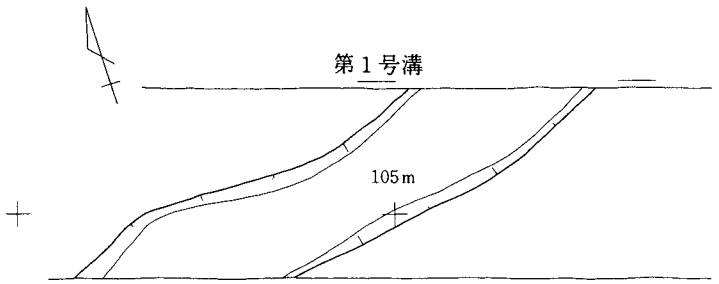
第7図　第1、2トレンチ全体図(S＝1/200)

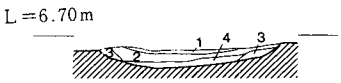
第１トレンチ北壁断面図



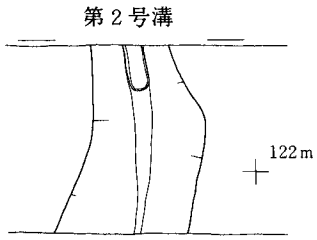


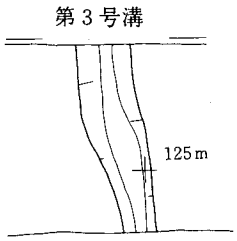
1　耕土
2　床土（黄褐色粘質シルト）
3　灰黄色粘質シルト（砂混じる）
4　灰黄色粘質シルト（黄色強い）
5　黒灰色強粘質土
6　５の続き。粘性弱くなり、ボコボコしている
7　灰黄色弱粘質土（炭粒含む）
8　黒褐色粘質土（５の続き）
9　淡茶黄色弱粘質砂
10　６と地山の漸移層
11　盛土
12　茶灰色砂
13　２～３㎝大砂利と茶灰色砂の混合層
14　茶灰色砂

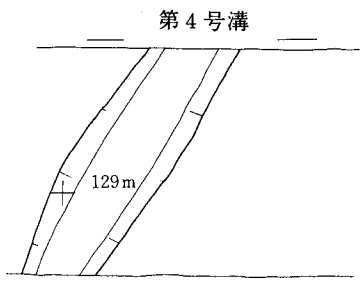


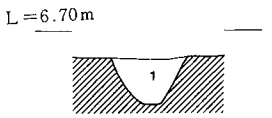


1　灰褐色強粘質土
2　黄灰白色強粘質土
3　黒色強粘質土
4　灰白色強粘質土

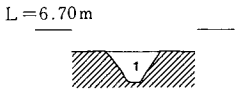




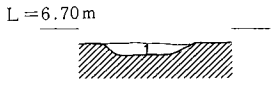




1　暗灰色砂質土



1　暗灰色粘質土

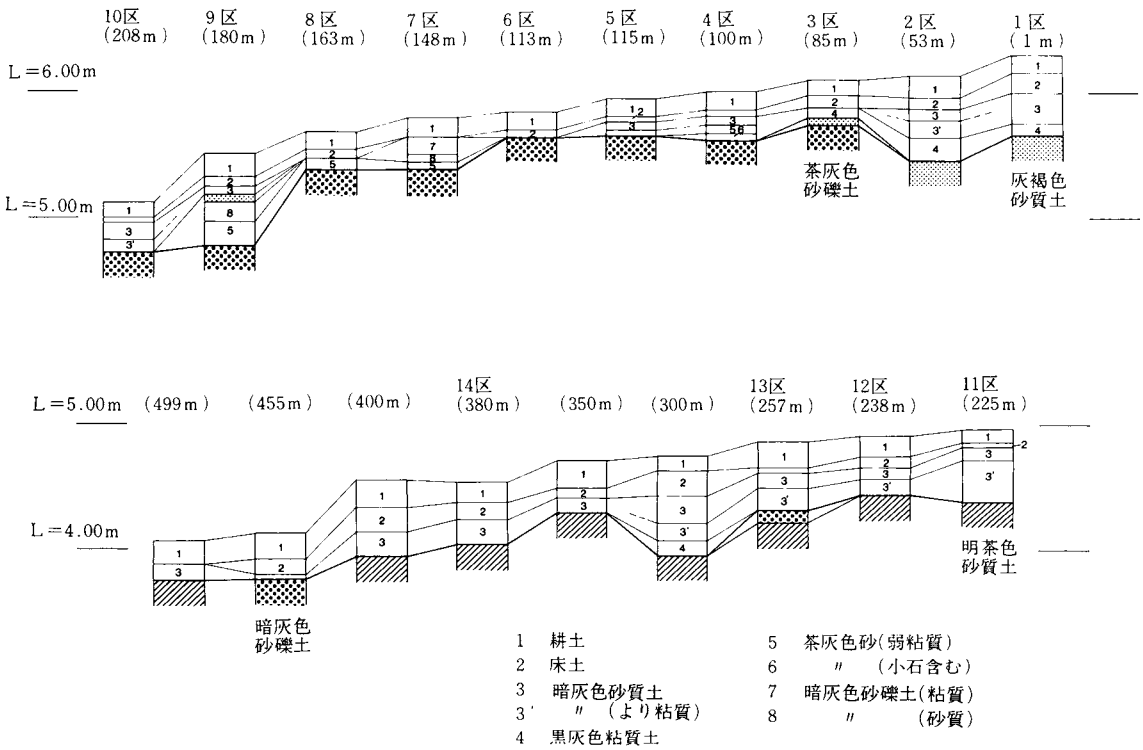


1　暗灰色砂質土

第８図　第１、２トレンチ土層層序・遺構実測図

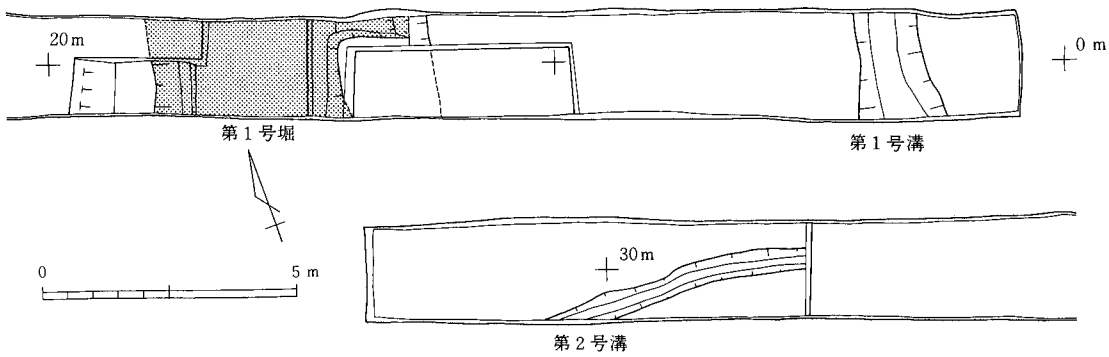
レンチは農道や調査区の掘り残し部分等で東側から順に１～14区に細分している。各区は基点よりそれぞれ以下の距離を測る。１区0.8～34.8m、２区53～70.6m、３区84～89.6m、４区99～104.4m、５区114～118m、６区132～137m、７区146.2～151m、８区161.5～166m、９区177～181.5m、10区207～211m、11区222.5～227.5m、12区235.5～241m、13区255～376.5m、14区377～493m。

基本土層層序は第９図のとおり、上層から第１層耕土、第２層床土、第３層包含層（暗灰色砂質土）、第４層地山となる。調査区が長いこともあり、調査区全体で土層は一様な堆積状況を示さないが大きく３分類可能である。まず、１、２区では第３層と第４層の間に黒灰色粘質土が堆積し、第１、２トレンチと同様に包含層になると考えられる。耕土から地山面までの厚さは60～70cmを測り、地山は灰褐色砂質土である。それに対して３～10区は第３層の包含層が薄くなり、第４層の上に茶灰色砂や暗灰色砂礫土が複雑に堆積する。９区を除き耕土から地山面までの厚さは20～40cmを測り、１、２区に対してかなり薄い印象を受ける。また地山は１、２区でみられた灰褐色砂質土がほとんど堆積せず、河原石の混じる茶灰色砂礫土に変化する。なお、この茶灰色砂礫土は地下２m以上堆積することが確認されている。次に11～14区の土層は、耕土から地山面までの厚さは40～80cmを測り、西側に向かい次第に薄くなる。また13区300～310m付近では、１区と同質の黒灰色粘質土が堆積し、その部分の包含層および遺構面は上下２層に分けられる。地山は12区～14区東側は明茶色砂質土であり、14区西側で再び茶灰色砂礫土に変わる。以上を整理

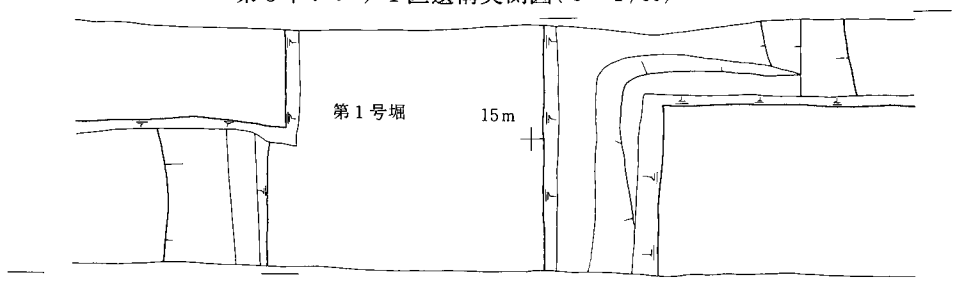


第９図　第３トレンチ土層層序実測図

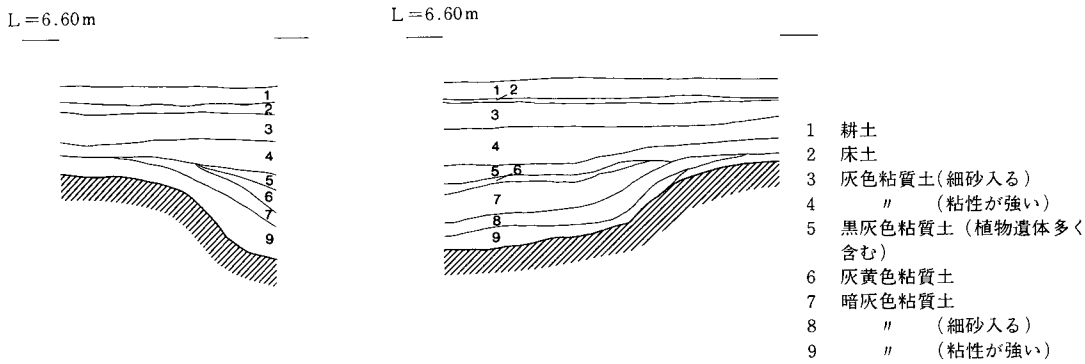
第３トレンチ１区全体図(Ｓ＝１/150)



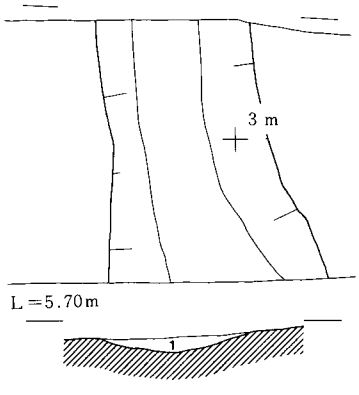
第３トレンチ１区遺構実測図(Ｓ＝１/60)



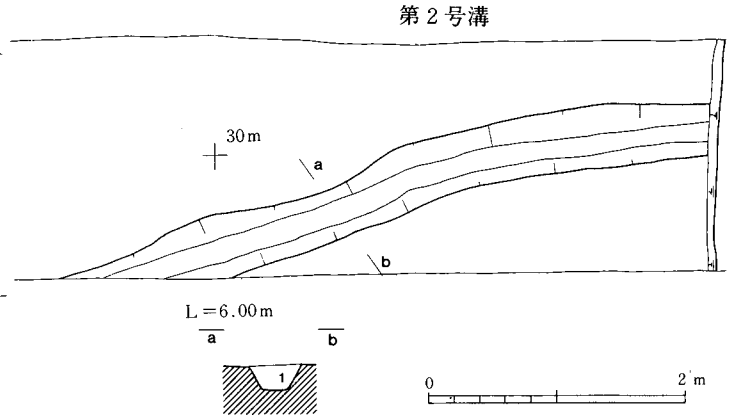
第１号堀



第１号溝



第２号溝



第10図　第３トレンチ１区遺構実測図

すれば、１、２区および11区～14区東側の地山は砂質土であり、その範囲に遺構も集中して存在、その後の土砂の堆積も安定した様相を呈する。それに対して２区～10区および14区西側の地山は砂礫土であり、遺構は確認できない。

なお、調査区は基本的に東側から西側にむけて緩やかに傾斜し、現水田面の標高は調査区東端で約6.3m、西側で約4.1mを測る。また地山面の標高は調査区東端で約5.8m、西端で約3.7mを測り、３区、12区、13区350m付近で若干高くなる。

第４節　第３トレンチ１～12区

１．１区　（第10図）

調査の結果、堀１条、溝２条を検出した。これらの遺構は集落と重複して存在する小川遺跡の一部と考えられ、包含層より15～17世紀の遺物が出土している。

第１号堀

幅約3.8m、深さ約0.7mを測り、ほぼ南北方向に流れる。小字名として“ゴヨンボリ”が残ることから堀と考えられる。覆土は上層より灰黄色粘質土、暗灰色粘質土が自然堆積する。堀肩部はしっかりとしており、東側肩部に一部張り出した部分が存在する。小川遺跡の周囲を巡る堀となる可能性もある。出土遺物なし。

第１号溝

第１号堀と並行して流れる浅い溝で、幅120～170cm、深さ約12cmを測る。覆土は第２号溝と同様な黒灰色粘質土である。第１号堀より新しい時期に掘られたと考えられる。出土遺物なし。

第２号溝

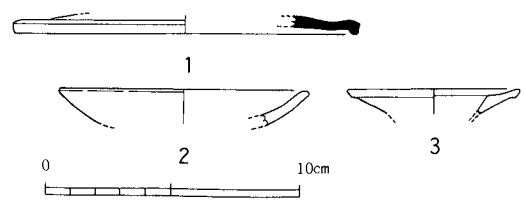
屈曲しながら東西方向に流れ、幅40～50cm、深さ約20cmを測る。覆土は第１号溝と同質である。出土遺物なし。

包含層出土遺物

第11図１は須恵器坏蓋である。２は白磁皿で口径10.6cmを測る。素地は乳白色で釉は薄くほとんど目立たない。森田勉氏分類D群[2]であり、15世紀代に位置付けられる。３は青白磁小壺で口径6.8cmを測る。素地は灰白色で堅緻、内面のみに青みがかった釉を施す。なお図化しなかったが塗り鉄を施した越前焼がある。口縁端部は平坦に仕上げ、胎土は灰色を呈し、堅緻である。田中照久氏による越前焼編年[3]によれば17世紀以降に位置付けられる。

２．２～12区

前述のとおり、２区、11区を除く３～10区までは茶灰色砂礫土の地山が比較的浅いレベルで現れ、包含層もほとんど存在しない。そのため小トレンチによる調査を先に実施し、遺構が確認された部分を拡張する調査方法をとった。調査の結果、明



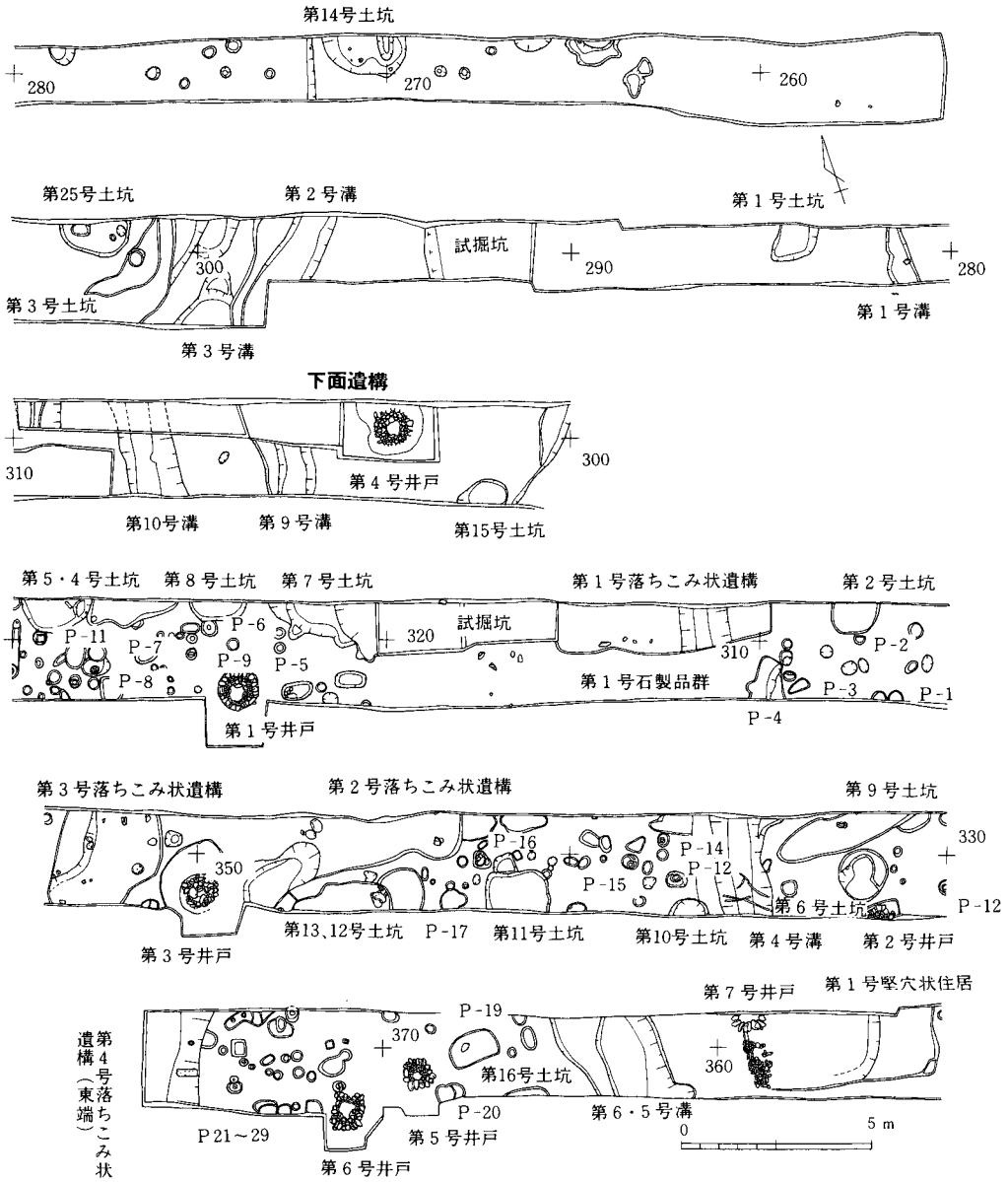
第11図　第３トレンチ１区包含層
出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

確な遺構は存在せず、よって調査区の拡張も実施しなかった。遺物はわずかに残る包含層と地山の間から摩耗した須恵器等が数点出土したにとどまる。なお分布調査時に付近の水田で灰褐色砂質土の地山を検出しており、調査区周辺は地山面が複雑に変化していると考えられている。

第５節　第３トレンチ13～14区

１．調査概要

第３トレンチ13～14区は古代末から中世まで存続した小川新遺跡の一部にあたる。本遺跡は小川町の西側一帯に広がることが分布調査の結果から明らかになっているが、調査範囲が狭いため、遺跡の範囲等は明確にはできなかった。調査により竪穴状住居１棟、井戸10基、土坑25基、落ち

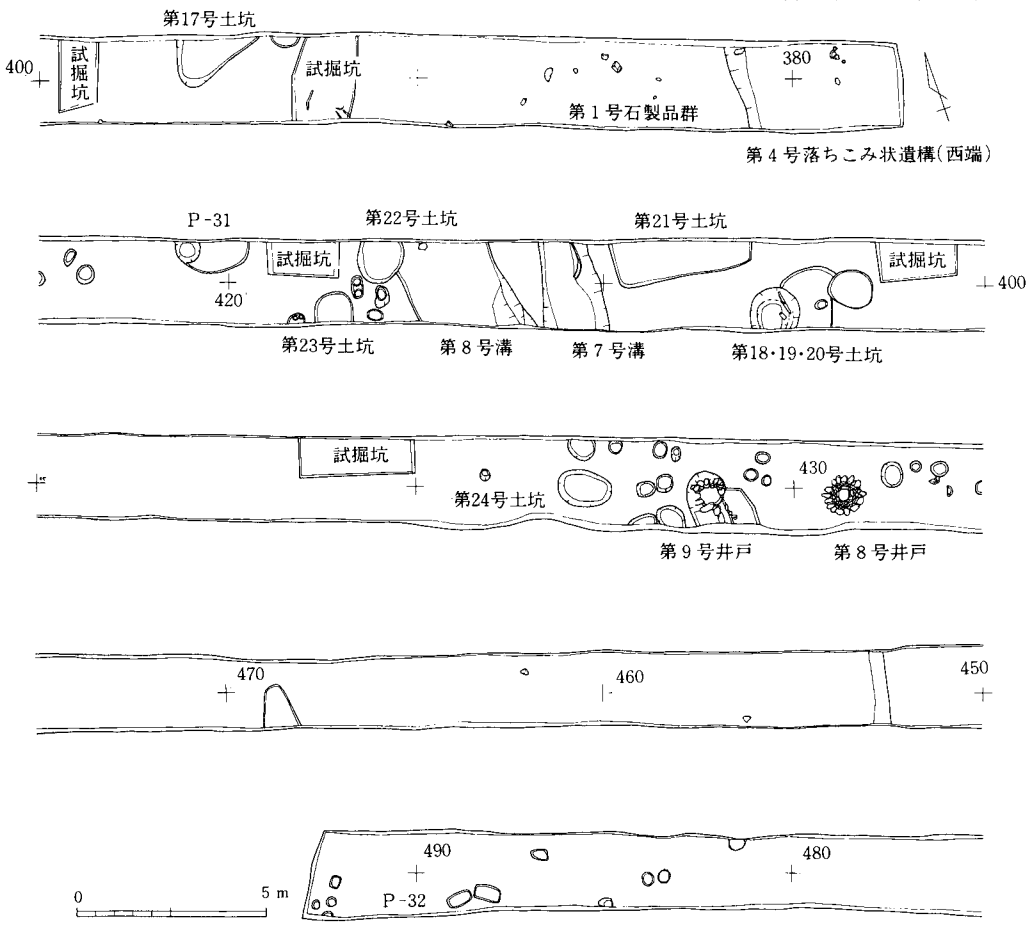


第12図　第３トレンチ13区全体図（Ｓ＝１/200）

こみ状遺構４基、溝８条、ピット多数等を検出した。検出した遺構の分布は第３節で述べたように地山面の在り方に大きく制約を受け、地山が明茶色砂質土の範囲（13区290m～14区440m）に集中する。特に石組の井戸は数が多く、また規模も似通っており、調査区周辺が地下水の季節的自噴地帯であることも考えれば大変興味深い。また掘建柱建物の柱穴と考えられるピットも確認されたが、調査範囲の制約から掘建柱建物の復元はできなかった。

遺構面は13区300～310m付近で包含層（暗灰色砂質土）の上に黒灰色粘質土が堆積するため、その範囲のみ上下２面に分けている。すなわち黒灰色粘質土をベースとする遺構（上面遺構）、明茶色砂質土をベースとする遺構（下面遺構）が存在する。上面遺構は全体に浅く、明確にプランを把握、整理できなかった。

なお、13区355mの付近から中世の遺構の底面が黒灰色強粘質土に達し、その強粘質土中から弥生時代終末～古墳時代の遺物が少量出土した。そのため13区で４箇所、14区で５箇所の試掘坑を設定し、黒灰色強粘質土の堆積状況の把握に努めた。その結果、355～380m付近にかけて中世の地山面である明茶色砂質土の下に弥生時代終末～古墳時代の遺物を含む黒灰色強粘質土が薄く堆積することが判明した。しかし明確な遺構も検出できなかった上に、出土遺物が時代幅をもち、また少量であるため調査区全体を掘り下げる調査はおこなわなかった。部分的に地山面が下がっ



第13図　第３トレンチ14区全体図（S＝1/200）

た地点に少量の遺物を含む黒灰色強粘質土が二次的に堆積したものと理解したい。

出土遺物は少量の弥生土器、土師器、須恵器の他、12～18世紀代にかけての輸入陶磁器、国産陶磁器、土師質皿、石製品、管状土錘等がある。中でも15～16世紀代の遺物が多く、調査区は15～16世紀代を中心に営まれた集落部分と考えた根拠となる。

2．竪穴状住居（第14～15図）

第1号竪穴状住居

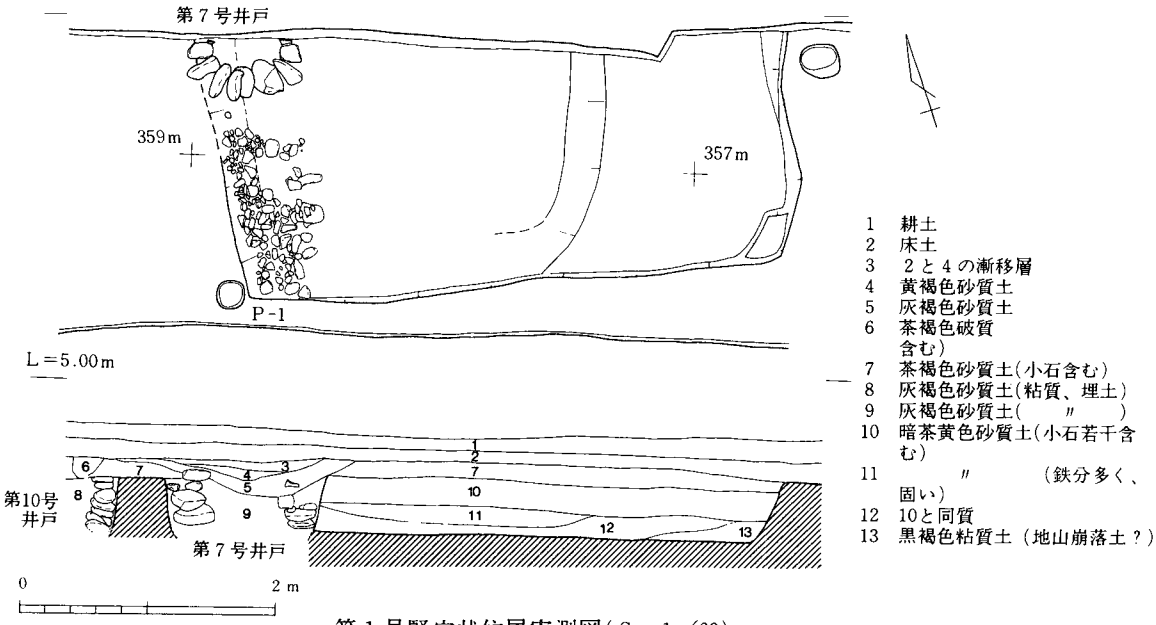
13区360m付近で検出した。方形を呈すると考えられ、東西方向で一辺約4.6mを測る。一度深さ約50cmまで掘りこみ、暗茶黄色砂質土でしっかりと埋め固める。その後、西側の壁に沿って4～10cm大の平たい小石を一段（厚さ2～8cm程度）敷き詰め、炉状の配石を2箇所並べて作る。この炉状の配石は、いずれも火を受けた痕跡はそれほど顕著でない。南側の配石は50×60cmの規模を測り、まず周囲を大きめの石を配した後、その中に小石を敷き詰める。北側の配石は80×70cmの規模を測り、同様に周囲に大きめの石を配するが中央部付近には小石を敷き詰めない。また竪穴状住居付近のピットが柱穴になるかは不明である。遺物が配石付近から出土した。第14図4は土師質皿で口径7.8cm、器高1.5cmを測る。口縁部に一段ナデをおこない、藤田邦雄氏編年[4]Ⅲ期に属する。5は越前焼すり鉢である。底部器肉は薄く、内面は使用による摩滅が著しい。6は越前焼壺で口径19.0cmを測る。口縁端部を平坦に仕上げ、横方向に引き出す。内面に自然釉が付着する。5は田中照久氏による越前焼編年Ⅳ期後半（以下、越前焼の時期は越前何期と略する。）、6はⅤ期と思われる。7は茶臼下臼で底部外面にノミ痕が残る。石材は硬質の凝灰岩で、62と同じである。8は行火底部であり、垣内光次郎氏による行火分類[5]Ⅰ種（第76図参照。以下、行火何種と略する。）に分類できる。石材は軽石凝灰岩である。

3．井戸（第16～20図）

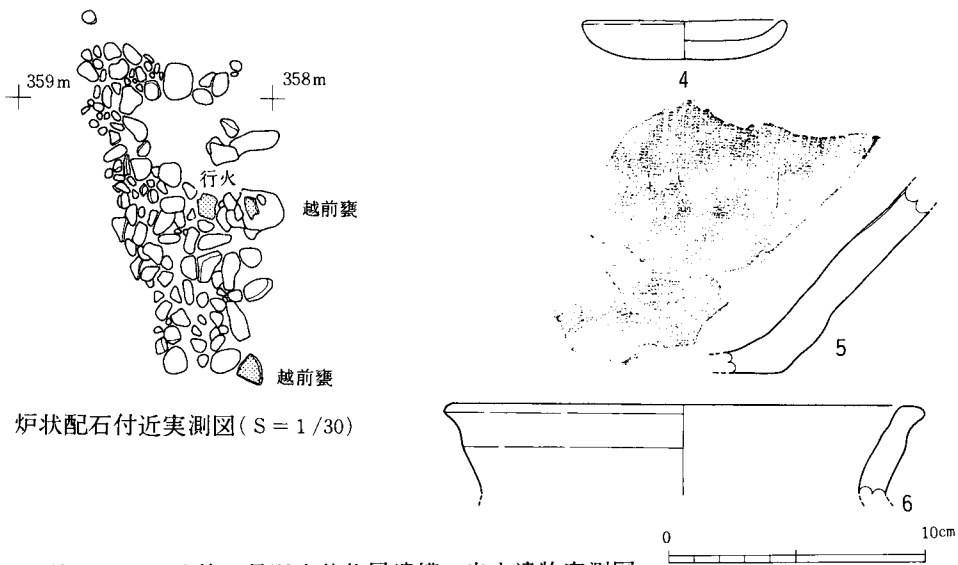
合計10基の石組の井戸が確認された。調査区周辺が地下水の季節的自噴地帯であるためか、比較的規模が小さく浅いものばかりである。井戸底の標高は3.1～3.6mを測り、3.5～3.6mのものが多い。また、井戸側の石組に近接してすり鉢形の掘り方をもち、井戸側の石組は裏込め石を使わず、平たい河原石の小口積みを基本とする。平面形態から円形、隅丸方形、方形の3タイプに分類可能で、水溜部分に曲げものを使うものもある。これらの特徴をもつ井戸は県内では門前町道下元町遺跡等[6]にみられ、宇野隆夫氏分類[7]CⅡ類に属する。なお第18、19号土坑も井戸の可能性をもつ。

第1号井戸

13区324m付近で検出し、上端径約70cm、底部径約30～40cm、深さ約100cm、底部の標高約3.4mを測る。円形の掘り方をもち、石組はまず底面に40cm大の河原石を組んだ後に、10～30cmの河原石をあまり傾斜をもたずに10段程度積み上げる。調査時の所見では一段ごとに逆方向に積み上げている。また西側の石組はやや小振りである。覆土は上層より河原石・黄色粘土の混じる暗黄灰色粘質土（埋土）、茶灰色砂礫土となる。埋土中より遺物が出土した。第18図9は青磁碗で口径

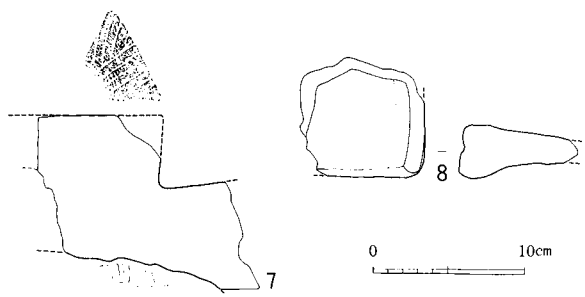


第１号竪穴状住居実測図（Ｓ＝１／60）



炉状配石付近実測図（Ｓ＝１/30）

第14図　第３トレンチ第１号竪穴状住居遺構・出土遺物実測図



第15図　第３トレンチ第１号竪穴状住居出土遺物実測図（Ｓ＝１/５）

15.6cmを測り、外面にやや崩れた弁幅の広い線描蓮弁文を施す。素地は灰白色で小さな気泡を有する。また釉は緑灰色を呈し、貫入は釉の鉄分により赤橙色に発色する。11は連歯下駄であり、中央部付近で最大幅を取る角張った長方形を呈する。長さ14.5cm、幅7.0cm、残存高3.2cm、方形の鼻緒孔は一辺約7㎜を測る。また図化できなかったが漆椀（図版31）が出土した。

第2号井戸

13区332m付近の調査区南側で検出され、調査区外にのびる。円形を呈すると思われ、規模等は不明である。裏込めの覆土は暗灰茶色弱粘質砂で、石組に20cm大の河原石を利用している。出土遺物なし。

第3号井戸

13区350m付近で検出した。隅丸方形を呈し、他の井戸と比べ規模は小さい。上端で一辺50～60cm、底部で一辺約30cm、深さ約60cm、底部の標高約3.6mを測る。やや崩れた円形の掘り方をもち、石組はかなり粗い印象を受ける。まず底面に砂利を敷いた後、20～30cm大の大きめの河原石を方形に一段組み、その上に5～20cm大の河原石を3～4段程度組み上げる。また石組の石の大きさは北・東側が南・西側に比べ小振りである。覆土は上層より河原石・灰の混じる暗灰色粘質土（埋土）、河原石の混じる暗灰色粘質土（埋土）、灰茶色砂礫土となり、それぞれの厚さは約10cm、約40cm、約10cmを測る。なお石組に粉挽き臼が転用されている。覆土中より遺物か出土した。第18図10は青磁碗である。口径13.2cmを測り、口縁端部はやや内側に肥厚する。体部外面および内面見込部分に花文状の沈線を入れる。素地は灰白色で緻密、淡オリーブ色の釉を施す。13は断面台形を呈する砥石で最大長12.5cm、最大幅3.8cm、厚さ3.4cm、重量211.5gを測る。側面全てが使用され、石材は淡黄灰色・硬質の凝灰岩で15、227と同質である。第20図24、25は行火Ⅰ種底部で、小さい台部をつくり出す。石材は軽石凝灰岩である。24は全面に熱を受けた痕跡が残る。25は底部外面をややくぼませる。

第4号井戸

13区305m付近で検出した下面遺構で、埋土が黒灰色粘質土を切っている。円形を呈し、復元上端径約110cm、底部径約35cm、深さ約130cm、底部の標高約3.1mを測る。石組は、まず底部に径約34cm、幅約6cmの曲げものを5～10cm大の河原石を使って据え付けた後、河原石をすり鉢状に外側に開きながら積み上げる。また石組には下の方に比較的大きめの河原石を使う。石組は検出面から50cm程度が抜かれており、下方の6～8段程度が残存する。掘り方は崩れた円形を呈する。覆土は上層より河原石の混じる黒灰色粘質土・明茶色砂・暗灰色シルトの混合土（埋土）、暗灰色粘質砂、茶灰色砂礫土となり、それぞれの厚さは約40cm、約60cm、約30cmを測る。覆土中より遺物が出土した。第18図12は青磁稜花皿で口径約17cmを測る。素地は灰白色でオリーブ色の釉を施す。14、15は砥石である。14は長さ10cm以上、幅約4cm、残存重量192gを測る。バチ形を呈し、側面三面に研ぎ痕が、残り一面に粗いノミ痕が残る。石材は淡緑白色・軟質の凝灰岩である。15は灰黄色を呈し、13と同じ石材である。幅5.0cm、厚さ1.7cmを測る。側面全てを研ぎに使う。19はにぶい黄色を呈する越前焼すり鉢である。内面のおろし目は横方向に施した後、縦方向に加える。第20図28は宝篋印塔相輪部下端の受け花で、受け花上端径15.3cmを測る。16弁の蓮弁を丁

寧に彫り込み、石材は緑灰色・硬質の凝灰岩である。

第5号井戸

13区368m付近で検出した。円形を呈し、上端径約40cm、底部径約30cm、深さ約60cm、底部の標高約3.6mを測り、井戸側はほぼ垂直に立ち上がる。石組は10～20cm大の河原石を8段程度積み上げ、最後の一段はやや大きめの河原石を使う。掘り方は明瞭に検出できなかった。覆土は上層より河原石の混じる暗灰色粘質シルト、粘質粒を含む暗灰茶色砂礫土でいずれも埋土と考えられる。それぞれの厚さは約40cm、約20cmを測る。第20図31は覆土第1層目から出土した粉挽き臼上臼で、臼面径約32cm、厚さ7.7cmを測る。1／8程度残存。淡緑灰色を呈し、石材は火山礫凝灰岩である。第18図16は覆土第2層目から出土した管状土錘で一部欠損する。長さ2.4cm、幅2.2cm、孔径1.4cm、残存重量11.3gを測る。18は掘り方埋土中から出土した弥生～古墳時代の壺底部で、底部やや台状を呈し、内面に粗いハケ調整を施す。

第6号井戸

13区369m付近で検出した。方形を呈し、上端で一辺約60～70cm、底部で一辺約50cm、深さ約80cm、底部の標高約3.6mを測る。石組は、まず10～20cm大の比較的小さく平たい河原石を2～3段積み上げた後、断面方形の木材を方形に組み、更に河原石を8～10段程度すり鉢状に積み上げる。また石組に粉挽き臼、行火を転用している。掘り方は明瞭に検出できなかったが、石組に近接して存在すると考えられる。覆土は河原石の混じる暗灰色弱粘質砂で一度に埋め込まれる。第20図26、27、30は覆土中から出土した。26は行火Ⅰ種で器肉は厚い。内面に細かい単位のノミ痕が残る。27は行火Ⅱ種で、前面4カ所に窓、底部外面4カ所に小さい台部をつける。内面のノミ痕が顕著に残る。石材は層状に緑色粒が入る緑色凝灰岩であり、加賀市水田丸付近の石質に似る。30は軽石であり、研ぎに使用された可能性をもつ。32は井戸側に組み込まれた粉引き臼上臼である。臼面径約30cm、厚さ約7cm、方形の供給口は一辺約3cmを測る。また側面下方2カ所に横長の挽き木孔を穿つ。臼面のおろし目は使用により摩滅している。淡緑灰色を呈し、石材は火山礫凝灰岩である。

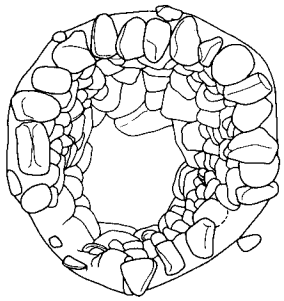
第7号井戸

13区359m付近で検出し、第1号竪穴状住居より後出する。円形を呈し、上端径約60cmを測る。深さ等は不明で掘り方は検出できなかった。河原石の混じる灰褐色砂質土で埋め込まれる。埋土中より少量の遺物が出土した。

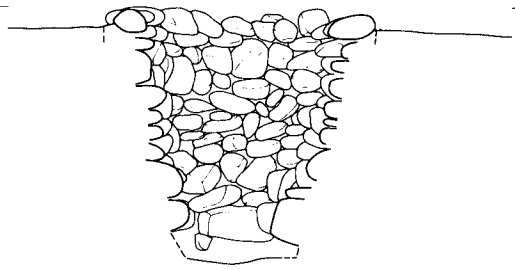
第8号井戸

14区429m付近で検出し、第9号井戸と同様に茶灰色砂礫土をベースとして掘り込まれる。円形を呈し、上端径60～70cm、底部径約40cm、深さ約85cm、底部の標高約3.3mを測る。底部に径約38cm、幅約6cmの曲げものを据え付けた後、他の井戸より大きめの20～30cm大の河原石を6段程度すり鉢状に積み上げる。掘り方は検出できなかった。覆土は灰茶色砂礫土で、遺物が出土した。第18図17は土師質皿で口径7.6cm、器高1.7cmを測る。口縁部全周に灯明痕が残る。藤田氏編年Ⅴ期に位置付けられる。20は珠洲焼すり鉢で249と同一個体である。口縁部は外側に肥大し、口縁部に波状文、体部内面全体におろし目を施す。吉岡康暢氏による珠洲焼編年[8]Ⅵ期（以下、珠洲何期

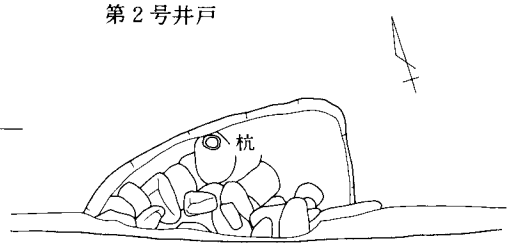
第１号井戸



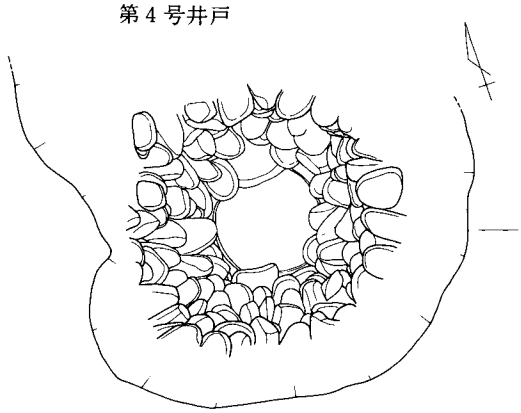
L＝4.40m



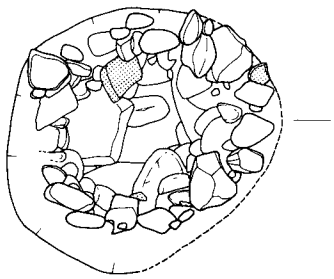
第２号井戸



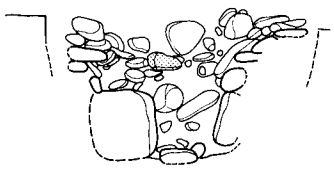
第４号井戸



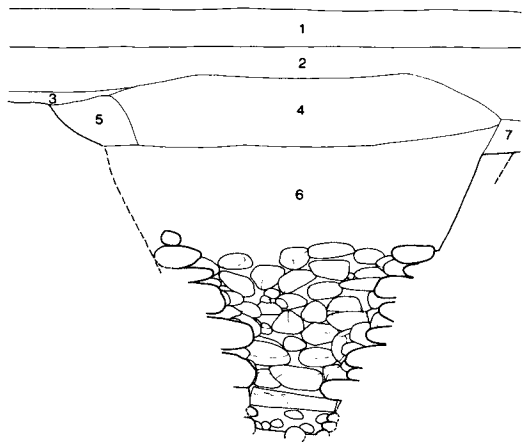
第３号井戸



L＝4.30m



L＝4.80m

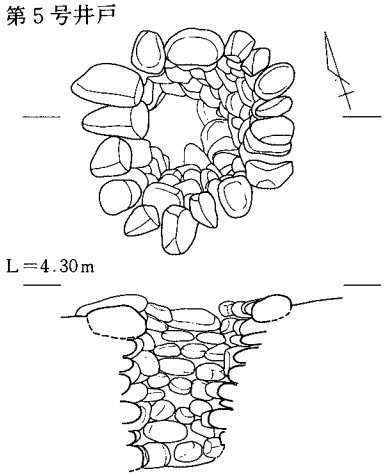


0　　1 m

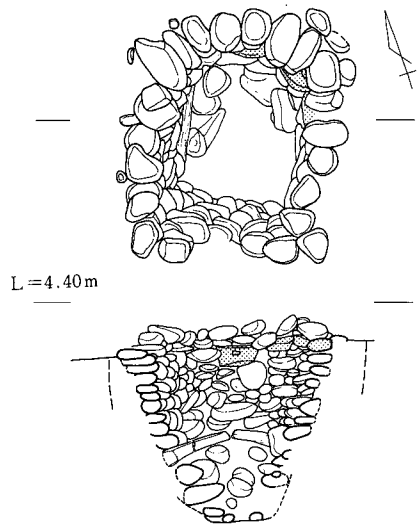
1　耕土
2　床土
3　暗灰色砂質土
4　明茶色砂＋暗灰色シルト＋黒灰色粘質土（10～20cm大円石多い。埋土）
5　乳灰色砂（黒灰色砂・黒灰色粘質土がブロック状に混じる。埋土）
6　暗灰色粘質砂（粘性帯びる）
7　黒灰色粘質土（炭粒含む）

第16図　第３トレンチ井戸実測図(1)(Ｓ＝１/30)

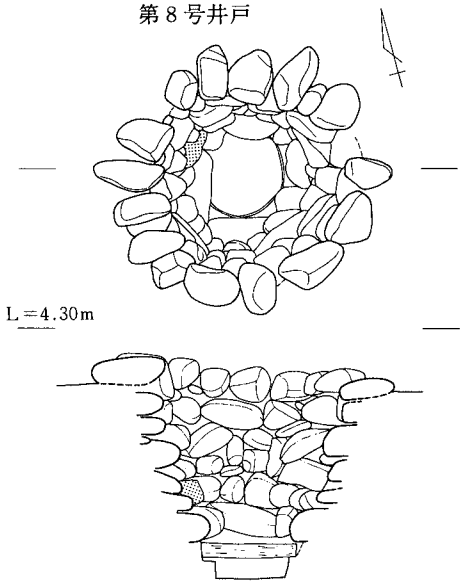
第５号井戸



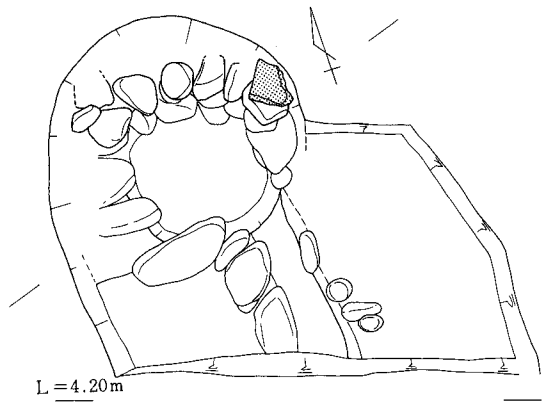
第６号井戸



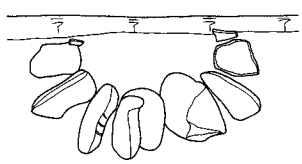
第８号井戸

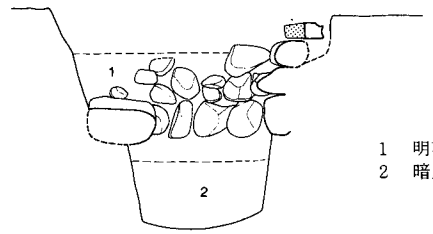


第９号井戸

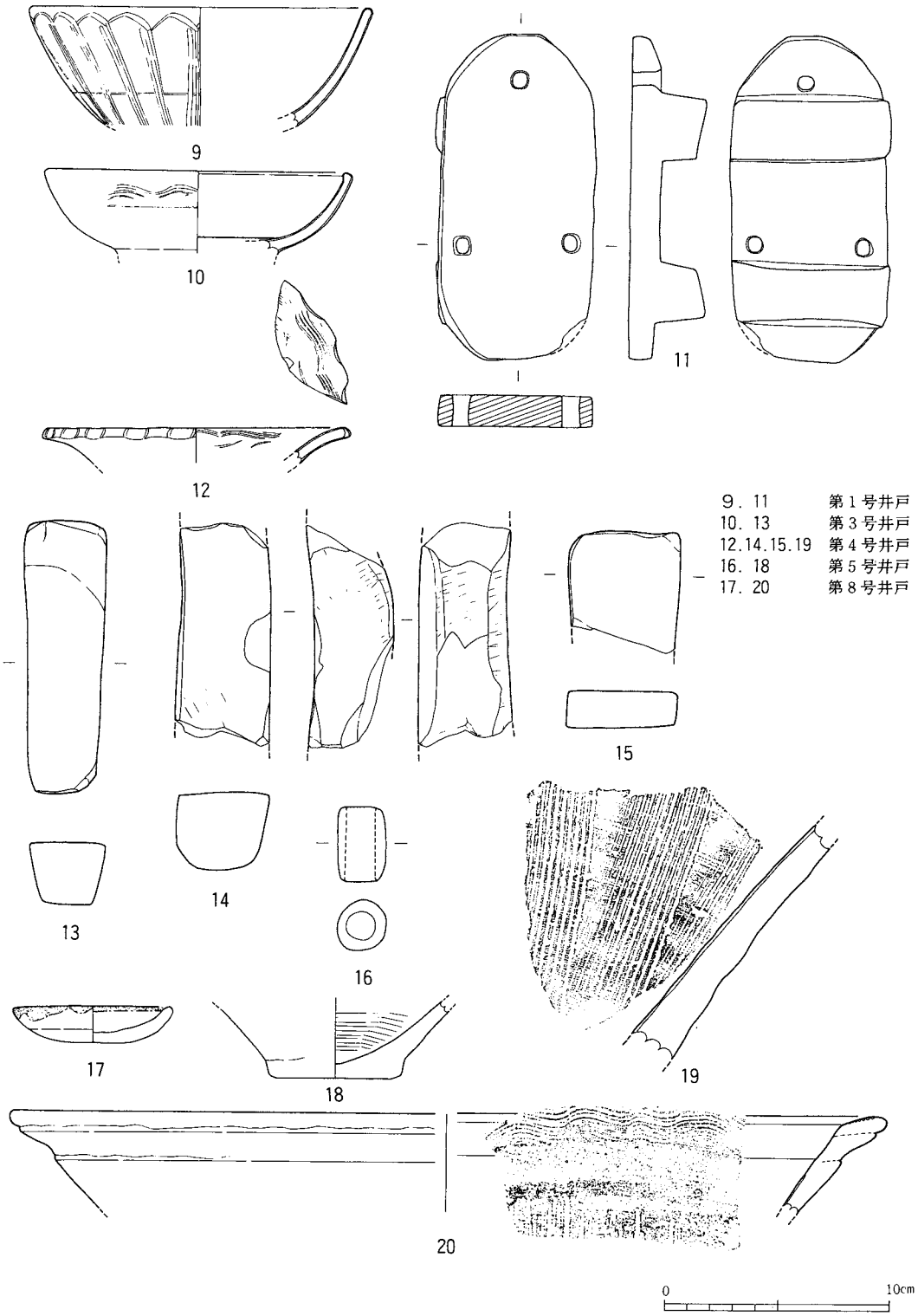


第７号井戸





第17図　第３トレンチ井戸実測図(2)(Ｓ＝１/30)

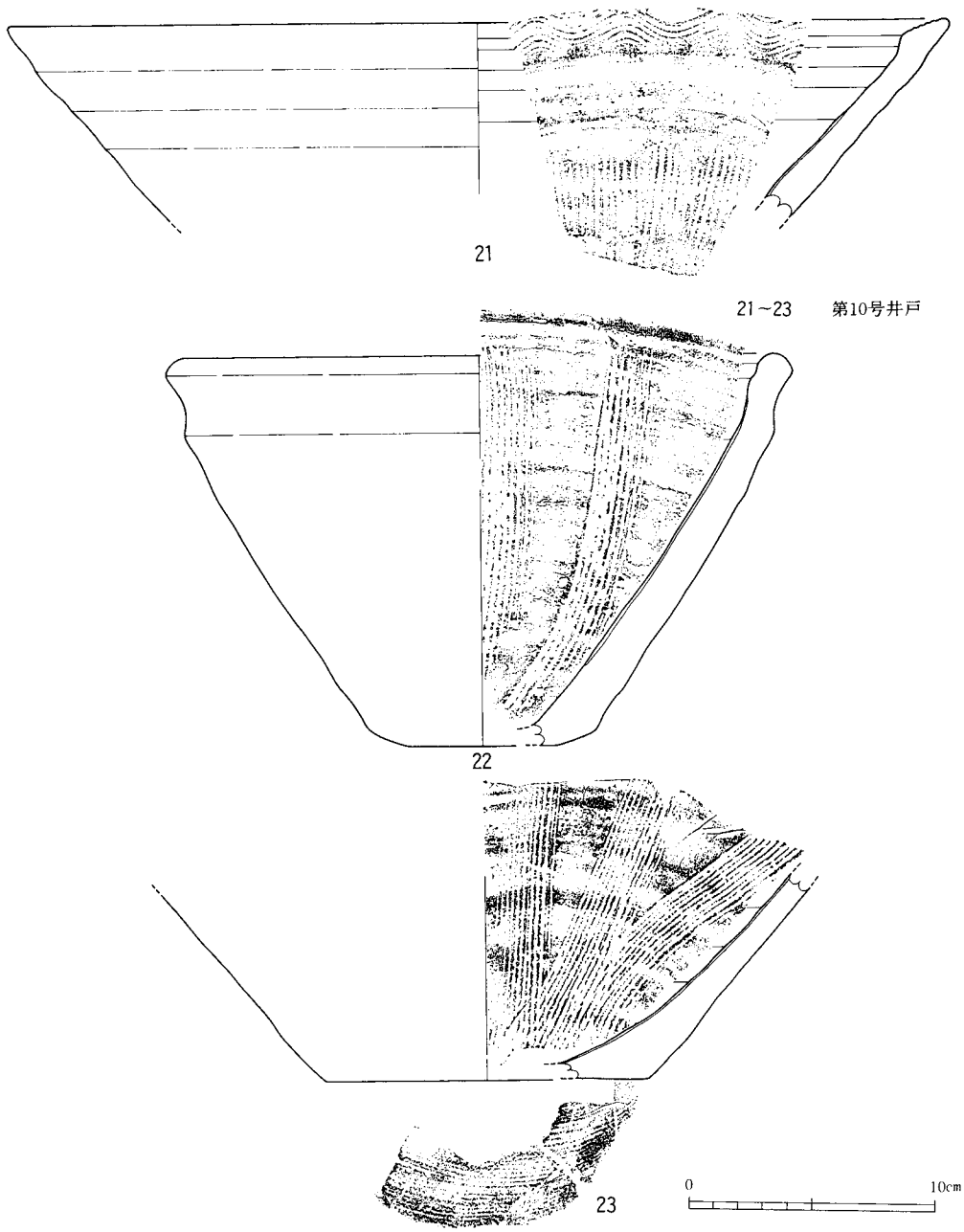


第18図　第3トレンチ井戸出土遺物実測図(1)(S＝1／3)

と略する。）と考えられる。

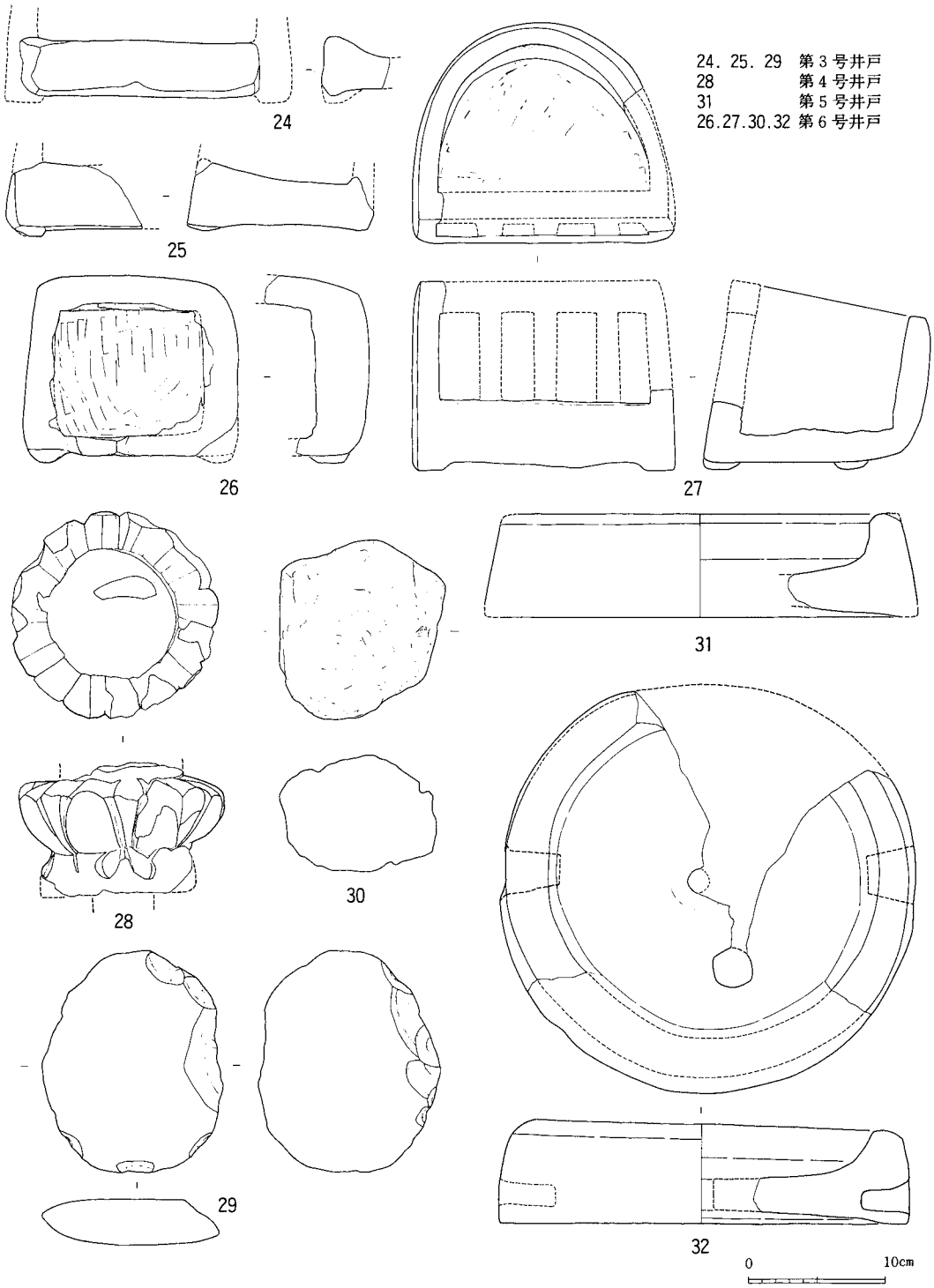
第９号井戸

14区432m付近で検出した。隅丸方形を呈すると考えられ、上端で一辺約60cm、底部で一辺約40～50cm、深さ約80cm（石組の下端まで深さ約55cm）、底部の標高約3.3mを測る。石組に使われた河原石は比較的大きく、井戸側に囲炉裏の縁石を転用する。検出時は石組の上半は抜き取られ、底部より３段程度が残っていた。覆土は上層より明茶色砂、暗灰色粘質土となる。また井戸から



第19図　第３トレンチ井戸出土遺物実測図(2)（Ｓ＝１／３）

南側に幅約20cmの溝がのび、井戸から水を引いたものと考えられる。溝の肩部には河原石が一段のみ残存し、上部は抜き取られている。溝底の標高は約3.50～3.55mを測る。出土遺物なし。



第20図　第3トレンチ井戸出土遺物実測図(3)（S＝1/5）

第10号井戸

13区369m付近で検出し、第7号井戸の西側に近接して掘られる（第14図）。調査区北壁断面に一部が現れており、規模不明である。石組は20cm前後の河原石を積み上げており、覆土は河原石の混じる灰褐色砂質土であり、一度に埋め込まれている。第19図21～23は埋土中より出土した。21、23は珠洲焼すり鉢である。21は口径39cmを測り、口縁部は内傾する。口縁部に波状文、体部全体におろし目を施す。珠洲Ⅵ期と考えられる。23の底部は薄く、体部直線的に立ち上がる。内面に幅2.5cmで11条一単位のおろし目を加える。珠洲Ⅲ期と考えられる。22は越前焼すり鉢で、口径26cm、器高16.1cmを測る。底径が小さく、体部はあまり開かない。越前Ⅳ期と思われる。

4．土坑　（第21～28図、第1表）

合計25基の土坑を検出した。大部分の土坑は不定形で浅い。第11号土坑から、まとまった管状土錘が出土した。また第18、19号土坑は形態・規模から井戸の可能性をもつ。

第1号土坑

第13区284m付近で検出した。やや崩れた方形を呈すると考えられ、110cm×100cm以上、深さ約20cmを測る。覆土は上層より砂粒を含む明灰色粘質土、鮮灰色粘質土となる。出土遺物なし。

第2号土坑

13区308m付近で検出した。隅丸方形を呈し、116cm×80cm以上、深さ約10cmを測る。覆土は暗灰色砂質土の単層である。覆土中より遺物が出土した。第26図33は珠洲焼すり鉢である。口縁端部をやや凹ませ、内面に細かい単位のおろし目を施す。珠洲Ⅱ期に位置付けられる。第28図59は茶臼上臼で臼面径21.2cm、厚さ11.8cmを測る。方形の挽き木孔の周囲に蓮弁状の文様を彫り込む。

第3号土坑

13区302m付近で検出し、黒灰色粘質土をベースとする上面遺構である。不定型なプランをもち、覆土は細かい木片が多く混じる暗灰色粘質砂である。出土遺物なし。

第4号土坑

13区326m付近で検出し、第5号土坑に切られる。深さ18～24cmを測り、覆土は灰黄色砂質土で黒色粘土をブロック状に含む。出土遺物なし。

第5号土坑

13区329m付近で検出した。やや崩れた円形を呈し、深さ約30cmを測る。覆土中に20cm大の河原石、木片を含む。出土遺物なし。

第6号土坑

13区331m付近で検出した。中央部付近は一段深くなり、径130～140cm、深さ約30cmを測る。覆土は上層より暗灰色粘質土、暗灰茶色粘質土となる。第26図35は覆土第2層目より出土した珠洲焼すり鉢で青灰色を呈する。口径38.4cm、器高15.0cmを測り、体部は直線的にのびる。口縁端部に波状文、体部内面に幅3.5cmで12本一単位のおろし目を加える。胎土は淡灰色を呈し、緻密。珠洲Ⅳ期後半と考えられる。

第7号土坑

13区322m付近で検出し、黒灰色粘質土に覆われた下面遺構である。不定型な平面プランをもち深さ約12cmを測る。地山面の浅い落ちこみの可能性をもつ。出土遺物なし。

第8号土坑

13区324m付近で検出した。楕円形を呈すると考えられ、東西方向で長さ約150cm、深さ約30cmを測る。覆土は上層から灰黄色砂質土、暗灰色砂質土となる。出土遺物なし。

第9号土坑

13区333m付近で検出し、長軸300cm以上、短軸約100cm、深さ10～24cmを測る。覆土は東側から堆積し、上層から暗灰色砂質土、灰黄色砂質土となる。覆土中より遺物が出土した。第26図34は越前焼すり鉢。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部を平坦に仕上げる。内面に1条の凹線を入れた後、幅3.5cmで12本一単位のおろし目を加える。胎土は淡灰色で緻密。越前Ⅳ期後半と考えられる。第28図58は台付石鉢で、隅丸長方形を呈すると考えられる。長軸17cm以上、短軸約26cm、台高3.5cmを測る。底部内面に火を受けた痕跡が残り、火鉢として使用されたと考えられる。石材は細砂粒を多く含む緑色の凝灰岩である。

第10号土坑

13区337m付近で検出し、円形を呈すると考えられる。径約100cm、深さ74cmを測り、覆土は茶灰色浜砂の単層である。耕土直下から切り込み、近・現代の耕地整理後に掘られたと考えられる。出土遺物なし。

第11号土坑

13区341m付近で検出した。隅丸方形を呈すると考えられ、底部東側が一段深くなる。東西方向で長さ約180cm、深さ約45cmを測る。覆土は上層から炭粒を含む暗灰色砂質土、より暗い暗灰色砂質土となる。底部西側で管状土錘が15個体まとまって出土した。なお第23図では遺物取り上げ後、さらに掘り下げた状態を赤色の線で示している。第26図36は覆土中より出土した土師器高杯脚部である。胎土中に焼土塊を含む。第26図37～47および第27図48～51は管状土錘である。49を除き側縁部が直線的で、平面形態は長方形または隅丸長方形を呈する。法量から大きく2分類できる(第1表)。41、42、50は長さ3.4～3.9cm、重さ16.2～23.7g、他の個体は長さ4.5cm前後、重さ33～50gを測る。また孔径は1.4～1.7cmと安定した数値を示す。大半は胎土の赤色粒を含む。第28図63は覆土中から出土した粉挽き臼上臼で、石材は火山礫凝灰岩である。

第12号土坑

13区345m付近で検出し、第13号土坑に切られる浅い土坑である。円形を呈すると考えられ、径約140cm、深さ12cmを測る。第27図52は覆土中より出土した珠洲焼すり鉢である。器肉は厚く、内面全体に彫りの深いおろし目を施す。珠洲Ⅵ期と考えられる。

第13号土坑

13区349m付近で検出した。東西方向で長さ約270cm、深さ25cmを測る。東側底部に30～40cm大の河原石がまとまって出土した。第28図61は覆土中から出土した石鉢底部で、底部からなだらかに立ち上がる。石材は灰白色の軽石凝灰岩である。

第14号土坑

13区270m付近で検出した。崩れた楕円形を呈し、東側の底部が一段深くなる。深さ15cmを測り、覆土は小石の混じる暗灰色粘質土である。第28図62は覆土中から出土した茶臼上臼で、石質は緑灰色・硬質の凝灰岩である。

第15号土坑

13区302m付近で検出した下面遺構である。やや崩れた円形を呈し、東西方向で長さ約120cm、深さ約40cmを測る。覆土は上層より植物遺体を含む黒灰色粘質土、青灰色粘質土、暗青灰色粘質土となる。出土遺物なし。

第16号土坑

13区366m付近で検出した。隅丸長方形を呈し、長軸136cm、短軸82cm、深さ13cmを測る。底部は平坦で、覆土は20cm大の河原石の混じる暗灰色砂質土の単層である。第28図60は覆土中から出土した粉挽き臼下臼で臼面径28.4cm、厚さ8.0cmを測り、中央部が膨らむ。臼面のおろし目は8分割である。石材は火山礫凝灰岩。

第17号土坑

14区396m付近で検出した。深さ約20cmを測り、覆土は上層より暗灰色弱粘質砂、暗灰色粘質土となる。出土遺物なし。

第18号土坑

14区404m付近で検出し、その規模等から井戸として掘られた可能性をもつ。平面プランはやや崩れた円形で、断面円筒形を呈し、底部は平坦である。径100～110cm、深さ74cmを測り、覆土は小石の混じる暗灰色砂の単層である。覆土中より遺物が出土した。第27図53、54は越前焼すり鉢である。53は淡黄橙色を呈する。内面に幅3.2cmで9本単位のおろし目を施すが使用による摩滅が著しい。54は赤橙色の色調で、口径29.4cm、器高10.7cmを測る。体部は直線的にのび、口縁端部を平坦に仕上げる。内面に幅3cmで11本一単位のおろし目を施す。ともに越前Ⅳ期後半と考えられる。第28図64は軽石凝灰岩製の縁石である。断面台形を呈し、表面にノミ痕が残る。図中下面を除き火を受けている。第50図257は北宋銭の元豊通寶。書体は行書体である。(9)

第19号土坑

14区405m付近で検出し、第18号土坑と同様に井戸として掘られた可能性をもつ。平面プランは円形を呈し、断面は底部からすり鉢状に開く。径約130cm、深さ約80cmを測り、覆土は小石や河原石の混じる暗灰色砂である。第28図65は覆土中から出土した。建築部材と考えられ、柄および柄穴が認められる。一部火を受け炭化する。

第20号土坑

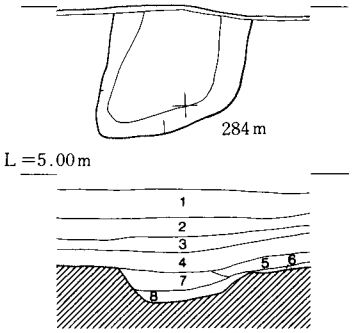
14区405m付近で検出し、第18、19土坑に切られる。深さ15cmを測り、覆土は小石や河原石の混じる暗灰色砂である。出土遺物なし。

第21号土坑

14区408m付近で検出し、その規模から竪穴状住居の可能性をもつ。隅丸方形を呈すると考えられ、一辺約360cm、深さ20～25cmを測る。覆土は淡灰黄色砂質土である。出土遺物なし。

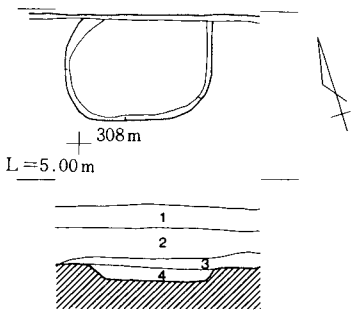
第22号土坑

第１号土坑



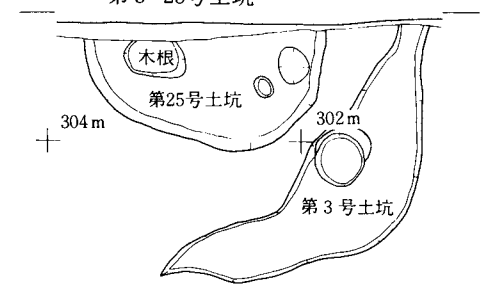
1　耕土
2　床土
3　暗茶灰色粘質土（２～５m小石含む）
4　暗灰黄色弱粘質土
5　暗灰黄色弱粘質土
6　暗灰色砂質土（粘質）
7　明灰色粘質土（砂粒含む）
8　鮮灰色粘質土

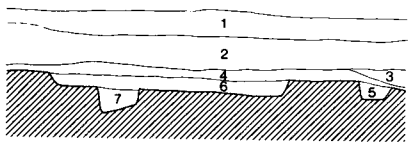
第２号土坑



1　耕土
2　床土
3　暗灰色砂質土(包含層)
4　暗灰色砂質土

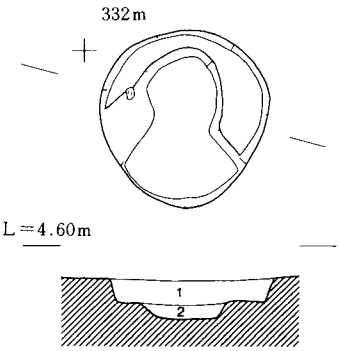
第３・25号土坑





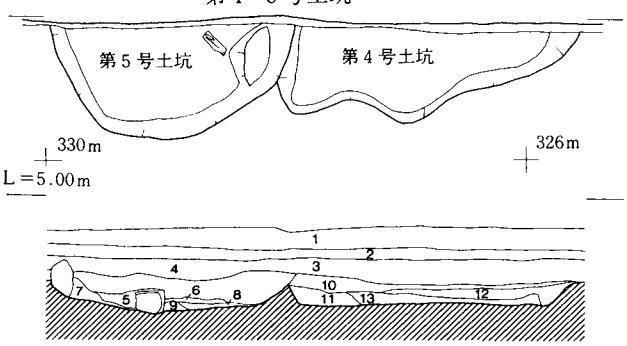
1　耕土
2　床土
3　茶灰色砂礫土
4　暗灰色砂質土（包含層）
5　暗灰色粘質砂（粘質ピート含む）
6　暗灰色砂質土（炭粒多い）
7　暗灰色砂質土（粘質）

第６号土坑

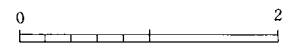


1　暗灰色粘質土（炭粒含む）
2　暗灰茶色粘質土

第４・５号土坑

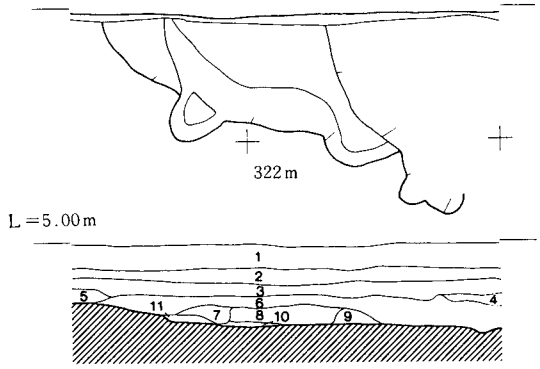


1　耕土
2　床土
3　暗灰色砂質土
4　灰黄色砂質土（やや粘質、鉄分黄灰色粘土ブロック含む）
5　灰色砂質土
6　暗灰色弱粘質土（鉄分含む）
7　灰色粘質土(鉄分含む)
8　黒灰色粘質砂
9　暗灰色弱粘質砂
10　灰黄色砂質土(黒色粘土ブロック入る)
11　灰黄色砂質土
12　10と同質(黒色粘土ブロック多く含む)
13　10と同質（やや粘質）



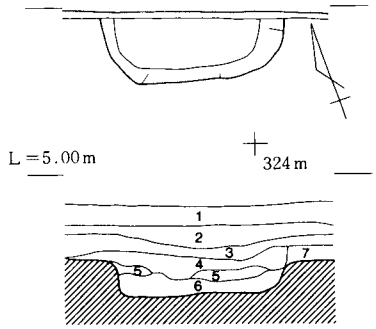
第21図　第３トレンチ土坑実測図(1)（S＝1/60）

第７号土坑



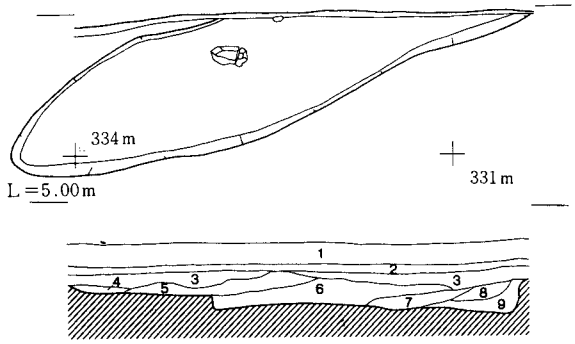
1　耕土
2　床土
3　暗灰色砂質土
4　黒灰色弱粘質砂
5　４と同質
6　黒褐色粘質土
7　黒灰色砂質土（鉄分含む）
8　黄灰色砂質土(炭粒多く含む)
9　黒灰色粘質砂
10　黒灰色粘質砂
11　明黄灰色粘質砂

第８号土坑



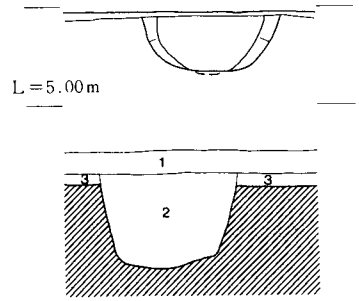
1　耕土
2　床土
3　暗灰色砂質土
4　灰黄色砂質土（やや粘質、鉄分含む）
5　〃　（黒灰色粘土ブロック含む）
6　〃　（４より暗い、炭粒含む）
7　暗灰色砂質土（やや粘質）

第９号土坑



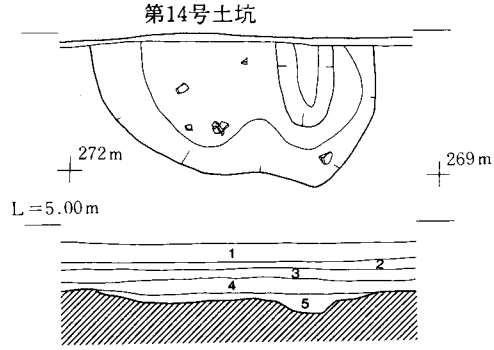
1　耕土
2　床土
3　暗灰色砂質土
4　黄灰色砂質土(やや暗い)
5　黄灰色砂質土
6　暗灰色砂質土（やや粘質、鉄分含む）
7　灰黄色砂質土（小石含む）
8　〃　（やや暗い）
9　〃

第10号土坑

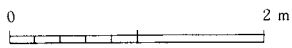


1　耕土
2　茶灰色浜砂
3　床土

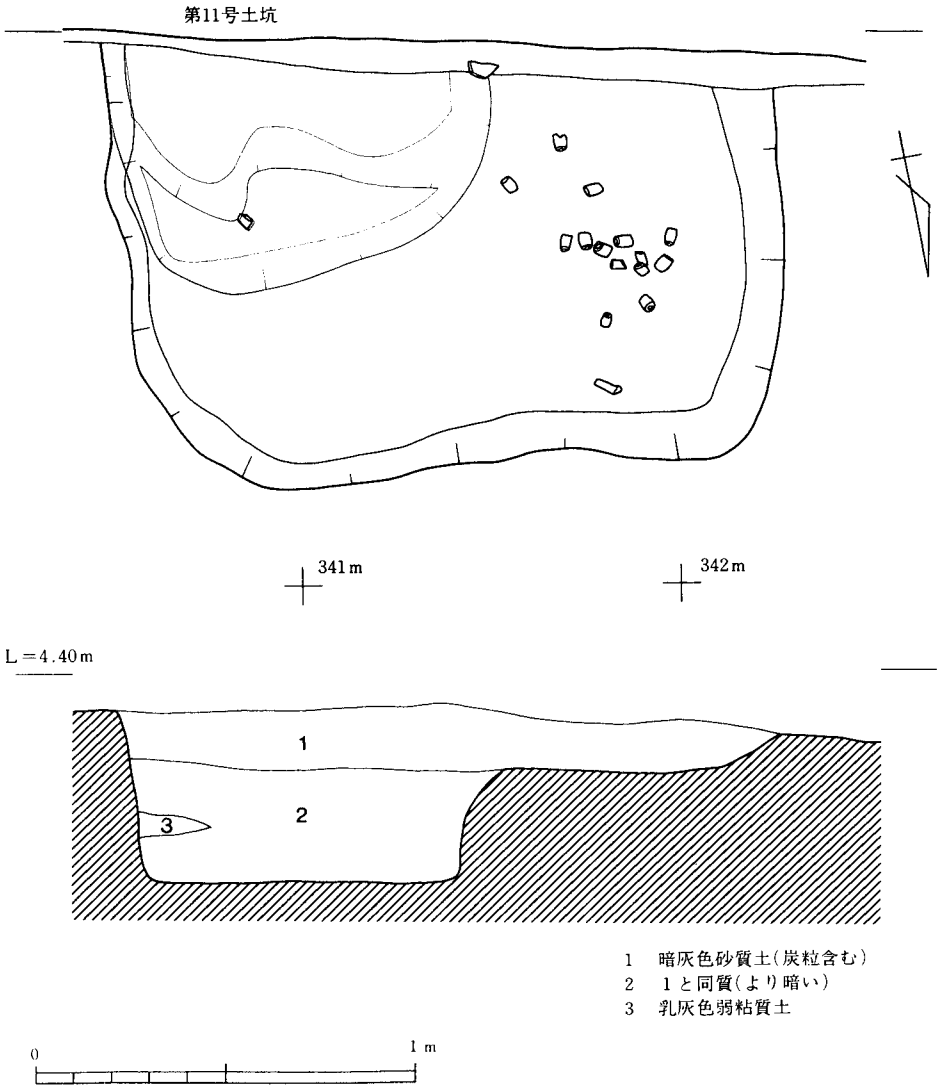
第14号土坑



1　耕土
2　床土
3　暗灰黄色弱粘質土
4　暗灰黄色弱粘質土
5　暗灰色粘質土(小石含む)



第22図　第３トレンチ土坑実測図(2)(Ｓ＝１/60)



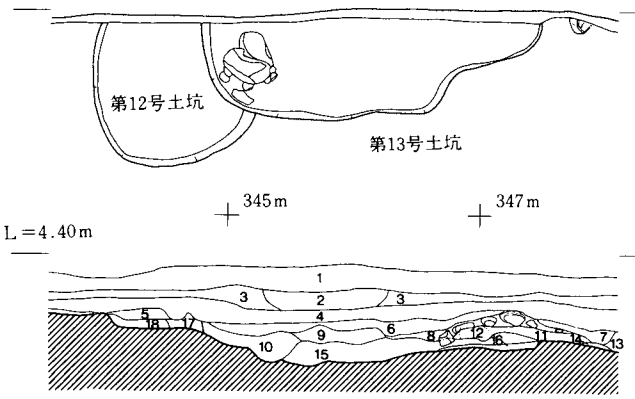
第23図　第3トレンチ土坑実測図(3)(S=1/30)

14区406m付近で検出した。崩れた円形を呈し、東西方向で径125cm、深さ30cmを測る。覆土は上層より暗灰色弱粘質砂、粗い明茶色浜砂となる。第27図56、57は覆土中より出土した。56の管状土錘はにぶい橙色を呈し、長さ3.3cm、幅3.7cm、孔径1.6cm、重さ40gを測る。胎土中に焼土粒を含む。57は須恵質の甕口縁部で、口径約40cmを測り、色調は灰色である。口縁部は外反し、端部外側にはナデ調整で面をつくる。胎土は黒色細粒を少量含み、粘質な印象を受ける。産地、時期ともに不明。[10]

第23号土坑

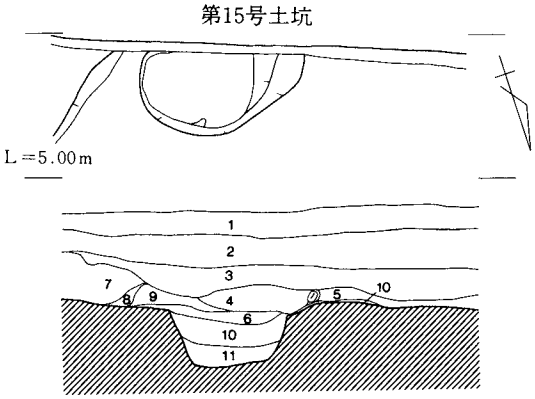
14区417m付近で検出した。円形を呈する考えられ、径約100cm、深さ30cmを測る。覆土は上層より暗灰色～暗灰茶色砂(埋土)、灰茶色砂となる。第27図55は覆土中から出土した珠洲焼小壺で、口径9.6cm、器高11.1cmを測る。肩部は張っており、短くのびる口縁端部はやや外傾する。また肩

第12・13号土坑



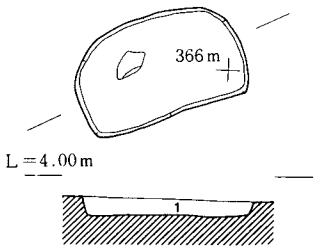
1 耕土
2 撹乱(濁灰色砂質土)
3 床土
4 暗灰色砂質土(炭類含む)
5 暗灰色弱粘質砂
6 黄灰色砂質土
7 黒灰色弱粘質土
8 黒灰色粘質土(円石含む)
9 暗灰色粘質土(黒灰色土ブロック含む)
10 暗灰色粘質土
11 灰色砂(炭粒含む)
12 〃
13 黄灰色弱粘質土
14 暗灰色粘質土
15 〃
16 暗灰色粘質土(しまっている)
17 黒灰色粘質土
18 暗灰色弱粘質土(炭粒含む)

第15号土坑



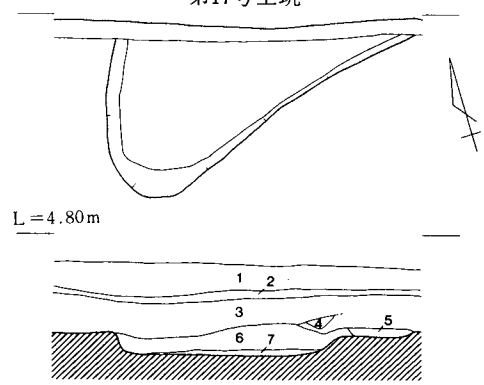
1 耕土
2 床土
3 茶灰色弱粘質砂
4 濁暗灰色弱粘質砂(小石含む)
5 黒灰色粘質土
6 〃 (植物遺体含む)
7 暗灰色弱粘質砂(小石含む)
8 〃 (黄灰色砂混じる)
9 灰色粘質土(〃)
10 青灰色粘質土(植物遺体含む)
11 暗青灰色粘質土

第16号土坑



1 暗灰色砂質土

第17号土坑

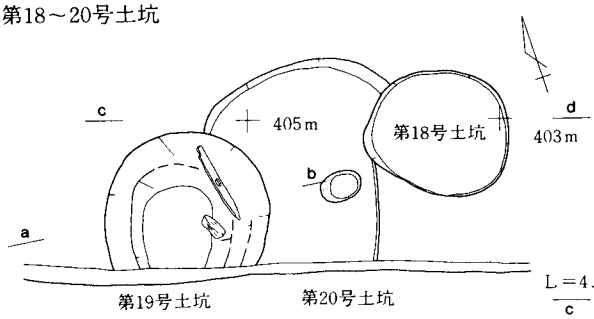


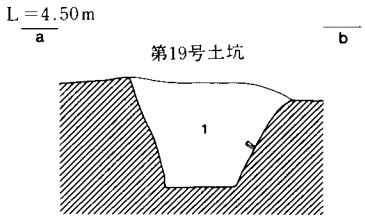
1 耕土
2 床土
3 暗灰色弱粘質砂(小石含む)
4 暗灰色砂質土
5 暗灰黄色砂質土
6 暗灰色弱粘質砂(暗灰色砂混じる))
7 暗灰色粘質土

0 2m

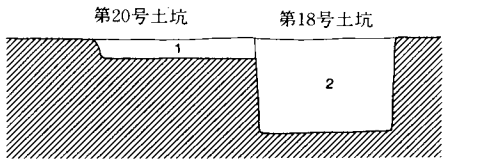
第24図 第3トレンチ土坑実測図(4)(S＝1/60)

第18～20号土坑



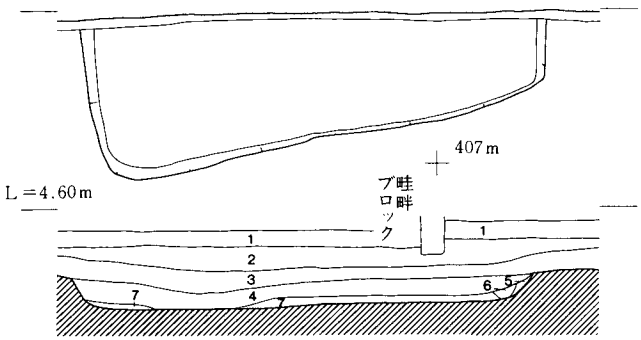


1　暗灰色砂(小石 、20cm大円石含む)



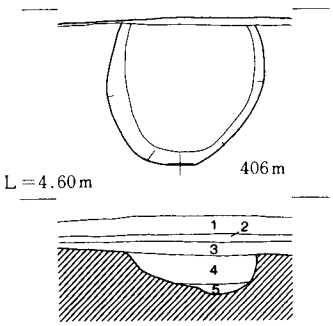
1　暗灰色砂(小石、20cm大円石含む)
2　暗灰色砂(小石含む)

第21号土坑



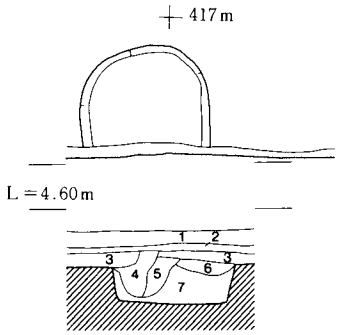
1　耕土
2　床土
3　暗灰色砂質土(炭粒含む)
4　淡灰黄色砂質土(やや粘性)
5　〃　(黄色が強い)
6　〃　(黒色が強い)
7　〃　(粘性が強く黒っぽい)

第22号土坑



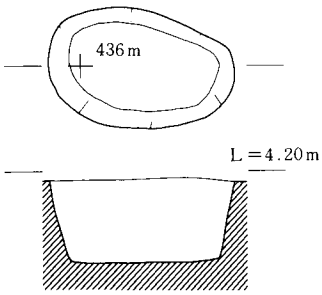
1　耕土
2　床土
3　暗灰色砂質土
4　暗灰色弱粘質砂
5　明茶色浜砂(粗い)

第23号土坑



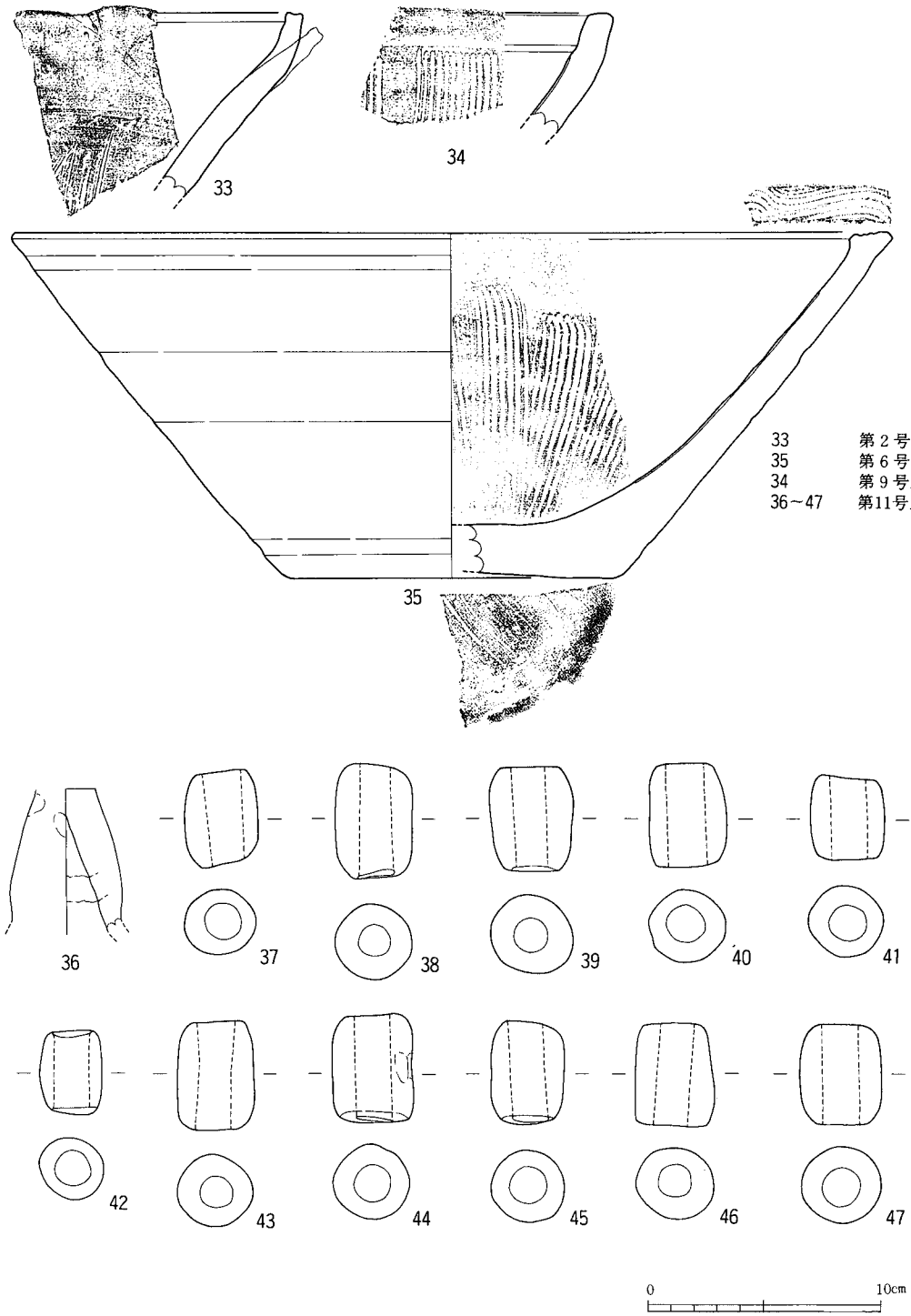
1　耕土
2　床土
3　暗灰色砂質土
4　淡灰色砂(黄色土、黒褐色土ブロック状に入る)
5　暗灰茶色砂(黄褐色土、ブロック状に入る)
6　暗灰茶色砂
7　灰茶色砂(炭化物含む)

第24号土坑

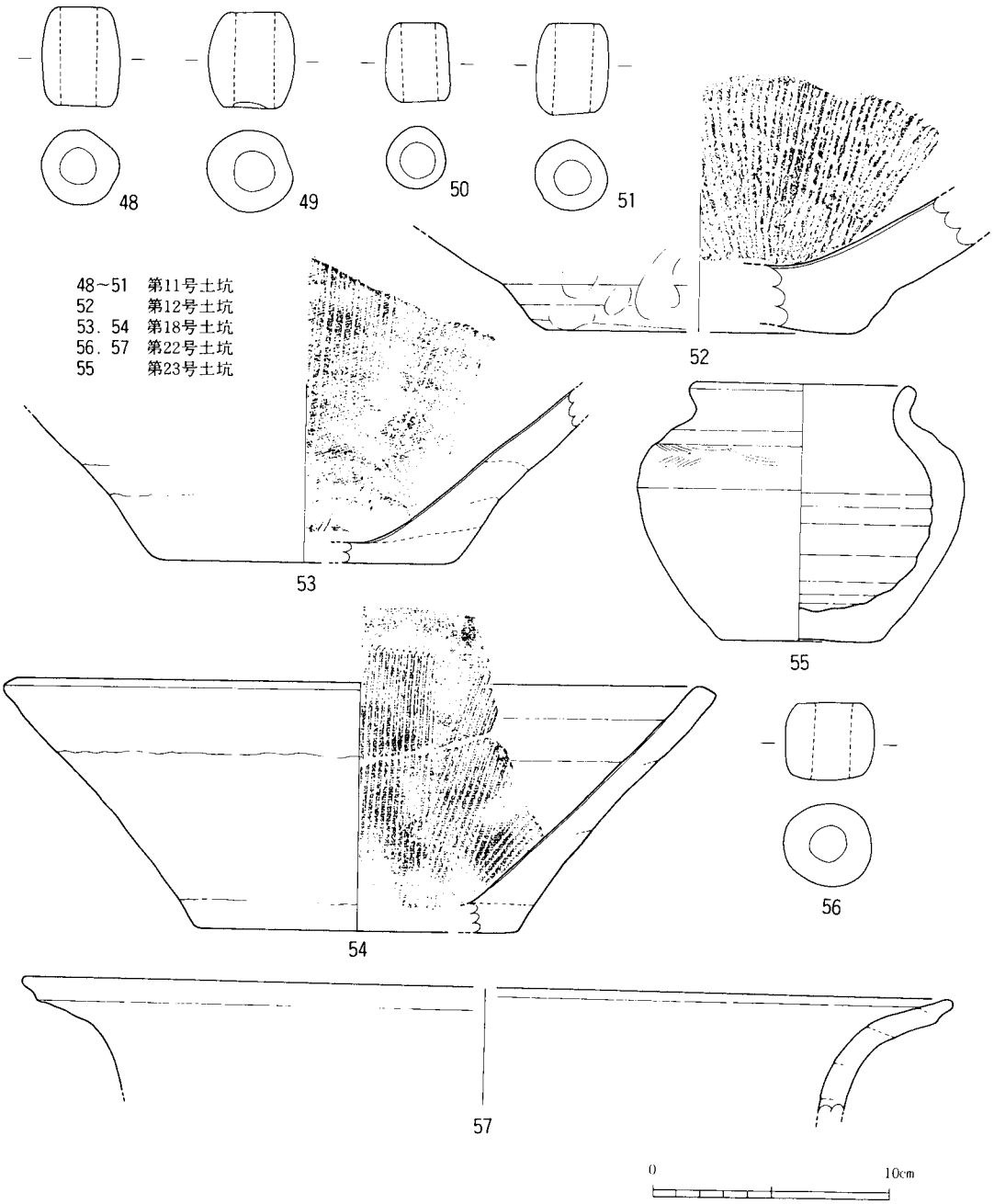


暗灰色砂(20cm大河原石含む)

第25図　第３トレンチ土坑実測図(5)(Ｓ＝１/60)



第26図　第3トレンチ土坑出土遺物実測図(1)(S＝1/3)

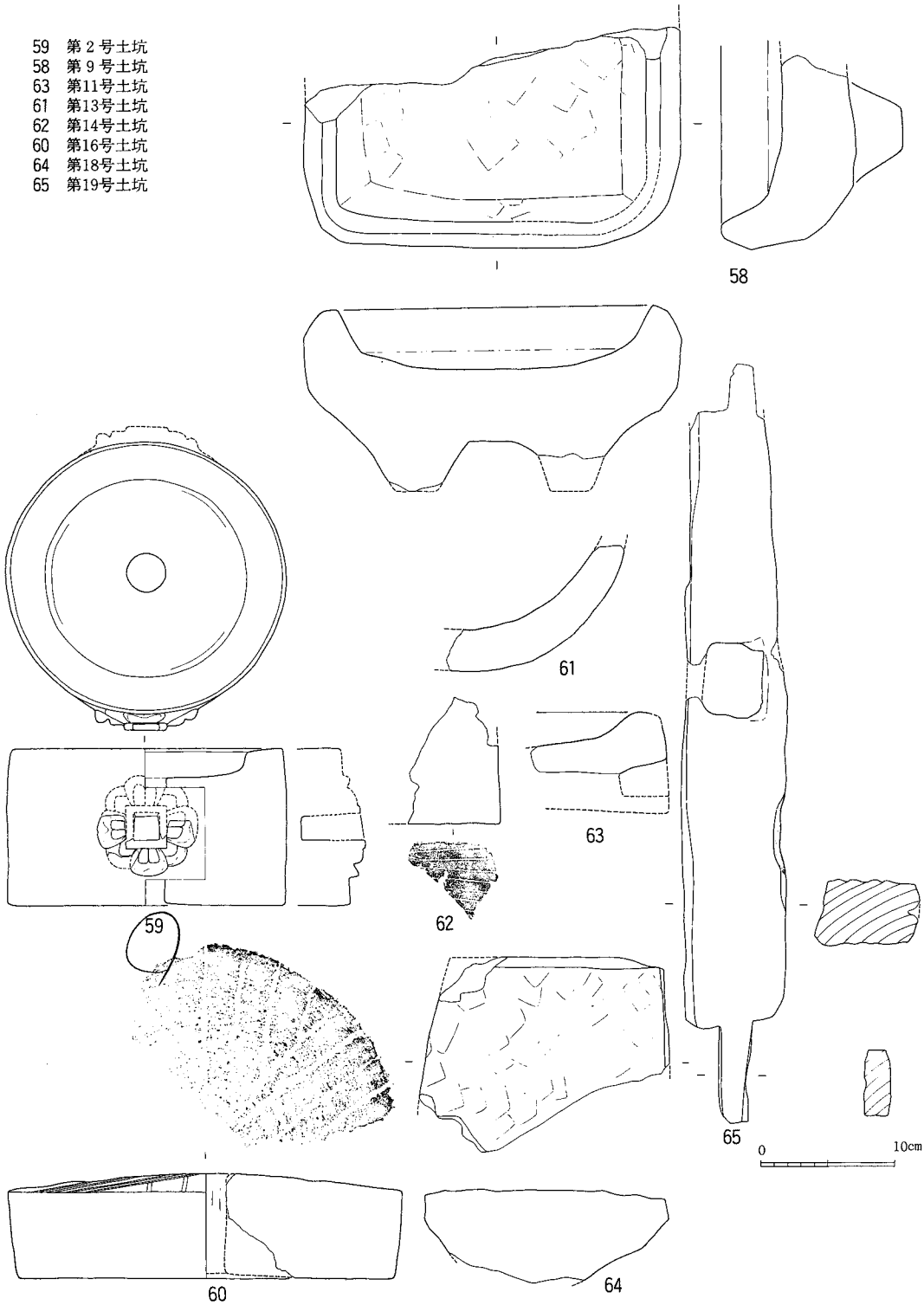


第27図　第３トレンチ土坑出土遺物実測図(2)（Ｓ＝１／３）

第１表　第11号土坑出土管状土錘一覧表（単位はcmおよびｇ）

No.	長さ（cm）	幅（cm）	孔径（cm）	重さ（g）	No.	長さ（cm）	幅（cm）	孔径（cm）	重さ（g）	No.	長さ（cm）	幅（cm）	孔径（cm）	重さ（g）
37	4.3	3.2	1.6～1.4	欠損	42	3.6	2.7	1.5	(16.2)	47	4.3	3.5	1.6	36.2
38	5.0	3.4	1.4	48.4	43	4.7	3.3	1.4～1.6	45.1	48	4.2	3.3	1.6	欠損
39	4.5	3.7	1.4～1.5	50.1	44	4.7	3.6	1.6	43.0	49	4.1	3.6	1.7	欠損
40	4.5	3.3	1.7	37.3	45	4.5	3.2	1.6	33.6	50	3.4	2.8	1.5	16.5
41	3.7	3.2	1.6	23.7	46	4.5	3.5	1.5	42.6	51	3.9	3.1	1.6	欠損

59　第２号土坑
58　第９号土坑
63　第11号土坑
61　第13号土坑
62　第14号土坑
60　第16号土坑
64　第18号土坑
65　第19号土坑



第28図　第３トレンチ土坑出土遺物実測図(3)（Ｓ＝１／５）

部をナデによりくぼませ、その下に文様を加える。

第24号土坑

14区436m付近で検出した。楕円形を呈し、長軸126cm、短軸94cm、深さ65cmを測る。底部は平坦で、覆土は河原石の混じる暗灰色砂の単層である。出土遺物なし。

第25号土坑

13区303m付近で検出した黒灰色粘質土をベースとする上面遺構である。楕円形を呈すると考えられ、深さ約10cmを測る。覆土は炭粒を多く含む暗灰色粘質土の単層で出土遺物なし。

5．落ちこみ状遺構　（第29～34図、第2表）

第1号落ちこみ状遺構

13区310～315m付近で検出し、第1号竪穴状住居に類似した形態をとる。方形を呈すると考えられ、東西方向で幅約580cm、深さ約15～30cmを測る。底面は平坦で、中央部東側がややくぼむ。覆土は灰黄色砂質土で、くぼんだ部分には黒色粘質土が堆積する。第1号竪穴状住居のように覆土を埋めたとする積極的根拠はなく、また底面で生活をした痕跡も認められなかった。どのような性格をもつのか現状では判断できず、類例をまって再考したい。第31図67、68、第33図102は底面、第31図66、71～73および第33図97、98、108は覆土中から出土した。66は平安時代後期の土師器椀で、底部台状を呈し、底部外面に糸切り痕が残る。67は土師質皿で口径10cm前後を測る。色調はにぶい橙色で口縁部に灯明痕が残る。藤田氏編年Ⅲ期と考えられる。68は明染付碗である。高台外面と内面見込部分に圏線を、また体部外面と内面見込部分に文様を施す。全面に施釉後、高台畳付部分の釉を削り取る。素地は灰白色で堅緻、釉は透明でやや青味を帯びる。71は瀬戸焼天目茶碗で口径11.6cmを測る。黒褐色の釉を施し、割れ口2箇所に漆状の補修痕が認められる。72は越前焼すり鉢で、幅4.0cmで14本一単位のおろし目を入れる。色調は灰色で胎土は堅緻。越前Ⅳ期後半に位置付けられる。73は越前焼壺で胴部は直線的に立ち上がる。割れ口2箇所に漆状の補修痕が認められる。97、98は行火Ⅰ種である。97は台部付近で下面に火を受けている。石材は軽石凝灰岩である。98の石材は緑色凝灰岩で、補修のため側面に彫り込みをおこなう。102は置き砥石と考えられ、断面方形を呈する。色調は灰白色で、石材は硬質の凝灰岩である。108は淡緑灰色の粉挽き臼上臼で、臼面径32cm、厚さ12.6cm、供給口径約5cmを測る。臼面のおろし目は8分割され、5本の副線を入れる。石材は白色粗粒を含む硬質の凝灰岩である。

第2号落ちこみ状遺構

13区342～349m付近で検出した。不定形なプランをもつ浅い落ちこみと考えられ、南西側で一段深くなる。覆土は河原石を含み、上層より暗灰色砂質土、暗褐色粘質土等が複雑に堆積する。また南東側の一段深くなる部分では底面で河原石に混じり、管状土錘がまとまって出土した。他の遺物は覆土中から出土した。第31図69は加賀焼甕口縁部で、口縁端部をしっかりと面取りする。那谷ダイテンノウダニ1号窯に類例があり[10]、加賀Ⅲ期に位置付けられる。70は瀬戸焼鉄釉の香炉で口径9.1cmを測る。黒褐色の釉を施す。74は珠洲焼すり鉢で口径31cmを測る。口縁部は内傾し、割れ口2箇所に漆状の補修痕が認められる。珠洲Ⅵ期と考えられる。75は越前焼すり鉢で口径37

cm、器高12cm前後を測る。淡黄橙色を呈し、幅3cmで10本一単位のおろし目を入れる。越前Ⅳ期後半に位置付けられる。76～83は管状土錘で、いずれも側縁部が直線的で、円柱状を呈する。長さ4.5～5.0cm、幅3.1～3.9cm、孔径1.5～1.6cmを測り、安定した数値を示す。色調は淡橙色～灰白色で、胎土中に赤色粒を含む。なお各個体の法量は第2表のとおりである。85の表面は円滑であり砥石の可能性をもつ。安山岩系の石質で重さ234gを測る。第33図100は行火Ⅰ種で、石材は軽石凝灰岩である。102は行火Ⅱ種で前面に窓が穿たれる。石材は軽石凝灰岩である。第34図114は軽石凝灰岩製の囲炉裏の縁石と考えられる。断面方形を呈し、下面を除き火を受けた痕跡が残る。

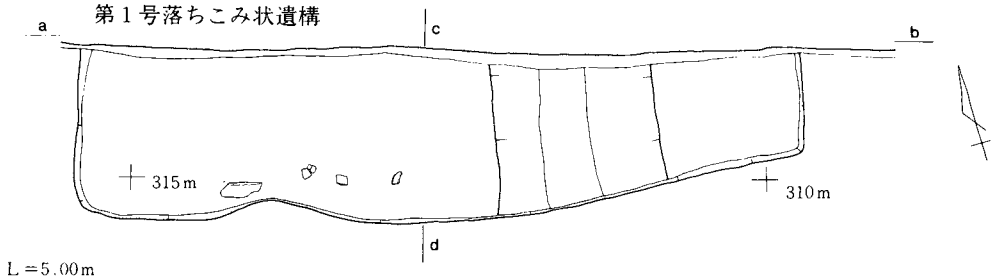
第3号落ちこみ状遺構

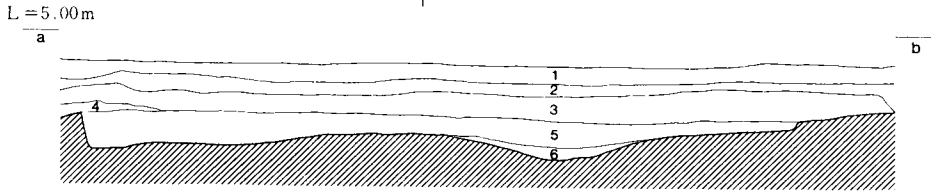
13区351～354m付近で検出した。深さ約10～20cmを測り、底面はほぼ平坦である。覆土は河原石を含む。覆土中より遺物が出土した。第31図84は瀬戸焼天目茶碗で、口径11.5cm、器高6.5cmを測る。鉄化粧を体部下端まで施した後に、にぶい茶色の釉をかける。割れ口2箇所に漆状の補修痕が残る。86は珠洲焼すり鉢で口縁部は内傾し、波状文を施す。珠洲Ⅵ期に位置付けられる。第33図103は石鉢で体部と底部の境は明瞭に屈曲する。底部内面に火を受けた痕跡が残る。石材は107と同じく、緑色細粒を層状に含む緑白色凝灰岩である。104～107は円形の石鉢である。104～106は口径約30cmを測る。体部やや内湾し、口縁部を平坦に仕上げる。105の底部は使用により薄くなる。また火鉢に転用されたのか、内面に火を受けた痕跡が残る。石材は緑色細粒の混じる白緑色の凝灰岩。107は口径約40cmを測る。体部は直線的にのび、方形の把手を彫り出す。把手数不明。石材は103と同じである。第34図109、112は粉挽き臼である。109は下臼で、臼面径31cm、厚さ7.7cm、芯棒径2.8cmを測る。芯棒は六角形に面取りされ、臼面両面に8分割のおろし目を入れる。ただし底部外面のおろし目は未使用である。石材は112と同質の淡緑灰色の火山礫凝灰岩である。112は上臼で臼面径26cm、厚さ約6cmを測る。使用により厚さはかなり減じており、円周上約20cm離れて、2箇所に横長方形の挽き木孔を穿つ。115は縁石の可能性をもつ。また図化できなかったが明銭の永樂通宝（楷書体）が1枚出土している。初鋳年は永樂6年（1408）である。

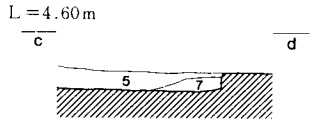
第4号落ちこみ状遺構

13区373m～14区382m付近で検出し、東西方向で幅約920cm、深さ20～30cmを測る。底面は平坦であり、肩部はなだらかに立ち上がる。東端覆土は上層より灰黄色弱粘質砂、暗灰黄色粘質土、暗灰黄色弱粘質砂、明茶灰色砂となる。なお375～377m付近は農道を確保するため未掘である。覆土中から遺物が出土した。第32図87は須恵器甕で南加賀産と考えられる。88は管状土錘で長さ3.8cm以上、幅3.2cm、孔径1.5cm、残存重量20.8gを測る。89、90は土師質皿である。89は橙色を呈し、口縁部全周に灯明痕が付着する。90は浅黄橙色を呈し、口縁部に一段ナデを施す。それぞれ藤田氏編年Ⅴ期、Ⅲ期に位置付けられる。91は白磁皿で口径約10cmを測る。口縁端部は2段に面取りされている。素地はやや砂っぽく、黄色味を帯びた灰色の釉を施す。15世紀以降と考えられる。92は青磁稜花皿で図化していないが口縁部内面にヘラ描きの花文を施す。透明感のあるオリーブ灰色の釉をかけ、貫入が入る。93は青磁碗で口径11.8cm、器高5.5cmを測る。高台は中心をズレており、体部外面に不揃いな線描蓮弁文を施す。素地は赤茶色を呈し、にぶい褐色の釉を高

第１号落ちこみ状遺構

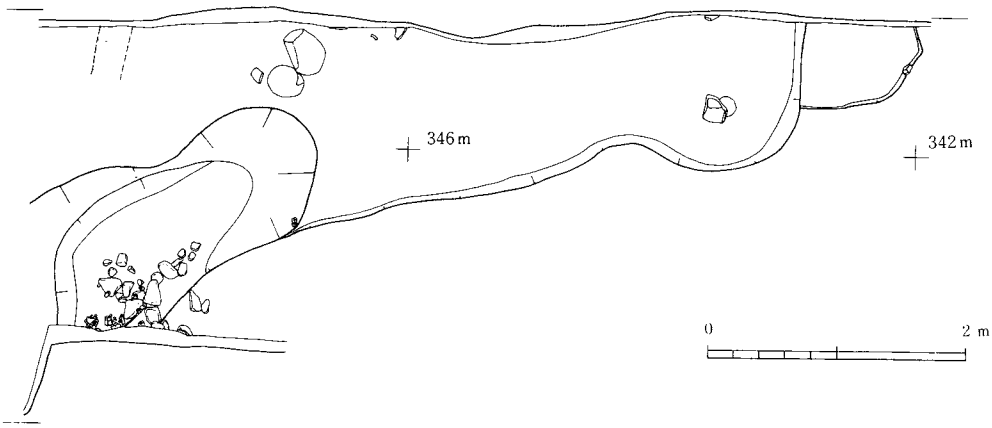


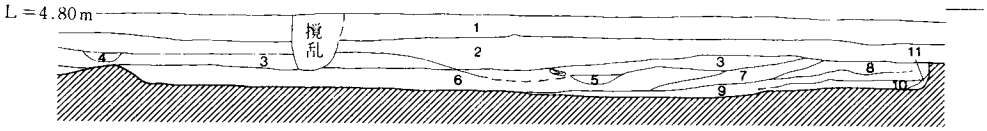




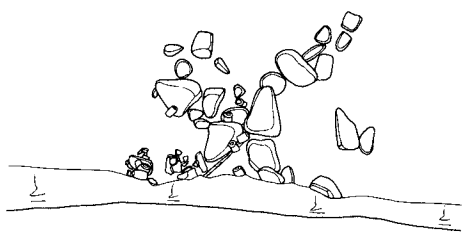
1　耕土
2　床土
3　暗灰色砂質土(炭粒含む)
4　暗黒灰色弱粘質土(小石含む)
5　灰黄色砂質土(やや粘質、小石、炭粒含む)
6　黒色粘質土(植物遺体を多く含む)
7　暗灰色粘質土(炭粒含む)

第２号落ちこみ状遺構





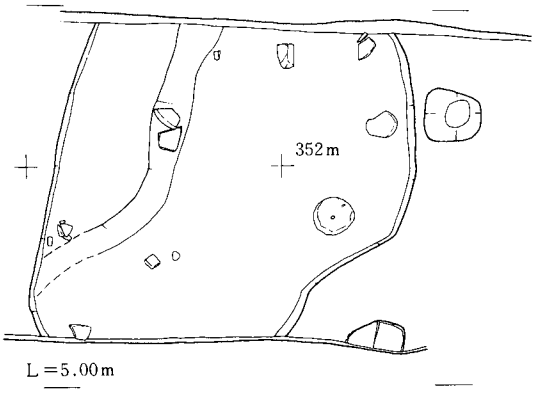
第２号落ちこみ状遺構管状土錘出土状況(Ｓ＝１/30)

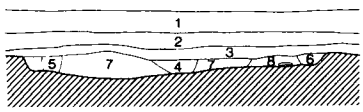


1　耕土
2　床土
3　暗灰色砂質土
4　黄褐色砂質土
5　黄色粘質土灰色砂の混合土
6　暗灰色砂質土(３より黒く粘質)
7　黄色粘質土と灰色砂の混合土
8　暗灰色砂質土
9　暗褐色粘質土(灰を多く含む)
10　〃　(10より粘質)
11　〃　(灰を多く含む)

第29図　第３トレンチ落ちこみ状遺構実測図(1)(Ｓ＝１/60、１/30)

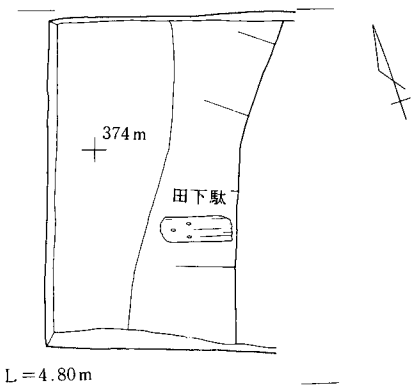
第３号落ちこみ状遺構

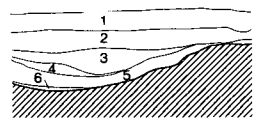




1　耕土
2　床土
3　暗灰黄色砂質土
4　〃　（黄色土ブロック混じる）
5　灰黄色粘質土(小石含む)
6　灰色砂
7　暗灰黄色砂質土(やや粘質)
8　濁黄褐色粘質土

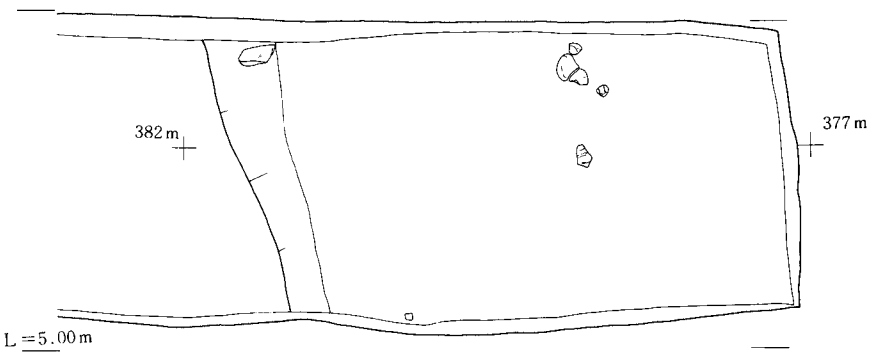
第４号落ちこみ状遺構(東端)

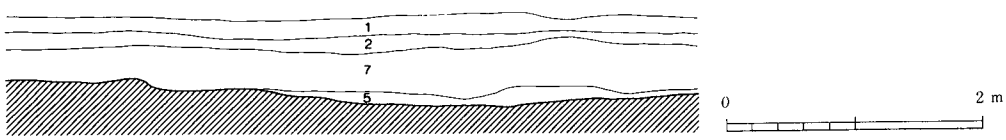




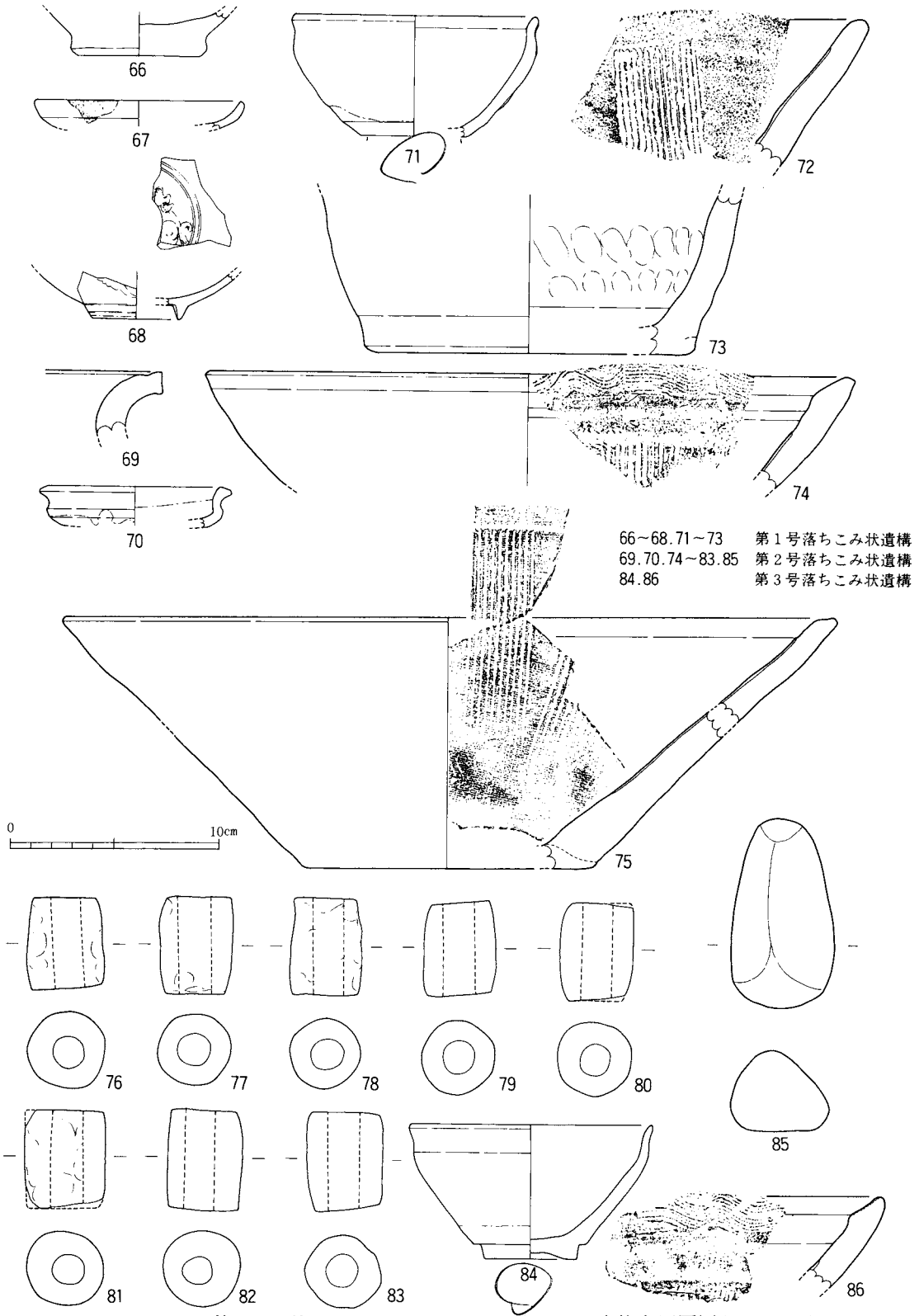
1　耕土
2　床土
3　灰黄色弱粘質砂(炭粒含む)
4　暗灰黄色粘質土
5　暗灰黄色弱粘質砂
（３より粘質で鉄分を多く含む）
6　明茶灰色砂
7　３に円礫混じる

第４号落ちこみ状遺構(西端)





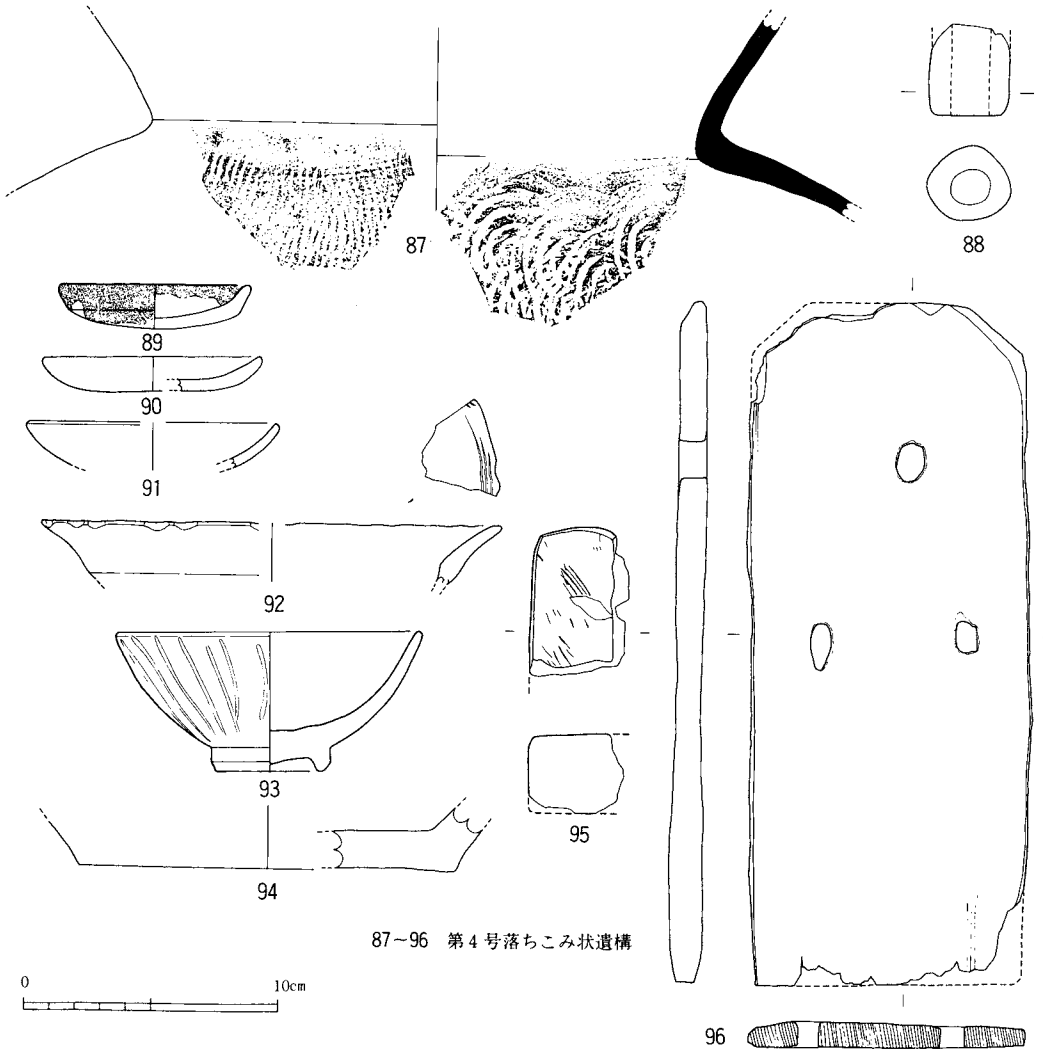
第30図　第３トレンチ落ちこみ状遺構実測図(2)(Ｓ＝1/60)



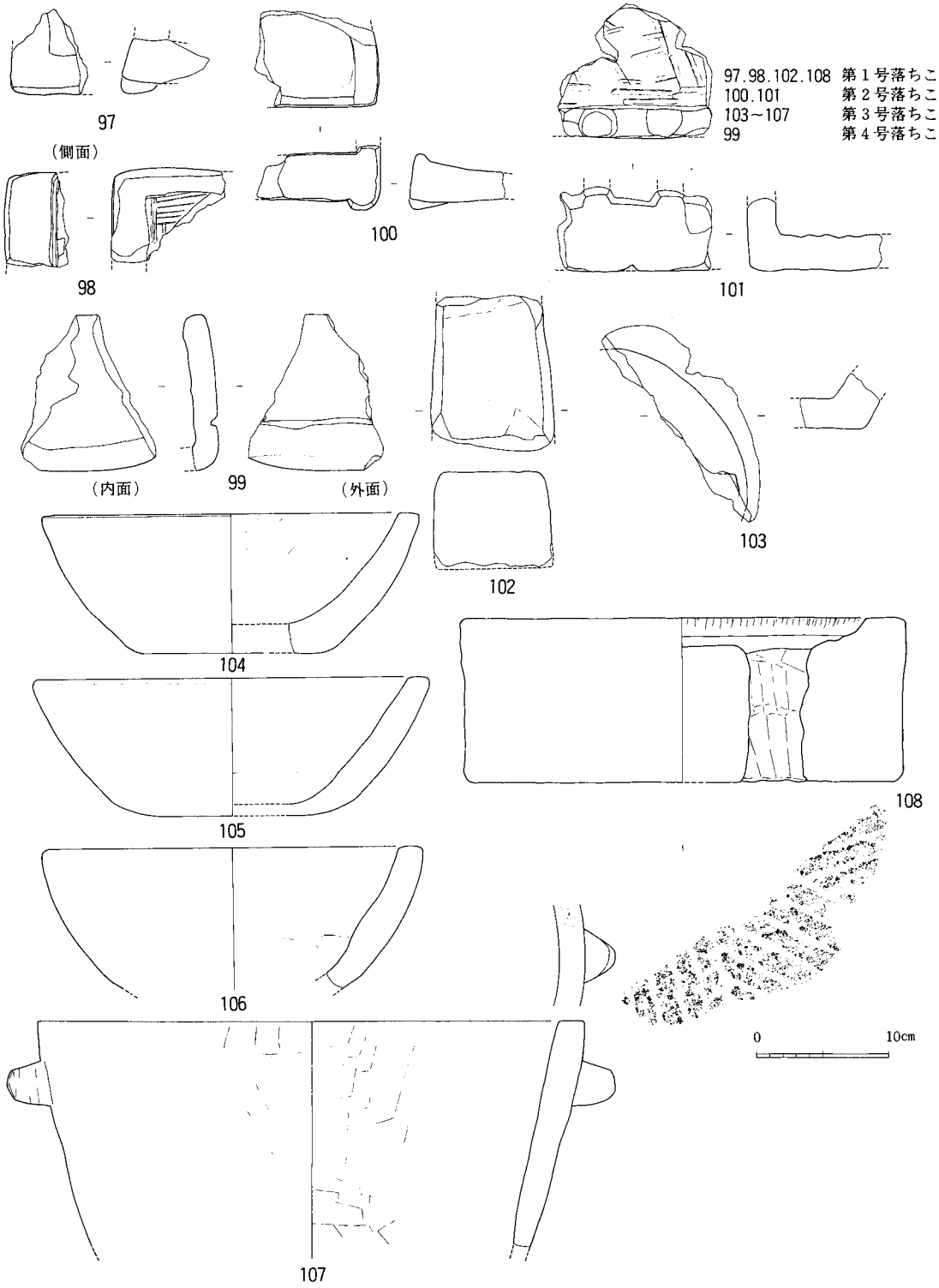
第31図　第３トレンチ落ちこみ状遺構出土遺物実測図(1)(Ｓ＝１／３)

第２表　第２号落ちこみ状遺構出土管状土錘一覧表（単位はcmおよびｇ）

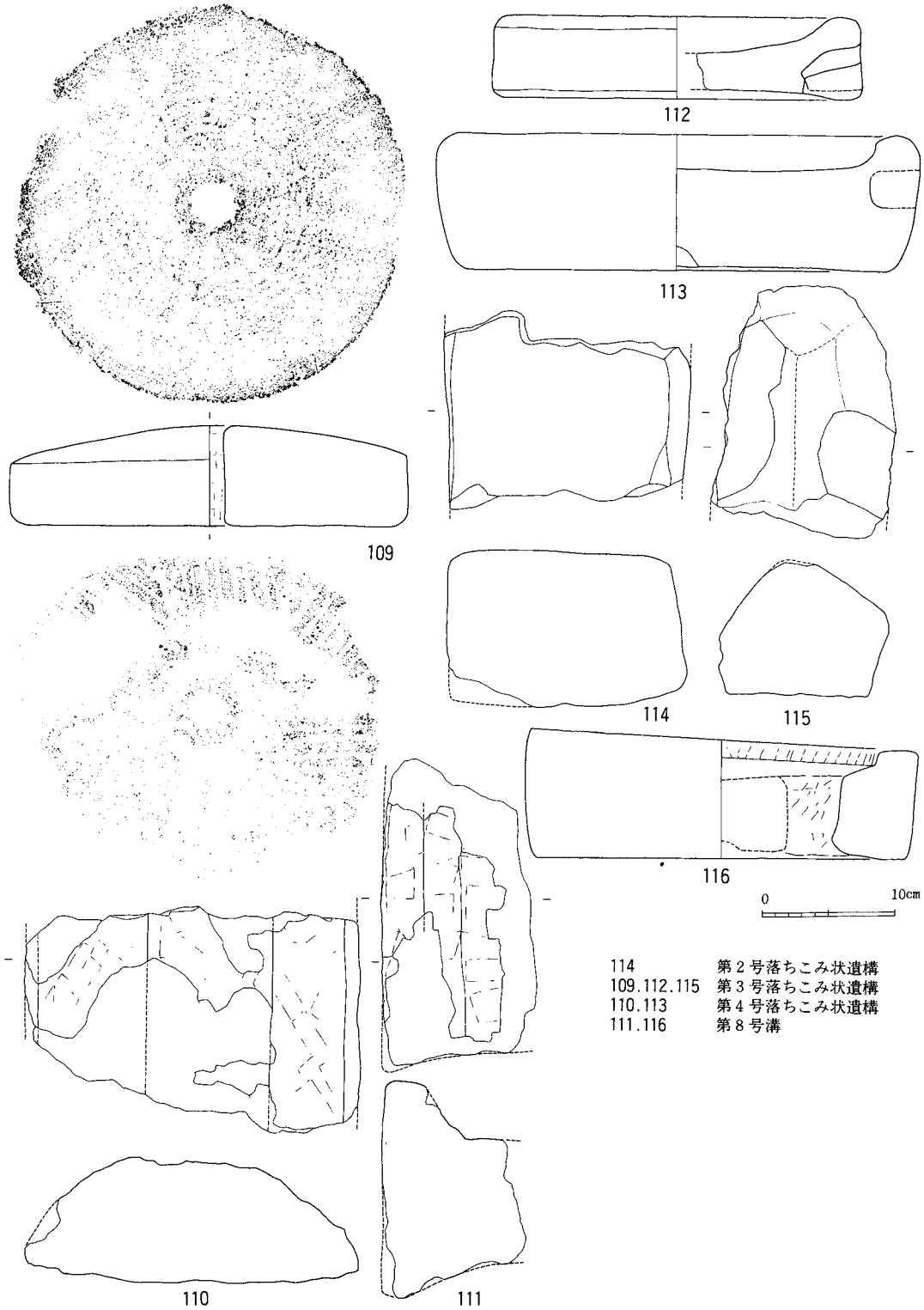
No.	長さ	幅	孔径	重さ	No.	長さ	幅	孔径	重さ
76	4.5	3.7	1.5	47.2	80	4.7	3.5	1.5	欠損
77	4.7	3.2	1.6	46.5	81	4.8	3.9	1.6	約58?
78	4.6	3.5	1.6	41.4	82	5.0	3.1	1.6	51.8
79	4.6	3.5	1.6	43.0	83	4.8	3.6	1.5	52.7



第32図　第３トレンチ落ちこみ状遺構出土遺物実測図(2)（Ｓ＝１／３）



第33図　第３トレンチ落ちこみ状遺構出土遺物実測図(3)（Ｓ＝１／５）



第34図　第３トレンチ落ちこみ状遺構他出土遺物実測図（Ｓ＝１/５）

台畳付部分を超えて施す。94は越前焼壺底部である。淡灰色を呈し、内面に二次加熱による剝離が認められる。95は砥石で断面方形を呈する。石材は成層状に堆積した硬質の凝灰岩である。第33図99は行火Ⅱ種底部付近で、補修のため彫り込みを加える。石材は緑白色の凝灰岩である。第34図110は囲炉裏の縁石と考えられる。断面台形を呈し、下面を除き火を受けている。石材は軽石凝灰岩。113は粉挽き臼上臼で、臼面径約35cm、厚さ10.4cmを測る。横長方形の挽き木孔を上の方に彫り込む。石質は火山礫凝灰岩である。第32図96は田下駄で中世のベース面となる黒褐色粘質土と覆土最下層の間から出土した。田辺常博氏他の分類[02]オオアシⅠ類（単純縦長）と考えられ、縦長の足板前方にやや崩れた楕円形の3個の鼻緒孔を穿つ。長さ約54cm、幅約21.5cm、厚さ約2.5cm、鼻緒孔2～3cmを測る。柾目取りで、表面が使用により摩耗している[03]。なお図化できなかったが内外面とも朱塗りの漆片が出土した。

6．溝　（第34～39図）

溝10条を検出した。全て等高線に沿うように、ほぼ南北方向に流れる。

第1号溝

13区281m付近で検出した。幅36～76cm、深さ24cmを測り、覆土は上層より明灰色粘質土、鮮灰色粘質土となる。第37図117は覆土中より出土した珠洲焼すり鉢で、内面全体に彫りの深いおろし目を入れる。珠洲Ⅴ期と思われる。

第2号溝

13区297m付近で検出した上面遺構である。第3号溝とほぼ平行して流れ、幅110～120cm、深さ12cmを測る。覆土は礫の混じる茶灰色砂で、洪水等により一度に埋まった可能性をもつ。第37図118は覆土中から出土した青磁碗で口径約13cmを測る。素地は淡灰色で、にぶい淡緑色の釉をかける。また割れ口に漆状の補修痕が残る。119は木製品で樽等の底板の可能性をもつ。

第3号溝

13区300m付近で検出した上面遺構である。幅約290cm、深さ28cmを測り、調査区南側で一段深くなる。最後に第2号溝と同質の砂で埋まり、第2号溝とほぼ同じ時期に廃絶したと考えられる。また南側の一段深くなった部分は底面より15cmの深さを測り、茶灰色粘質シルトが堆積する。覆土中より遺物が出土した。第37図120は越前焼壺類底部である。淡黄橙色を呈し、外面に板状具による成形痕が残る。121は曲げもの底板で調査区南壁の一段深くなった部分より出土した。径13.4cm、厚さ0.7cmを測る。

第4号溝

13区335m付近で検出した。幅120～140cm、深さ50cmを測るしっかりとした溝である。覆土は暗灰色弱粘質土で、第2層目には礫が多く混じる。底面は弥生～古墳時代の遺物を含む黒灰色強粘質土に達する。覆土中より遺物が出土した。第37図123は瀬戸焼灰釉皿で口径10.4cm、器高2.6cmを測る。厚い淡緑黄色の釉を全面に施した後、畳付部分の釉を削り取る。口縁部に漆状の付着が認められる。124は肥前系の鉢か。体下部で屈曲し、体部外反気味に立ち上がる。素地は黒色細粒を含んで灰色を呈する。灰緑色の釉を体部外面下半まで施す。125は朝鮮王朝鉄釉の徳利口縁部

で口径7.6cmを測る。にぶい茶褐色の釉を施す。126は管状土錘で隅丸長方形を呈する。長さ4.6cm、幅3.7cm、孔径1.6cm、重さ49.3ｇを測る。128は流紋岩系の石材で造られており、砥石と思われる。なお、第35図で図化した自然木は黒灰色強粘質土中より出土した。

第５号溝

13区362m付近で検出した。幅140～170cm、深さ32cmを測り、東側肩部は緩やかに立ち上がる。覆土は灰色砂質土であり、底面は黒灰色強粘質土に達する。第37図122は黒灰色強粘質土から出土した土師器壺で、頸部に粘土紐の接合痕が顕著に残る。胴部外面に粗いハケ調整を施し、古墳時代後期に位置付けられる。127は硬質の粘板岩製の石硯で黒色を呈する。平面形態は長方形を呈し、隅丸長方形の硯面をもつ。比較的小型の製品と考えられる。また図化しなかったが黒灰色強粘質土中から布留甕が出土した。

第６号溝

13区364m付近で検出し、第５号溝に切られる。深さ約35cmを測り、覆土は上層より灰黄色弱粘質砂、ピートを含む明灰色粘質土となる。

第７号溝

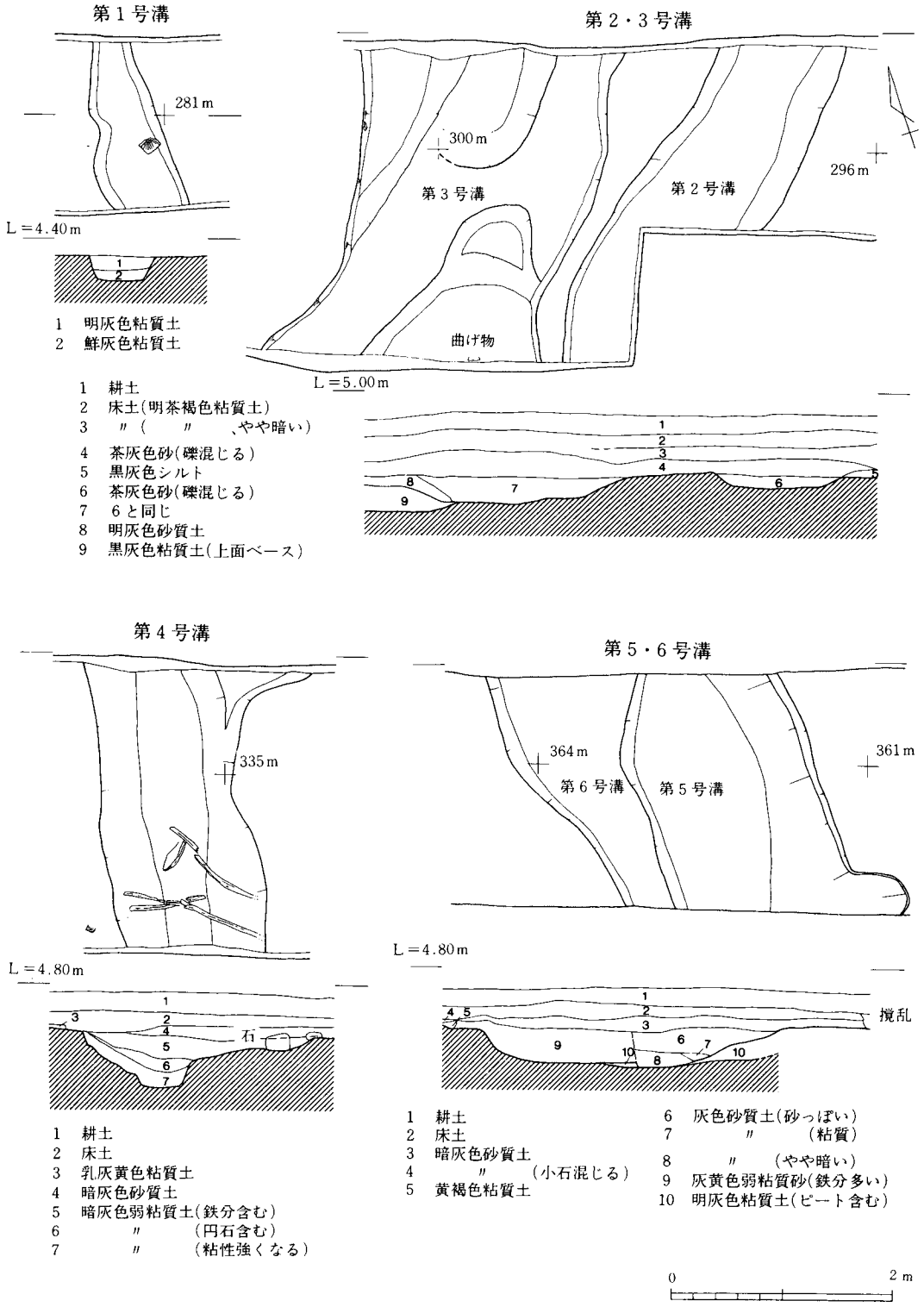
14区411m付近で検出した。幅140～180m、深さ22cmを測り、南側は幅が広くなる。覆土は上層より暗灰色砂、灰茶色粘質土、明茶灰色粗砂となる。覆土中から遺物が出土した。第38図129は緑白色の砥石で断面方形を呈する。残存する側面全てを研ぎに使っている。中研ぎ用と考えられる。石材は硬質の緑色凝灰岩。130、131は管状土錘である。130で長さ3.0cm、幅3.2cm、孔径1.4cm、重さ24.5ｇを、131で長さ3.9cm、幅3.3cm、孔径1.4cmを測る。132は珠洲焼すり鉢である。133、134は越前焼壺底部である。色調は133は淡橙黄色で、134は淡灰色である。第39図136は覆土第２層目から出土した。タモ枠と思われ、直径約２cmのしなる木をそのまま利用している。ワクの径は約75cmを測る。

第８号溝

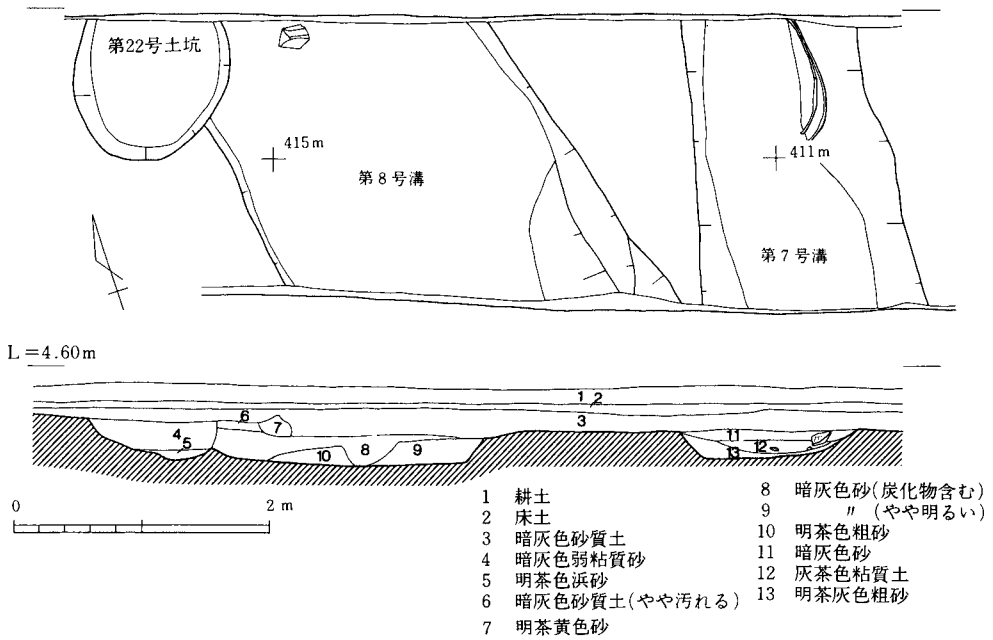
14区414m付近で検出し、第22号土坑に切られる。幅240～260cm、深さ25cmを測るしっかりとした溝である。覆土は上層より暗灰色砂、明茶色粗砂となる。第34図111は囲炉裏の縁石と考えられる。他の個体に対して異なった形成がなされ、用途が異なる可能性をもつ。石材は軽石凝灰岩である。116は粉挽き臼上臼で臼面径約28cm、厚さ9.3～10.0cmを測り、使用により片減りしている。灰緑色を呈し、硬質・黒色の角閃石を含む粗粒砂岩系の石材である。第38図135は覆土中から出土した珠洲焼すり鉢である。内面に粗いおろし目を入れ、底部外面に糸切り痕が残る。珠洲Ⅵ期と考えられる。

７．その他の遺構（第13、40～43、50図）

その他に遺構としてピット、石製品群を検出した。ピットは多数検出され、掘建柱建物跡の柱穴と考えられるピットもあるが、調査区幅の制約から復元できるものはなかった。そのうち覆土中より遺物が出土したもののみにナンバーをふった。ここでは出土遺物を図化したピットのみ説明を加える。また明確な遺構ではないものの、地山面２箇所で水の流れによると考えられる河原



第35図　第３トレンチ溝実測図(1)(Ｓ＝１/60)



第36図　第３トレンチ溝実測図(2)(Ｓ＝１/60)

石に混じり、石製品等の集中する地点があった。そのため石製品群と呼称し、包含層とは別に取り扱っている。

第５号ピット

13区324m付近で検出した。径約30cm、深さ25cmを測り、覆土は暗灰色弱粘質土である。第40図137は越前焼すり鉢である。色調は灰色で、幅3.5cmで12本一単位のおろし目を入れる。

第19号ピット

13区367.7m付近で検出した。径約30cm、深さ36cmを測り、覆土は暗灰色弱粘質土である。第40図140は土師質皿で口径7.8cmを測る。口縁部に２段のナデをおこない、藤田氏編年Ⅲ期に位置付けられる。

第20号ピット

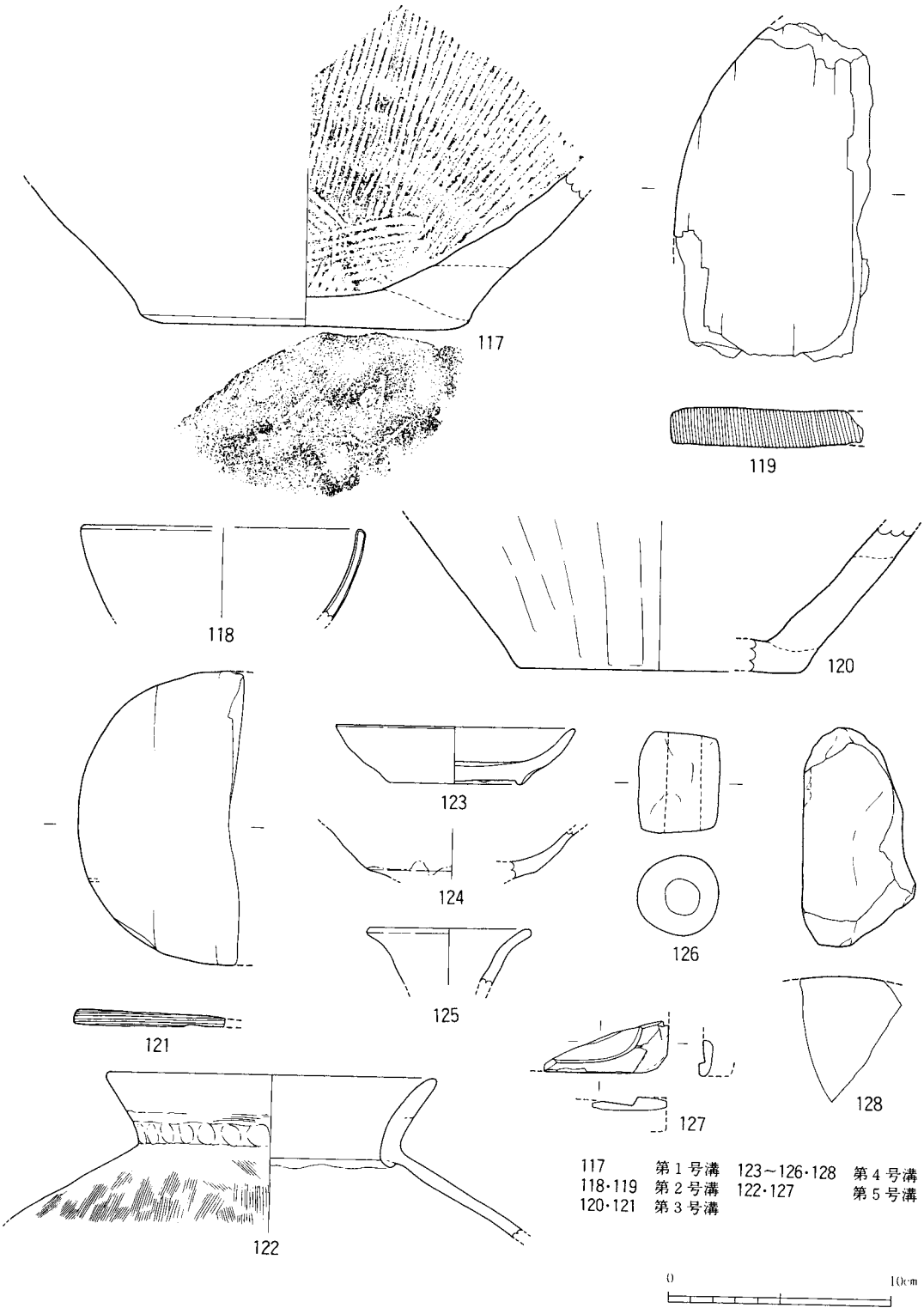
13区367m付近で検出した。深さ26cmを測り、覆土は暗灰色砂質土である。第40図141は土師器甕で、口径19.1cmを測る。口縁部内端はやや上方に肥厚する。

第22号ピット

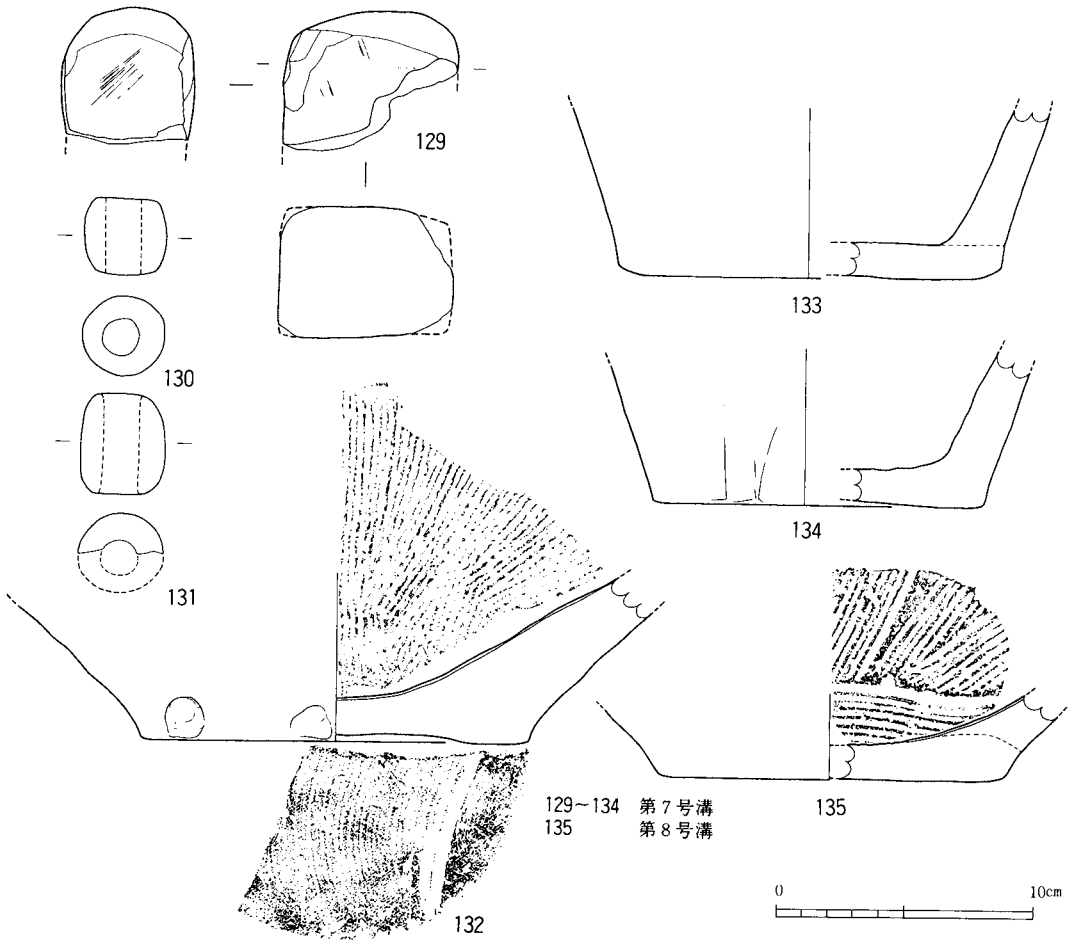
13区370.2m付近で検出した。径約30cm、深さ20cmを測り、覆土は暗灰色砂質土である。第50図255は明銭の永樂通寶（楷書体）である。

第25号ピット

13区371m付近で検出した楕円形のピットで、深さ20cmを測る。覆土は暗灰色砂質土である。第40図138は朝鮮王朝青磁の梅瓶高台付近で、外面に象眼を施す。素地は灰色を呈し、オリーブ灰色の釉を施す。



第37図　第３トレンチ溝出土遺物実測図(1)（Ｓ＝１／３）



第38図　第３トレンチ溝出土遺物実測図(2)(Ｓ＝１／３)

第31号ピット

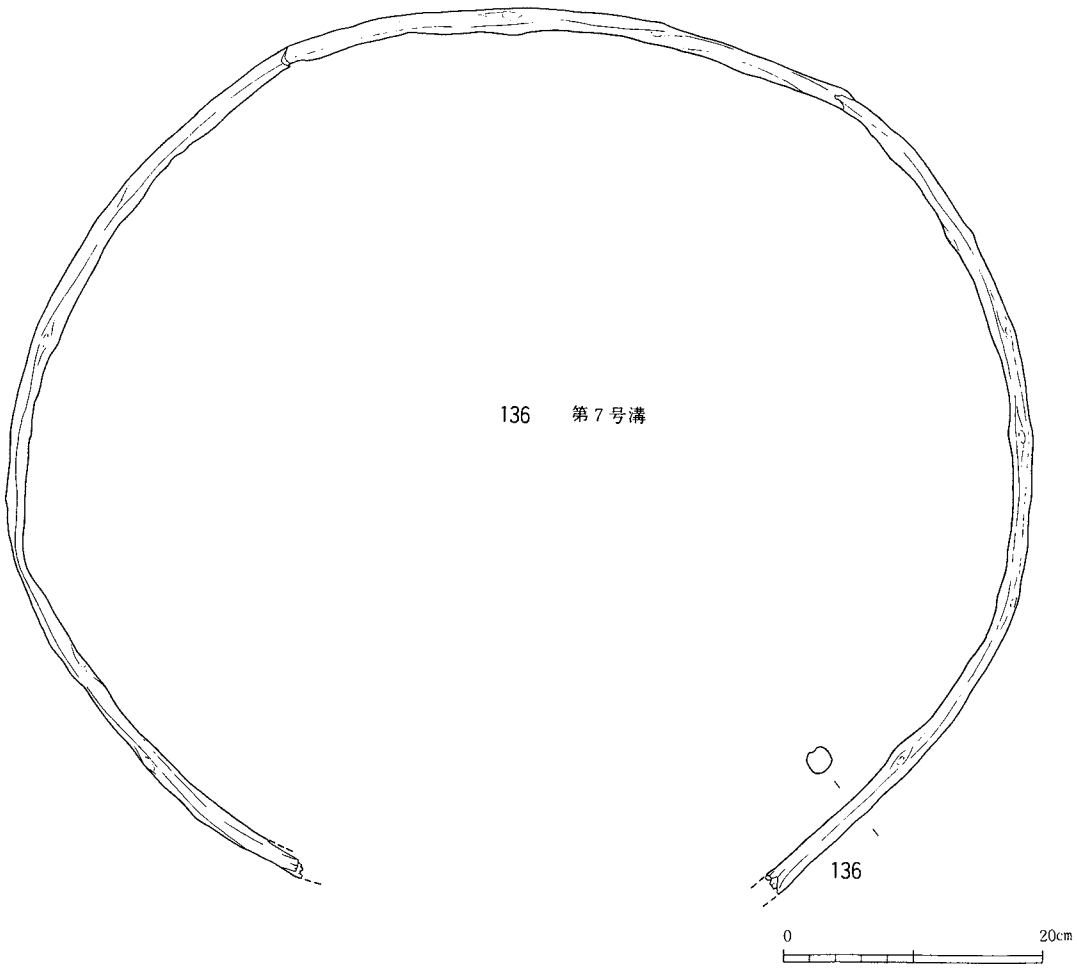
14区421ｍ付近で検出した。径64cm、深さ27cmを測り、覆土は灰茶色砂礫土である。第40図139は土師器高坏脚部で脚部中程に穿孔をおこなう。

第32号ピット

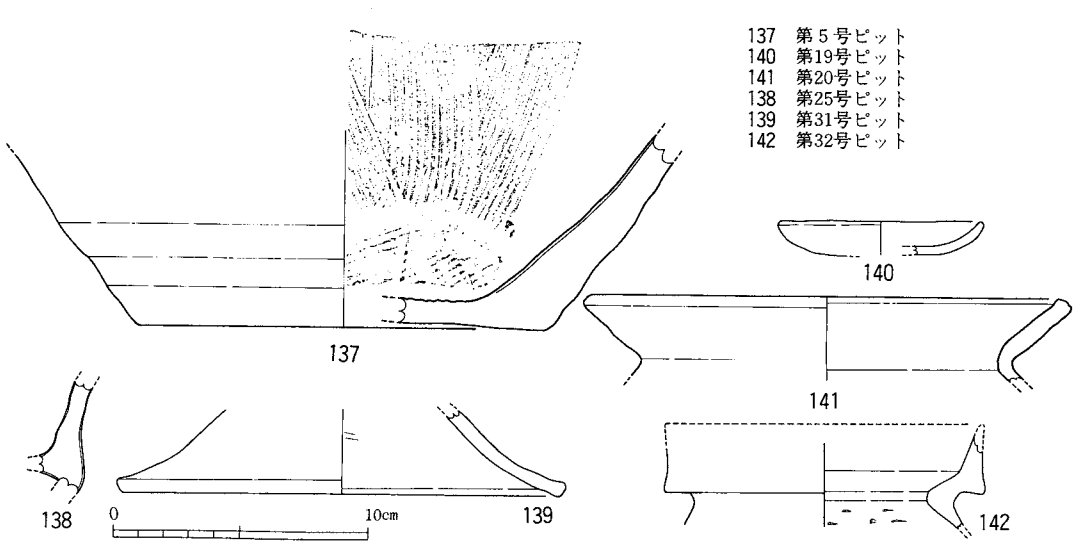
14区489ｍ付近で検出した。楕円形を呈し、長軸72cm×短軸36cm、深さ約30cmを測る。覆土は灰茶色砂礫土である。第40図142は浅黄色の弥生時代後期の甕で口縁部は直立する。

第１号石製品群

13区316～318ｍ付近で水の流れによると考えられる河原石に混じり、石製品等が集中して出土した。洪水等により一度に流されてきた可能性をもつ。第41図143は越前焼甕底部である。焼成は甘く、橙黄色を呈する。144は加賀焼甕底部で、淡灰色を呈する。第42図146は行火Ⅱ種の蓋である。天井部は丸味をもち、受け部を削り出す。小松市滝ヶ原付近の石質と似る。147は平面円形の石鉢である。体部は内湾しながら立ち上がる。緑色粒の混じる火山礫凝灰岩である。150は粉挽き臼上臼で臼面径29cm、厚さ８cmを測る。上面が熱を受け、煤が付着していることから火鉢等に転



第39図　第３トレンチ溝出土遺物実測図(3)(Ｓ＝１/６)



第40図　第３トレンチピット出土遺物実測図(Ｓ＝１/３)

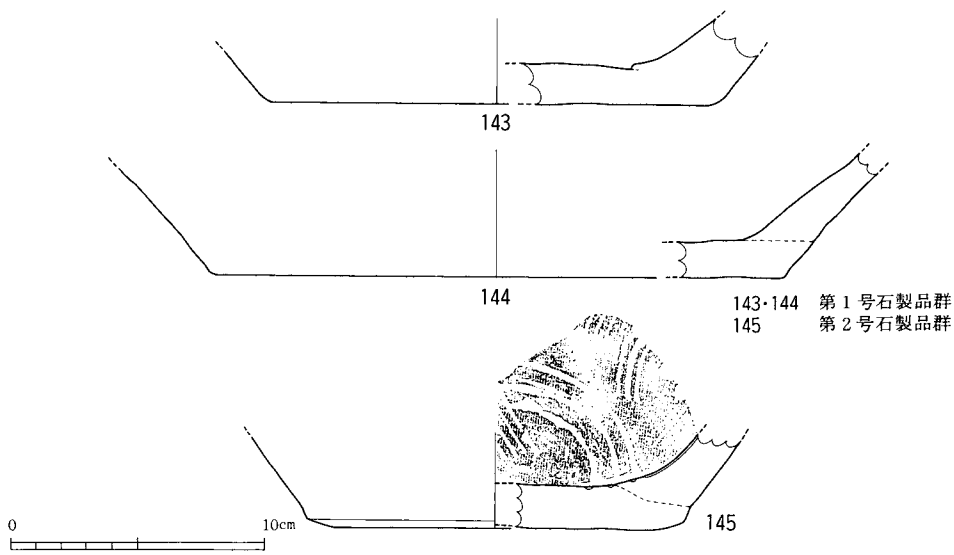
用されたと考えられる。石材は淡緑灰色の火山礫凝灰岩である。第43図153は石鉢で底部外面内側を削り、低い台部をつくり出す。石質は第28図58と同質である。なお図化しなかったが、焼台（径約10cmの石）が融着した越前焼甕片が出土した。

第２号石製品群

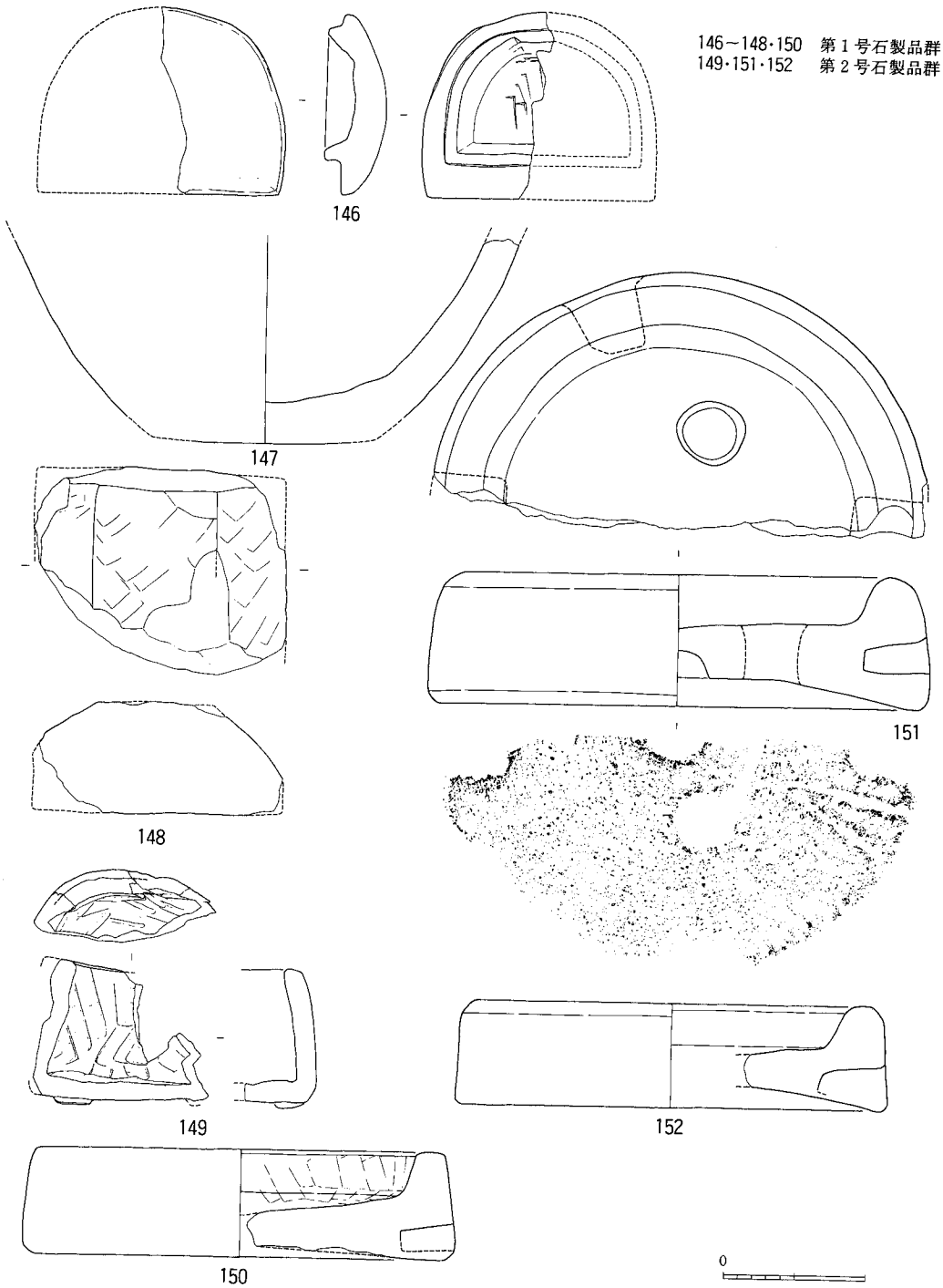
14区383～389m付近で第１号石製品群と同様に茶色砂・河原石が堆積した中に混じり、石製品等が集中して出土した。第41図145は越前焼すり鉢で、にぶい灰色の色調をもつ。内面に第47図235と同様に粗いおろし目を入れ、越前Ⅴ期と考えられる。第42図149は行火Ⅱ種で第51図262と同一個体である。やや小振りで器肉は薄い。外面の調整は丁寧である。小松市滝ケ原付近の石質と似る。151、152は粉挽き臼上臼である。151は臼面径36cm、厚さ9.5cm、供給口径４cmを、152は臼面径30cm、厚さ7.5cmを測る。また151で３箇所、152で２箇所に横長長方形の挽き木孔を穿つ。ともに石材は淡緑灰色の火山礫凝灰岩である。第43図154は石鉢で平面長方形を呈すると考えられる。石材は軽石凝灰岩である。155、156は五輪塔の火輪である。155は軒先を欠き、残存軒先幅28cm、高さ17～18cmを測る。156の軒先は反る。上端を欠き、軒先幅32.5cm、残存高17.5cmを測る。ともに石材は粗い砂礫を含む火山礫質の凝灰岩である。

８．包含層出土遺物（第44～54図）

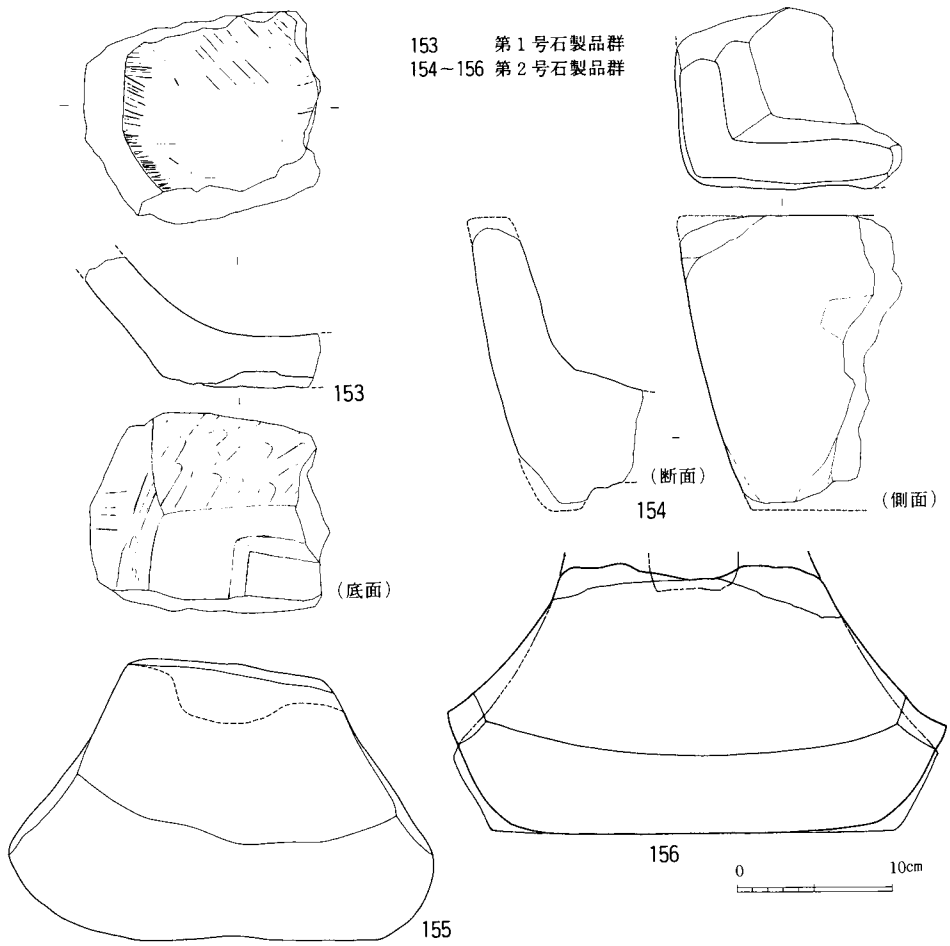
13・14区からは15～16世紀の輸入陶磁器、国産陶磁器、石製品を中心にして、12～18世紀代の遺物が出土した。そのうち17～18世紀の遺物は肥前陶磁器のみであり、器種構成の面から調査区周辺で生活をおこなっていたとは考えにくく、流れ込みの可能性が高い。また13区300～310mにかけてのみ、前述のとおり包含層は上層、下層に分けられる。上層包含層は暗灰色砂質土で、下層包含層は黒灰色粘質土である。便宜上、図中では下層包含層出土遺物を第44図に集めている。他の調査区の遺物は基本的に上層包含層から出土している。



第41図　第３トレンチ石製品群出土遺物実測図(1)（Ｓ＝１／３）



第42図　第３トレンチ石製品群出土遺物実測図(2)（Ｓ＝１／５）



第43図　第3トレンチ石製品群出土遺物実測図(3)（S＝1/5）

300～310m下層包含層遺物

第44図157は白磁皿で高台4箇所に弧状の抉り込みを入れる。釉の色調は灰色で底部内面に目痕が残る。15世紀代と考えられる。158、159は明染付皿である。158は端反りの皿で口径13.7cmを測る。159は口径12.6cmを測り、口縁端部を丸く仕上げる。ともに素地は灰白色を呈し、青味がかった透明な釉を施す。16世紀前半と考えられる。160、161は朝鮮王朝雑釉碗である。160は体部下端で屈曲し、高台は内側につく印象を受ける。高台5箇所に胎土目積みの痕が残る。161の体部は内湾し、底部内外面6箇所に胎土目積みの痕が残る。ともに全面にオリーブ灰色の釉を施す。162は瀬戸焼灰釉の香炉で、口径8.4cmを測る。163は青磁碗で口径11.6cmを測る。素地は灰白色で堅緻、淡灰オリーブ色の釉をやや厚めに施す。割れ口に漆状の補修痕が認められる。164～166は越前焼すり鉢である。164は橙色を呈する。165の口縁部は内傾する。166の口縁部はほぼ水平である。164、166は越前Ⅳ期後半に、165はⅤ期に位置付けられる。167は石硯の破片である。石材は黒色で硬質の粘板岩である。168は行火Ⅰ種底部で、石材は軽石凝灰岩である。169は砂岩系の砥石で、側面全てが研ぎに使われている。

古代以前の遺物

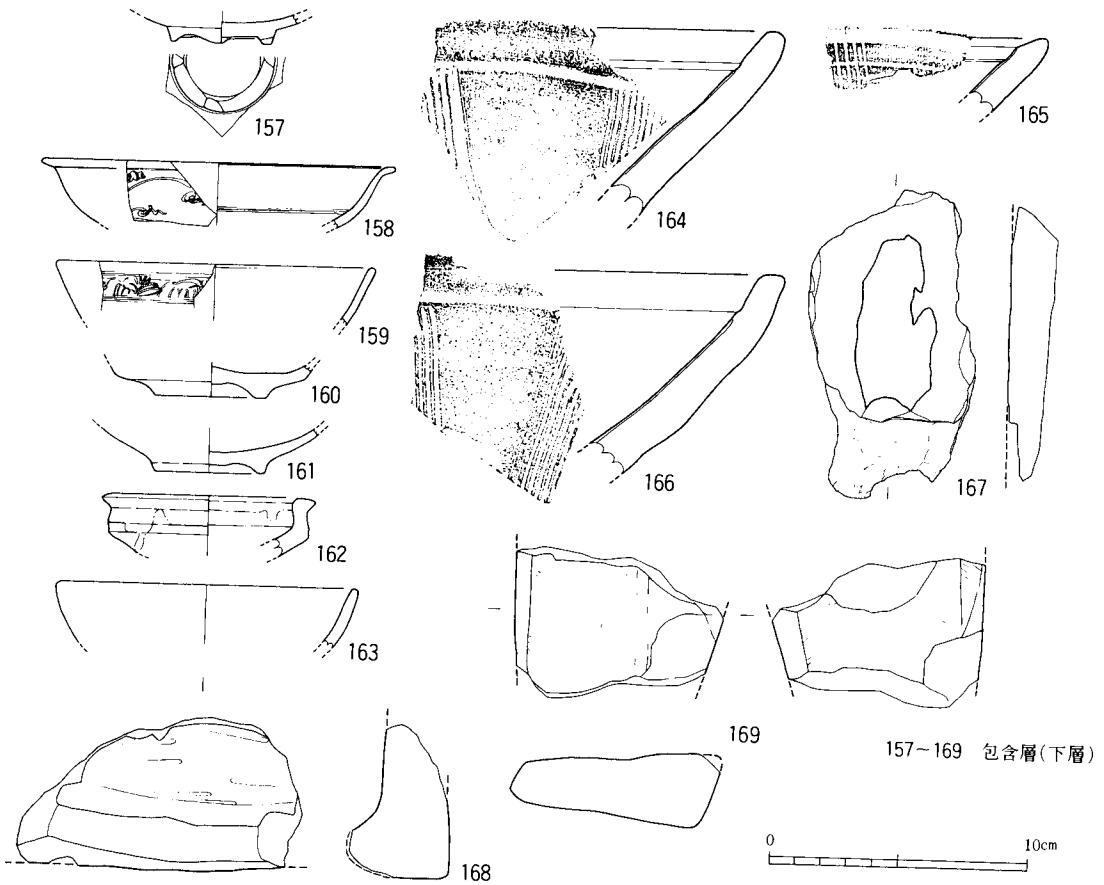
第45図170、171は弥生時代後期～終末の甕である。170は口径15.0cmを測る。171は口径17.2cmを測り、口縁部外反する。172は土師器甕で外面に煮沸によるヨゴレが付着する。173は弥生時代終末の装飾器台で、にぶい淡黄色を呈する。174は須恵器有台坏で、小さい台部が外展する。8世紀後半代と考えられる。176は須恵器甕である。内外面とも中央部付近が摩滅し、図でいえば下方を除き、割れ口が丁寧に面取りされる。猿面の可能性をもつ。南加賀産。177は弥生土器高坏脚部で、2本一単位の沈線で画した後、斜方向の文様を施す。178は高い平高台をもつ土師器皿で底径4.2cmを測る。181は体部内湾気味に立ち上がる。底部外面に糸切り痕が残る。

土師質皿

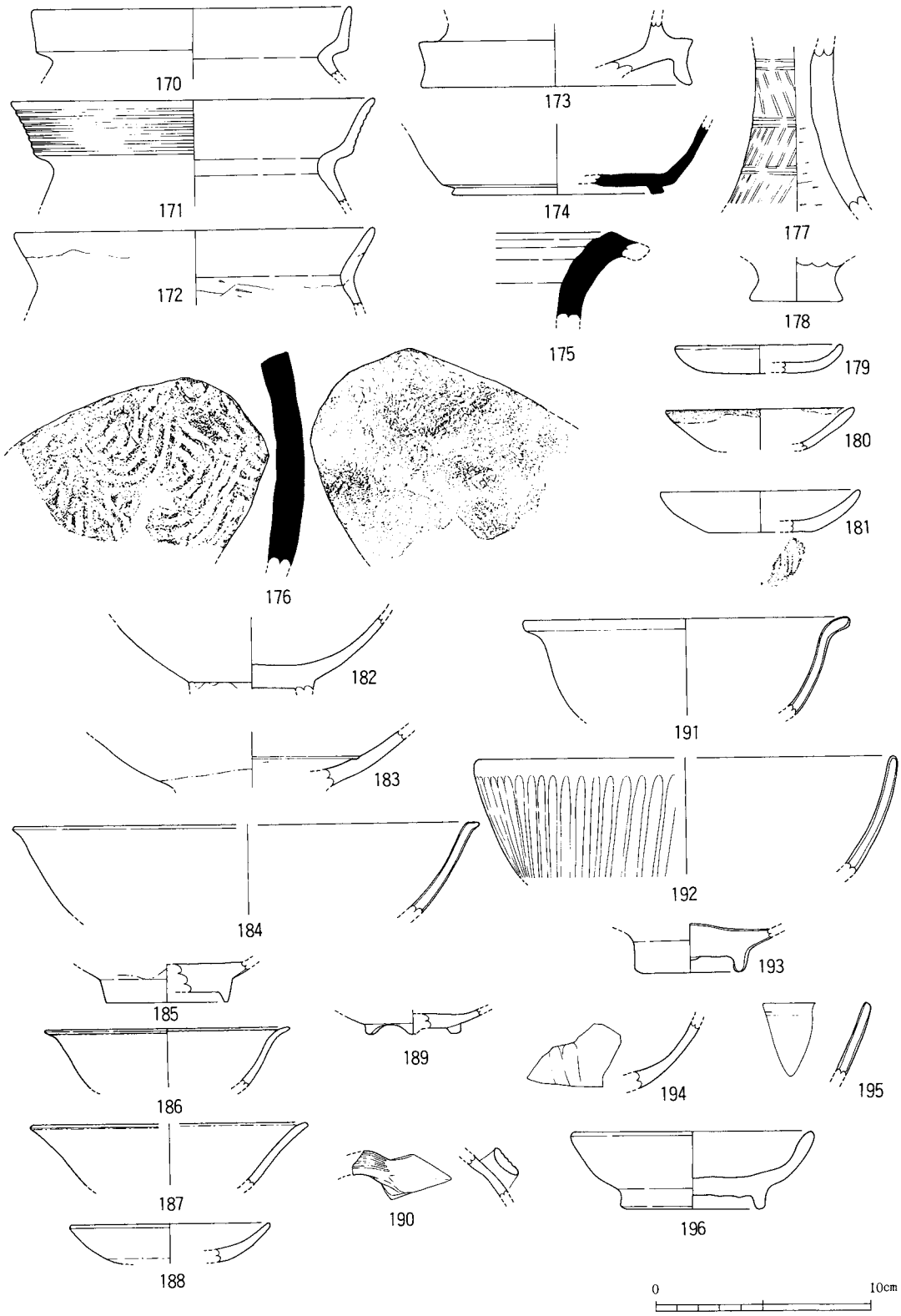
第45図179は口径7.8cm、器高1.3cmを測り、藤田氏編年Ⅲ期に位置付けられる。180は口径8.8cmを測る。体部直線的にのび、同Ⅵ期と思われる。口縁部には灯明痕が残る。なお、土師質皿は全般に小片となっており、図化できる個体はほとんどない。

白磁

第45図182～185は碗である。182は光沢のある淡灰色の釉を施す。白磁Ⅴ類と考えられる。183



第44図　第3トレンチ包含層出土遺物実測図(1)(S＝1/3)



第45図　第３トレンチ包含層出土遺物実測図(2)(Ｓ＝１／３)

は内面見込部分に沈線が入る。体部外面下半に回転ケズリ調整を施した後、灰白色の釉を施す。Ⅳ類か。184は口径22cm前後を測り、口縁端部を横方向にのばす。黄色味を帯びた薄い灰白色の釉を施す。Ⅴ類またはⅧ類と考えられる。185の底部器肉は厚く、先細りする高台となる。内面見込部分に沈線を有する。Ⅴ類。186、187は口禿の皿（Ⅸ類）である。187は口径11.6cmを測り、口縁端部の釉の削り取った部分は鉄分により茶色に変色する。ともに黄色味を帯びた灰白色の釉を体部下半までかける。189は高台に孤状の抉り込みを入れる。内面に目痕が認められる。畳付部分を除く全面にかけられた釉の色調は188に準ずる。ともに15世紀以降と考えられる。190は四耳壺と思われる。灰白色の釉を施し、13世紀を中心とした時期に位置付けられる。第53図284、285は碗である。284は淡オリーブ色の釉を薄くかけ、口縁部形態からⅠ類と考えられる。285は淡黄灰色の釉を施し、Ⅳ類と考えられる。

青磁

第45図191～195は碗である。191は口径15.4cmを測り、口縁端部は肥厚しながら外反する。淡緑灰色の釉を施す。192は外面にかなり雑な線描蓮弁文を入れる。釉の色調はオリーブ灰色で、二次加熱を受けている。193の高台は中心をずれている。淡緑灰色の釉を全面にかけた後、底部外面の釉を輪状に削り取る。194の外面には幅の狭い線描蓮弁文が認められる。195の口縁部外面には一条の沈線が認められる。割れ口に漆状の補修痕が残る。196は皿で口径11.4cm、器高3.7cmを測る。器肉は厚く、内面見込部分に花文がみられる。淡緑色の釉を厚くかける。

明染付

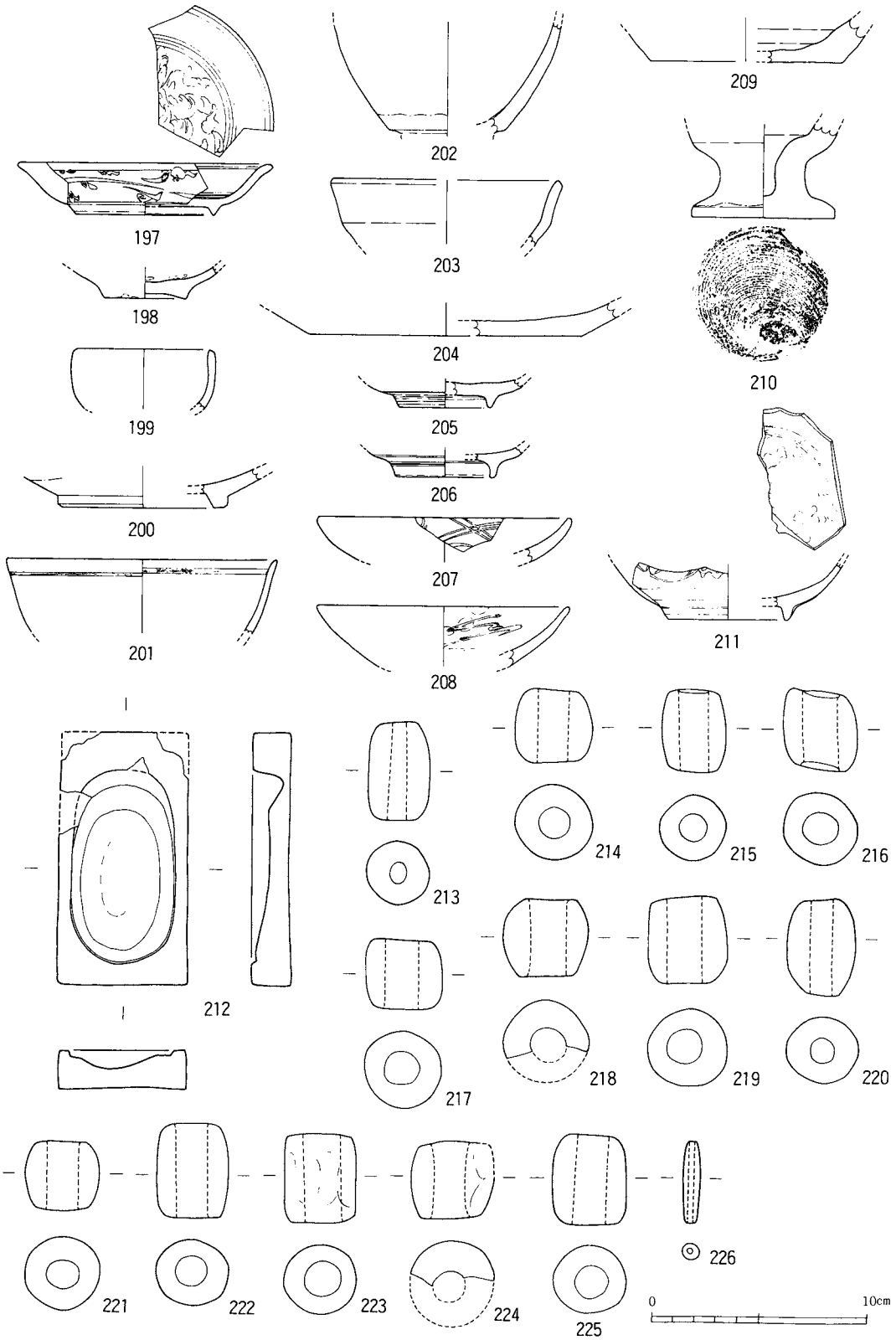
第46図197は端反りの皿である。口径12.0cm、器高2.5cmを測り、高台は背が低く、やや内湾する。内外面とも圏線と文様で加飾し、そのうち内面見込部分は玉取り獅子と考えられる。全面に施釉後、畳付部分の釉を削り取る。201は碗で口径12.6cmを測る。圏線の色調は体部内面が濃青色、体部外面は緑青色である。

その他の輸入陶磁器

第46図198は朝鮮王朝雑釉碗で高台は断面三角形状を呈する。全面に淡オリーブ灰色の釉を施し、5箇所に胎土目積み痕が残る。第53図286は中国南部産の灰釉壺と考えられる。外面に沈線で文様を施す。素地は淡茶色を呈し、茶褐色細粒を含む。また釉の色調は淡灰褐色である。

国産陶磁器

第46図199は瀬戸焼の鉄釉小碗で口径6.8cmを測る。体部内湾し、明茶褐色の釉を施す。200は肥前陶器鉢と考えられる。素地はにぶい橙色を呈し、灰白色の釉を施す。202～204は瀬戸焼。202は鉄釉の天目茶碗である。素地は乳灰色を呈し、黒褐色の釉を施す。203は鉄釉の皿類と思われ、体部は中程で屈曲する。素地は浅黄橙色を呈し、褐色の釉を施す。204は灰釉の三足盤である。底部外面に回転ケズリ調整が認められ、内面にかすかに釉が残る。割れ口に漆状の補修痕が残る。205、206は肥前磁器碗底部で高台に圏線が入る。205の畳付部分の釉を削り取る。207、208は肥前陶器皿である。207は口径12.1cmを測り、器肉は厚い。208は口径11.8cmを測り、釉は一部斑状にピンク色を発色する。いずれも18世紀代と考えられる。209は瀬戸焼鉄釉の広口鉢と考えられる。内面にロクロひだが残り、底部外面に回転ケズリ調整を施す。底部外面を除き厚い黒褐色の釉を



第46図　第３トレンチ包含層出土遺物実測図(3)(Ｓ＝１／３)

施す。また割れ口に漆状の補修痕が認められる。210は瀬戸焼鉄釉の尊式花瓶で底部外面糸切り痕が残る。黒褐色の釉をかける。211は色絵の碗で高台は先細りとなる。素地は堅緻で淡灰色を呈する。また透明感のある白色の釉を高台外面まで施した後、畳付部分の釉を外側から斜めに削り取る。色絵の色調は赤色と緑色であり、また鉄分による茶色の噴き出しが認められる。近世後半のものか。

石硯・管状土錘・砥石等

第46図212は淡緑灰色の石硯である。長さ11.9cm、幅6.0cm、厚さ1.9cm、残存重量215ｇを測る。平面形態は長方形で、底部をややくぼませる。また硯面は隅丸長方形を呈し、陸部は使用により楕円形に擦り減る。石材はきめの細かい緑色凝灰岩である。道下元町遺跡に類例が認められる。213～226は管状土錘である。213～215、218、220等は側縁部が膨らむのに対して、他は長方形もしくは隅丸長方形を呈する。法量は第３表を参照されたい。また213は陶質の管状土錘で緑灰色の自然釉が付着する。胎土から加賀産の可能性が高い。226は本遺跡で１点のみ確認されたタイプである。橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。227～231は砥石である。227は第18図13、15と同質の石材で乳灰色の色調をもつ。断面長方形を呈し、側面全てを研ぎに使う。228は下げ砥石と考えられる。表面は一面のみ円滑となっており、径約0.4cmの小孔を２箇所に穿つ。石材は硬質の桂化凝灰岩で黄灰色の色調をもつ。229は断面台形を呈し、側面全てが研ぎに使われている。中研ぎ用か。石材は淡緑灰色・硬質の凝灰岩である。230は残存する全ての面を研ぎの使う。石材は凝灰岩で風化により粉っぽくなっている。色調は黄灰色である。231は断面方形を呈し、側面全てを研ぎに使う。石材は成層状に堆積した硬質の凝灰岩で淡緑灰色の色調をもつ。232は灰色の軽石で表面を面状および線状の研ぎに使う。重さ14.0ｇを測る。

加賀焼

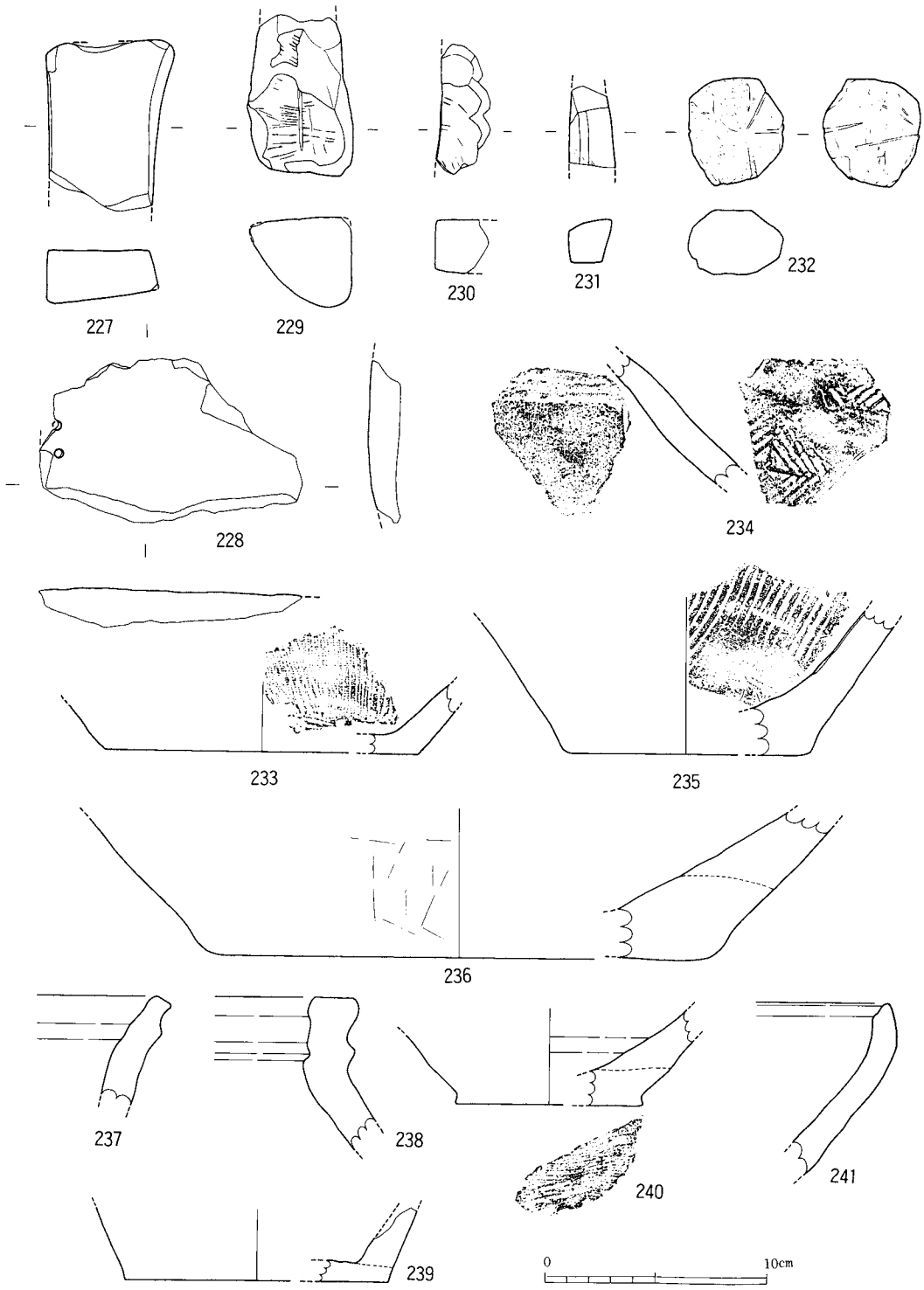
第47図234は甕胴部片で、方形を斜線で４分割する押印をもつ。湯上ユノカミダニ窯に類例がみられる。[09]

越前焼

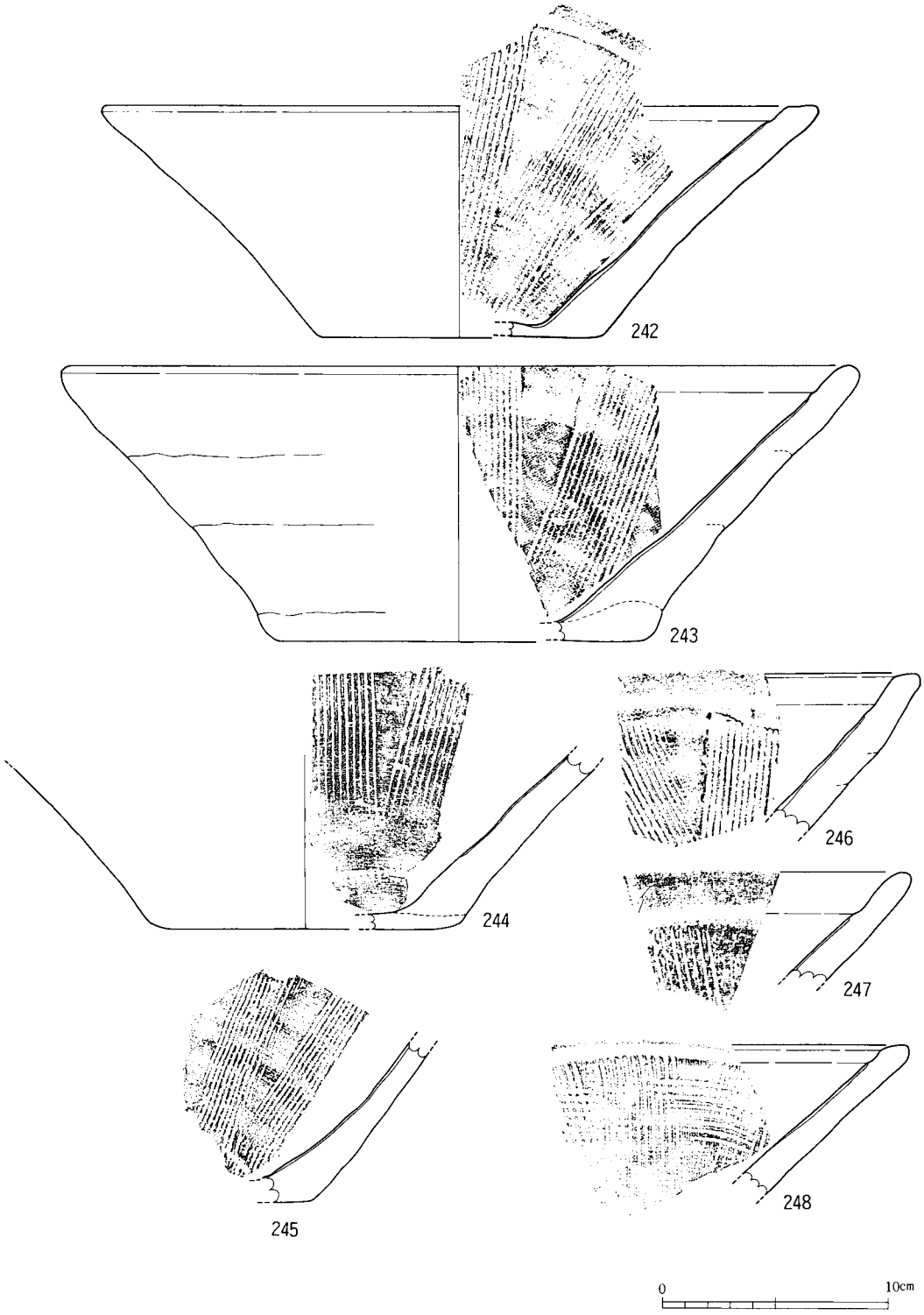
第47図233はすり鉢底部で黄橙色を呈する。235もすり鉢底部でにぶい灰色を呈する。底部は比較的小さく、体部は直線的に立ち上がる。内面に粗いおろし目を入れる。237、238は甕口縁部である。237の器肉は口縁部に向かい次第に薄くなる。238は淡灰色の色調で端部を平坦に仕上げる。岳の谷１号窯出土遺物に類例がみられる。[09] 239は壺底部である。第47図241、第48図242～244、

No.	長さ	幅	孔径	重さ	No.	長さ	幅	孔径	重さ	No.	長さ	幅	孔径	重さ
213	4.6	3.0	0.7～0.9	36.0	218	3.6	4.0	1.7	欠損	223	4.2	3.4	1.8	45.1
214	3.5	3.7	1.5	32.0	219	4.2	3.8	1.6	38.0	224	3.7	4.0	1.5	欠損
215	3.9	3.0	1.4	26.5	220	4.6	3.2	1.0	34.1	225	4.3	3.5	1.5～1.6	42.1
216	4.4	3.5	1.6	欠損	221	2.3	3.5	1.4～1.6	30.3	226	3.9	0.8	0.25	約2.0
217	3.4	3.6	1.7	39.5	222	4.5	3.5	1.5	40.9					

第３表　包含層出土管状土錘一覧表（単位はcmおよびｇ）

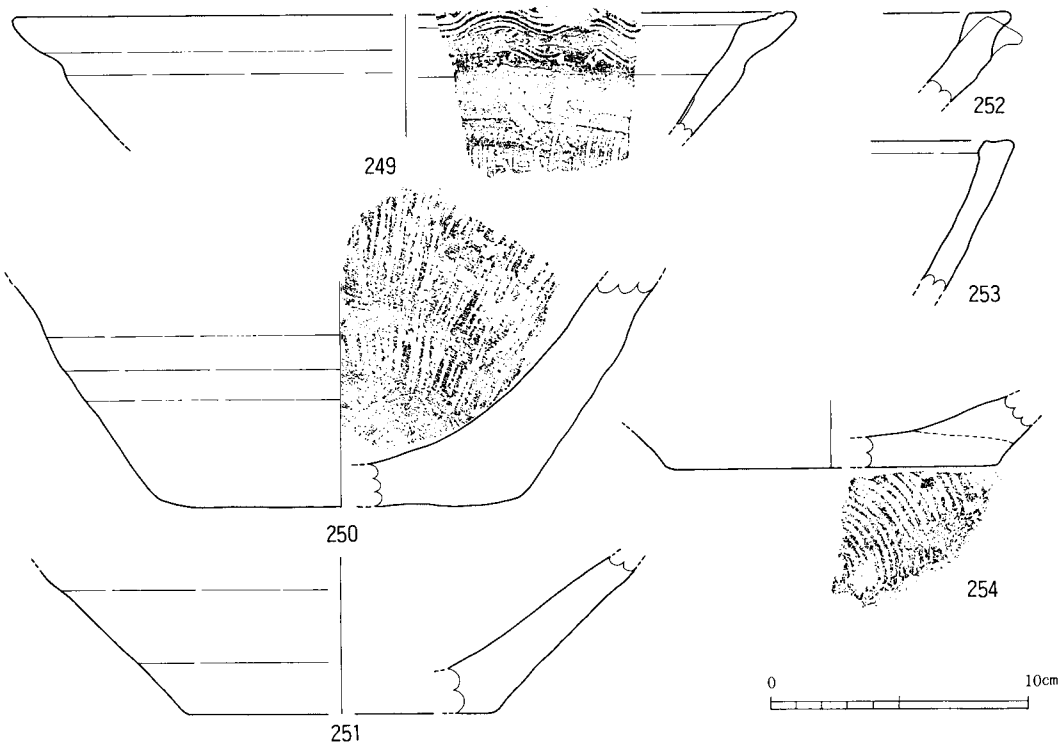


第47図　第３トレンチ包含層出土遺物実測図(4)(Ｓ＝１/３)

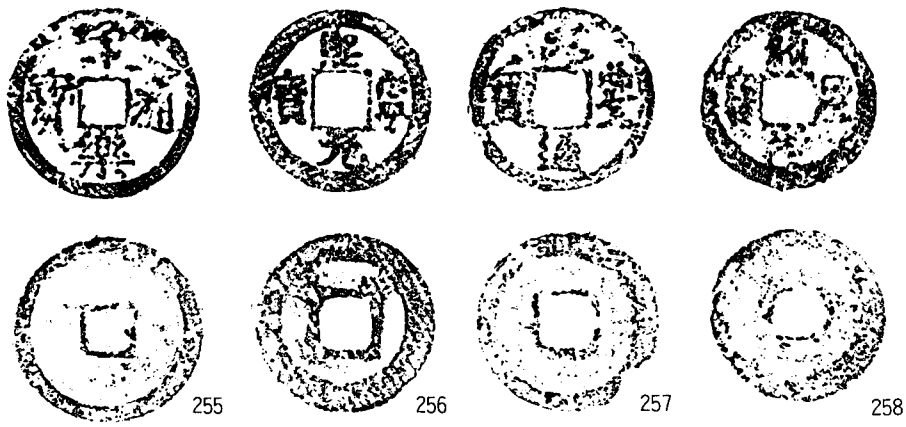


第48図　第３トレンチ包含層出土遺物実測図(5)(Ｓ＝１/３)

246～248はすり鉢である。241の口縁部は内側に屈曲する。淡橙色を呈し、水上窯跡群５号窯、蛇谷３号窯出土遺物に類例がみられる。[m] 242は口径32.0cm、器高10.4cmを測り、色調はにぶい灰色である。体部外反気味に立ち上がり、口縁部を平坦に仕上げる。幅約３cmで10本一単位のおろし目を入れる。243は淡橙色を呈し、口径35.0cm、器高17.0cmを測る。体部は直線的にのび、口縁端部は丸く仕上げる。口縁部下方に一条の沈線を施した後、幅４cmで15本一単位のおろし目をいれる。244はにぶい淡黄色を呈する。内面使用による摩滅が著しい。246の橙色を呈し、口縁部は平坦に仕上げる。247は淡黄橙色を呈し、口縁部を丸く仕上げる。248はにぶい橙灰色の色調である。



第49図　第３トレンチ包含層出土遺物実測図(6)(Ｓ＝１/３)



第50図　第３トレンチ包含層他出土銅銭実測図(Ｓ＝１/１)

内面に幅3.2cmで10本一単位のおろし目を縦方向に入れた後、横方向にも加える。241は越前Ⅱ期、243，247はⅣ期後半、233，238，242，246，248はⅤ期に位置付けられる。

珠洲焼

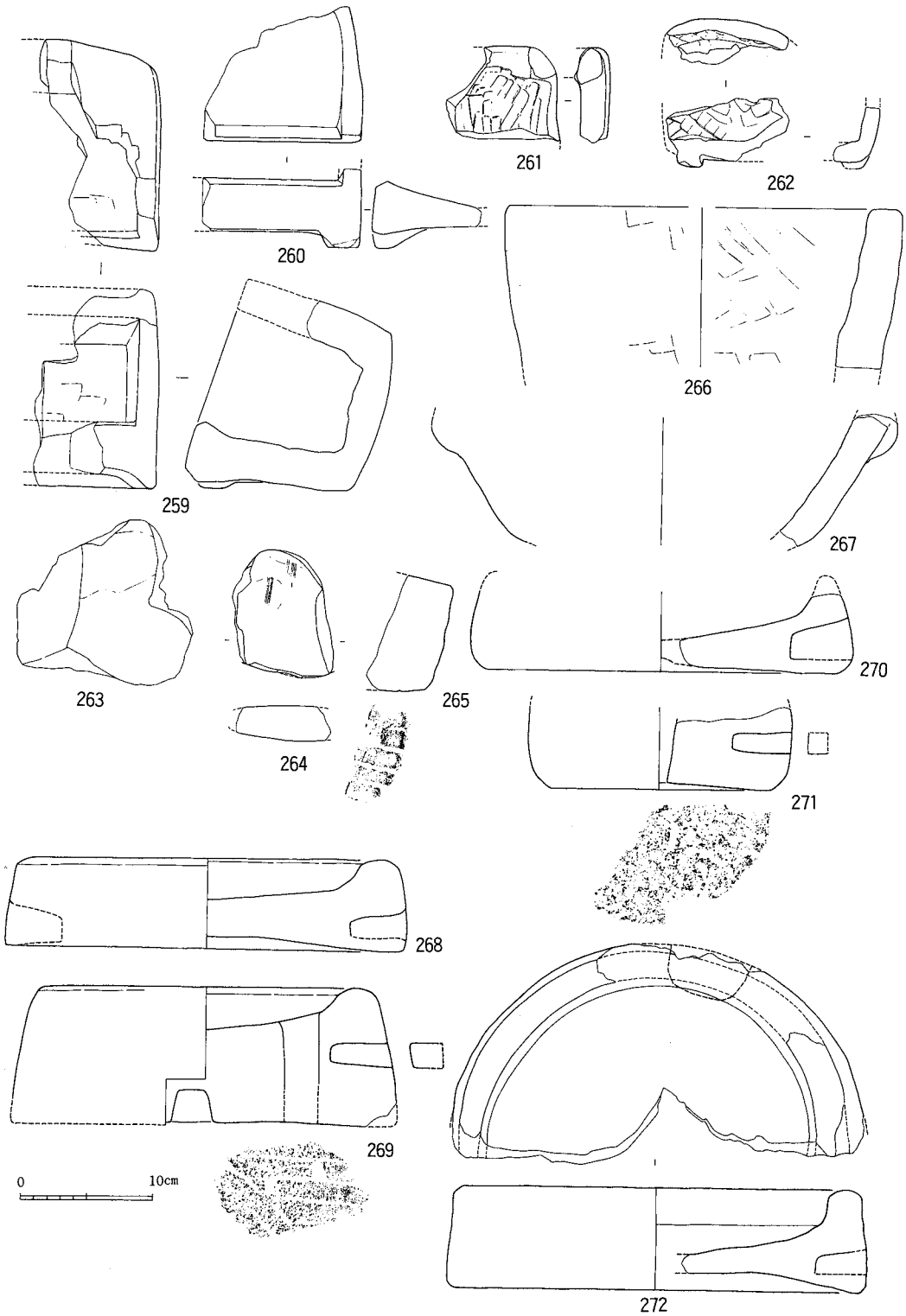
第45図175は甕で口縁部内面にロクロひだが残る。第47図236は甕底部で色調は淡黄灰色である。焼きのあまい印象を受ける。240は壺で底部外面に糸切り痕が残る。第48図245、第49図249～251はすり鉢である。245は幅2.3cmで11本一単位のおろし目を入れる。249は第18図20と同一個体で口縁端部は外側に長くのびる。250はにぶい黄灰色を呈し、器肉は厚い。内面全体におろし目を入れる。底部内外面ともに使用による摩滅が著しい。251は割れ口に漆状の補修痕が認められる。252は口縁端部を平坦に仕上げる。253の口縁端部は内側に肥厚する。254は底部外面に糸切り痕が残る。内面は使用による摩滅が著しい。175は珠洲Ⅰ期、245はⅡ期、252，253はⅢ期、249，250，251，254はⅥ期に位置付けられる。

銅銭

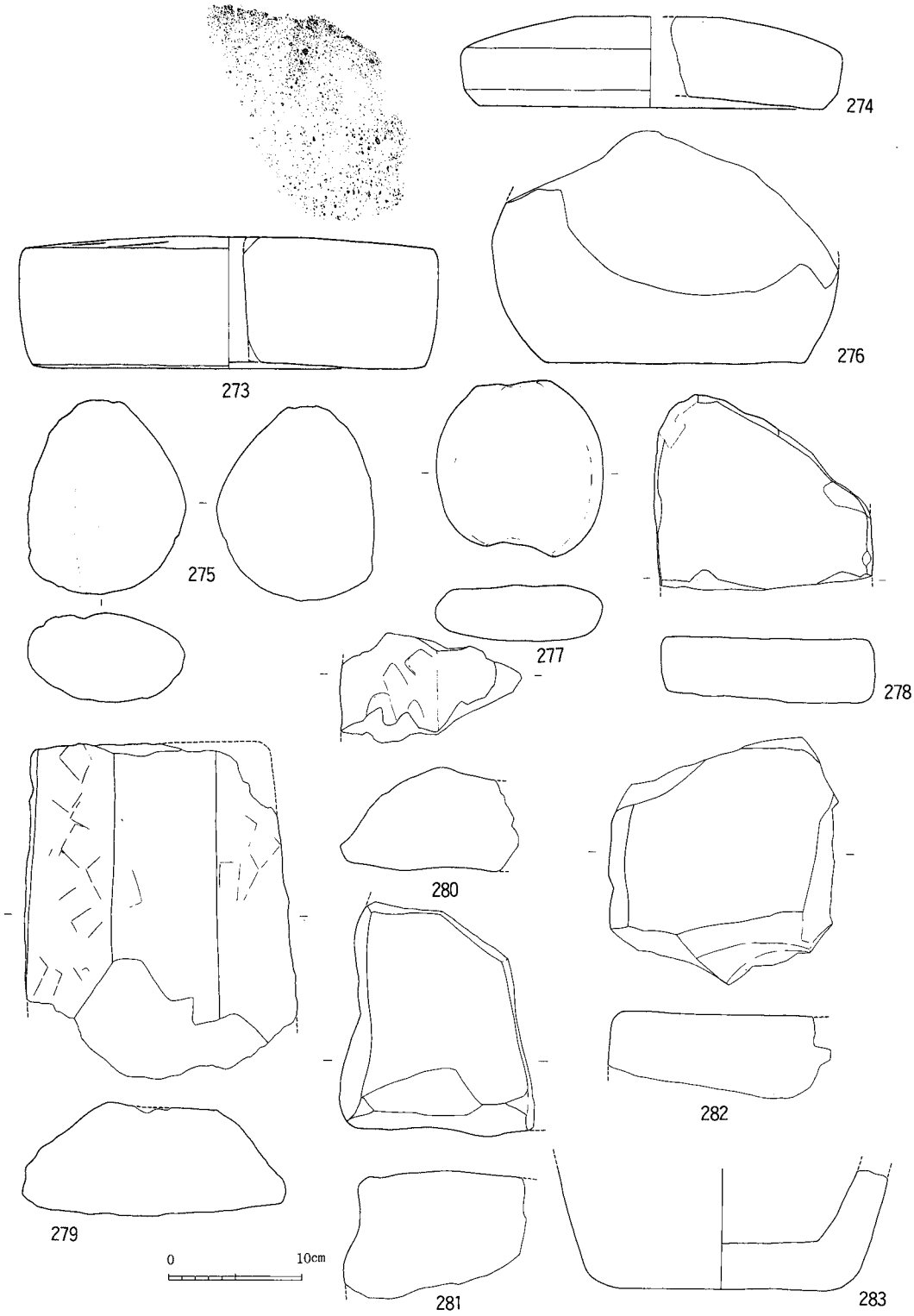
第50図256，258は北宋銭である。256は熙寧元寶（楷書体）、258は詔聖元寶（篆書体）である。また図化しなかったが嘉祐通寶（篆書体）１枚が出土した。

行火・石臼等

第51図259～262は行火である。259はⅠ種で前方のみに小さい台部をつけるようだ。内面はノミ痕が顕著であるのに対して外面は丁寧に仕上げる。石材は軽石凝灰岩。260もⅠ種に属し、石材は軽石凝灰岩である。261はⅡ種と考えられ、石材はしっとりとした良質の緑色凝灰岩で他の行火と印象が異なる。262はⅠ種で第42図149と同一個体である。薄手で外面を丁寧に仕上げる。小松市滝ヶ原付近の石材と似ている。263は安山岩系の石材で造られた縁石と思われ、火を受けた痕跡が残る。264は黄色の色調をもつ硬質の凝灰岩である。表面が円滑となっており研ぎに使われた痕が残る。265は粉挽き臼上臼と考えられる。石材は269と同じく石英・角閃石の混じる硬質の粗粒砂岩である。266，267は石鉢である。266は体部直立し、口縁部を平坦に仕上げる。内外面ともにノミ痕が残る。石材は103，107と同質の緑色細粒を層状に含む緑白色凝灰岩である。267は把手がつく。268～270は粉挽き臼上臼である。268は臼面径約30cm、厚さ約７cmを測る。側面２カ所に方形の挽き木孔を穿つ。石材は270,272,273が火山礫凝灰岩で、271,274は同じ石質をもつ凝灰岩である。269は臼面径約26cm、厚さ約10cm、供給口径約３cmを測り、やや崩れた方形の挽き木孔を穿つ。淡黄灰色を呈する。270は臼面径26cmを、また挽き木は2.5×3.5cmの方形で深さは4.5cmを測る。使用によりかなり薄くなっている。271は茶臼上臼と考えられ、方形の挽き木穴は1.3～1.6cm、深さ3.8cmを測る。272は粉挽き臼上臼で、臼面径約30cm、厚さ7.9cmを測る。横長方形の挽き木孔を穿つ。臼面のおろし目は使用により摩滅する。第52図273，274は粉挽き臼下臼。273は臼面径31cm、厚さ約10cmを測る。臼面の膨らみが強い。274は臼面径約28cm、厚さ約７cmを測り、臼面のおろし目は摩滅している。275は石錘で、表面をくぼませ縄等を結ったと考えられる。276は五輪塔水輪である。風化により表面の剝落が著しい。石材は大粒の礫を含む火山礫凝灰岩。277は石錘と思われ、硬質の火山礫凝灰岩で作られる。重さ1436ｇを測る。278は表面が円滑となっており、置き砥石の可能性をもつ。279～281は囲炉裏の縁石と考えられる。279，280は表面

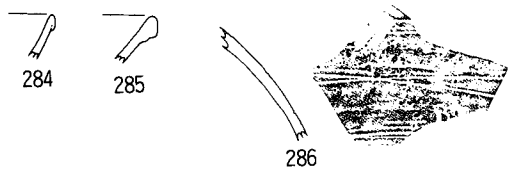


第51図　第３トレンチ包含層出土遺物実測図(7)（Ｓ＝１/５）

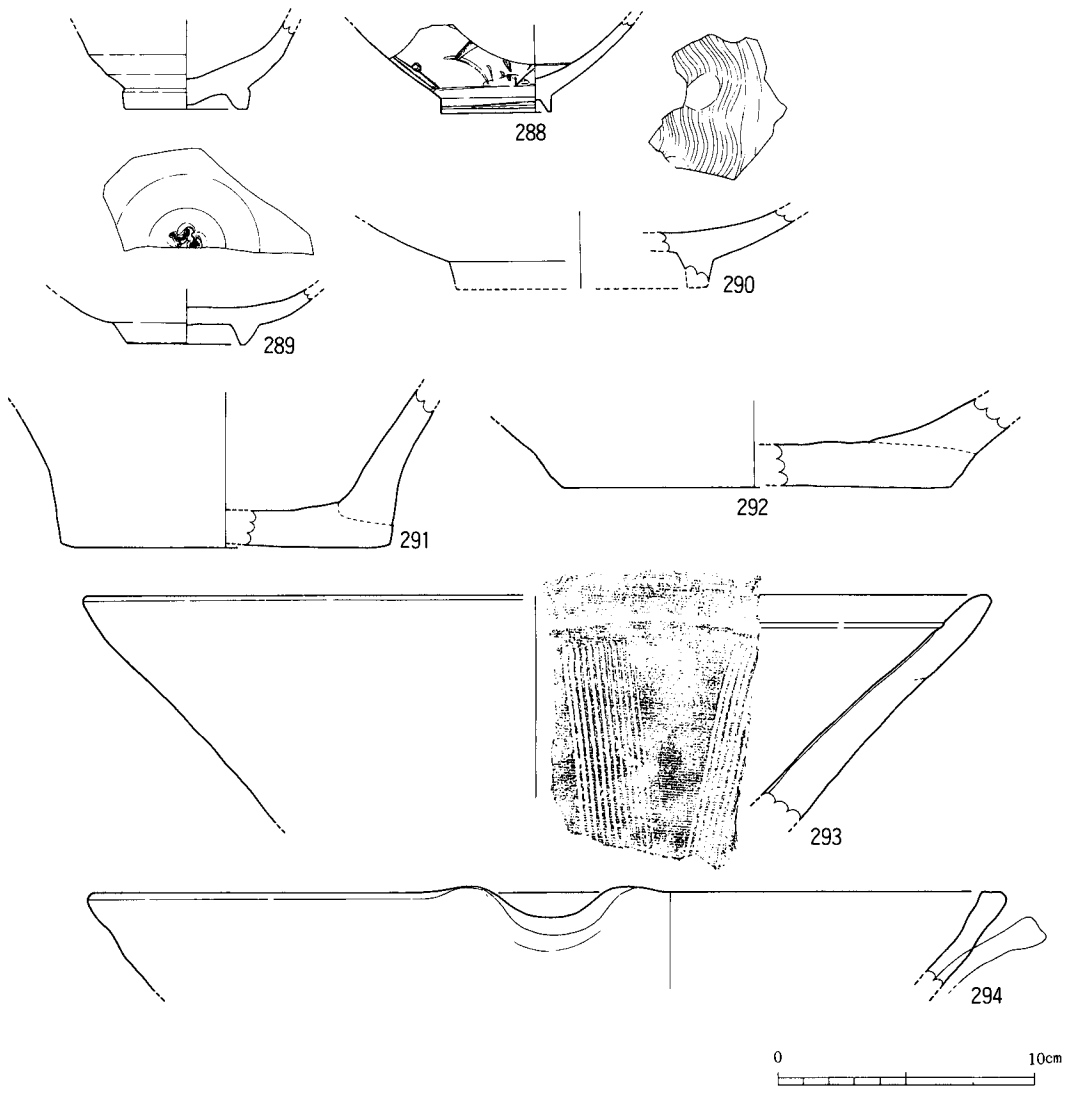


第52図　第３トレンチ包含層出土遺物実測図(8)（Ｓ＝１/５）

にノミ痕が残り、石材は軽石凝灰岩である。下面を除き火を受けている。281の石材は白色細粒を多く含む硬質の凝灰岩である。282は置き砥石と思われ、流紋岩系の石材でつくられる。283は厚手の石鉢である。本来はもっと立ち上がるが上部が破損した後に再成形、火鉢に転用されている。内面に火を使った痕跡が顕著に残る。現存で高さ約9㎝を測



第53図　第3トレンチ包含層
出土遺物(9)(S＝1/3)



第54図　調査区周辺表採遺物実測図(S＝1/3)

り、第33図104～106と同質の石材である。

調査区周辺表採遺物

第54図287～294は調査区周辺で表採した遺物である。287は肥前陶器褐釉碗である。素地は茶褐色の色調で内面に黒色の釉をかける。17世紀代と思われる。289は肥前陶器皿である。高台は断面三角形を呈し、内面見込部分に濃緑青色のコンニャク判を入れる。18世紀後半に位置付けられる。288は明染付碗で断面三角形の高台はやや外展する。内外面とも濃青色の文様を施す。291～293は越前焼である。291は壺で胴部外反気味に立ち上がる。292は甕底部で外面に離れ砂が付着している。293はすり鉢で内面に幅2.8㎝で12本一単位のおろし目を入れる。越前Ⅳ期後半と考えられる。294は珠洲焼すり鉢で口縁端部を平坦に仕上げる。珠洲Ⅲ期に位置付けられる。

註

(1) 現地調査時に地元の方からご教示いただいた。

(2) 森田　勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』№2　日本貿易陶磁研究会　1982。また白磁の分類については14世紀までを森田　勉他「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4（九州歴史資料館　1978）等を参考にしている。

(3) 田中照久「越前成形技法の復元」『北陸における越前陶の諸問題』北陸中世土器研究会　1989

(4) 藤田邦雄「中世土器素描」『北陸の考古学Ⅱ』石川考古学研究会々誌第32号　石川考古学研究会　1989

(5) 垣内光次郎「中世北陸の暖房文化」『石川考古学研究会々誌』第33号　石川考古学研究会　1990
なお、垣内氏は更にⅡ種をａ～ｃ類に細分されている（第76図参照）が、本遺跡出土の行火は全形を復元できる個体が限られていため細分は行っていない。

(6) 平田天秋・西野秀和『門前町道下元町遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　1985

(7) 宇野隆夫「井戸考」『史林』第65巻第５号　史学研究会　1982

(8) 吉岡康暢「第一部　珠洲の名陶」『珠洲の名陶』珠洲市立珠洲焼資料館　1989、同『日本海域の土器・陶磁［中世編］』六興出版　1989

(9) 銅銭については芝田　悟氏よりご教示いただいた。記して感謝したい。

(10) 胎土、器形が全く同じ甕が志賀町赤住ナカノＣ遺跡より出土している。また水白モンショ遺跡第１号竪穴住居跡から出土した甕とは、やや胎土等が異なる印象を受けた。前述２遺跡出土の甕は産地不明ながら、珠洲焼の成立期とでもいうべき時代に位置付けられている。本遺跡で志賀町赤住ナカノＣ遺跡と同じ産地と考えられる甕が出土したことは、古代の土器生産がどのように中世の土器生産に転換していったかを考えるうえで大変興味深い。

(11) 宮下幸夫・田嶋正和・藤田邦雄・垣内光次郎「中世加賀の窯業研究」『石川考古学研究会々誌』第33号　石川考古学研究会　1990

(12) 田辺常博他『南前川遺跡』福井県三方郡三方町教育委員会　1985

(13) 奈良国立文化財研究所の光谷拓実氏の古年輪学の年輪年代研究法による分析によれば、西暦707年以降である。記して感謝したい。

(14) 肥前陶磁器については藤田邦雄氏よりご教示いただいた。記して感謝したい。

(15) 註(11)文献中のⅣ類101もしくは102の押印と考えられる。

(16) 小野正敏「戦国から近世へ、越前陶の生産の実態」『北陸における越前陶の諸問題』北陸中世土器研究会　1989

(17) 田中照久「越前国鯖江市南井南屋敷中世墓址出土の中世陶器」『福井考古学会誌』創刊号　福井考古学会　1983
水野九右衛門・田中照久『水上古窯址群発掘調査報告書』　宮崎村教育委員会　1980

引用・参考文献

垣内光次郎他『普正寺遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1984

西野秀和・垣内光次郎他『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡（Ⅱ）』　石川県立埋蔵文化財センター　1985

三浦純夫他『米光万福寺遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1987

湯尻修平他『白江梯川遺跡Ⅰ』　石川県立埋蔵文化財センター　1988

山本直人他『水白モンショ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1989

第６節　伝小白山社跡地の調査

１．調査の結果（第55・56図、図版27～30）

小白山社跡地と伝えられる場所は、現小川集落の西約500m、現海岸線からは東へ約100mの位置にある。周辺は水田となっており、小丘が水田中に突出した景観を呈している。小丘上には「白山宮神符社大宮之跡」と刻んだ石柱が建てられている。

発掘は裾部のみを対象とし、丘上は表面観察を行った。裾部には５ヶ所のトレンチを設定した。

社地跡伝承地は長方形の小丘となっており、主軸を北西一南東の方向にもつ。現在の水田の区画と方向をそろえており、裾部は四辺とも水田に規制され、削られた状況が窺える。規模は長軸（東西）16m、短軸10mを測る。高さは、東側に最も高い所があり、水田との比高約1.5mを測る。頂部は西側へ向かって低くなっており、水田との比高は約１mである。丘上には水田より出た自然石が積み上げられており、積石の小丘という観を呈している。石にまじって数点の中世陶器が採集されたが、周辺部から上げられたものとみられる。

丘上において遺構は確認出来ない。また、構築状況も不明である。削られた裾部を見ると、礫が相当量含まれているので、礫を主体として構成される小丘である可能性が大きい。

第１トレンチはコンクリート擁壁がつくられる場所で、裾部に沿って設定した。幅１m、長さ13.6mである。第１層は耕土、第２層は床土である。第３層は小砂利を含む砂層である。第４層は第３層より粘質の強い砂層である。この下は径２～10cm大の礫層である。この礫層までの深さは、田面より20～30cmを測る。トレンチ内の西側には、東西方向に、幅70cm、深さ10cmの溝が走る。その東にはピットがあり、東端は約20cmの深さで落ちる。

本トレンチからの出土遺物には、弥生土器、須恵器、朝鮮陶器、石製品がある。

第２トレンチは第１トレンチの中央部から直角に北側６m延ばしたものである。幅は１mである。耕土を除くとすぐ礫面で、この面まで25cmを測る。溝１条とピットが検出された。弥生土器が１点出土している。

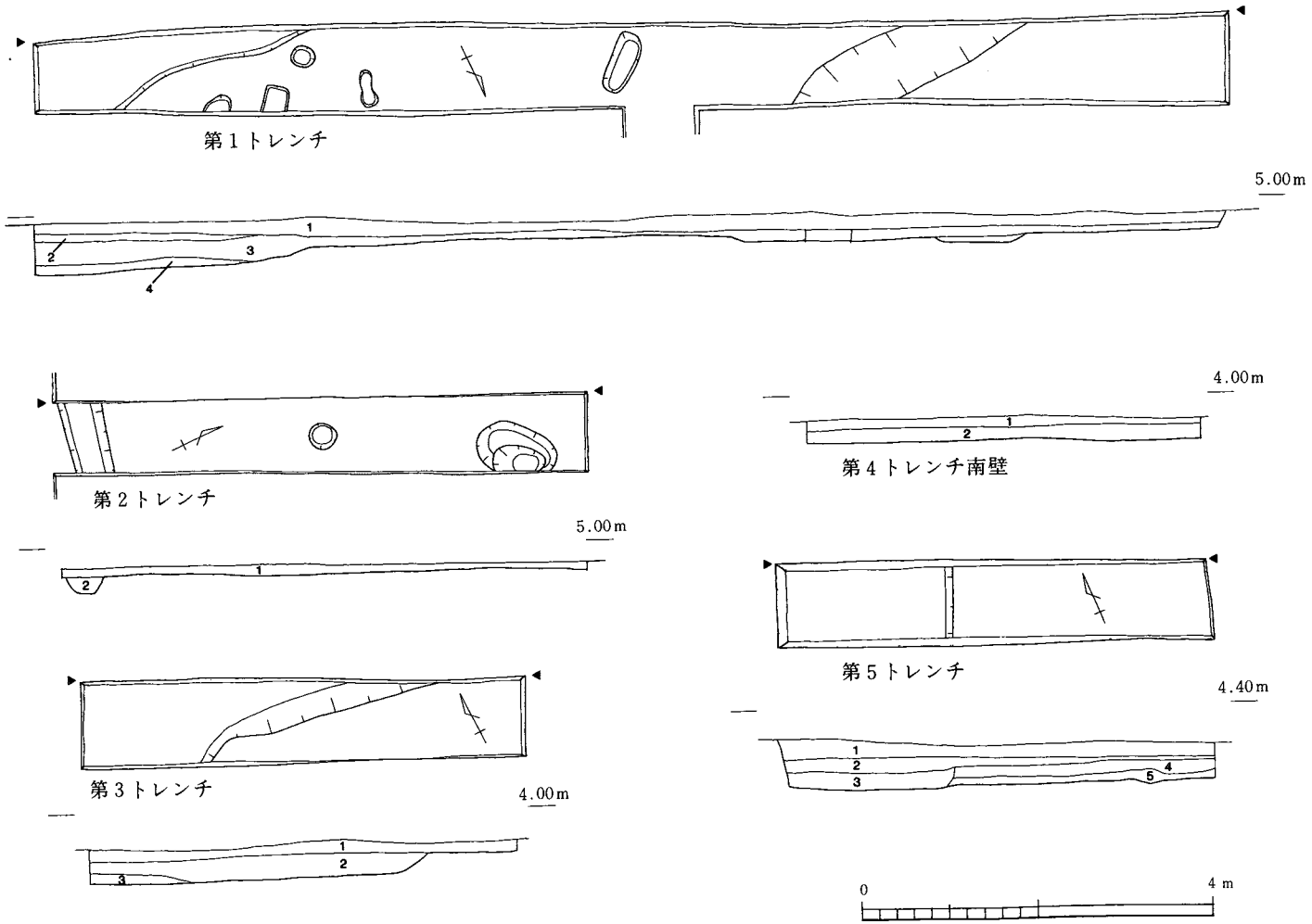
第３トレンチは西側に設定した。幅１m、長さ4.5m。耕土の下に小砂利層があり、その下は礫層の地山になる。地山まで28cmを測る。出土遺物はない。

第５トレンチは東側に設けた。幅１m、長さ５m。第１層・第２層は耕土・床土で、第３層は礫まじりの暗灰褐色粘質土層である。第４層は暗灰色砂質土層、第５層は暗灰褐色砂質土層である。その下は礫層となっており、田面からは約45cmを測る。出土遺物には土師器、越前焼がある。

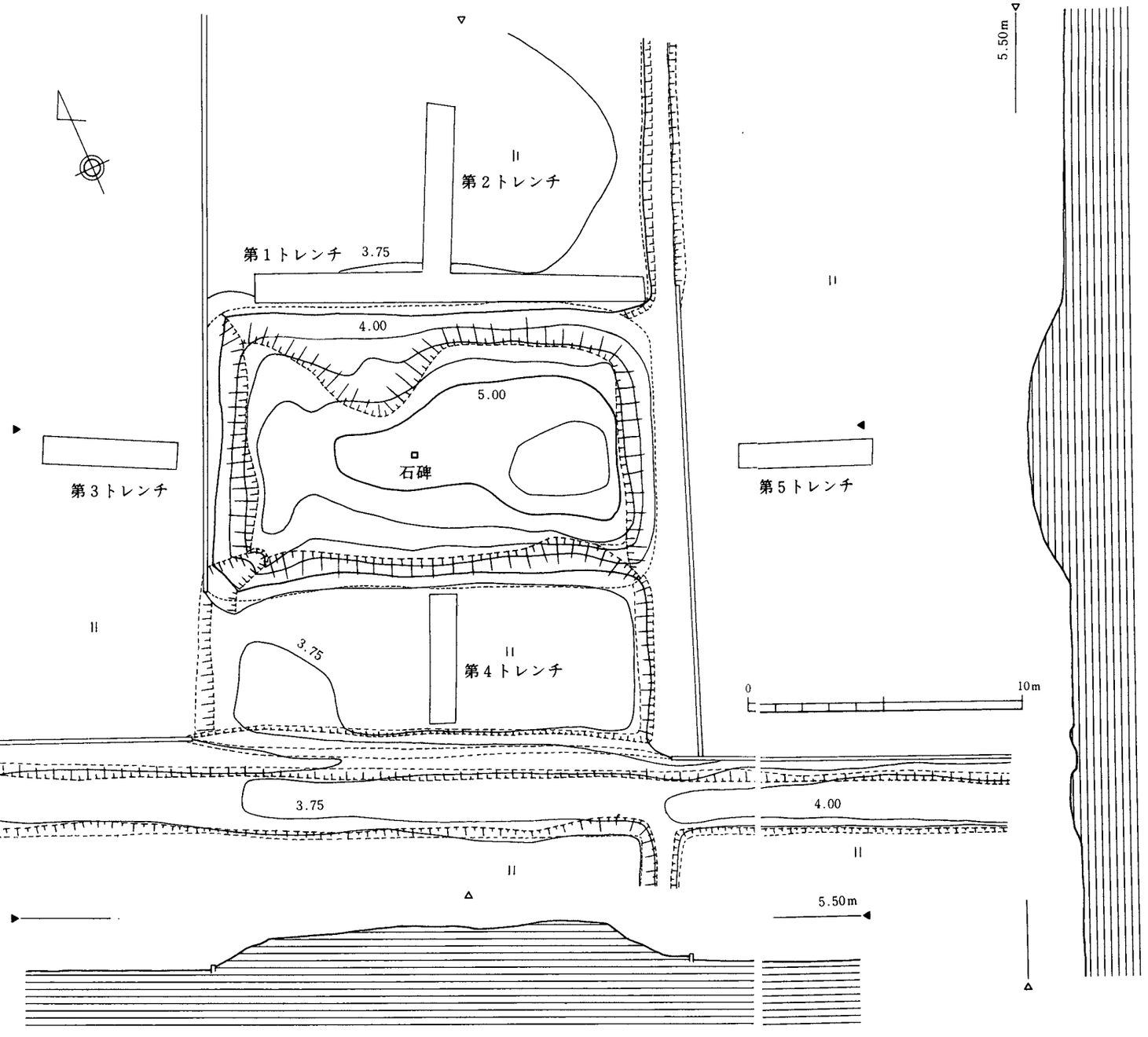
２．遺　物（第57図）

トレンチ内出土のものと、丘上およびその周辺から採集したものがある。

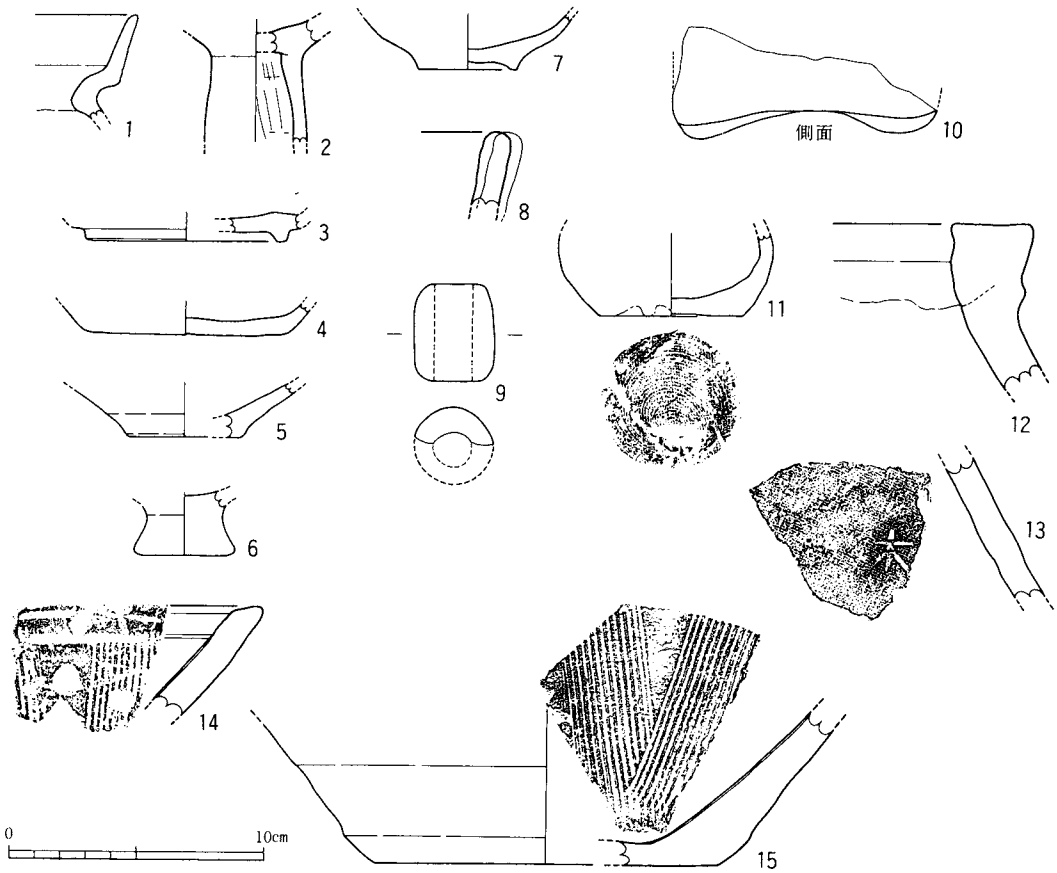
出土遺物　１～10である。１・２は弥生土器である。１は第２トレンチより出土した有段口縁の甕、２は第１トレンチより出土した高坏である。いずれも後期後半の所産であろう。３・４は須恵器の坏である。５・６は土師器で、第５トレンチより出土した。５は皿、６は台脚付の小皿である。12世紀前半代のものとみられる。７は第１トレンチの流路内より出土した朝鮮王朝の陶



第55図　伝小白山社跡地トレンチ実測図（S＝1/80）



第56図　伝小白山社跡地測量図（S＝1/200）



第57図　遺物実測図（S＝1／3）

器で、皿である。底径4cmを測り、内底面に目跡がみられる。釉は内外面に施され、オリーブ灰色を呈する。16世紀の所産とみられる。8は第5トレンチより出土した越前焼の片口鉢である。9は第1トレンチの流路内から出土した土錘で、長さ3.8cm、径3.4cm、孔径1.5cmを測る。10は第1トレンチより出土した凝灰岩製の横口式行火である。

採集遺物　11～15は丘上および周辺部から採集したものである。11は瀬戸・美濃焼の小型壺とみられる。底径5.5cmを測り、回転糸切り痕がみられる。外面は、底面以外鉄釉がかかる。内底面には黄褐色の付着物が見られる。16世紀前半代と考えられる。12～15は越前焼である。13には「本」という文字状の押印が見られる。越前焼はいずれも16世紀前半～中葉の所産とみたい。

3．若干の所見

伝小白山社跡地についてのトレンチ調査および丘上の観察で跡地とみなしうる資料は得られなかった。伝跡地の規模については、四辺が削られていることが明らかで、現在より大きかったことは間違いない。明治末年から始まった耕地整理によって削られたものとみられる。高野直満氏の著した『大地無常』（自筆本、昭和37年）には、明治時代中頃の伝小白山社跡地は、東西50～60m、南北6～7m、高さは水田面から1mあったと記される。現在の規模と比べると、南北長と

比高は変わらないが、東西方向にかなり長く、細長い土塁状の景観が想起される。

耕地整理以前の手取川扇状地がかなりの起伏をもっていたことはよく知られるところである。この小丘も、かつての起伏の名残りである可能性があるが、小白山社社地の一画を占めていた可能性や、近くに小白山社が存在した可能性を否定することもできない。

第4章　平成2年度調査

第1節　小川新遺跡ブシャデン地区の調査

1．立地

現在の小川集落の南端から海岸へ向かう道路の南側約95mに、それと平行する長さ100m、幅2mの調査区を設定することになった。調査区の西端から北陸自動車道までは西へ約20m、現在の日本海の汀線までは西へ約90mを測る。ほぼ東西方向で線状に走る調査区の東端付近の北方約160mには、第1次調査でその周辺を調査した「小河小白山社」跡の伝承地が所在する。

付近の地形は日本海へ向けて漸次標高を減じており、この点は調査区内の地山の標高が東端部で約3.1m、中央部で約2.9m、西部で約2.5mを測ることからも理解できる。南北方向の地形の傾斜については、調査区の幅が2mに限られたため発掘によって裏付けることはできなかったが、現在の地表面のあり方から概して北に高く、南西の山島用水の河口付近の微低地へ向けて徐々に下がっていくものと推察される。因みに山島用水は往時の手取川の大きな分流ないしは本流の河道の名残りといわれ、その様子は『一遍上人絵詞伝』にも描かれている。

2．層序

地表からの土層堆積状況についてはすべて調査区北壁において記録した。基本的には最上部に現代の農道の盛土と水田の床土、次に暗灰色砂質土、さらにその下には濃暗灰色シルト層の堆積がみられる。この濃暗灰色シルト層が中世の遺物包含層に相当するが、その包含量はきわめて少ない。これより下位の土層については、各遺構の項において説明することにする。なお、ベース（地山）となるのは明黄褐色細砂層である。

3．遺構の概要（第60図）

長さ100m、幅2mの調査区内に分布する遺構は、中央の近代以降の耕作に伴うものを除いては遺構が希薄な区域を挟んで、東・西2グループに分けることができる。まず、西部では溝4条（第3～6号溝）が、また東部では溝2条（第1～2号溝）、土坑1基（第1号土坑）、性格不明の落ち込み1基（第1号落ち込み）が検出されている。いずれも中世前後に属するものと考えられる。

4．西部の遺構と遺物

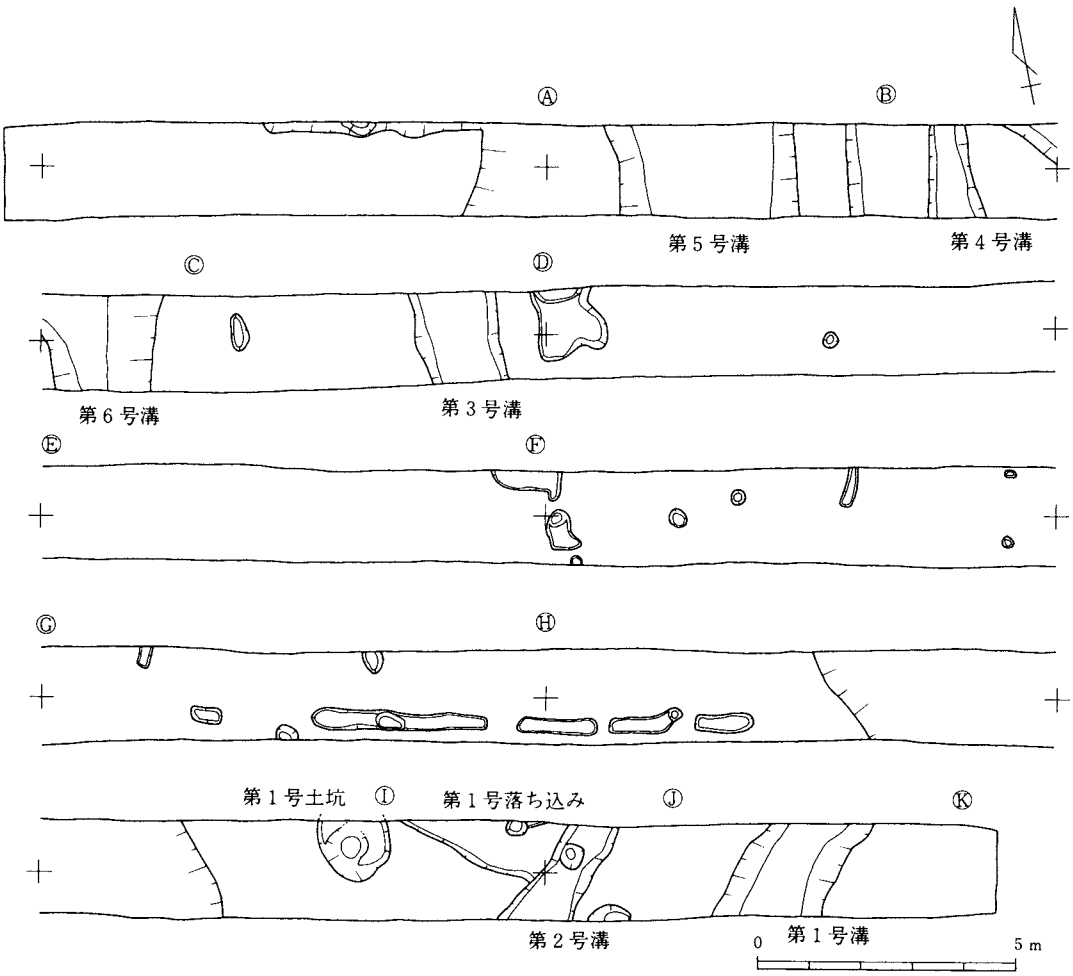
（イ）溝

第3号溝（第64・69図）

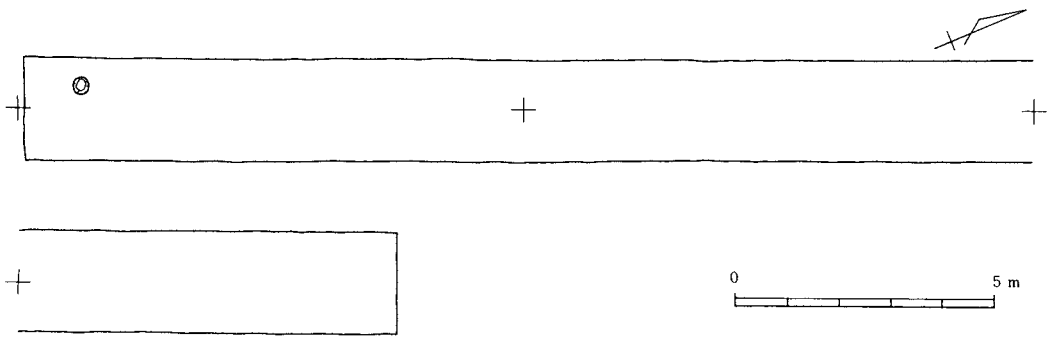
遺構　調査区西端から東へ約29mの地点において検出されている。幅約160cm、深さ約25cmを測

第58図　ブシャデン地区位置図（S＝1/3,000）

第59図　アブラデン地区位置図（S＝1/3,000）



第60図　ブシャデン地区全体図（S＝1/150）



第61図　アブラデン地区全体図（S＝1/150）

る。ほぼ南北方向に走っており、覆土は砂質に富む土壌によって占められている。

遺物（1～8）　1は土師質土器の小皿であり、成形は非ロクロ成形による。口縁端部に弱いながら面取りを施し、以下体部外面に横ナデを施す。小片にして全形を窺うことは難しい。色調は暗い肌色を呈しており、胎土中にはほとんど砂粒を含んでいない。木製品は棒状のもの（2～5）と板状のもの（6～8）とに大別される。まず前者では3が箸と考えられ、5においては焼けた痕跡（以下スクリーントーンで表示）を認めることができる。その他、断面不整五角形に面取りがなされ先端を斜めに裁ち切る2、左右両側から削って先端を尖らせる4なども出土している。また、完形品で占められる後者はいずれも木札様のものであり、6の下端の木口は側面図に見る通り斜めに裁ち切られている。

第4号溝（第63・69図）

遺構　調査区の西端から東へ約19mの地点において検出されている。幅70～110cm、深さは20cm前後と推定される。覆土濃暗灰色粘質土中には有機物も多く遺存しており、昆虫の羽なども肉眼で観察することができた。土層断面図から第6号溝が埋積した後に営まれたことが知られ、また、掘り込み面の状況から第5号溝と近接した時期に機能した可能性が高いといえる。

遺物（9～10）　9は珠洲焼片口鉢であり、口縁端部に若干外傾する面を有し、その外端は嘴状に小さく張り出す。暗青灰色を呈する器壁には、石英の微砂粒と思われるものが多く含まれている。内外面ともにシャープなロクロナデによって仕上げられており、薄手の部類に属する。10は短冊形の木製品であり、下端は斜めに裁ち切られている。図示した左側縁には一部焼けた痕跡が観察できる。

第5号溝（第62・69・70・71・72図、図版38）

遺構　調査区西端から東へ12～16mの地点に所在し、西部の溝群中で最も西に位置する。幅約3.6m、地山面からの深さ約0.3mを測り、本調査区中最大規模の溝ともいえる。土層断面図からは遺構機能時には上幅が5m以上に及んでいた可能性も指摘し得る。東側では暗灰色砂質土（覆土第10層）が底部から上部にかけて急斜度で立ち上がるのに対して、西側では濁青灰色砂質土（第8層）が緩やかな立ち上がりを示しつつ暗灰色シルト（第5層）へと続いていく。そのためか本遺構の西側においては、全体図からもわかるとおり、壁が一旦立ち上がったのちも幅約2mにわたって地山が浅く落ち込んだ箇所が認められる。本溝出土遺物の報告にあたっては、この部分を「西側肩部」と呼称し、濃暗灰色シルト層（第4層）を「上層」、濁淡黒灰色粘質土（第6層）・黒灰色粘質土（第9層）を「下層」とすることにする。

上層出土の遺物（11・13～25・27・28・30・33・35）　陶器では珠洲焼の壺と思われる11と同じく珠洲焼で器種不明の底部である13が出土している。前者では内外面ともにロクロナデによる調整が看取されるほか、底部外面には静止糸切りによって切り離されたのちに幅4cm程度の短冊状の板を並べものの上に置かれたような痕跡を認めることができる。底径11.5cm、残存高13.4cmを測り、色調は淡青灰色であり胎土中には海綿骨針が含まれる。使用に起因する痕跡と考えられるものには、外面の底部から数cmの部位のスス状付着物及び内面の同一部位における黒色のヨゴレ、また底部内面に集中する径数mmのアバタ状の小さな凹みをあげることができる。これらについて

は壺が破損したのちの転用によって生じた可能性も払拭できない。次に13については外面に砂目状のものが観察できるが、その性格についてははっきりしない。木製品については、14～25及び27が箸或いはそれに類するものと判断される。まず、14・15は太身の部類に属し、一端のみを尖らせている。面取りが施されており、断面形はいずれも不整な六角形。これに対して細身の16・17・19は両端を尖らせている。部分的にしか遺存していない22～25・27についても、太さ等からこのグループに含まれる可能性が考えられる。その他にはやや太身の18、遺存部でみる限り一端が平坦に作り出されている20・21がみられる。箸類以外では小さいながら完形品である細長い板状の木製品28、短い棒状の30・31・33、木栓状の35も出土している。このうちの31及び33の一端には焼けた痕跡が残る。

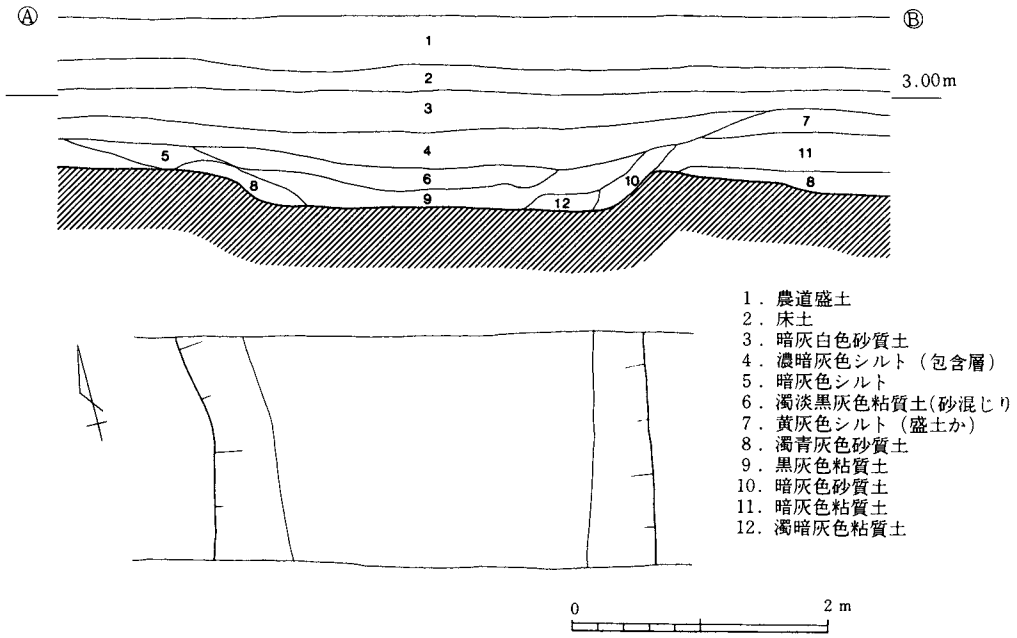
西側肩部出土の遺物（12・26・29・32・34）　12は非ロクロ成形の土師質土器の小皿である。口径7.0cm、器高1.5cmを測り、口縁端部外面に1段のヨコナデが施されている。色調は暗黄灰褐色を呈する。木製品では箸の一部と思われる26、短冊状の29、短い棒状で端部に焼けた痕跡を有する32・34がみられる。

下層出土の遺物（36～65）　いずれも木製品である。まず、箸と考えられる36～55については、完形或いはそれに近く全形を窺うことのできる36～41はいずれも細身で両端を尖らせるものである。長さにはややバラツキがあるが、21cmから26cmの範囲に収まる。部分的にしか遺存しないもののうちには一端が平坦な42～45、一端が尖る46～53、両端を欠く54・55がみられ、その殆どが細身であるが、なかにはやや太い42のようなものもみられる。箸類以外では、左右両端部にそれぞれ1箇所の刻みを有する56、薄手の小板片57～61、楔形の木製品は62～64、一部が焼けた木塊65などが出土している。なかでも興味深いのは56であり、長さ28.0cm、最大幅1.9cm、厚さ1.0cmを測り、上記のとおり左右両端部のそれぞれ上面には幅0.5cm、深さ0.3cm前後のV字状の刻み目が彫り込まれている。全体的に丁寧に仕上げられており、中央部に径2～3㎜の釘（恐らく木釘か）の跡が認められることからも、何らかの製品の部材である可能性が高い。

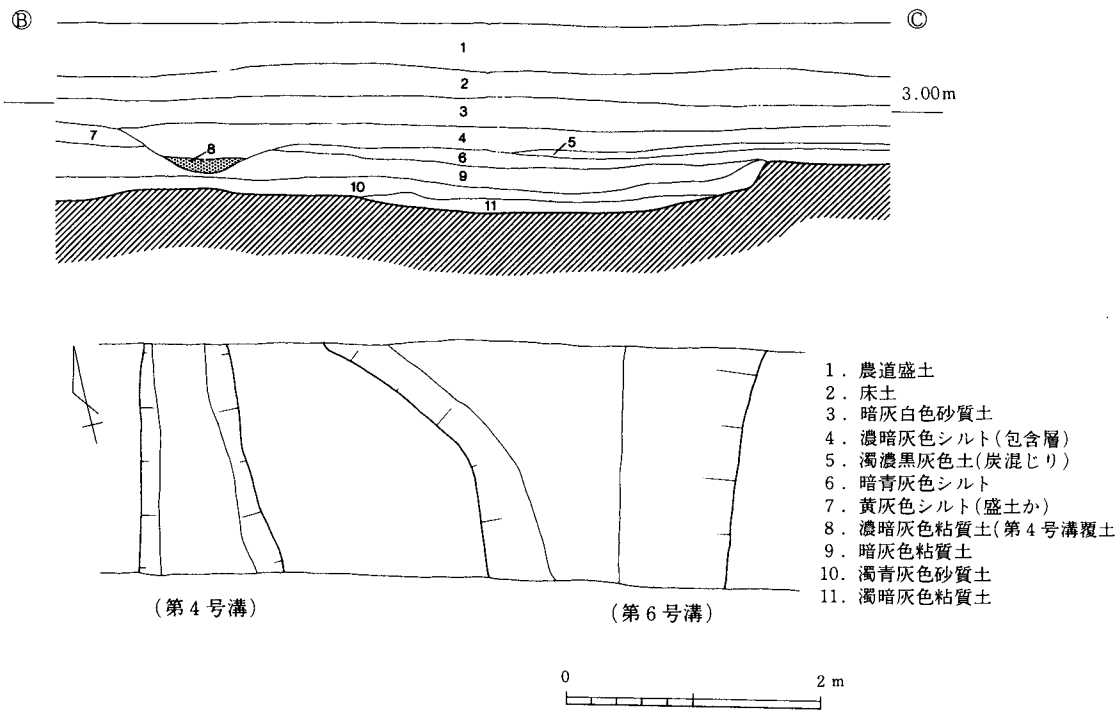
第6号溝（第63・72・73図、図版38）

遺構　調査区の西端から東へ約21mの地点に所在する。幅1.9～3.5m（実際はそれ以上であろうか）、深さ約35cmを測る。土層断面図からも明らかなように東側における壁の立ち上がりが明瞭なのに対して、西側におけるそれは鈍く不明瞭といえる。また、掘り込み面の状況から第4号及び第5号溝に先行する時期の所産とすることができよう。覆土はほぼ3層に分かれ、上下の粘質土層に挟まれるようにして濁青灰色砂質土層（第10層）が堆積しており、流水によって生じた粗粒砂層と考えられる。図示されていないが、遺構掘り下げ時点においては直径約3～4cmの表皮を残したままの細い木を用いた杭が、東側の壁に4本打ち込まれているのが確認できた。

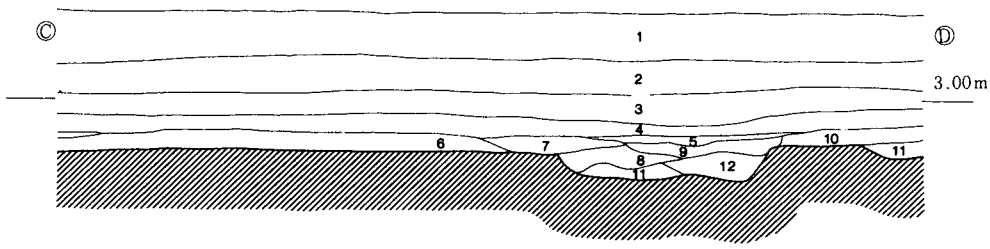
遺物（66～74）　土器は66が1点検出されているのみである。底径5.0cmに復元されるが、小片に過ぎず器種不明と言わざるを得ない。器表面の状態が悪く調整等を窺い知ることはできないが、1（第3号溝）や12（第5号溝）とは異なり、底部糸切りによるロクロ成形による土師器である可能性が指摘できる。明橙褐色を呈し胎土中には赤色の微粒が少量含まれている。次に67～73はいずれも面取りが施された棒状の木製品である。そのうちの67～70の一端には焼けた痕跡が認め



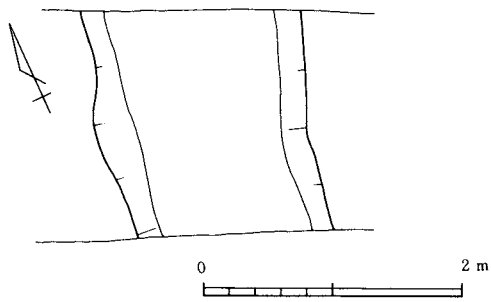
第62図　ブシャデン地区第５号溝実測図（Ｓ＝１／60）



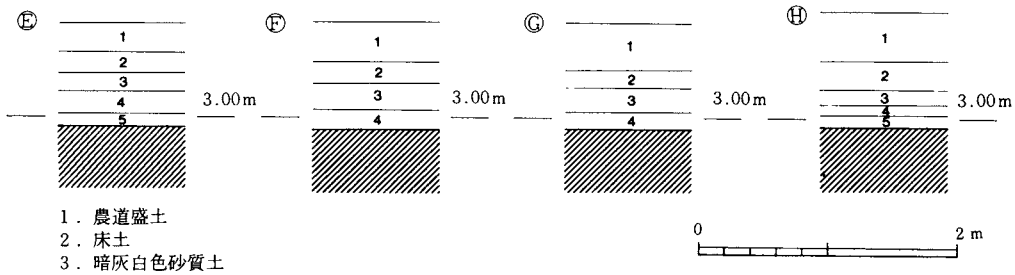
第63図　ブシャデン地区第４・６号溝実測図（Ｓ＝１／60）



1．農道盛土
2．床土
3．暗灰白色砂質土
4．濃暗灰色シルト（包含層）
5．暗茶灰褐色土
6．暗青灰色シルト
7．濁暗茶褐色土(粘質砂混じり)
8．濁濃茶褐色土(砂質)
9．暗青灰色砂質土
11．濁黄灰色砂質土
11．濁青灰色砂質土
12．濁黄褐色砂質土

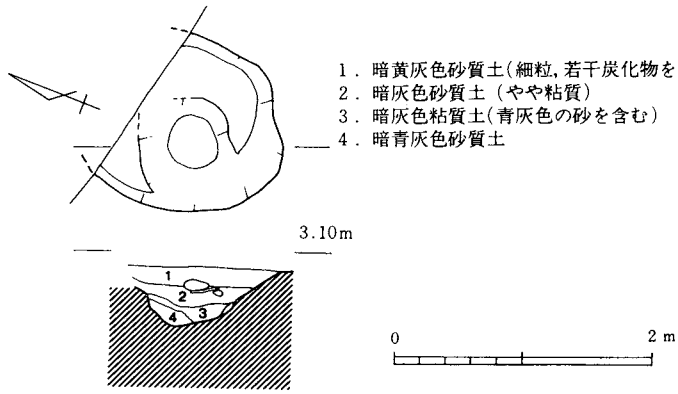


第64図　ブシャデン地区第３号溝実測図（S＝1／60）



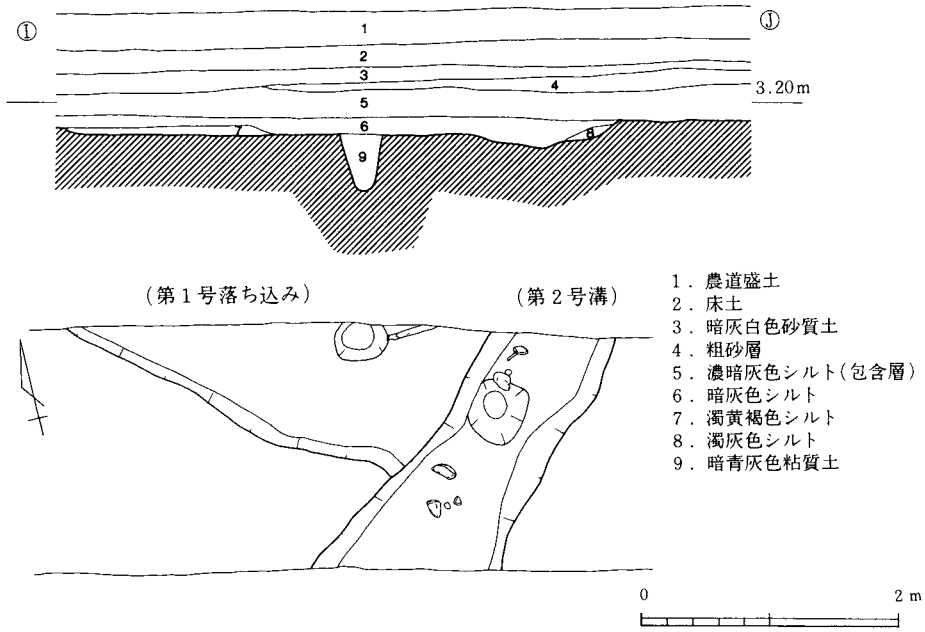
1．農道盛土
2．床土
3．暗灰白色砂質土
4．濃暗灰色シルト(包含層)
5．濁暗灰色砂質土

第65図　ブシャデン地区土層柱状図（S＝1／60）

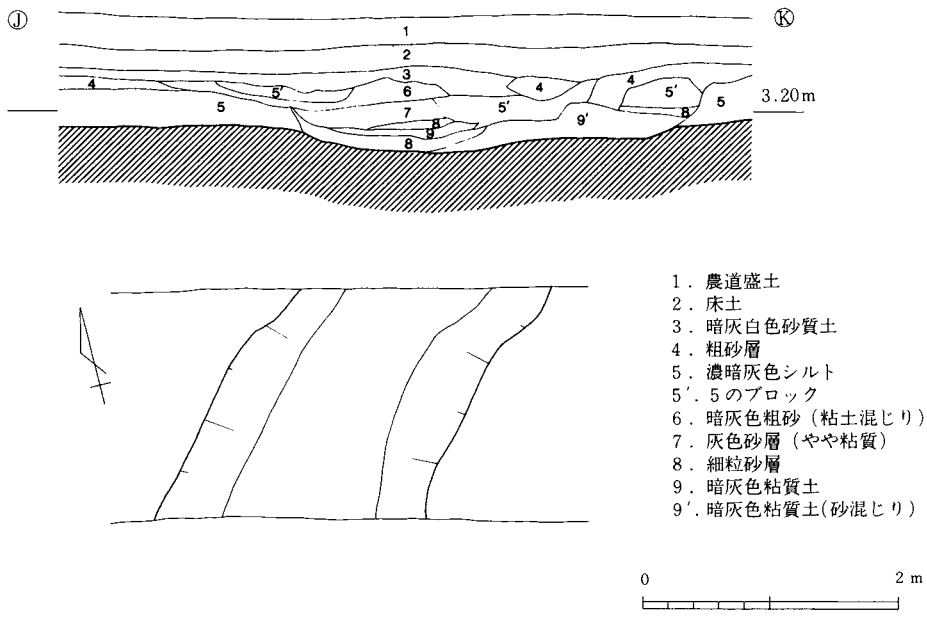


1．暗黄灰色砂質土(細粒，若干炭化物を含む)
2．暗灰色砂質土（やや粘質）
3．暗灰色粘質土(青灰色の砂を含む)
4．暗青灰色砂質土

第66図　ブシャデン地区第１号土坑実測図（S＝1／60）



第67図　ブシャデン地区第２号溝・第１号落ち込み実測図（Ｓ＝１／60）



第68図　ブシャデン地区第１号溝実測図（Ｓ＝１／60）

られる。67は折れた箸の先端部を利用している。残る74は紡織具のイトワク（糸枠）であり、遺存状態はきわめて良好で全形を知ることができる。中央部に楕円形の軸穴１孔を有する隅丸正方形状の２枚の横木に４本の枠木が伴うもので、枠木と横木の結合に際しては１本の枠木について腹面側に２箇所の切り込みを設けるとともに背面側から接合部１箇所につき２本、都合16本の木釘を打ち込んでいる。次に各部の寸法等について述べたい。まず横木は13.4×13.0cm、厚さ2.0cmを測る隅丸正方形に近い形状の１枚板で、中央部に4.0×3.2cmの楕円形の軸穴がみられる。次に枠木は長さがほぼ30cm、背面側は丸く仕上げられており、横断面はいずれの箇所においてもカマボコ形といえる。また背面側が直線的であるのに対して、腹面側は横木との結合部２箇所が山形に盛り上がり、そこに長さ4.5cm前後、幅2.2cm、深さ2.5cm程度の溝状の切り込み部が設けられている。背面側は丁寧に仕上げられていて木工具痕がほとんど看取されないのに対して、腹面側のそれは明瞭である。枠木の上下両端は3.0×2.6cmくらいの楕円形の平坦な面となっている。木釘は直径５～６mm、長さ４cm弱である。80はイトワクの軸木かもしれない。なお、本資料の出土位置は溝検出部分東南の濁青灰色砂質土層（第10層）中にあたる。このイトワクについては、紡織具に詳しい角山幸洋先生（関西大学教授）に実見して頂くと同時にご教示も賜っており、その際の所見も含めて後述することにしたい。

５．東部の遺構と遺物

（イ）土坑

第１号土坑（第66・74図、図版39）

遺構　調査区東端から西へ約13mの地点に位置する。北部は調査区外にのびており、未調査である。長さは120cm以上、幅140cm前後を測り、形状は不整な楕円形と推定される。深さは46cm、底面は径40cm前後と意外に小さい。

遺物（75～77）　土層断面図にみるとおり、覆土第１層（暗黄灰色砂質土）と同第２層（暗灰色砂質土）の境付近から拳大～人頭大の礫に混じって、75～77をはじめとする木製品が若干出土している。長さ25.8cmを測る75は一端のみが尖る箸で、幅約１cm、厚さ0.6cmと太身の部類に属し、表裏面とも平滑に仕上げられている。76・77は板状の木製品の一部であるが、性格等は不明。

（ロ）落ち込み

第１号落ち込み（第67・74図、図版39）

遺構　調査区東端から西へ９～12mの地点において検出されている。北側が大きく調査区外にのびるほか、東側も第２号溝と重複しているため、元来の平面形を窺うことは難しい。地山を５cm程度掘り窪めた浅い落ち込みで、北側には直径約40cm、深さ約45cmのピットが１基みられる。主要な覆土は暗灰色シルト層（第６層）であり、この点は第２号溝と同じである。調査時に両遺構の覆土を分けようと試みたが結局は分層することができなかった。

遺物（80）　平面図に図示したとおりピット東側の床面上より80が出土している。80は長さ36cm以上、幅4.0cm、厚さ2.8cmを測り、本調査区出土品中で最も太くて長い棒状木製品といえる。横断面は角のとれた長方形を呈し、表面は丁寧に仕上げられていて木工具痕はみられない。先端に

近付くにしたがって先細りになる。

（ハ）溝

第１号溝（第68図）

遺構　調査区東端から西へ約５ｍの地点において検出されている。幅約180cm、検出面からの深さ約18cmを測る。土層断面図にみるとおり少なくとも濃暗灰色シルト層（第５層）より上位から掘り込まれており、同層を掘り込んだ形跡が認められない後述の第２号溝よりも新しい時期に営まれた可能性が高い。また、同層のブロック状の塊が土層断面で多く確認されることから、崩壊による埋積も想定されよう。底部の標高値は南西から北東にかけてわずかに低くなる傾向にあるが、調査部分が限られるため流路方向を判断することは難しい。本溝からは遺物は得られなかった。

第２号溝（第67・74図図版39）

遺構　調査区東端から西へ約９ｍの地点に所在し、第１号落ち込みと重複するが、先述のとおりそれの覆土との区別ができなかったため、切り合い関係は不明である。或いは両者はほぼ同じ時期に営まれたものかもしれない。幅は100～120cm、検出面からの深さは最高で約25cmを測る。第１号溝と同様に底部の標高値は南西から北東にかけて若干低くなるが、やはり流路の方向を特定するまでには至っていない。底部には直径40～50cm、深さ20cm前後のピットが１基伴うほか、拳大か或いはそれよりやや大きめの礫が何箇かみられた。

遺物（78・79）　78は白磁の碗で口径は16cm前後に復元できる。口縁は端反りとなり、小片のため全形を窺うことができないものの恐らく「Ｖ類」〔横田・森田　1978〕に位置付けることができると思われる。79は箸であり、残存する長さは18cmを測る。一方の先端が尖るが、太さから考えて欠損してしまったもう一方の先端も尖っていた可能性が考えられる。

６．調査区周辺採集資料

ブシャデン地区において排水路部分の発掘調査が行われていた頃、その周辺では県営ほ場整備事業に係わる田面の工事が進みつつあった。第75図に掲げる資料は主として発掘調査に参加した中村繁和氏が調査の合い間に耕作土中から採集した遺物によって占められている。以下、順次説明を加えたい。

須恵器（81・82）　81が杯蓋、82が甕類の胴部の破片である。前者には宝珠形のツマミがみられ、後者の外面は平行タタキ、内面は同心円状タタキによって調整されている。

青磁（83）　83は小片ながら皿の底部付近と思われ、屈曲部の上位には短い口縁部が伴っていたと推定される。見込みには櫛描文が施されており、釉の色調は青味がかった緑色といえる。龍泉窯系のものであろうか。

白磁（84～87）　84・85は小片ながら碗の口縁部と考えられる。口縁端部の形態は前者が端反りであるのに対して、後者は玉縁を有するものである。釉の色調はともに黄色味を帯びるが、前者では密な貫入が観察できる。また、薄手に作られている84の内面には１条の細い沈線が走る。続く86は釉及び胎土の色調が純白に近いものであり、他の３者に比して後出的な時代の資料かもし

れない。高台径3.3cmを測り、外面は高台の内側も含めてケズリによって仕上げられている。残る87は四耳壺の肩部と考えられ、外面にのみにかけられた釉の色調は84・85同様に黄色味を帯びる。内面にはロクロナデが残る。

土師質土器（88）　口径7.0cm、器高1.5cmに復元され、口縁部の内外に灯芯油痕がみられる。口縁部外面は1段のヨコナデによって調整されている。淡茶灰色を呈する。

土師器（89）　底径4.4cmを測り、底部外面にはかすかに回転糸切りの痕跡を残す。ロクロ成形による製品と考えられ、暗橙褐色を呈する胎土中には赤色粒（シャーモット）が多く含まれている。

珠洲焼（90・91）　90は恐らく壺の胴部片と思われ、右下がりの平行タタキ（3cm幅に10条程度のもの）が施されている。91はすり鉢の片口部付近であり、内面にはおろし目がみられる。また、同じく内面の一部には黒色の付着物も認められる。

瓦器（92）　2箇を1対とする17弁の菊花状の花文（直径9mm）、茎と思しき2条を1対とする縦位の沈線（1条の幅0.5mm程度）、そこから伸びる葉を表現する三ケ月状の文様（長さ9mm前後）、地文をなす直径1mmの密な円文によって加飾されている。このように間隙なくスタンプによって施文する手法は中世の瓦器には余り類をみず、或いは近世に降る資料かもしれない。厚さ7mm前後と比較的薄手であり、小片のため器種を特定することは難しいが、風炉状のものを想定しておきたい。

土錘（93～96）　いずれも明るい橙褐色を呈する。陶質に堅く焼き上げられた93は、長さ3.9cm、最大径4.8cmと推定され、本器種中最も大きなものである。細かい砂粒及びシャーモットを胎土中に含む94～96については、第1次調査に伴う多くの類例の出土が知られており、詳しくはその記述を参照して頂くことにしたい。

第2節　小川遺跡アブラデン地区の調査

現在の小川集落の西南に長さ27.5m、幅2m、したがって面積55㎡のトレンチを設定して調査を実施した。トレンチの方向は北北東から南南西にかけてである（第59図）。土層については、まず最上層に厚さ約20cmの耕作土、次に厚さ約15cmの水田床土が堆積しており、その下の黄褐色シルト層がベースをなしていた。この黄褐色シルト層には、上面が標高6.9m前後を測るが、どちらかといえばトレンチ南端に比して北端がわずかながらに高い傾向にある。また、トレンチの北半分ではこの層は礫混じりとなっていた。

さて、調査の結果についていえば、トレンチ南端部付近で直径約30cm、深さ約20cm、暗茶褐色粘質土を覆土とするピットが1基検出されたのみで、周辺の耕作土中には中世に属すると思われる陶磁器の細片が若干含まれていたものの、トレンチ内からの遺物の出土は確認できなかった（第61図）。このことは、今回の調査区が現在の小川集落と重複するようにして分布する「小川遺跡」の中心部からはずれていることに起因するとも考えられるが、「小川遺跡」については試掘によるデータが限られていることもあって判断が難しいのもまた事実である。なお、本調査区は第1節にて報告した小川新遺跡ブシャデン地区の調査区から東へ約500mの地点にあたる。

第3節　まとめ

第2節で触れた小川遺跡アブラデン地区においてはさしたる成果も得られなかったため、ここでは第1節とした小川新遺跡ブシャデン地区における成果について簡単にふりかえることにしたい。

（1）予想される各遺構の年代

まず、ブシャデン地区においては、木製品の遺存状態が良好で一定量の出土がみられた一方、土器類の出土量に恵まれず、この点が各遺構の年代の判定を難しくしていることが指摘できるのではなかろうか。とはいえ、きわめて数少ない出土土器に調査区周辺採集の資料を補い、この地区では主として古代末期から中世にかけて遺構が営まれたと推定することは許されるであろう。

次に、調査区の西端から東端にかけて広く堆積しており、所によっては若干の遺物を包含することのある土層に濃暗灰色シルト層が知られるが、これを「鍵層」として各遺構の先後関係を考えてみたい。

濃暗灰色シルト層との関係から各遺構は以下のように分類されよう。

A群　濃暗灰色シルト層を掘り込んだ形跡が認められず、覆土最上層とこの層との間に間層が認められるもの。第6号溝がこれに該当する。

B群　濃暗灰色シルト層を掘り込んだ形跡が認められず、覆土最上層の直上にこの層の堆積が認められるもの。第2・第3号溝及び第1号落ち込み。

C群　濃暗灰色シルト層或いはこれに相当する層を覆土最上層とするもの。第4・第5号溝。

D群　明らかに濃暗灰色シルト層を掘り込んで遺構を築いているもの。第1号溝。

上記の点から遺構の構築年代は大略A→B→C→D群の順となると思われる。A群では第6号溝から底部糸切りのロクロ成形の土師器と思われる66が出土しており、古代末期以前に遡る可能性があると考えられる。B群では第2号溝から端反りの白磁碗78、またC群の第4号溝から珠洲焼片口鉢9、第5号溝上層からは同じく壺である11が出土している。9・11については珠洲陶器の「第Ⅰ期」〔吉岡　1989〕に属すると考えられ、また、78も前述のごとく白磁の「Ⅴ類」〔横田・森田　1978〕に位置付け得る。したがって、これら3者は、製作或いは輸入の年代において12世紀以前に及ぶものと考えることができる。しかし一方、B群の第3号溝、C群の第5号溝西側肩部よりそれぞれ1点のみながら非ロクロ成形の土師質土器片（1・12）の出土もみられ、器物の製作から廃棄に至る伝世期間の問題を考慮した場合、白磁・珠洲焼に比してこちらの方がより近接した時間幅に収まり得るのではないかと思われる。B・C群については出土した白磁・珠洲焼の製作年代が示す製作（輸入）年代である古代末期より繰り下げて中世前半頃とするのが現時点ではより無難ではないかと思われる。さらに先述のとおりB・C群における土師質土器の出土が微量で定量的な分析に堪えるものでないため、これ以上の限定はできない状況にあることも言うまでもなかろう。残るD群については、濃暗灰色シルト層が中世以外の時期の遺物を含んでいなかったこともあり、近世以降の時期に属する可能性も払拭できない。

以上の各遺構の年代については、限られた調査区における限られたデータに依拠しての推定の域を出ないものであり、今後本遺跡が本格的に発掘調査される機会があれば随時訂正されるべき性質のものであることも付言しておきたい。

（2）小川津・小河小白山社と小川新遺跡

最後に今回調査結果を報告することになったブシャデン地区を含む小川新遺跡が有する歴史的背景について触れ、第2次調査の報告の結びとしたい。なお、これについては本書の他稿と重複する部分も大きいと思われるが、その点については寛恕願いたい。

まず、小川新遺跡が所在する石川県松任市小川地区はかつては石川郡宮保村の一部をなしており、宮保の名は現在も県営ほ場整備事業の地区名などにその名を留めている。“宮保”の“宮”とは文字どおり白山宮をさすのであり、したがってかつてその神領（実際には免田群か）が所在した地域であったことを地名のうえからも窺い知ることができる。

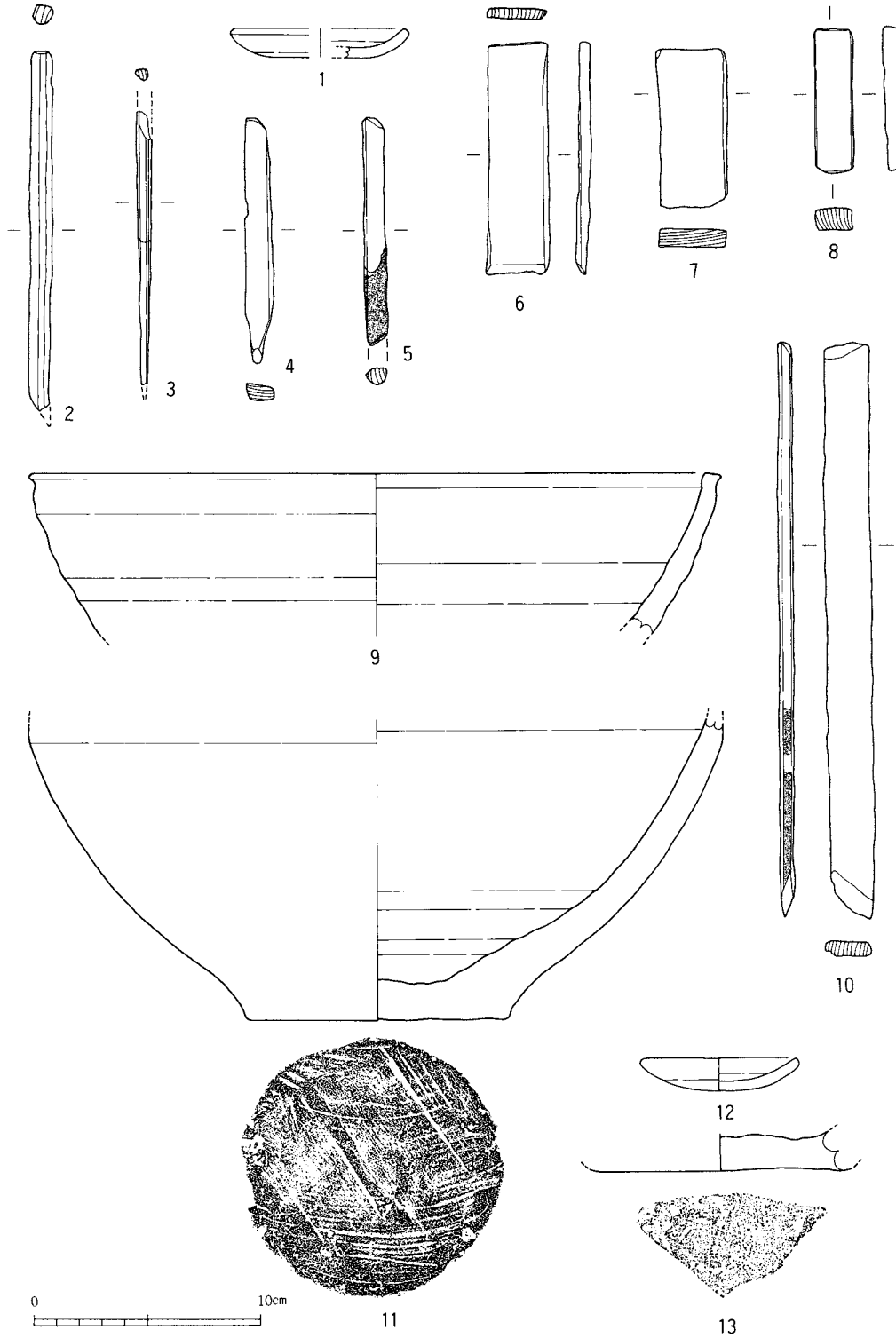
ところで小川地区をはじめとする現在の松任市街地の西南部一帯のかつての宮保・宮丸保・笠間東保にあたる地域、すなわち手取川旧河道右岸部を中心に、白山本宮の神主職を継承した一族である上道氏（惣領は宮保氏を称す）が12～13世紀頃に在地領主としての展開をはかっていることについては、浅香年木氏が指摘してすでに久しい〔浅香　1978〕。

手取川扇状地の扇頂部の鶴来付近には、国内の多くの商工業者を神人として組織・統括してもいた中世加賀における最大の宗教勢力白山宮の拠点である本宮が置かれ、本宮・金剣宮の門前には現在の鶴来市街地の祖型となる平等寺市などの市場が形成されていたはずである。手取川旧河道の河口付近に位置した「小川津」は、その白山宮（加賀馬場）との密接な関連を背景にして形成され、加賀の国内経済の一翼を担ったと推定される鶴来付近の市場からすれば、手取川河道を介して日本海と結ばれるところの地理上、交通上の重要な位置を占めていたことは想像に難くない。

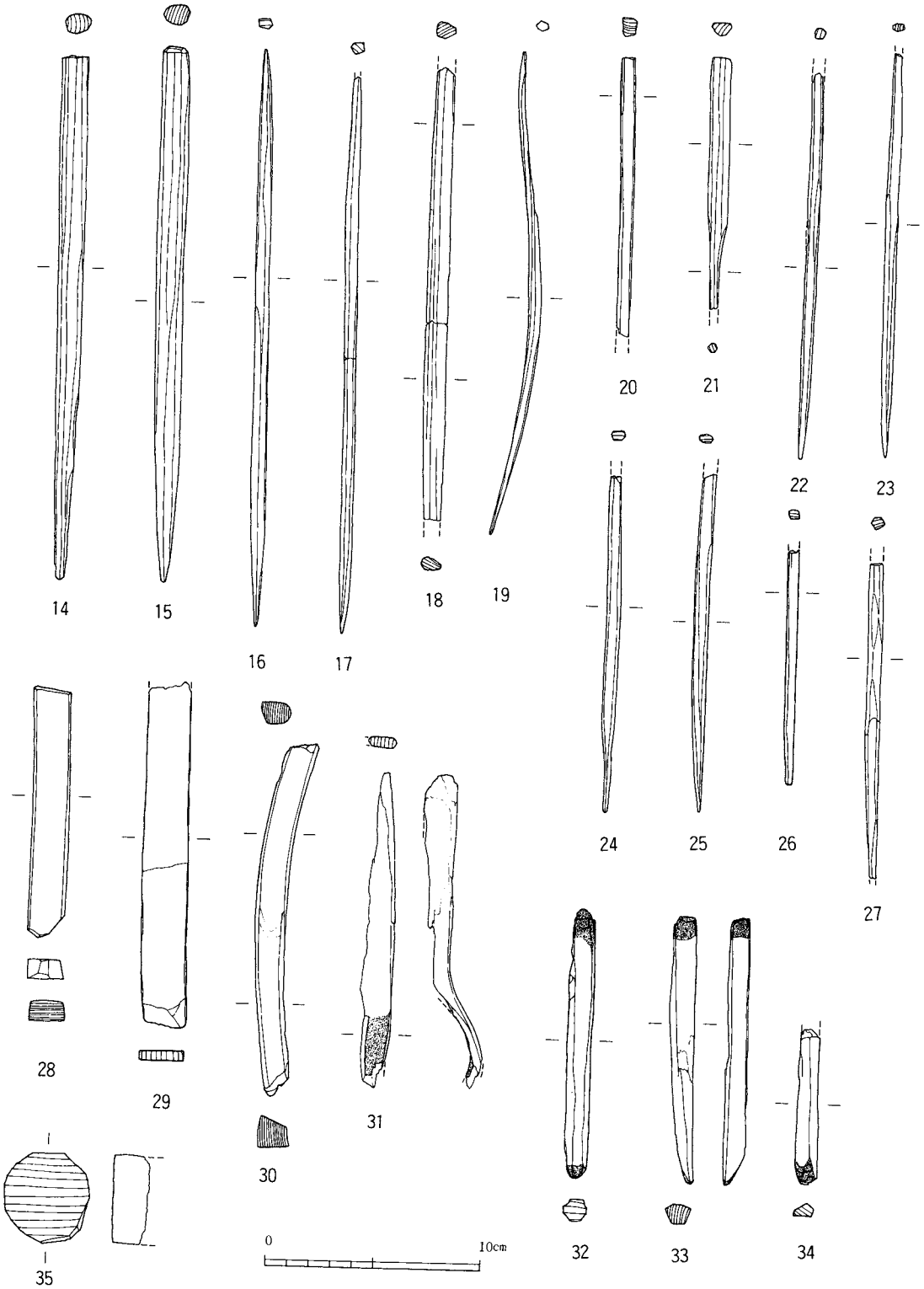
さらにこの「小川津」付近には、『延喜式』に記された駅名から復原される古代の官道＝北陸道が海岸沿いに走っていたと考えられており、古代末期の源平の争乱に際しても、『源平盛衰記』に軍勢の通過地点としてもその名を見ることができる。また、長寛元（1163）年頃に成立したとされる、白山加賀馬場についての最古の縁起である『白山之記』では、小河に置かれた白山宮の「惣門」の前で北陸道を旅する人が下馬して遠く霊峰白山を遥拝した習わしについて触れるとともに、この地に「小河小白山社」が境外末社として鎮座していたことを伝えている。

加賀平野で最大の河川である手取川の扇状地扇頂部付近にあって、加賀一宮として、或いは加賀における白山信仰の中心として宗教的な権威を誇った白山本宮及びその周辺の社は、北加賀をはじめとした国内各地に一円的もしくは散在的な神領（神免田）を有するとともに、商工業者を神人として従属させることを通じて、国内の生産・流通の分野にもその影響力を行使し得る存在であった。そして、その門前に形成された市場はその台所であったと予想できる。

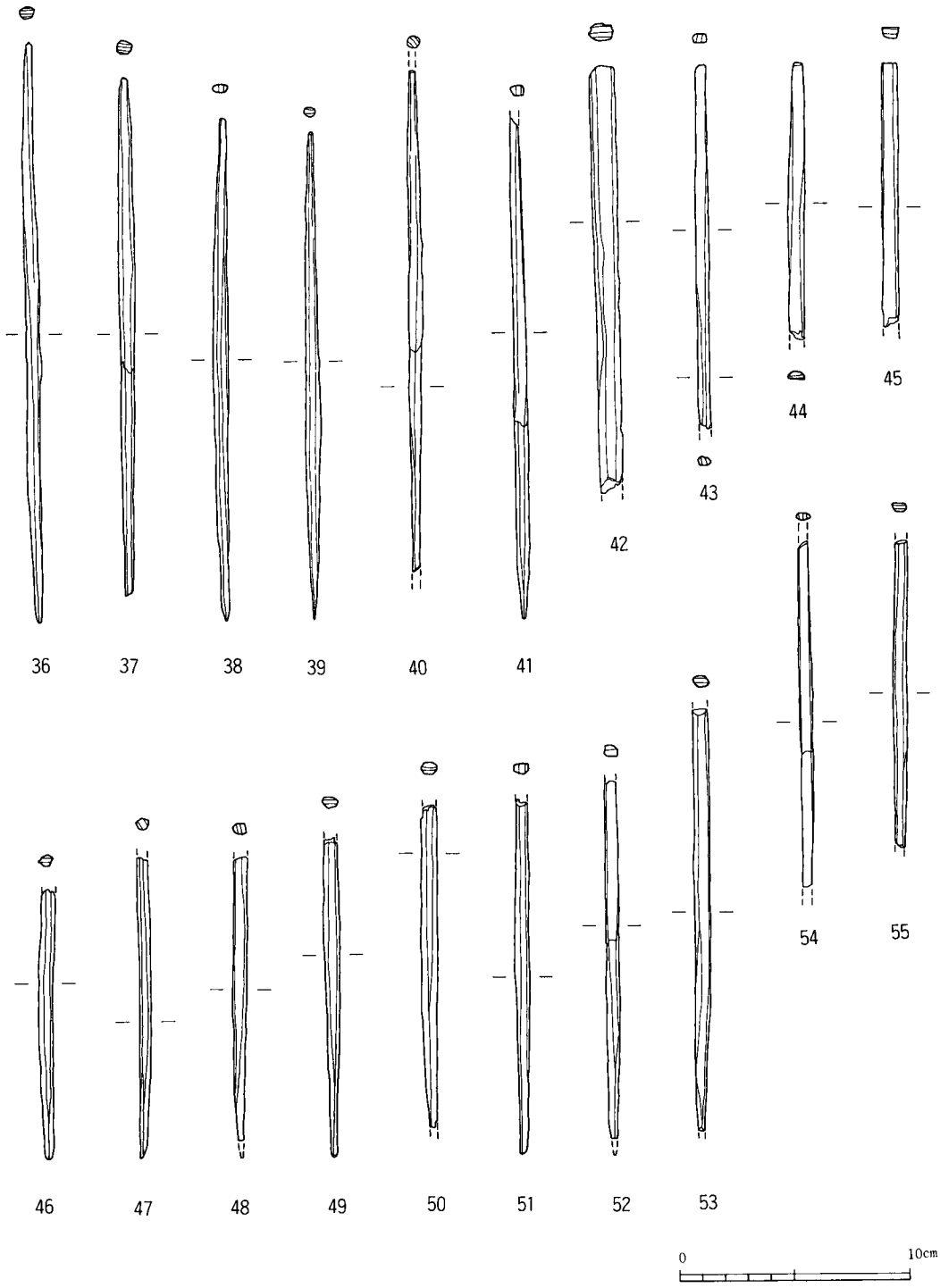
このような白山本宮周辺の経済的側面・基盤を考慮した場合、同一水系の河口を占め、日本海及び北陸道に結節する「小川津」はまさに要津にほかならず、12～13世紀頃にみられる末社や附属施設の存在、津の後背地域における神免田（「宮保」）の所在に立脚した神主一族の開発領主と



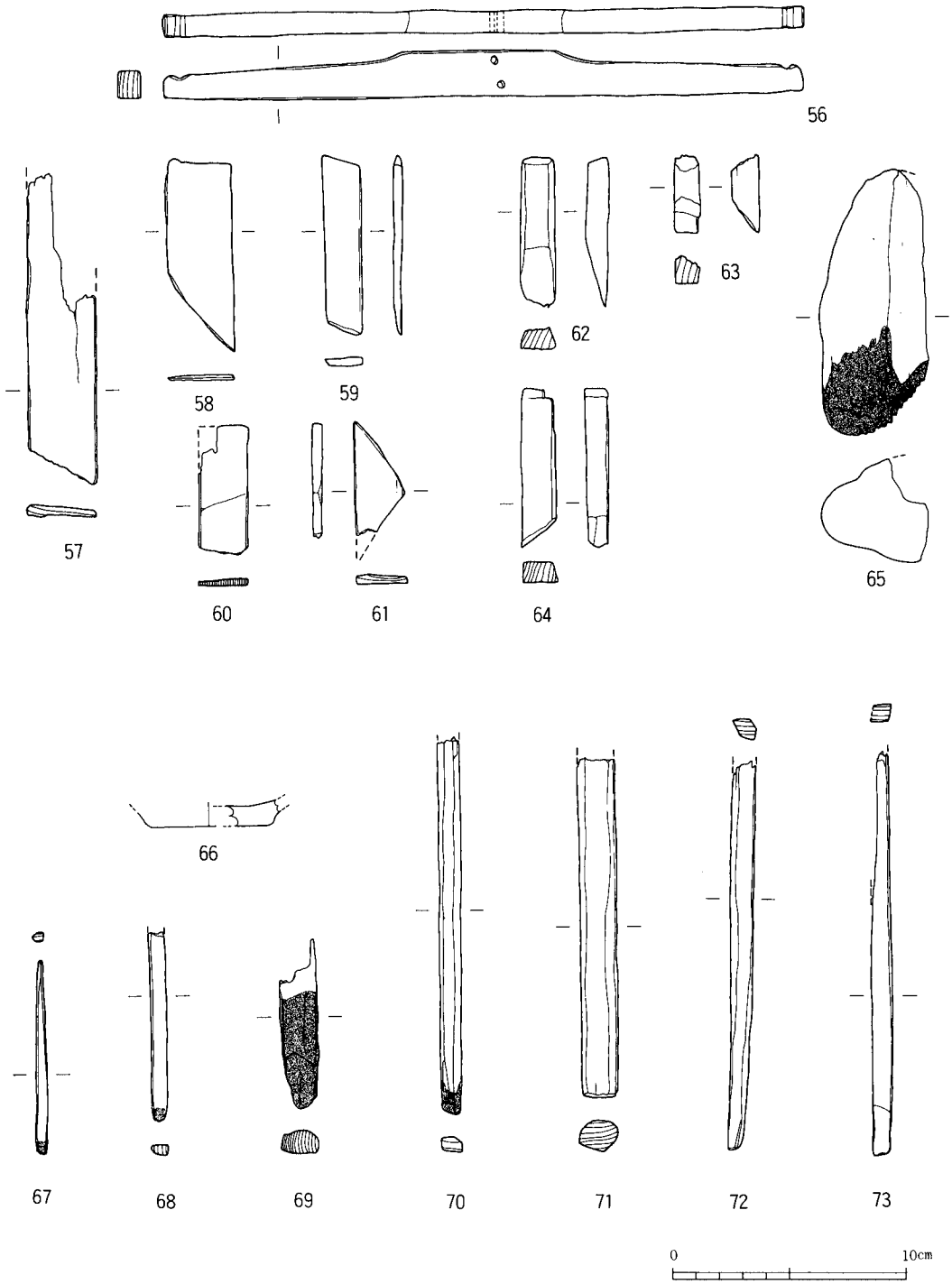
第69図　ブシャデン地区第３・４・５溝出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）



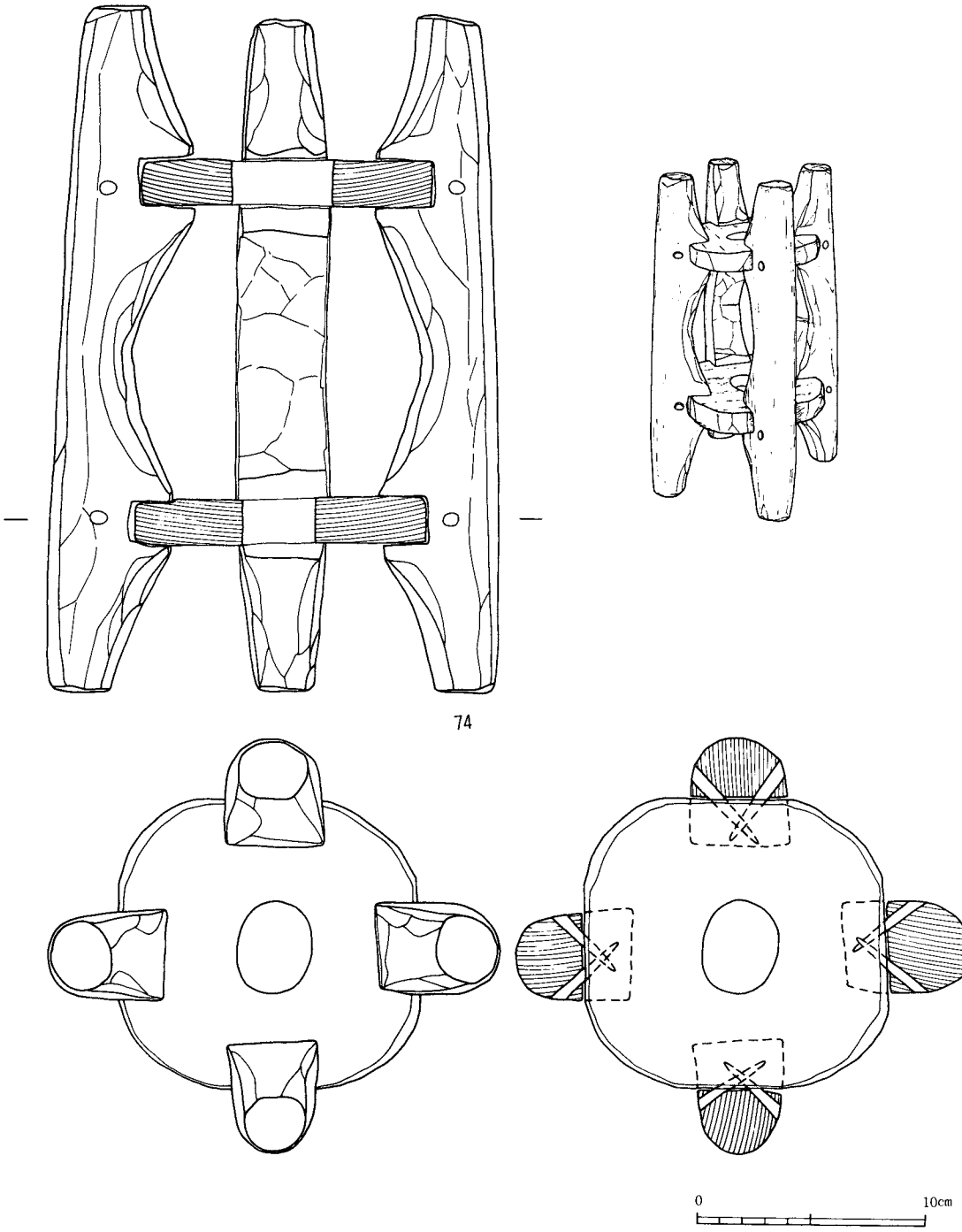
第70図　ブシャデン地区第５号溝出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）



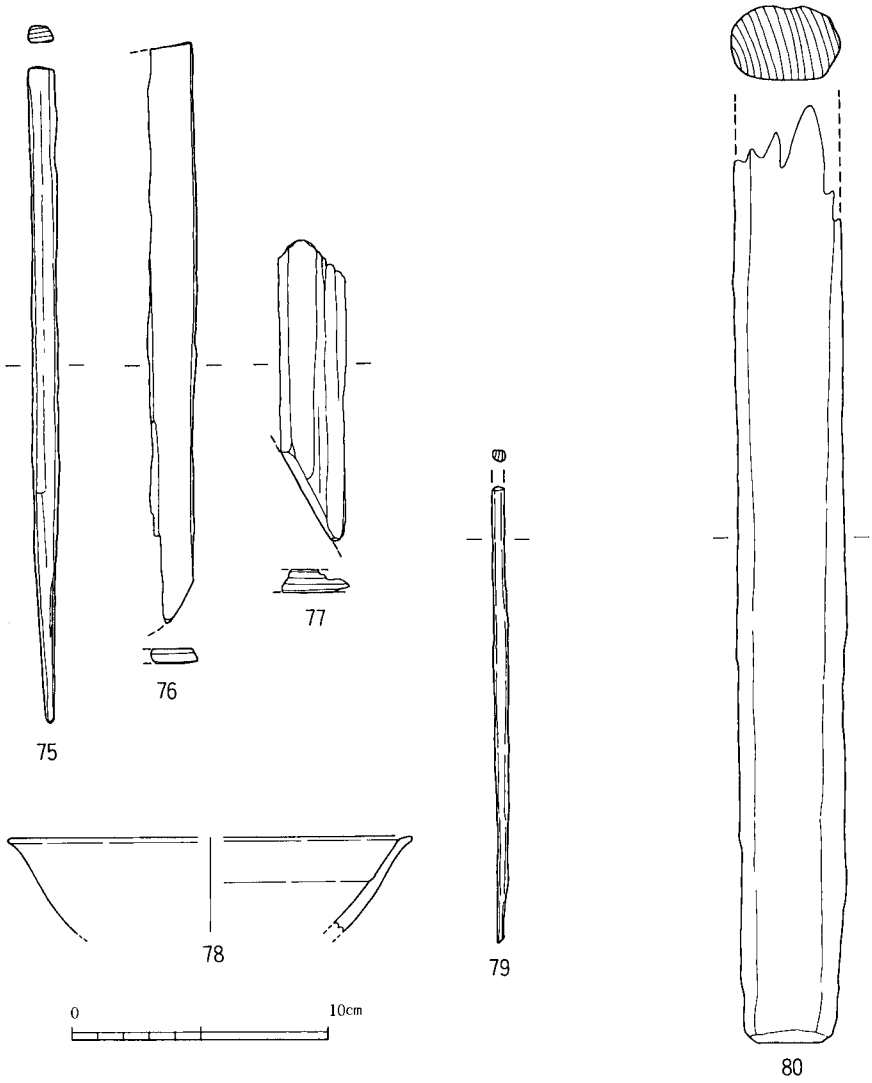
第71図　ブシャデン地区第５号溝出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）



第72図　ブシャデン地区第５・６号溝出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）



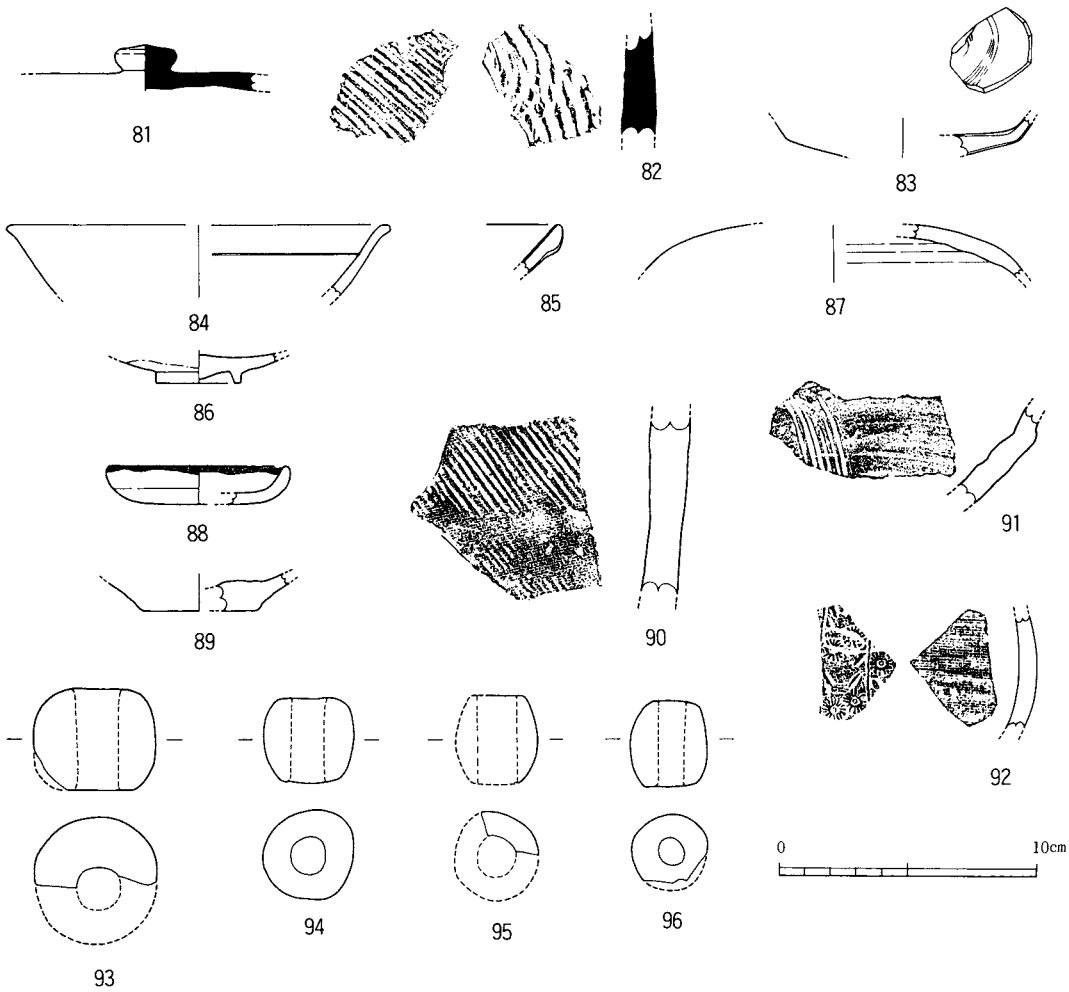
第73図　ブシャデン地区第６号溝出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）



第74図　ブシャデン地区第１号土坑・第１号落ち込み・第２号溝出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

しての進出という事象に関してもこの点から理解されよう。

本稿を記すにあたっては、本書の他の執筆者はもとより角山幸洋、吉岡康暢、垣内光次郎、滝川重徳、中村繁和の各氏より多くのご教示・ご助力を頂いている。ここに感謝申し上げる次第である。



第75図　ブシャデン地区周辺採集資料実測図（S＝1／3）

参考・引用文献

浅香年木　「古代における手取扇状地の開発」『古代地域史の研究』　法政大学出版局　1978

横田賢次郎・森田勉　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館紀要』4　1978

奈良国立文化財研究所編　『木器集成図録　近畿古代篇』　奈良国立文化財研究所　1985

吉岡康暢他　『珠洲の名陶』　珠洲市立珠洲焼資料館　1989

第5章　考　　察

第1節　平成元年度出土遺物の検討

1．中世陶磁器類についての若干の検討

平成元年度調査の結果、第3トレンチ13、14区より15、16世紀を中心に12～16世紀の陶磁器類が出土した。ここでは数量的な面から陶磁器類を整理し、あわせて若干の検討を加えたい。ただし、調査面積が限られること、出土遺物量があまり多くなく資料自身が偏りをもつ可能性があること、また出土遺物の示す時間幅がかなり広いこと等出土資料自身が限界性を有する。そのため今回得られたデータはあくまで参考資料であることに留意されたい。ただ、このような制約もあるが、現在北加賀地方で陶磁器類の流通・消費の動向を検討できる中世遺跡の調査例が少なく、遺跡の性格も考慮すれば、一定の役割を果たし得るものと考えている。なお、陶磁器類については垣内光次郎、藤田邦雄の両氏より多大なご教示を、また第4表の作成に関しては丸山敦子女史（金沢大学大学院生）のご協力を得ている。深く感謝する次第である。

今回の調査で得られた陶磁器類は破片数で、834点を数え、破片数でみた各陶磁器類ごとの割合は第4表のようになる。越前焼、珠洲焼、加賀焼等の甕・壺・鉢の三器種で構成される日常用具（調理、調整、貯蔵用具）が半数近くを占め、次いで土師質土器（約34.3%）、輸入陶磁器（約11.9%）、瀬戸系陶器（約3.6%）となる。

輸入陶磁器

輸入陶磁器は破片数で99点を数え、陶磁器類全体の中で11.9%の割合を占める。そのうち、大部分は青磁、白磁などの中国製品で、朝鮮王朝陶磁器も一定量（陶磁器類全体の中での割合1.3%、輸入陶磁器の中での割合約11%）が搬入・消費され、目立った存在となっている。また中国南部産と考えられる褐釉壺類胴部（286）が1点出土した。また器種別では飲食具（碗・皿等）が大部分を占め、青磁は碗、白磁は皿・碗、染付は碗、朝鮮王朝陶磁器は雑釉碗が主体をなす。

中国製陶磁器では青磁と白磁が同量程度出土した。

青磁は碗が大半を占め、次いで皿が多い。全て龍泉窯系で、上田秀夫氏の分類[1]B－Ⅳに類別できる。これらは15世紀後半～16世紀代に大量に搬入・消費されたと考えられる。

白磁は碗・皿が主体をなし、他の器種では四耳壺が1点出土した。碗はいずれも少量ずつではあるが森田勉氏分類[2]Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅶ、Ⅸ類等が確認でき、現在の年代観でいえば10～11世紀以降、14世紀前半までを含んでいる。一般に加賀地域に中国製陶磁器が本格的に確認できるのは12世紀以降とされ[3]、本遺跡にも同時期以降に搬入・消費されたと考えるのが妥当であろう。また、少なくとも15世紀代を下る白磁碗は確認できない。それに対して白磁皿・坏類は森田勉氏分類[4]D類に類別でき、15世紀後半以降16世紀代にかなり多量に搬入・消費されたと考えられる。

染付は碗・皿類が確認され、碗が主体をなす。垣内氏のご教示によれば16世紀前半代を中心にした時期に位置づけられる。

第4表　出土陶磁器類破片数一覧表

	器種		破片数
中国(88)	青磁(39)	碗	26
		鉢	2
		盤	1
		皿	2
		稜花皿	5
		不明	3
	白磁(39)	碗	11
		皿	18
		坏	1
		四耳壺	1
		不明	8
	青白磁(1)	小壺	1
	染付(8)	碗	6
		皿	2
	褐釉(1)	壺類	1

	器種		破片数
朝鮮(11)	青磁(1)	瓶	1
	雑釉(9)	碗	9
	鉄釉(1)	徳利	1
国産(735)	瀬戸系陶器(30)	平碗	1
		天目茶碗	13
		盤	1
		皿	8
		花瓶	1
		香炉	2
		小壺	1
		その他	3
	越前焼(257)	壺	37
		甕	154
		鉢	55
		不明	11

	器種		破片数
国産	珠洲焼(131)	壺	26
		甕	35
		鉢	63
		不明	7
	加賀焼(23)	壺	4
		甕	16
		鉢	1
		不明	2
	信楽焼(3)	壺	3
	瓷器系不明(2)	甕	2
	瓦質土器(3)	火炉	1
		花瓶	1
		不明	1
	土師質土器(286)	皿	286
	総計		834

第5表　出土陶磁器類の割合

	総数	割合(%)
輸入陶磁器	99	11.9
瀬戸系陶器	30	3.6
越前、珠洲加賀等	416	49.8
瓦質土器	3	0.4
土師質土器	286	34.3
合計	834	100

第6表　日常用器（壺・甕・鉢）の産地と割合

	壺(%)	甕(%)	鉢(%)	その他	総数(%)
越前焼	37 (52.9)	154 (74.4)	55 (46.2)	11	257 (61.8)
珠洲焼	26 (37.1)	35 (16.9)	63 (52.9)	7	131 (31.5)
加賀焼	4 (5.7)	16 (7.7)	1 (0.9)	2	23 (5.5)
信楽焼	3 (4.3)	0 (0)	0 (0)	0	3 (0.7)
瓷器系不明	0 (0)	2 (1)	0 (0)	0	2 (0.5)
合計	70 (100)	207 (100)	119 (100)	20	416 (100)

朝鮮王朝陶磁器は雑釉碗が主体をなし、他の器種では高麗青磁の梅瓶、鉄釉の徳利が各1点出土した。雑釉碗の国内への搬入は16世紀前半代が戦国城館や寺院等に限定されるのに対して、16世紀後半代には一乗谷朝倉氏遺跡から多量に出土するように日本海沿岸地域を中心として全国的に搬入が増加するとされる[5]。また県内でも穴水町西川島遺跡群桜町遺跡、門前町道下元町遺跡、金沢市桂町遺跡、鶴来町白山町墳墓群等の16世紀代にも存続した遺跡で出土例がある。このような状況から16世紀後半代に本遺跡に搬入・消費されたと考えたい。なお16世紀末には全国的に出土例は激減すると考えられている。また高麗青磁の梅瓶は県内で初めての出土である。

以上、本遺跡の輸入陶磁器を整理すれば、12世紀以降14世紀代前半まで白磁碗のみで構成、15

世紀代に青磁碗と白磁皿・坏類の組み合わせに転換、16世紀に入り染付碗・皿が、そして16世紀後半に朝鮮王朝雑釉碗が加わるものと考えられる[6]。

瀬戸系陶器

瀬戸系陶器は30点確認され、出土した陶磁器類全体の中で、3.6%の割合を占める。器種別では天目茶碗が主体を占める。次いで皿類が多く、宗教用具である花瓶、香炉も少量確認されているが全体に器種に乏しく、おろし皿は1点も確認できない。また輸入陶磁器に対する比率は、中核的港湾機能をもつとされる金沢市普正寺遺跡[7]と比べ、本遺跡はかなり低い印象を受ける。その理由は主に前述した調査面積、資料数等に起因すると考えられるが、果たして一般化できる要素を含んでいるかどうか、今後の調査例を持って再考したい。

越前焼、珠洲焼、加賀焼等

越前焼、珠洲焼、加賀焼等の甕・壺・鉢の三器種で構成される日常用具は416点を数え、陶磁器類全体のほぼ半分の割合を占める。また産地別にみれば第6表のとおり、越前焼61.8%、珠洲焼31.5%、加賀焼5.5%、信楽焼0.7%、産地不明の瓷器系陶器0.5%となる。越前焼が完全に優位性を保ち、次いで珠洲焼が多く、一番産地の近い加賀焼はあまり目立たない。今回の調査で検出した遺構が16世紀を中心にした時期であるため、加賀焼の割合が少なくなったと考えられる。また、器種ごとにみると、壺、甕とも越前焼が半数以上の割合をもち、甕では圧倒的に他の産地を凌駕している。それに対して鉢では珠洲焼の割合がかなり高くなり、越前焼より若干量多い。このことから、鉢のみは珠洲焼・越前焼の両者が搬入・消費されたと想定できる。加賀焼はどの器種のついても確実に補完的な位置にある。信楽焼は壺のみが出土し、普正寺遺跡でも指摘される[8]ように、茶の運搬、保存容器に使われたものと考えられる。産地不明の瓷器系陶器については古代末を中心とした時期に位置付けられる。本遺跡出土遺物のうち57と同一の胎土、形態をもつ個体が富来町赤住ナカノC遺跡で出土し、能登地方のみならず手取川扇状地でもこのような性格を有する遺物が確認できたことは少なからぬ意義をもつと思われる。

なお、各遺物の時期については個々に述べてあるが今一度整理してみたい。越前焼は田中照久氏による編年[9]で、241の鉢がⅡ期に属する他は、Ⅳ期後半からⅤ期に位置づけられるものばかりである。また珠洲焼は吉岡康暢氏による編年[10]で、Ⅰ～Ⅲ期が少量ずつ存在し、Ⅳ、Ⅴ期は確認できず、鉢を主体として急激にⅥ期（15世紀後半）に増加する。

土師質土器

土師質土器は皿に限られ、陶磁器類全体の中で約34.3%の比率を占める。ほぼ耕土直下に包含層が存在するためか、実測に耐えらうる個体はほとんどなく、大部分が細片となっている。181や図版36の表採遺物が12世紀代に位置付けられ、中世では藤田氏分類[11]Ⅵ、Ⅴ、Ⅳ期の遺物が確認できる。そのうちⅤ、Ⅵ期の遺物は比較的しっかりしており、灯明皿に使われた痕跡が残る個体が多い印象を受ける。また、他の遺跡での出土例と比べ土師質土器の陶磁器類全体の中で占める割合がかなり低い。その原因は先述の遺物の残り具合に起因するのか、それとも組成自体に起因するのか現段階では判断できない。今後の類例をまちたい。

その他の遺物

瓦質土器、漆製品等が少量確認されている。また平成2年度調査で多量に出土した木製品は、ほとんど確認できなかった。

小結

最後に本遺跡の陶磁器類の特徴としては、①輸入陶磁器に比して瀬戸系陶器の割合が少ないこと、②輸入陶磁器は青磁・白磁に加え、染付・朝鮮王朝陶磁器が定量存在すること、③瀬戸系陶器は天目茶碗が目立つ他は器種に乏しく、また数量も少ないこと、④日常用具は加賀焼がほとんど存在せず、越前と珠洲の2産地が主体をなし、その中で不明瞭ながらも分業的な構成がみられること、④土師質土器の割合が他の遺跡と比べかなり少ないこと等があげられる。

また、垣内氏は陶磁器類の消費状況から加賀地域の中世集落を都市的集落（中核的港湾集落）、基幹集落（門前町、各市）、一般集落（農村、漁村）に分類できる可能性を指摘している[02]。限られた資料の中で本遺跡の陶磁器類を位置付けるならば、都市的集落である普正寺遺跡に近い要素をもつものの、白山宮の門前町と考えられる鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡との対比が可能である。本遺跡出土陶磁器は基幹集落の有する陶磁器類の範疇に入るものと考えられる。

2．石製品の産地に関する一考察

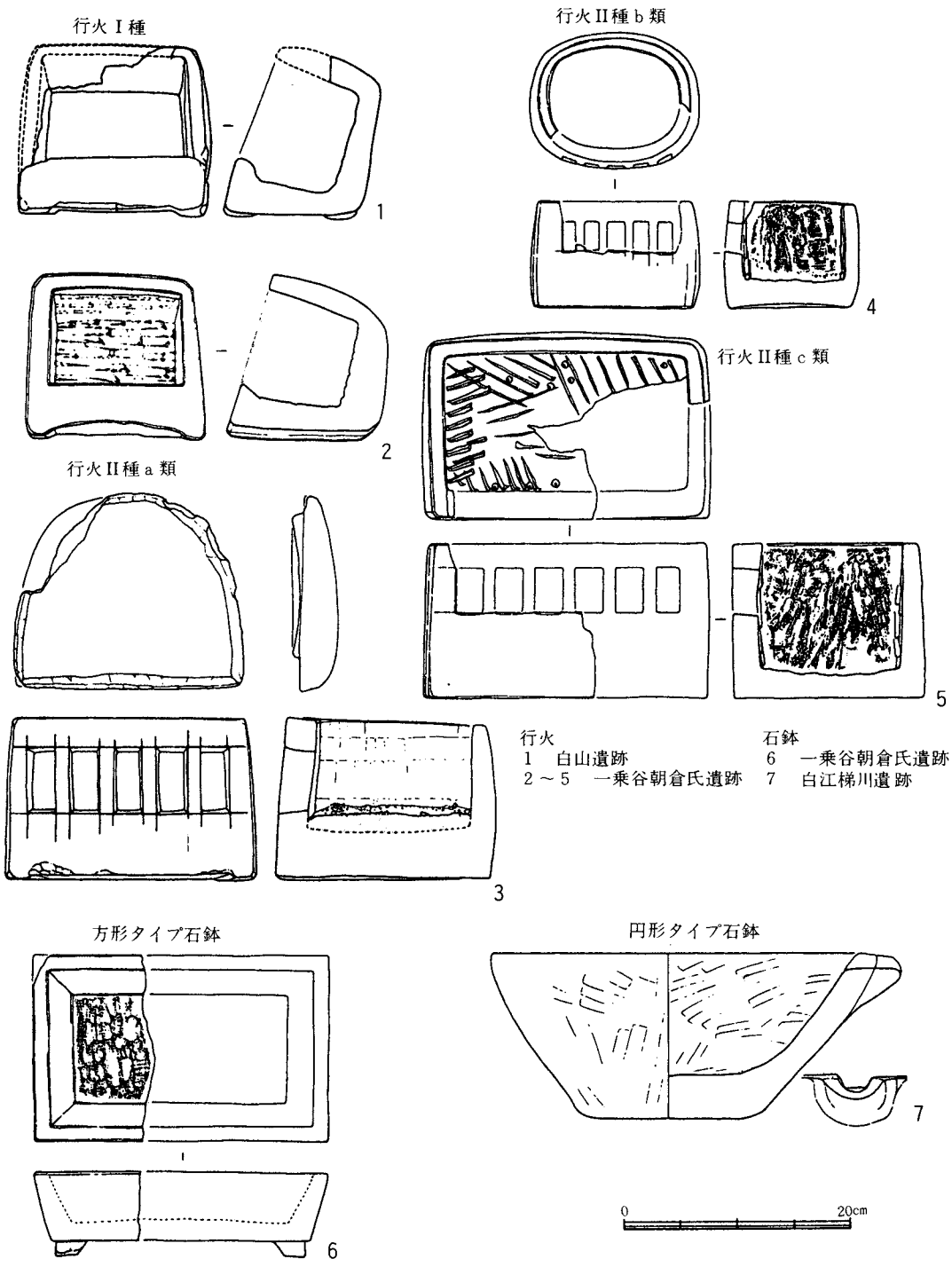
(1)はじめに

近年、北加賀地方を中心に14～16世紀代の集落遺跡の発掘調査が増加している。その出土遺物には、陶磁器類とともに行火・石鉢・粉挽き臼・茶臼等の生活用具に使われた石製品が必ずといってよいほど存在する。このような状況から14～16世紀代の加賀地方では、かなり広範な地域、階層で石製品が流通・消費していたことが明らかである。また商品経済の発達に伴い、陶磁器や木製品にない「不燃性・耐火性・不朽性」という特質を生かした石製品を生産した何らかの職業的な石工集団やその生産・流通を支える政治的、経済的背景が存在したことも想像に難くない。

県内の石製品に関する研究は、主に五輪塔や板碑等の宗教的側面が強い石造物を中心に進み、多くの優れた研究が存在する。それに対して、より身近な生活用具に使われた石製品についての研究は数えるほどしか存在せず、その意味で近年始まったばかりの研究分野といえる。

生活用具に使われた石製品の研究として、まず金沢市教育委員会による市内南東部の丘陵一帯に分布する石切り場の総合的調査[03]がある。この調査は近世以降操業した石切り場に対する聞き取り調査が中心で、石切り場の分布および生産技術等が明らかとなっている。また国見山山系一帯に採掘可能な凝灰岩の存在が確認されている。

次に福井県の研究だが、久保智康氏が一乗谷朝倉氏遺跡の長年にわたる発掘調査の成果から、福井市足羽山山麓で採掘されて笏谷石（安山岩質凝灰岩）の利用の歴史について考察をおこなっている[04]。それによれば、鎌倉から南北朝時代に福井県のいくつかの石材産地（凝灰岩のみならず花崗岩・安山岩を含む）で、「それぞれの石工集団により多元的に生産が始まった」と考えられること、戦国時代16世紀前半には商品経済の発達に伴い、笏谷石の石工集団が朝倉氏の勢力を背景に組織が拡充され、石屋大工が総括する「座」的な専門職人集団を形成した可能性が高いこと、



第76図　行火・石鉢分類図　（垣内氏註(3)文献中より転載、一部修正）

藩政期に入ると北前船に代表される日本海海運の発達により、石川県内はもちろん、遠くは北海道松前に至る各地の湊を中心とした遠心的な流通が確認されること等を明らかにしている。

県内では垣内光次郎氏が中世北陸の暖房文化を論じる中で[05]、加賀、越前地方に偏在する凝灰岩製の行火を中心に生活用具に使われた石製品全般について考察をおこなっている。まず両地方の遺跡出土の行火を形態から第76図のように分類した。そしてⅠ種は14世紀末頃に金沢市普正寺遺跡で出土するのを初現とし、15世紀中頃～16世紀前半の期間にⅡａ、Ⅱｂ類と形態が改良され、16世紀後半以降はⅡｂ類が使用されてきたと行火の変遷を述べている。また笏谷石を使用する越前地方の行火（バンドコ）と加賀地方の行火では「細部の造りが異なり」、「石材の違いと併せ、両地方に別々の石工人が生産活動を展開」し、それぞれの地方で石製品を流通させた可能性が高いこと、そして、それぞれの地方の生産活動の範囲は石鉢・囲炉裏の縁石でも確認されることを指摘している。

また、形態より加賀地方特有の特徴を有する行火の出土例は、富山県西部で少数確認されるものの加賀地方を中心とし、その商業取引活動は「旧国内規模」といえような比較的狭い範囲であること、行火は小松市東方の観音山西麓で産出する凝灰岩、石臼は加賀市刈安山山麓の凝灰岩、石鉢は小松市南部の舟見山（鞍掛山）山麓の凝灰岩というように、それぞれの山麓から産出する凝灰岩の石質の特徴を生かした製品を造っており、産地間で、分業化または特産化ともいえる様相を呈することを指摘している。そして行火等の暖房用具が使用された背景には、14～15世紀の気候の冷涼化および商工業の発達を考えている。垣内氏のこれらの研究は、北陸の石製品の分類・機能・変遷のみならず、その産地、生産活動構造の一端や出現の背景にも及んでおり、優れた論考といえよう。

次に三浦純夫氏[06]は、県内の遺跡出土の行火の分布が加賀地方に偏在すること、垣内氏分類Ⅰ種は、形態から転倒による事故が起こりやすく、Ⅱ種に改良されたと想定できることを指摘している。また行火出現の背景として、素材として加工しやすく、火に強いという凝灰岩を産出可能な地点が多く存在した地域的特性に加え、冷涼化が進んだという気候条件があるとし、これにより越前・加賀地方に特有の「凝灰岩文化」を成立させたと述べている。

このような研究を受けて、ここでは現存する加賀地方の凝灰岩の石切り場[07]の分布および石質の特徴を分類し、小川新遺跡出土の石製品の産地推定、流通等について検討をおこないたい。

(2)加賀地域の凝灰岩石切り場の分布と特徴

現在までに県内で採掘された石材として、凝灰岩・片麻岩・花崗岩・砂岩・泥岩・石英粗面岩・安山岩等が知られている。そのうち凝灰岩は火山灰、火山砂、火山礫等が堆積・固化したもの[08]である。そして砂岩と同様に軟質で加工が容易であるという特性をもち、先述のように多くの産出地点をもつ加賀地方では中世以前から碧玉製石製品や古墳の石室の材料として他の石材より頻繁に加工、利用されている。

中世加賀地方で生活用具に使われた凝灰岩製石製品の生産・加工・流通は、後述するように産地である凝灰岩の石切り場（以下、単に石切り場と略する）が加賀地方に集中すること、垣内、

三浦両氏が指摘するように、加賀地方特有の形態をもつ行火の出土例がほぼ加賀地方に限定され、越前・能登地方では確認できないこと、また久保氏が指摘するように笏谷石は藩政期以降にならないと日本海沿岸に広く流通しないことを考慮すれば、頻繁に国を越える広い地域で成立していたとは考えにくい[19]。つまり、中世加賀地方で生活用具に使われた凝灰岩製石製品の生産・加工・流通は、ほぼ加賀地方に収束する「旧国内規模」程度の「閉鎖的な」活動であり、その産地として加賀地方の石切り場を考えて大過ないと判断できる。このことを前提として、以下の文を述べていきたい。

加賀地方の石切り場は、現在わずかに小松市滝ヶ原地内、加賀市水田丸地内で採掘されるだけで、戦後大部分の石切り場は操業を中止している。そのため石切り場の分布、採掘時期等に関しては、文献および現地踏査により調査、推定するしか方法がない。文献でいえば、昭和28年発行の『石川縣地質鑛産誌』[20]、『小松市史』[21]等に戦後記憶されていた石切り場の記載がある。そのうち、凝灰岩に関して小松市立歴史民俗資料館展示資料を加え、まとめたものが第７表の石切り場一覧であり、地図上にプロットしたものが第77図である。河川に面した刈安山、舟見山（鞍掛山）、観音山、国見山山麓の丘陵部のかなり広い範囲に分布していることがわかる。また凝灰岩系以外の石切り場としては、有名な戸室石（角閃安山岩）や深田石（砂岩）、犀川上流の輝石安山岩の石切り場が若干数存在する。もちろん、記録に残った石切り場は戦後記憶されていたものであり、全てが中世まで遡るものでない。また逆に近代までに操業を停止し、記録されなかった石切り場も少なくないと考えられる。それに加え、他県の調査でも明らかなように、現地調査で知り得る石切り場の操業年代の推定は、文献や陶磁器等の出土遺物が全くない場合は非常に困難であるという遺跡特有の限界をもつ。しかし、このような限界性を有するのの、加賀地方は凝灰岩が比較的容易に採掘可能で、かつ搬出・運搬等の経済的諸条件を満たす範囲が多く、それが分布に現れていると考えられる。

なお、能登地方以北の凝灰岩の産地としては、羽咋郡押水町沢川地内（沢川市、緑色角礫凝灰岩、主に富山県地方に流通）、羽咋郡志賀町出雲地内（戦時中に土台石として採掘）、同郡富来町東部（東谷内石、石英粗面岩質凝灰岩）、鳳至郡一帯（州衛石、小木石等）等が存在し、能登地方でもかなり北側に分布する傾向が強い[22]。ただし、能登地方では砂岩や輝石安山岩の石切り場がより多く存在し、石製品の流通に関して加賀地方と対照的な様相を呈するようだ。

さて、諸文献等に記載された分布および石質から加賀地方で知り得た石切り場は、以下のように整理できる。第７表のNo.1～4は刈安山山麓に属し、加賀市大聖寺川の支流に面した丘陵に分布し、石質は凝灰岩である。用途は主に土台石であり、石質はあまり良くないようだ。No.5の福田石は大聖寺市街地に程近い大聖寺川流域で採掘され、石質は凝灰岩である。

No.6～15は動橋川流域の舟見川（鞍掛山）山麓に属し、現在でも良質の凝灰岩を産出する石切り場を含む。また文献に記載される用途も土台石の他に灯籠や墓石があり、古くから耐久性に優れた良質の石材が産出した地域と考えられる。そのうちNo.6～8は加賀市と小松市の市境付近、動橋川と滝ヶ原川の合流点一帯の低丘陵に分布し、石質は凝灰岩である。No.9～12は、12を除き先のグループより東側の丘陵一体に分布し、石質は緑色凝灰岩である。なおNo.10、11の石切り場

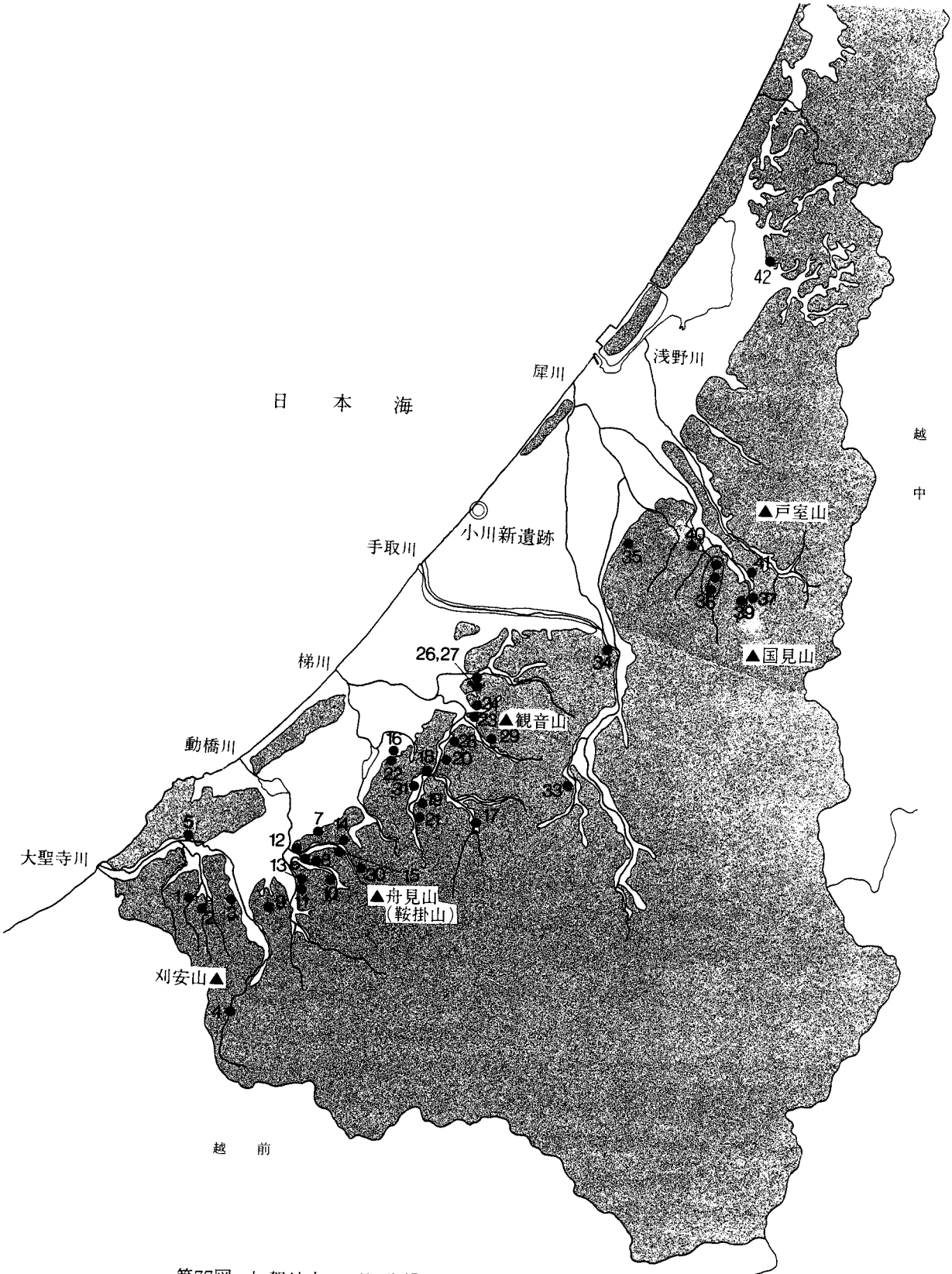
第７表　加賀地方石切り場一覧表　（註文献(13)、(20)、(21)および小松市立歴史民俗資料館展示資料より作成。）

No.	石切り場名	所在地	岩名	用途
1	カズラン石	加賀市骨宇町	凝灰岩	土台石
2	ソソリ石	加賀市直下町	凝灰岩（貧弱）	土台石
3	塚谷石	加賀市河南町塚谷	凝灰岩	土台石
4	我谷石	加賀市我谷町	凝灰岩	
5	福田石	加賀市福田町福田	凝灰質砂岩	土台石
6	勅使石	加賀市勅使町	凝灰岩	
7	分校石	加賀市分校町	凝灰岩	土台石
8	宇谷石	加賀市宇谷町	凝灰岩（硬質）	
9	桂谷石	加賀市桂谷町	緑色凝灰岩（硬質）	土台石
10	滝ヶ原石	小松市滝ヶ原町	緑色凝灰岩	灯籠、墓石
11	水田丸石	加賀市水田丸町	緑色凝灰岩	墓石、土台石
12	松山石	加賀市松山町	緑色凝灰岩	土台石
13	横北石	加賀市横北町	粗鬆凝灰岩	墓石、土台石
14	クレ谷石	小松市那谷町クレ谷	細粒浮石質凝灰岩	土台石
15	那谷石	小松市那谷町那谷	粗粒浮石質凝灰岩	土台石
16	蓮代寺石	小松市蓮代寺町	細粒浮石質凝灰岩	土台石
17	観音下石	小松市観音下町	浮石質凝灰岩	土台石
18	江指石	小松市江指町	緑色凝灰岩	土台石
19	波佐谷石	小松市波佐谷町	緑色凝灰岩	土台石
20	大野石	小松市大野町	緑色凝灰岩	土台石
21	瀬領石	小松市瀬領町	凝灰岩	土台石

No.	石切り場名	所在地	岩名	用途
22	三谷石	小松市三谷町	角礫質凝灰岩	土台石
23	遊泉寺石	小松市遊泉寺町	角礫質凝灰岩	土台石
24	ツタ山石	小松市鵜川町	角礫質凝灰岩	土台石
25	立明寺石	小松市立明寺町	角礫質凝灰岩	土台石
26	里川石	小松市里川町	角礫質凝灰岩	土台石
27	下八里石	小松市下八里町	不明	土台石
28	五国寺石	小松市五国寺町	不明	
29	原石	小松市原町	不明	
30	菩提石	小松市菩提町	不明	
31	長谷石	小松市長谷町	不明	
32	赤穂谷石	小松市赤穂谷町	不明	
33	二曲石	鳥越村出金	灰黄色凝灰色	
34	（不明）	辰口町岩本他	不明	
35	額谷石	金沢市額谷町	白色斑状凝灰岩	土台石、墓石等
36	平沢石	金沢市大平沢町他	安山岩質凝灰岩	
37	鈴原石	金沢市寺津町	安山岩質凝灰岩	
38	カワヤ石	金沢市甕杉町	安山岩質凝灰岩	
39	ムラ石	金沢市熊走町	安山岩質凝灰岩	
40	山川石	金沢市山川町	石英粗面岩質凝灰岩	竈、土台石
41	鷹巣石	金沢市瀬領町他	石英粗面岩質凝灰岩	土台石
42	菩提寺石	津幡町英田	輝石安山岩質凝灰岩	土台石

は現在でも採掘をおこなっている。No.13の横北石はNo.9～12のグループの分布範囲に存在し、石質は粗鬆凝灰岩である。No.14、15は加賀市那谷町地内に存在し、石質は浮石質凝灰岩である。なお、No.30は石質不明ながら、分布からこのグループに属する可能性をもつ。

No.16～29、31、32は小松市梯川の支流一帯に広く分布し、梯川流域が石切り場に適した諸条件を満たしていたことが伺われる。ただし、用途は主に土台石であり、石質は細かい加工に向かない性質をもつと考えられる。No.16の蓮代寺石は小松市蓮代寺地内の低丘陵で産出し、石質は細粒浮石質凝灰岩である。No.17の観音下石は小松市観音下町地内、郷谷川に面した丘陵で産出し、立地上、他の石切り場より奥まった印象を受ける。石質は浮石質凝灰岩である。No.18～20は小松市杉谷川に面した丘陵に分布し、石質は緑色凝灰岩である。No.21の瀬領石はNo.18～20のグループより東側の小松市瀬領町地内の丘陵で産出され、石質は凝灰岩である。No.22～26は梯川流域でも比較的西側の低丘陵地帯に分布し、石質は角礫質凝灰岩である。なお、No.27～29.31.32は石質不明ながら、分布よりこのグループに属すると推定できる。



第77図　加賀地方の石切り場分布図

（註文献(13)、(20)、(21)および小松市立歴史民俗資料館展示資料より作成。）

No.33の二曲石は鳥越村出合地内で産出し、石質は灰黄色凝灰岩である。No.34は辰口町岩本付近で産出し、石質不明[23]。

次にNo.35～41は金沢市南東部の国見山山麓からのびる丘陵一帯に分布する。なお、第7表、第77図は代表的な石切り場であり、詳細は註文献(13)を参照されたい。No.35は金沢市額谷町東部の額谷地内で藩政期以降に採掘され、石質は白色斑状凝灰岩である。用途は墓石を含むが、総じて脆い印象を受ける。No.36～39は犀川支流に面した丘陵に分布し、石質は安山岩質凝灰岩である。No.40､41は先のグループの分布域と重複し、石質は石英粗面岩質凝灰岩である。用途に竈を含み、興味深い。No.42はかなり離れた河北郡津幡町英田地内で産出する。石質は輝石安山岩質凝灰岩である。

以上のように、加賀地方の石切り場は河川に面したあまり奥まらない丘陵部に立地する特徴を有し、このことから搬出・流通には主に河川の利用を想定できる。また分布と石質より、山系および水系を単位とし、ある程度までグループ分けがおこなえることも判明した。このことは加賀地方にも笏谷石で指摘される生産を支える政治的、経済的な背景を想定するならば、今後生産の在り方は山系および水系を単位として整理できる可能性を提示しているように考えられる。今後、生産年代を含め慎重に整理する必要がある。

(3)各石切り場の石質の特徴と分類

中世加賀地域の石製品の生産・流通を知る手段としては、産地である石切り場の分布の他に、消費遺跡出土石製品の石質から、切り出された石切り場を推定する方法がある。そこで、先述した石切り場を対象として現地調査をおこない、現存する石切り場から採取したサンプルの石質より各石切り場ごとの石質の特徴を抽出・分類する作業をおこなった。この場合、一つの石切り場でも採掘する地点、深さが異なれば、少しづつ石質に差異が生じるため、抽出・分類した石質の特徴自身が普遍性をもつかという問題点が存在する。しかし、調査の結果からいえば、加賀地方に存在する石切り場の石質は、かなりバラエティーに富んでおり、ある程度までは肉眼観察で容易に各石切り場の石質を識別できることが判明した。そのため現段階では、大まかではあるが先述した問題点は十分許容できる範囲内にあると考えている。もちろん、今後より多くの石切り場のサンプルを採取し、石質の特徴を整理することはもちろんのこと、科学的な分析により客観性を高める必要があることは論を待たない[24]。

現地踏査等で第7表記載の石切り場42箇所のうち、ほぼ半数の石切り場の石質を知ることができた。第8表の石切り場名の横に◆の印のあるものは現地からサンプルを採取したものであり、◇の印のあるものは小松市立歴史民俗資料館の展示資料を参考にした。

次に石質の分類は、肉眼観察によりおこない、サンプルの硬軟や色調、含まれる粒子の色調・大きさ・形などを基準とした。その中でも特に実見した凝灰岩の大半には考古学でいう「緑色凝灰岩（グリーン・タフ)」の色調をもつ緑色の粒子および軽石質の白色粒子が含まれており、その含み具合を重視している。なお、第7表にある岩石学による分類では同じ角礫質凝灰岩とされる三谷石、里川石、遊泉寺石が、肉眼観察による分類では属するグループが異なるように、岩石学

第８表　加賀地方の凝灰岩分類試案

グループ		石切り場名	硬軟・色調	石質の特徴
A		ソソリ石、(カズラン石、塚谷石) ◆	やや硬質、濃緑色	素地は均等な大きさの濃緑色細粒子。ザラザラしている。
B		水田丸石 ◆◇	硬質、淡緑白色	良質で、しっとりとしている。キメの細かい素地に緑色粒子が層状に入る。紫色粒子若干量含む。
C	C-1′	滝ヶ原石 ◆◇	硬質、淡緑白色	良質。丸味をもち、色調の鮮明な緑色粒子、淡紫～紫色粒子を少量含む。
	C-1″	原石、里川石 ◇　◆◇	硬質、淡緑色	セメント質。C－1′より石質悪い。やや角張った緑色粒子、淡紫色粒子を比較的多く含む。軽石質白色粒子目立たない。
	C－2	下八里石、蓮代寺石、 瀬領石（小松市）、赤穂谷石 (全て◇)	硬質、淡緑～ 緑白色	セメント質。C－1′より石質悪い。色調が浅く、形の崩れた緑色粒子を含む。素地中の軽石質白色粒子は目立つ。
D		(桂谷石、松山石、江指石？)	やや硬質、緑色	良質の緑色凝灰岩
E	E－1	波佐谷石 ◆	硬質、淡灰白色 (黄色味帯びる)	軽石質白色粒子含まず。形の崩れた扁平な３～５㎜大の濃緑色粒子を多く含む。
	E－2	勅使石、那谷クレ谷石 ◆　◆	硬質、淡緑色	軽石質白色粒子含まず。E－1に準じた形の10㎜以上の濃緑色粒子を多く含む。
F		ツタ山石、遊泉寺石 ◆◇　◆◇	硬質、淡緑～ 淡緑黄色	サラついた質感で石質悪い。 形の崩れた緑色粒子、軽石質白色粒子を多く含む。
G	G－1	大野石 ◆	やや硬質、淡緑白色	緑色粒子含まず。軽石質白色粒子を多く含む。素地淡緑白色。
	G－2	三谷石 ◇	やや硬質、淡緑白色 (黄色帯びる)	緑色粒子含まず。軽石質白色粒子と５㎜前後の硬質黒色粒子を多く含む。やや軽い印象を受ける。
H	H－1	額谷石 ◆	やや脆い、淡灰白色	素地は粒子が粗く、ザラザラする。緑色粒子含まず、軽石質白色粒子（５～10㎜）、黒色細粒含む。
	H－2	瀬領石（金沢市） ◆	やや脆い、淡緑白色	H－1に準ずるが、軽石質白色粒子は不揃いで、５～30㎜の大きさをもつ。
I		観音下石 ◇	硬質、淡黄色	素地スポンジ状に空隙あり。黒色粒子を多く含む。
J		(辰口町岩本周辺) ◆	硬質、灰黄～ 淡緑色	素地の粒子は極めて粗い。３～５㎜前後の軽石質白色粒子の他に硬質の様々な粒子を多く含む。
K		福田石	不　明	(凝灰岩質砂岩)
L		横北石	不　明	(粗鬆凝灰岩)
M		二曲石	不　明	(灰黄色凝灰岩)
N		平沢石、鈴原石、カワヤ石、 ゴート石	不　明	(安山岩質凝灰岩)
O		菩提寺石	不　明	(輝石安山岩質凝灰岩)

と肉眼観察の分類は一致しないことが多かった。分類の基準が異なるためであろう。

分類の結果、第8表に示すようにA～Oのグループに分類できた。このグループ間の識別は比較的容易である。また、各グループ内である程度まで識別可能なものは小文字の数字（1・2）で、何らかの細かい違いがあるが相互識別がかなり困難なものを「'」「"」で表した。以下、各グループごとに石質の特徴を述べる（巻頭図版2、第8表参照）。

Aグループのソソリ石はB～Mのグループと明瞭に識別できる。ソソリ石のサンプルは加賀市直下町地内の刈安山から延びる丘陵谷部、通称二の谷の大正時代まで採掘された石切り場から採取した。サンプルはやや硬質で濃緑色の色調をもち、均質な大きさの濃緑色細粒のみで構成され、一見砂岩のような印象を受ける。

Bグループの水田丸石は、動橋川流域の舟見川（鞍掛山）から延びる山麓で産出し、サンプルは現在も操業をおこなっている石切り場より採取した。石質は硬質でキメが細かく、良質といえる。石質の特徴として、淡緑白色の素地[25]に緑色粒子が層状に入る。この特徴は他のグループには見られない。

Cグループは硬質で、10㎜以下の緑色粒子を明瞭な形で確認されるのに対して、軽石質の白色粒子は素地とほとんど区別できないものを集めた。そして、さらに細かい特徴からC－1'、C－1"、C－2に分類している。C－1とC－2はある程度識別できるが、C－1'とC－1"は明瞭に区別できない。C－1'・C－1"は緑色粒子の他に淡紫色粒子を含む。C－1'の滝ヶ原石は舟見山（鞍掛山）から延びる山麓に位置し、現在でも灯籠や石碑等のため採掘がおこなわれている。素地は良質でキメが細かく、比較的丸みをもった緑色～淡紫色粒子を少量含む。それに対してC－1"の梯川流域の里川石・原石はセメントのような質感をもち、石質は相対的に悪い印象を受ける。また、含まれる粒子は角張りC－1'より多く、色調は薄く、ぼんやりとしている。軽石質の白色粒子がやや目立つ。C－2はC－1"に準じたあまり良くない石質で、梯川流域の下八里石・赤穂谷石・蓮代寺石・小松市瀬領石が属する。C－1'、C－1"で確認される淡紫～紫色の粒子を含まず、緑色粒子は形が崩れ、輪郭がはっきりせず、より色調が薄い。また素地の中に輪郭のはっきりした軽石質白色粒子を相対的に多く含むため、白色粒子が浮き出しているような印象を受ける。

Dグループはサンプルを採取できなかったが、良質の緑色粒子のみで構成されるものを想定した。考古学でいう“緑色凝灰岩”である。第7表中の石質から、桂谷石・松山石・江指石がこのグループに属する可能性をもつが詳細は不明である。

Eグループは硬質で、肉眼では軽石質白色粒子が観察できず、淡緑白色の素地に扁平で形の崩れた濃緑色粒子を多く含むものを集めた。ややバサついた質感からCグループとは明瞭に区別できる。E－1の波佐谷石は角張って形の崩れた3～5㎜の大きさの濃緑色粒子が多く含むのに対して、E－2の勅使石、那谷石は同様な特徴をもつ10㎜以上の大きさの粒子を多く含む。

Fグループは硬質で石質はあまり良くない印象を受ける。淡緑色の素地の中に、明瞭に形の崩れた緑色粒子と軽石質白色粒子をかなり多く含むものを集めた。このグループには梯川流域で産出されたツタ山石・遊泉寺石が属する。ツタ山石の粒子が比較的細かいの対して、遊泉寺石の軽

石質白色粒子は10㎜以上の大きさをもつものが多い。またツタ山石の素地が淡緑色を呈するのに対して、遊泉寺石は黄色味を帯びる。

Gグループは、やや硬質で相対的に軽い印象を受ける。素地は粉っぽく、軽石質の白色粒子のみを多く含むのに対して、緑色粒子が確認できない。10㎜以上の大きさの白色粒子も少なからず観察できる。G－1に分類して大野石が軽石質の白色粒子のみを含むのに対して、G－2に分類した三谷石は、さらに5㎜前後の角ばった黒色粒子を多く含む。また三谷石はやや黄色味を帯びる。

HグループはGグループと同様に緑色粒子を含まず、軽石質の白色粒子のみを多く含むものをあつめている。ただし、Gグループとは石質が爪で削るとボロボロと崩れるように、軟質というより脆い点、また淡緑白色～灰白色の素地がかなり粗く、コンクリートのようにザラザラとしている点で大きく異なる。H－1に属する額谷石の軽石質の白色粒子の大きさが5～10㎜前後で比較的揃っているのに対して、H－2に属する金沢市瀬領石の白色粒子の大きさは5～30㎜とかなりバラツキをもつ。いずれも金沢市東南の丘陵地帯で産出する。

Iグループは緑色粒子も白色粒子も含まない。このグループに属する観音下石は非常に硬質で、淡黄色を呈する。素地はスポンジ状に空隙をもち、黒色粒子を多く含む。また肉眼観察では素地の粒子が視認できない点で大きくAグループとは異なる。

なお石切り場からではないが、石切り場の存在する辰口町岩本地内の天狗橋から入る林道に露呈した崖面から凝灰岩のサンプルが採取できる。石質が他と大きく異なるため、一つのグループ（Jグループ）を設定した。この石質が加賀地方に広く分布するかどうかは不明だが、後述するように小川新遺跡出土石製品に類似の石質をもつ個体が存在する。サンプルはかなり硬質で灰黄色～淡緑色を呈し、石質は他のグループよりかなり粗く、3～5㎜前後の白色軽石や他の硬質の粒子を多く含む。また、さらに荒れた石質になるが同様の特徴をもつ凝灰岩が加賀市直下町地内の道路脇の崖面からも採取できる。

K～Nのグループは現在サンプルを採取していないが、文献からみてA～Iのグループとは異なる石質をもつ可能性のあるものを分類した。Kグループは加賀市福田石が属し、石質は凝灰質砂岩である。立地からみても他の石切り場とは異なる。Lグループには祖鬆凝灰岩の石質をもつ加賀市横北石を、Mグループには立地、石質とも他と大きく異なる鳥越村二曲石（灰黄色凝灰岩）、Nグループには金沢市犀川流域で安山岩質凝灰岩の石質をもつ平沢石、鈴原石、カワヤ石、ムラ石を、またOグループには河北郡津幡町英田の菩提寺石（輝石安山岩質凝灰岩）をそれぞれ想定している。

以上の分類の結果、各グループ内では石質に若干の差異があるものの、各グループ間での石質の違いが大きく、かなりの程度までグループ間の分類が可能であることが判明した。これをベースとして加賀地方の凝灰岩の生産・流通の様相をかなりの程度復元できると考えられる。

(4)小川新遺跡出土石製品の分類と産地の推定

同遺跡出土の凝灰岩製の石製品のうち、実測をおこなった個体を中心に、先述した石質の特徴

第９表　遺跡出土石製品の石質分類

◎行火

石質分類	Ⅰ種	Ⅱa種	Ⅱ種不明	備　考
B	98	27		
C－1′		149,146他		
C-1″かC-2	26	99	149	
D		261		
G－2	8,24,91,100 168,259,260 他	101		破片数50以上

◎囲炉裏の縁石

石質分類		備　考
G－2	64,101,110 114,148,280他	板石組。破片数20以上。
不明1	281	硬質　凝灰岩系
不明2	263	硬質　安山岩系

◎粉挽き臼

石質分類		備　考
A類似	271,274	
J類似	31,32,60,109 113,150,270他	
不明3	108	硬質　凝灰岩
不明4	116,265,269	粗粒砂岩系

◎石鉢

石質分類	平面円形	平面方形	備　考
B	103,107,266		
C－1、2	104,105,106 267,283		純粋なC－1′は確認できない。
G－2	61	154	
A類似		58,153	
J類似	147		

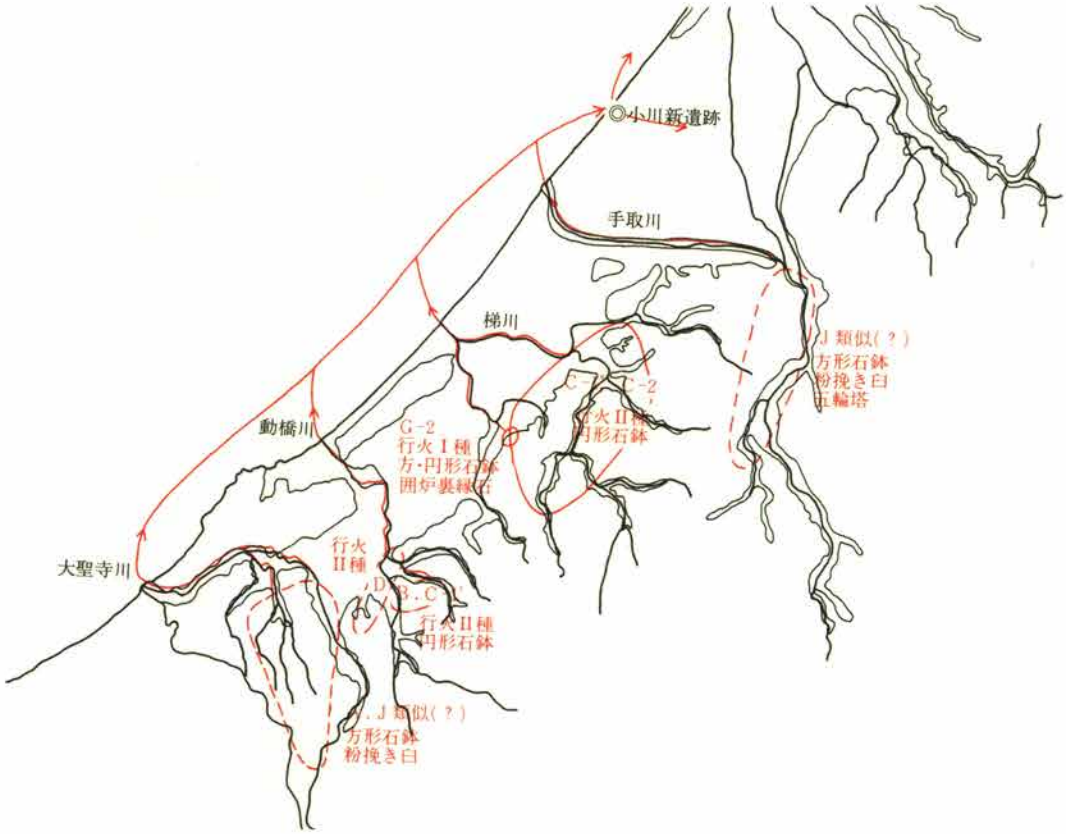
◎その他

石質分類		備　考
J類似	155,156,276	五輪塔
不明5	28	宝筐印塔

の分類と対比し、第９表のような結果を得た。

行火

B、C、D、G－２のグループに属する石質が確認された。垣内氏分類Ⅰ種の形態をもつ行火は、G－２のグループの石質をもつ個体が大部分を占める（破片数で50以上）。また、BとCのグループの石質をもつものも若干量存在する。より加工の複雑なⅡ種はB、C、D、G－２のグループの石質が確認されるが、主体的な産地は想定できない。ただし、B、C、Dという比較的硬質・良質な石材が使われる傾向をもつ。以上、整理すれば、14世紀後半～15世紀代に「熱に対して強い」性質をもつ観音山山麓に属した梯川流域の小松市三谷周辺を中心にⅠ種が造られる。そして、15世紀後半～16世紀前半までには、前述の産地に加え、梯川流域の他の産地や舟見山山麓に属し良質な石材を算出する動橋川流域の産地でも生産したと想定できる。またG－２のグループの石質をもつ三谷周辺の産地は、14世紀代は「特産化」に近い様相を呈するが、行火の形態がⅡ種に移行した後が、後述する囲炉裏の縁石の生産を中心におこなった可能性をもつ。なお第４章中では、G－２のグループの石質をもつ個体は軽石凝灰岩と表現している。



第78図　　小川新遺跡石製品の流れ模式図

石鉢

147、153、266を除く全ての製品が内面に熱を受けており、主に火鉢として利用されたと考えられる。また平面形態から方形（または長方形）と円形の2タイプに分類できる。前者のタイプは底に小さな支脚を四方に造り出し、その形態から瓦質土器の火鉢の模倣製品と考えられる。一乗谷朝倉氏遺跡に類似品がみられる。後者のタイプは珠洲焼鉢の模倣と考えられており、加賀地方を中心に分布する独特の形態をもつ[29]。

肉眼観察の結果、B、C、G－2グループおよびA、Jグループに類似する石質が確認された。B、Cグループの石質をもつ石鉢は円形タイプのみに確認される。ただし石質がやや悪い印象を受けることからC－1'グループに特定できる個体はなかった。G－2グループの石質は両タイプで確認された。Aグループに類似する石質は、方形タイプに限られる。これらの個体はにぶい淡緑色を呈し、硬質で素地はやや粗く、軽石ではない面をもつ白色粒を多く含む特徴を有する。Jグループに類似する石質をもつ147は円形タイプで、淡緑色を呈する。石質は3～5㎜前後の粗い素地に硬質の白色軽石粒子や他の粒子が多く混じる。この石質をもつ石製品は第4章中では火山礫凝灰岩と記述してある。

以上のことから、円形タイプは主に比較的良い石質をもつ動橋川流域の水田丸・滝ヶ原周辺や

梯川流域の石切り場の石で造られたと考えられる。また方形タイプは石切り場の特定はできないものの、円形タイプより石質が粗く、その石質の類似性から手取川、大聖川流域の石切り場の石で造られたと想定できる[27]。なお、両タイプは石質による産地間の分業が図られた可能性が高い。

囲炉裏の縁石

断面台形・平面長方形を基本形とし、2面に被熱の痕跡が確認される個体が多い。方形もしくは長方形に組み合わせて使ったと考えられる。石質はG－2グループに大部分が属し、他に産地不明のものが若干量存在する。不明1の石質は淡灰緑色を呈し、非常に硬質の白色粒子を多く含む。不明2は硬質の安山岩系の石材で灰色を呈する。G－2グループの石切り場としては梯川流域の三谷付近が想定でき、行火と同様に熱に対して強いという石質の特徴を生かした特産化が図られたと考えられる。

粉挽き臼

A、Jのグループに類似する石質の他、産地不明のものが若干量存在する。破片数から見て、流通の主体はJに類似する石質をもつグループの産地と考えられる。A、Jのグループに類似する石質は、石鉢で確認された類似の石質の特徴とそれぞれと一致し、それぞれ同じ石切り場から切り出されたと考えられる。不明3としたものは硬質で白色・黒色細粒を含み、小川新遺跡出土茶臼と同じ石質をもつ。茶臼と不明3はA～Oのグループ以外の同じ石切り場で造られたと考えられる。不明4は灰色を呈した粗粒砂岩系の石質で、石英・角閃石を多く含む。以上のことから凝灰岩製の粉挽き臼は、行火、石鉢より硬質で、より粗い粒子を多く含む石材を産出する地点で「特産的」に造られており、その石質の類似性から加賀市刈安山山麓の大聖寺川流域または手取川流域の産地が想定できる。

その他の石製品

全ての五輪塔はJグループに類似する石質をもち、粉挽き臼と同じ石切り場から採掘されたと考えられる。宝篋印塔は産地不明である。産地不明5の石材は淡緑色・良質の凝灰岩であり、素地は緑色で最大30㎜前後の形の崩れた軽石質白色粒子を多く含む特徴をもつ。

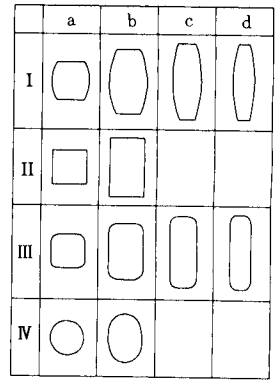
以上の結果、出土遺物から14～16世紀代に石を切り出していた産地はB～D、G－2およびA、Jグループ類似に属する石切り場周辺が想定でき、他の石切り場は近世以降に生産を開始した可能性が高い。また石切り場の推定および小川新遺跡への流通を模式化したものが第78図となる[28]。硬質で粒子の粗い石材を産出する刈安山山麓に属する大聖寺川流域から方形石鉢・粉挽き臼の大型製品が、良質で加工の容易な石材を産出する舟見山山麓に属する動橋川流域から行火Ⅱ種・円形石鉢という小型で加工が複雑な製品が、梯川流域から行火、石鉢、囲炉裏の縁石（うち三谷周辺からは熱に強い特性をもつ石材を生かして行火Ⅰ種・石鉢・囲炉裏の縁石）、硬質で粒子の粗い石材を産出する手取川流域からは方形石鉢・粉挽き臼・五輪塔というような大型製品が造られたと考えられる。よりマクロの視点からみれば、刈安山山麓や手取川流域はその石質から大型製品が、また舟見山、観音山山麓からは加工の複雑な精品が造られている。垣内氏が指摘する石質を生かした生産地間の分業または特産化の様相が明瞭に伺える。そして、それらの石製品は主に

第10表　遺跡出土管状土錘形態分類図

	a	b	c	d
Ⅰ	5	7		1
Ⅱ		10		
Ⅲ	2	23		
Ⅳ				

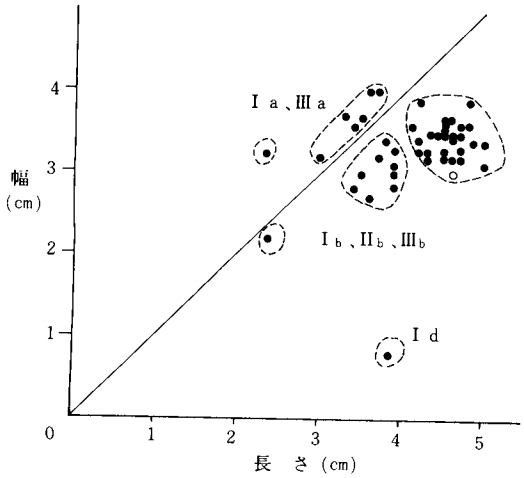
第11表　管状土錘形態分類図

（山本直人氏文献(30)より転載）

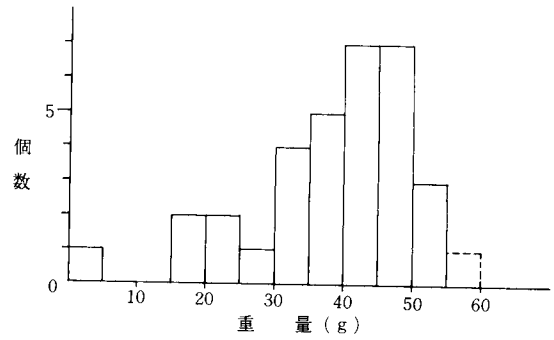


a類…長さと幅がほぼ等しいもの。
b類…長さが幅の2倍より短いもの。
c類…長さが幅の3倍より短いもの。
d類…長さが幅の3倍以上のもの。

第12表　遺跡出土管状土錘法量分布図



第13表　遺跡出土管状土錘重量分布図



河川・海を利用した水運により流通し、小川新遺跡にも運び込まれたと考えられる。さらに小川新遺跡群は港としても重要な位置を占めており、小川新遺跡を介して松任平野の内陸部の集落やさらに加賀国内を北限とした北側の港に流通していたと想定できよう。

(5)小結

以上、小川新遺跡出土の石製品から、中世加賀地方の石製品の流通の一端を考えてみた。遠藤元男氏の研究によれば[29]、石工（石作）が職人として独立したのは古代末期である。そして石材の需要も当初は社寺中心であったのが、次第に庶民に広がり、石材加工品の種類も多くなってきた

とされる。また江戸時代の『山海名産図絵』にある豊島石の細工場からは、石切り場の近くに加工する作業所をもっていたことが分かる。中世加賀地方の石切り場がこの絵図のような形態をとっていたかどうかは不明だが、イメージとして類似する点が多いように思われる。

いずれにしても中世以降の石製品の研究は、石切り場を生産遺跡とみる概念、石切り場の分布と操業年代、系譜を含めた生産技術、石工集団の構造、流通の在り方等考古学の分野を越えて多くの課題が存在し、十分に整理することが出来なかった。本稿が今後の研究の一助にでもなれば幸いである。

3．漁具について

本遺跡は日本海に近接し、漁業に関する遺物として管状土錘（漁網錘）・石錘・タモ枠が出土した。そのうち管状土錘は第11号土坑、第2号落ちこみ状遺構を中心に計47点（土師質土錘46点、陶質土錘1点）を数え、山本直人氏の分類[30]に従い、第10表のような結果を得た。大部分の管状土錘は、断面形態が中央部の膨らまない円柱状を呈し、長さが幅の2倍より短いb類に属する。また長さより幅が広いⅠa・Ⅲa類が7点、明らかに形態・機能の異なるⅠd類が1点（226）存在する。長さと幅の法量分布は第12表のようになり、長さは2.5cm前後と3～4cmに、また幅は2.7～4.0cmにそれぞれ中心が求められ、成形が手づくねであることを考慮すれば、比較的安定した数値を示すといえよう。孔径は陶質土錘213が0.7～0.9cmを測るのを除けば、1.4～1.7cmとまとまっている。

また、完形の管状土錘の重量分布は第13表のとおりで、20g前後、35～50gに分布のピークが認められ、金沢市普正寺遺跡出土遺物にみられるような60gを超える個体はない。なお、55～60gの間に入る81の管状土錘は、摩耗が著しいため破線で表現してある。

以上のことから、小川新遺跡にみる14～16世紀代の管状土錘は、平安時代まで主体を占めたⅠ類の形態をもつ個体が減少し、Ⅱ類が中心になること、幅・孔径が安定しているのに対して長さは法量分化している可能性をもつこと、重量は少なくとも2分化していることが判明した。資料点数が少なく即断は避けるべきだが、幅・孔径から漁網（または漁法）の種類は、それ程多くないように思われる。また、226の形態・重量をもつ管状土錘は、比較的波の静かな場所（もしくは河川）用の小型の網に使われたとも考えられる。なお、陶質土錘は胎土から南加賀産と考えられ、類似形態は珠洲市法住寺第3号窯から出土している。

註

(1) 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982

(2) 森田 勉他「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館 1978などを参考にしている。

(3) 垣内光次郎「中世、北加賀の陶磁器流通について」『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡（Ⅱ）』石川県立埋蔵文化財センター 1985

(4) 森田 勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982

(5) 『遺跡出土の朝鮮王朝陶磁』茶道資料館 1990

(6) 垣内氏は註(3)文献中で、北加賀地域では15世紀後半～16世紀に中国製品の器種構成が青磁碗中心から染付・白磁皿に転換することを論じている。本遺跡もその範疇に入る動きを示すと考えられるが、出土遺跡が時期幅をもつため明確にできなかった。

(7) 垣内光次郎他『普正寺遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1984

(8) 註(6)と同じ。

(9) 田中照久「越前成形技法の復元」『第2回北陸中世土器研究会資料 北陸における越前陶の諸問題』 北陸中世土器研究会 1989

(10) 吉岡康暢「総論 珠洲古陶器」『珠洲の名陶』 珠洲焼資料館 1989
吉岡康暢『日本海域の土器・陶磁〔中世編〕』 六興出版 1989

(11) 藤田邦雄「中世土器素描～加賀地方の土師器を中心にして～」『北陸の考古学Ⅱ』 石川考古学研究会 1989

(12) 註(3)と同じ。

(13) 北島俊朗他『金沢の石切り 石切り緊急調査報告書』金沢市文化財紀要65 金沢市教育委員会 1987

(14) 久保智康「笏谷石利用の歴史」『石をめぐる歴史と文化』 福井県立博物館 1989

(15) 垣内光次郎「中世北陸の暖房文化」『石川考古学研究会々誌』第33号 石川考古学研究会 1990

(16) 三浦純夫よりご教授いただいた。なお、この内容については「北陸における中世後期の生活と行火」と題して同志社大学考古学シリーズⅤ『考古学と生活文化』に刊行される予定である。

(17) 一般に凝灰岩を切り出した地点を「山」「丁場」と呼称しているが、他の鉱山の採掘箇所も同様な語句で言い表す。混同を防ぐため本稿では「石切り場」の語句を使う。また現段階では石切りがどのような生産の構造であったか不明な点が多々あるため、「石切り場」の表す範囲を「集落等の単位とするような、一つのまとまりをもった凝灰岩を切り出した地点の総和（群）」と限定して使う。文中「産地」と表現した場合は、不明な生産構造・背景・石工集団等を含めた、より広いニュアンスで使っている。

(18) 益富壽乃助『原色岩石図鑑』 保育社 1955

(19) 板碑や五輪塔等の石造品は供養という別の要因が、また茶臼は喫茶という別の要因がそれぞれ加わり、より広い地域間で流通した可能性をもつ。

(20) 『石川縣地質礦産誌』 石川県地方開発事務局 1953

(21) 『小松市史(4)』 小松市教育委員会 1965

(22) 能登地方の石切り場は、註(20)文献で知り得たものであり、実際はより多くの石切り場が存在する可能性が高い。今後調査を進める必要がある。

(23) 松山和彦氏よりご教授いただいた。また岩本周辺に点在する白山宮に関係する石造物は、この石切り場が切り出された可能性をもつ。当時、大きな勢力であった白山宮と岩本周辺の石切り場がどのような関係にあったか、生産の背景を考える上で大変興味深い。

(24) 群馬県では新田郡天神山・石山の凝灰岩について、顕微鏡による岩質鑑定で供給圏の復元が研究されている。また大阪府阪南丘陵に存在するミノバ石切り場では圧縮強度・衝撃試験の岩石試験が実施され、その特性が明らかとなっている。（国井洋子「石材の産地と供給圏」『よみがえる中世【5】浅間火山灰と中世の東国』（平凡社 1989）、岩崎二郎他『ミノバ石切り場跡』（財団法人 大阪府埋蔵文化財協会 1988））

(25) 便宜上、サンプルで明瞭に観察できる粒子以外の部分を「素地」という語句で説明を加える。

(26) 註(15)文献より。

(27) Jに類似する石質をもつ個体は、石鉢・粉挽き臼・五輪塔で確認される。その産地としては、石質の類似性から手取川流域（辰口町岩本周辺等）が考えられる。また、一昨年小松市滝ケ原町の石材店で石質のご教授を

受けた際、遺跡出土のJに類似する石質は加賀市我谷石の特徴に似るとの指摘をうけた。このことから、このいずれかの産地を想定できるが、現段階ではいずれのサンプルも観察しておらず判断できない。

(28) 鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡で石製品が出土しており、小川新遺跡とは若干異なる流通の様相を示す。遺物を観察していないため、比較・検討はおこなわないが、異なる理由として遺跡の性格・立地の違い等が考えられる。参考として報告書中で石質について述べてある個体について、報告書の記載に従い分類したものを下表に示す。

	火山礫凝灰岩	緑色凝灰岩	軽石凝灰岩	緑色凝灰質砂岩
行火Ⅰ種			○	
行火Ⅱ種			○	
円形石鉢	○	○		
五輪塔等	○	○	○	
宝篋印塔				○
粉挽き臼	○			
茶臼			(○)	
分類との対比	J.J類似	(B～D)	G	不明(Aか)

(29) 遠藤元男『日本職人史の研究』Ⅰ～Ⅵ 雄山閣出版 1985

(30) 山本直人「石川県における古代・中世の網漁業の展開」『石川考古学研究会々誌』第29号 石川考古学研究会 1986

第2節　小川新遺跡ブシャデン地区出土の糸枠について

1．角山幸洋先生による所見の聞き書き

小川新遺跡ブシャデン地区の第6号溝から紡織関連の木製品である糸枠が完全な形で出土したことは、第4章第1節で報告したとおりである。筆者はこの種の木製品に関しては門外漢であるため、紡織手工業の分野の研究において第一人者である角山幸洋関西大学教授を同大学経済学部の研究棟に訪ね、持参した糸枠を実見して頂いたうえで所見を伺うことにした。以下は平成3年3月12日におけるその際のご教示を聞き書きとしてまとめたものである。何分にも門外漢のため、先生の言葉の意を十分に理解できなかった部分もあると思われるが、それは偏えに文責者たる筆者の浅学に起因するところといえる。なお、ご多忙の折にもかかわらず快くご教示の機会を与えて頂いた角山先生にここで改めて感謝申し上げる次第です。

① 小川新遺跡出土の木製品はその形状等から絹糸用のイトワク（糸枠）と考えられる。80度位に煮たてたお湯の中にある繭玉の表面を藁を束ねたような道具で撫でながら採取した繊維を巻き取るために用いられたと推定される。横にした状態で二つの孔に軸を通して使用されたと思われ、民俗例では「うしくび」と呼ばれる。

② この糸枠は恐らくは杉材を用いているだろうが、すり減りやすい木質にもかかわらず、全くといっていい程に使用痕が認められない。未使用もしくは未製品である可能性も考慮する必要性があろう。

③ この糸枠は他例に比して加工の雑な部類に属する。通常は円形であるはずの二つの孔が楕円形であるのも気に懸かる。

④ 国産の絹糸（和糸）の生産が本格化するのは新井白石が日本からの銅の流出を防ぐため中国産の絹糸（唐糸）の輸入を禁じてからである（いわゆる「正徳の治」以降）。したがって日本における中世以前の段階での絹糸の生産はきわめて小規模であったとされている。小川新遺跡周辺でも同様であろう。

⑤ 絹糸生産においては養蚕地イコール製糸地が原則である。糸枠が出土した小川新遺跡周辺で製糸が行われていた可能性も十分に想定し得るが、②の点及び当時の加賀平野での桑栽培の実態がよくわからないので、断定はできない。

⑥ 小川新遺跡の糸枠に類似する資料としては、奈良国立文化財研究所刊行の『木器集成図録－近畿古代篇－』にみる平城宮出土のもの（同書遺物番号0901）をあげることができる。これは比較的小型のものである。糸枠の年代による形式の変遷についてはいまだ解明されていない。

⑦ 文献にみる「うしくび」の使用については、中国では明の初頭、王禎（おうてい）によって著された『農書』、日本では近世の『養蚕秘録』に掲げられた絵がそれぞれ初出であろう。

2．県内出土の糸枠について

本遺跡出土の糸枠は、枠木・横木・木釘のすべてが欠損することがなく、出土品としてはきわめて遺存状態が良好な資料といえよう。共伴遺物に恵まれぬため年代を推定することは難しいが、およそ古代末期から中世初頭の時期に位置付けられるのではないかと思われる。

ここでは石川県内出土の同種の木製品について、すでに報告書等で発表されている主な資料について集成を試みることにした。未発表の資料、或いは文献の検索不足による遺漏も当然ながらあるはずであり、実際の事例は以下に掲げるものよりさらに多いと予想される。また、本遺跡例については前記のとおり角山先生より絹糸の糸づくり作業の初期の工程で用いられた可能性が高いのではないかとのご指摘を頂いているが、糸枠については紡錘車と関連した使用方法も考えられるほか、直接的な機能とはやや異なり神社の神宝として伝世している資料も散見される。しかしながら、本稿で取り上げる資料の個々について、その形状・大きさ・出土状況等からその性格を判断することは現時点では困難であり、機能・用途に関する問題には触れず「糸枠」として一括して扱うことにしたい。なお、本木製品の型式については奈良国立文化財研究所刊行の『木器集成図録－近畿古代篇－』を参考にして、「２個所の横木はそれぞれ２枚の板を十字形に相次きでかみあわせ」るものを「A型式」、これに対して「一枚板の横木」を用いるものを「B型式」とすることにした。

以下、県内における出土例を紹介していくことにする。各遺跡についての参考・引用文献は末尾にまとめてある。

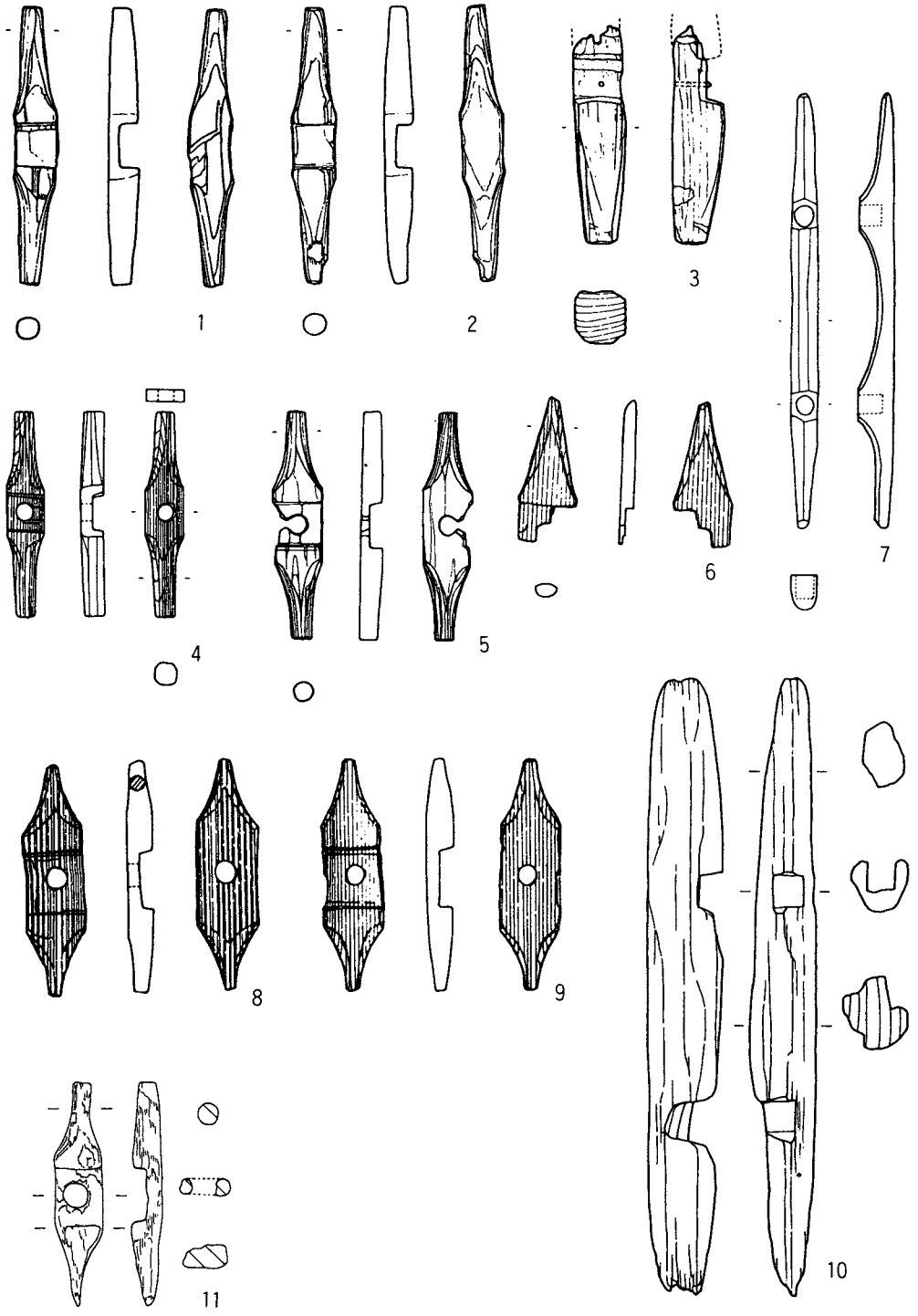
(1)、**鳳至郡穴水町大町・繩手（のうて）遺跡**（第79図１～３）

穴水市街地の西方、山王・小又川の合流点に近い標高2.6m前後の沖積地を占地し、崇徳院御影堂領大屋庄穴水保の存在を歴史的背景にもつ西川島遺跡群に包摂される。区画整理事業に係り1978年から1984年にかけて町教委が約4400㎡について発掘調査を実施している。

調査区から糸枠の部材が３点出土している。第79図１・２はA型式の横木であり、セットをなすという。軸孔がみられないことが特徴といえよう。同じく３は切欠き部の背面から貫く木釘が遺存しており、報告書〔四柳編　1987〕では「太身の横木」としているが、実測図をみる限りB型式の枠木である可能性も残るのではなかろうか。遺構出土でないため年代を考えることは難しいが、出土遺物でみるこの遺跡のピークは「13世紀前～中期と14～15世紀中期」である。なお樹種はスギとのこと。

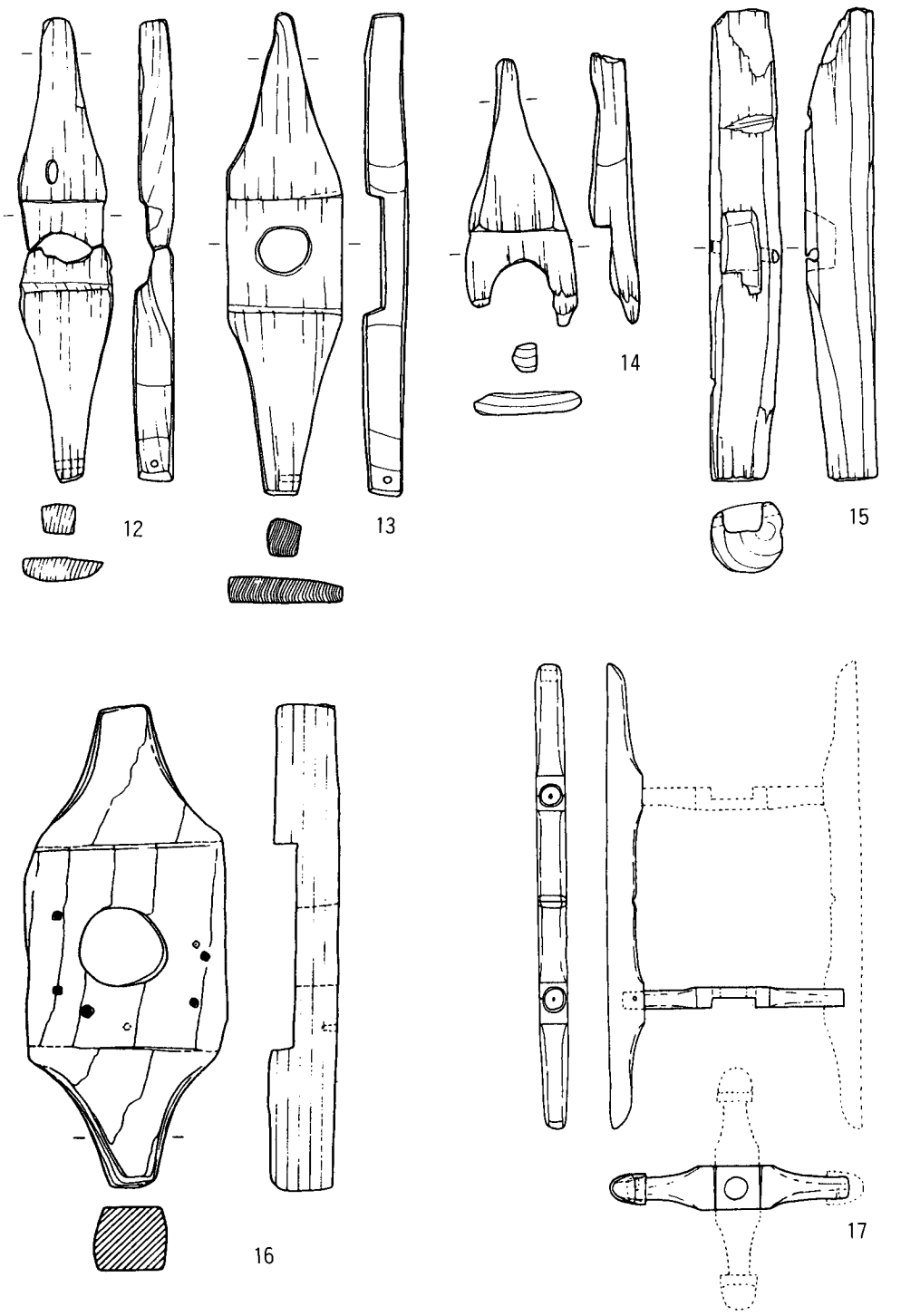
(2)、**鳳至郡穴水町白山橋遺跡**（第79図４～９）

(1)に近接し、やはり西川島遺跡群に含まれる。標高は約2.7m前後。(1)と同じ原因により1979・1983両年度にわたり町教委が発掘調査した２地点から糸枠の部材６点が出土している。まず、「祭祀遺物埋納遺構」からは数千本の箸や人形・舟形・陽物・鳥形の木製品に混じってA型式の横木が３点、同じくA型式の枠木が１点出土している（第79図４～７）。いずれもスギ材を用いている。第79図４と同７はセット関係をなすものであり、後者は両結合部間に浅い刳形をいれるとともに端部の側面形が刀身形を呈しており『木器集成図録－近畿古代篇』にいう「AⅣ型式」に分類できる。それ以外にも「５号土坑直上」から第79図８・９として掲げたA型式の横木が２点



（1～9は〔四柳編　1987〕、10は〔山本他　1989〕、11は〔楠他　1986〕から引用した）

第79図　県内出土の糸枠実測図(1)（S＝1／3）



(12～15は〔西野　1988〕、16は〔田嶋　1979〕、
17は〔荻中他　1987〕から引用した)

第80図　県内出土の糸枠実測図(2)(S＝1／3)

出土している。セットをなすものであり、両端が尖る形状を呈し、樹種はスギ。これらの年代については、共伴した土器から「祭祀遺物埋納遺構」が「13世紀後～14世紀前半代」、「５号土坑直上」が15世紀前半頃と考えられている。

⑶、鹿島郡鹿島町水白モンショ遺跡（第79図10）

能登半島で最大の平地である邑知地溝帯の中央南側に位置し、国道159号線鹿島バイパスの建設に伴い1987年に石川県立埋蔵文化財センターが約1400㎡を発掘調査した。遺跡付近の標高は24～26mを測る。「平面形態は隅丸方形を呈し、長軸４m、短軸3.5mを測る」という「第１号竪穴」から第79図10として示した枠木が１点出土しており、実見したところかなり腐蝕が激しいものの、長さ29cm前後に復元できるものと思われる。腹面側に２箇所の柄穴が穿たれているところからＡ型式に属する資料と判断される。報告者によればこの遺構は、「時期的には、12世紀第４四半期～13世紀第１四半期の範囲に包括される。」という。

⑷、金沢市近岡ナカシマ遺跡（第79図11）

河北潟から流れ日本海に注ぐ大野川の左岸に位置し、遺跡付近の標高は約１m。中学校の建設に係り金沢市教育委員会が1984年に1800㎡を発掘調査を実施している。弥生時代終末に営まれた「２号溝」より第79図11として掲げたＡ型式の横木が出土している。長さ10cm前後の小型のものである。２号溝が埋没したのちに付近では「平安時代前期」を中心とする掘立柱建物３棟、井戸１基が営まれており、楠正勝氏のご教示によれば糸枠はこれらと関連する可能性が高いのではないかとのことである。

⑸、河北郡津幡町刈安野々宮遺跡（第80図12～15）

河北潟に注ぐ津幡川の中流域に位置し、砺波丘陵から派生した標高35mの台地および丘陵上を占地する。国道８号線倶利伽羅バイパスの建設に伴い石川県立埋蔵文化財センターが1983年に約8500㎡について発掘調査を実施している。

第80図12～15として掲げた資料は「西地区」の深さ８m以上に及ぶ「井戸の底面近く」より出土したもので、12～14はＡ型式の横木、15もやはりＡ型式の枠木と考えられる。15は『木器集成図録－近畿古代篇－』にいう「ＡⅢ型式」に比定され、実測図に木釘の跡も看取できる。この井戸は、「２間×３間」と考えられ「大きい柱穴は径が100～150cm、深さ70～140cmを測る」特異な掘立柱建物に附属するもので、時期的には「15世紀後半代」頃と報告されている。

⑹、加賀市田尻シンペイダン遺跡（第80図16）

橋立台地を開析して日本海に注ぐ田尻川の流域の平野部微高地に立地し、標高は８m前後。県営ほ場整備事業に係り石川県教育委員会が発掘調査を実施している。

第80図16としてものは、Ａ型式に属する横木で「長さ20.5cm、幅8.6cm、厚さ3.0cm、軸孔の直径3.5cmを測る」比較的幅広のものといえる。また、７箇所において木釘（孔）を観察することができる。「01大溝」から出土しており、その年代は「11世紀後半代でもその前半代には遡上しない」とされている。

⑺、加賀市三木だいもん遺跡（第80図17）

加賀・越前国境に近い大聖寺川下流左岸の標高３～６mの山裾の平野に位置する。団体営ほ場

整備に係り、市教委が1985・1986年に約5600㎡について発掘調査を実施している。

「A地区C区」で検出された「方形池」の上層より、結合状態にあるA型式の横木・枠木が各1点出土している。枠木は長さ20.5cmを測り、『木器集成図録－近畿古代篇－』にいう「AⅣ型式」に比定される。概報等によれば年代は「13世紀後半であろう」とされている。この時期は「調査地の南西隅に突如8×5間の超大型建物（B－71）が出現する」という三木だいもん遺跡の画期にあたっている。なお当該遺跡は『高山寺雑掌申状案』にみえる「當寺領加賀國右庄」の庄域に含まれ、調査者は「右庄を現地で管理する有力豪族の居住地」との関連を想定している。

以上の事例から、地域的には奥能登から南加賀まで、年代的には平安時代から室町時代までの資料が知られ、今後は民俗資料との空隙を埋める近世期のものの出土も十分に予想される。型式的には小川新遺跡例と(1)の一部を除いてA型式によって占められている。

出土遺跡（遺構）については、(1)・(2)が港湾的機能も有した庄園の中心的集落で、前者では面積214㎡の総柱式掘立柱大型建物、後者では大量の木製品等が出土した「祭祀遺物埋納遺構」が特徴的といえる。(4)は平安時代前期における加賀国の代表的官衙遺跡である金沢市戸水C遺跡の周辺地域に位置し、やはり同期の大型建物が検出されている。(5)は宗教施設と思われる特異な建物に付属した井戸から出土し、(6)では「01大溝」と同期に四面に廂をもつ総柱式で大型の「01建物」が営まれている。(7)でも庄園の在地の管理機構との関連が指摘されている。そして、小川新遺跡も古代末期から中世初頭にかけては白山宮の境外末社が鎮座する港湾集落であったと思われる。

このように県内の古代・中世における糸枠の出土遺跡（遺構）は、官衙群・庄園の管理施設・宗教施設をその史的背景に有する地点に集中する傾向が窺えるが、これがたんに資料数が少ないがための偏りに起因するのか、はたまた絹生産が特定階層が経営した特定の工房に限られていた状況を反映しているのかどうかは今後の資料の蓄積をまって究明されるべき課題であろう。

参考・引用文献

奈良国立文化研究所編　『木器集成図録－近畿古代篇－』　奈良国立文化財研究所　1985
四柳嘉章編　『西川島』　穴水町教育委員会　1987
山本直人他　『水白モンショ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1989
楠正勝他　『金沢市近岡ナカシマ遺跡』　金沢市教育委員会　1986
西野秀和　『津幡町刈安野々宮遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1988
田嶋明人　『加賀市田尻シンペイダン遺跡発掘調査報告書』　石川県教育委員会　1979
田嶋正和他　『三木だいもん遺跡第一次調査略報』　加賀市教育委員会　1986
荻中正和他　『三木だいもん遺跡』　加賀市教育委員会　1987

第3節　中世の小河とその周辺—河と道と白山宮—

1　小川遺跡群の評価

本遺跡出土遺物のうち、土器については、第5章第1節で整理されている。遺跡の時期は12世紀から14世紀前半までと、15世紀中葉から16世紀後半まで続く二つに大別される。前者は中世の前期、後者は同後期に包括される。

前期では白磁碗を中心とする輸入陶磁器が目につくが、量は少ない。後期では輸入陶磁器のほかに越前焼が陶器の過半を占める。そして土器のほかに本遺跡を特徴づけるのが、石製品の多さである。石臼、行火、石鉢が目立っており、中世後期における消費地の石製品のあり方を知るうえで興味深い。生産地との関係については第5章第1節2で詳述されている。上記の石製品のほか、茶臼、石硯、宝篋印塔、五輪塔の存在も遺跡の評価に関わるものである。

2　中世の河と海と道

(1)　中世の河道

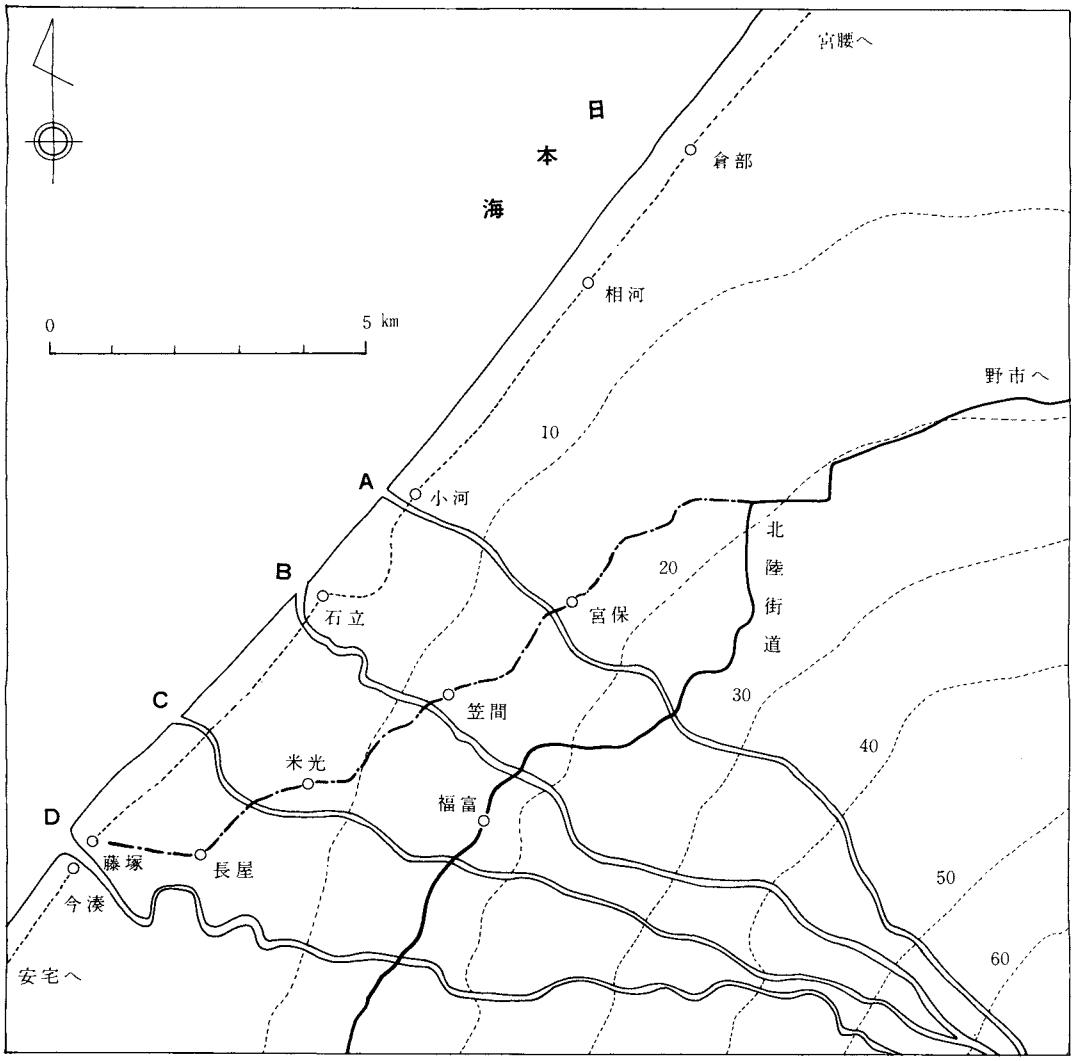
中世における手取川扇状地扇央稜線[1]以南の主要河道については、かつて三筋を想定した[2]。それは第81図に示した、現小川町の南を通る流れ（A）、石立町の南に注ぐ流れ（B）、そして石川郡美川町中心部の南に注ぐ流れ（D）である。ここでは、さらに美川町蓮池の南を流れ、現堂尻川川筋に近い一筋[3]（C）を加えておきたい。

次に中世の文献から河をみると、宝治元年（1247）～建長元年（1249）頃の成立とみられる『源平盛衰記』[4]で「小川大行事」、嘉元2年（1304）～嘉元3年（1305）頃の成立とされる『遊行上人縁起絵』[5]では「小河」、延徳2年（1491）に書かれた『越後下向日記』[6]では「ミナト河」と笠間付近の、単に「河」と表記するものの二ケ所がみえる。さらに永禄6年（1563）～永禄7年（1564）にかけて書かれた『永禄六年北国下り遣足帳』[7]では「湊川」、天正2年（1574）～天正5年（1577）の成立とみられる『朝倉始末記』[8]では「今湊川」「湊河」の名が見られる。

これらをさきの四筋の河道と照合すると「小川大行事」「小河」とみえるのは、Aの流れ、「ミナト河」「湊川」「今湊川」「湊河」と記されるのは、中世の今湊に注ぐDの流れに符合するものとみられる。このほか『三宮古記』の正和4年（1315）の記事に「河ヨリ南方　寺井　安宅　福富」とみえる「河」は、福富を現在の松任市福留町付近に比定した場合、AもしくはBの流れとなる。『越後下向日記』で笠間の下に河と表記されるのは、笠間の南を流れるBの河道と推定される。この河道は、いま大慶寺川と呼ばれる流れによって形成されたもので、第2次耕地整理が終了した現在においても大きな幅の段丘面を見ることができる。

さて、史料にみえる河の名前は少ないが、13世紀～14世紀代には「小河」が手取川扇状地扇央稜線以南の代表的なものとして意識されており、15世紀～16世紀には「湊川」がそれにとってかわったものとみられる。

中世の河の実態については『源平盛衰記』や『遊行上人縁起絵』に増水時の暴れぶりが記されるように、河幅や河筋の移動が絶えなかった。前記の史料は、すでに指摘されている「手取川南遷」[9]の一端を示すものである。正保4年（1651）成立の『三州輿地図』[10]の添書に「手取川二筋



第81図　手取川扇状地の河(中世)と道(中・近世)

幅三十間・四十間歩渡る　但し一雨一雨にて瀬替り　広さ百五十間・二百間も成申候　むずかしき川にて御座候」と記され、手取川扇状地を流れる河の中・近世的状況を知ることができる。

(2)　小川津について（史料１）

大治２年（1127）～大治３年（1128）の成立とみられる『医心方巻二十五裏文書』[01]に「小川津」とみえる。これについては、加賀国石川郡に存在した可能性が指摘[02]されており、弁済使、納所使の下向に充てるべき港として機能していたことが知られる。長寛元年（1163）頃の成立とみられる『白山之記』[03]に「小河」の名がみえる（史料５―①）ことから、小川津を本遺跡周辺に想定することは可能であろう。12世紀前半における加賀国の要津として機能していたものとみられる。

(3)　中世の道と風景（第81・82図、第14表）

道は時代とともに動いており、古いほどその復元は困難である。発掘調査による石川県内の中世道の検出例[04]は少なく、復元にあたっては文献に依拠するところが大きい。

まず、中世前期の道を『源平盛衰記』および『遊行上人縁起絵』によって窺ってみたい。前者

1、『医心方巻二十五裏文書』（散位藤原某書状断簡）

弁済使（第三三紙）・納所使令下向□、如令申候、可令充小川津給也、不可令准他人給候、毎事付脚力可令申之状如件、

2、『源平盛衰記』

巻二十八　北国所々合戦事

①（上　略）源氏ハ安宅ノ湊ヨリオチテ、今湊・藤塚・小河・浜倉部・双河打過テ、大野庄ニ陣ヲ取、（下略）

巻二十九　砺波山合戦事

②（上　略）甲冑モシホレツヽ、駒ニ任テ行程ニ、小川大行事ノ洪水ニ、先陣流ルレトモ、後陣是ヲ抹ス、（下　略）

3、『遊行上人縁起絵』

第五段

さて藤塚といふ所に暫逗留ありて、たち給はむとしける、其日の夕より、雲くもり風あれて、雨よもすからふりて、朝ハ空さりけなく晴にけれハ、宮腰へこえ給に、小河といふ名のミして、岩高く、瀬早き大河あり。水のおもおひたゝしくまさりて、かちよりハこゆへうもあらぬ気色也。

4、『政所賦銘引付』

二、安田遠江成真方ヨリ、永代買得当知行、云云、同国白山神領小川伊藤次郎名之内田地三段、自小川坪内左近方、永代買得、（下略）

5、『白山之記』

①佐那武、大野庄在之、拝殿・講堂、王子五所白早取、五所宮、大宮ヒ沙門、内宮不動、小白山、小河在之、

②一、国之八社者、

白山・菅生・府南気比・気多白山三社也・能田（栗）・加茂（安宅）・神符・佐那武（小河）・八幡（乃美）、

③一、白山本宮内鳥居、樫高寺中与公方境立、中鳥居槻橋寺中与公方境立、惣門神保小河立、北陸往反旅人等、此惣門下馬、白山向礼ナシテトヲル也、

6、『三宮古記』

一、練童已下十一人、可為寺領百性役之由　四月五日（下　欠）

三人　諸江三人　小河保三人　加加爪二人勤仕（下　欠）

7、『神官上道家系譜』

一、白山ニ三ノ鳥居アリ、内ノ鳥居（樫高（カシサカ））ノ公傍与寺中一堺ニ立ツ、中ノ鳥居剣（ハ）ノ寺中与富樫一堺ニ立ツ惣社ノ南作道ノ北也、惣門ノ鳥居（小河神符社ノ前ニ立ツ、為ル二北陸道ノ大道一之間、上下往反ノ人ヽ爰ニテ下馬シテ（シテヲ）成礼一通ル、

8、『大永神書』

白山九所小神

一　不動天和佐谷　　二　糟神勝軍地蔵

三　戸明神十八講川原　　四　岩坂宮尻本戸内

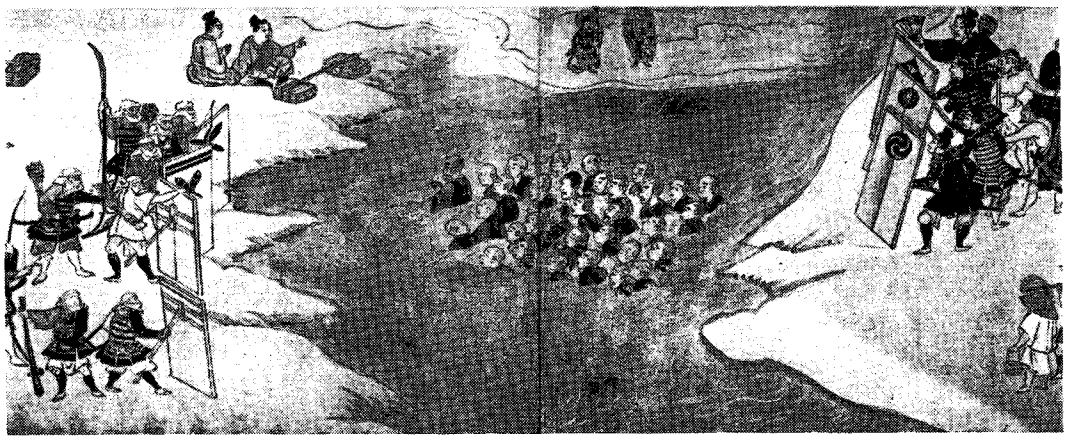
五　岩神馬場谷　　六　白山小川

七　志津原明神山内広瀬　　八　佐那武大野内宮

越後ノウ白山ノ事

九　高倉能登鈴ノミサキ

モスノ白山



第82図　「岩高く、瀬早き大河」を渡る他阿上人一行と河岸の武装集団

巻二十八北国所々合戦事（史料２―①）には源氏の退路が、同巻二十九砺波山合戦事（史料２―②）には平氏の退路が記されている。ここでは第14表のとおり、安宅～大野庄間の海沿いの地名がいくつかみえる。

後者は中世の小河[09]を描いた唯一の絵画史料として注目される。第82図は藤塚から宮腰へ向う他阿上人一行が、増水した「小河」という名の大河を渡る場面である。位置を確認すると、上人の前方が、宮腰側、後方が藤塚側となる。したがって、絵の右側は左岸、左側は右岸である。また、小河地内の河であるから、これは第81図Ａの流れとみなされ、左岸は石立、藤塚寄り、右岸には小河の村が存在することになる。さて、この場面の中心は不動尊、多聞天の加護のもと洪水の河を渡る他阿上人一行にあるが、これを狭んで対峙する武装集団にも注目しなければならない。この三者の髪型・被りものは、薙髪、烏帽子（加えて髭）、裹頭（かとう）・覆面[09]と明らかに異なっており、身分の標識として描き分けられたものとみられる。

烏帽子姿は中世の男の一般的な姿であり、左岸の人々は在地領主層に連なる武装集団とみたい。右岸の裹頭・覆面の集団は、他阿一行の薙髪と際立っている。裹頭・覆面は中世社会における特徴的な姿[07]でであり、この場面を検討した黒田日出男氏は、この集団を詞書にある「疥癩の類」とみなした[08]。同氏は『一遍聖絵』や『遊行上人縁起絵』の各場面を検討し、この集団が「宿の長吏」で、武装・戦闘能力をもち、渡守の権利を主張していたのではないかと推論される。また、東四柳史明氏は、この集団を、白山宮に関わる、小河宿の長吏でないかとみる[09]。

『遊行上人縁起絵』にみえる地名は「今湊」「藤塚」「小河」で『源平盛衰記』に重なる。ここでは「旅人」の表現があることより、この経路が幹道であったことが知られる。史料７では、小河に北陸道が通っていたことが明記される。このように、史料にみえる中世前期の道は、海に沿っていたことがわかる。

中世後期の道を、まず『越後下向日記』によって窺うと、中世前期の地名と共通するものはみえない。「ミナト浜」「ミナト河」とあるのが、「今湊」との近接性を想起させるのみである。ここでは、「ミナト浜」に続く地名が「テフヤ（長屋）」とあり、現手取川河口付近では前期と同じ場所を経由するものの、それより北は内陸部に入り、米光、笠間を経由している。これは、近世に「木曽街道」[20]と呼ばれる小松・松任を結ぶ道路の通過地と共通する。

第14表　中世史料にみる小川周辺の通過地名

	史料名	成立時期	地名							
前期	源平盛衰記　巻二十八	1247～1249	安宅ノ湊	今湊	藤塚	小河	浜倉部	双河	大野庄	
	同上　巻二十九	同上	安宅 安宅ノ湊	今湊	藤塚	小川大行事				
	遊行上人縁起絵	1304～1305		今湊	藤塚	小河			宮腰	
後期	越後下向日記	1491	湊浜	板津	湊河	長屋	米光	笠間	宮保	
	北国下り遣足帳	1563～1564		加州湊	湊川					

『永禄六年北国下り遣足帳』は旅の小遣帳ともいうべき史料である。ここでは、本遺跡周辺の地名として、「加州湊」と「湊川」がみられる。さらに湊川を舟で渡った記事がみえ、中世末期においても、この地が重要な通過地であったことがわかる。このほか、『朝倉始末記』では、すでに述べたように、「今湊川」「湊河」の名がみえる。

中世の道は、前期の史料においては海沿いにあることを確認した。これは言うまでもなく、舟の利用を考慮したもので、安宅、今湊、宮腰などは、古代北陸道以来の水陸兼用駅[21]としての機能したものとみられる。中世後期になると、内陸部へ道が入るのは、政治状況[22]および自然条件の変化を反映したものと理解される。

3　小河と白山宮

史料5～8は白山比咩神社所蔵史料より、小河に関する記述を抜粋したものである。5—①は小神分九所をあげたあと、佐那武云々と記される[23]もので、小白山が小河に所在することがわかる。この史料は佐那武社の説明をしたもので、小白山は佐那武社に勧請された神として記されていると理解[24]したい。5—②は国（加賀国）の八社を記したもので、6番目に小河所在の神符社がみえる。なお、列記される、加茂、神符、佐那武の三社は先述の海沿いの道に所在する。ここで国の八社の一つに数えられた神符社は、1527年の書写とされる『大永神書』では白山九所小神として六番目にみえる。ここでは、小川所在の白山社として記され、佐那武社とともに格付けの変化が窺える。

次に5—③の史料では、白山本宮の惣門が「神　保小河」にあると記され、北陸往来が近くを通っていたことがわかる。鎌倉時代の末期に成立したとみられる7の『神官上道家系譜』には白山宮の惣門の鳥居が、「小河神符社」の前にあると記されており、大道たる「北陸道」が通っていたとみえる。この史料と5—③史料は大略において同じであるが、いくつか表現上の相違がみられる。まずこの史料で「小河神符社」と社名がみえるが、5—③では「神保小河」という地名の表記となっている。なお、神符社と表記されるのは、5—②史料と同じである。さらに本史料で、鳥居の位置の説明が、本宮側からみてなされるのに対し、5—③では異なっている。

6の『三宮古記』[25]では文和2年（1353）の臨時祭礼に「小河保」より三人の練童が百姓役として課せられていたことがみえ、小河が神領として祭礼に関わっていたことがわかる。4の史料は『政所賦銘引付』にみる文明14年（1482）の記事で、15世紀後半に小河が白山神領であったことを確認できる。

4　小川の小字

本遺跡を含む小川の小字については、明治16年に作成された『皇国地誌』[29]によって次の16ケ所が知られる。「ヤナギマチ」「キタタンボ」「ホンムラ」「ハッタンダ」「ニシタンボ」「ゴタンダ」「シンムラ」「ナカノサワ」「ミナミタンボ」「カミコ」「サンタンダ」「ムラマエ」「オオカメ」「フゴ」「ハチコク」「スナダ」である。いっぽう、昭和37年に高野直満氏が書かれた『大地無常―小川附近の史蹟私観―』（自筆本）では「オオミヤ」「ヒシダヤシキ」「ソウモン」「コナカシャ」「バンバ」「ブシデン」「キタジャ」「ヤナギマチ」「カワラバンデン」が示されている。これらのなかで「オオミヤ」「ソウモン」など神社に関わるような小字があることは注目される。昭和46年に刊行された『宮保の歴史』[27]でもこれに依拠して神符社の位置を推定している。ただ、『皇国地誌』に神社の存在を想定させる小字がみえないことも重くみるべきであり、現地における十分な検証が必要となろう。

5　まとめにかえて

出土遺物による本遺跡の時期は、中世の前期と後期に二分される。このうち前期は『医心方裏文書』にみえる「小川津」から『遊行上人縁起絵』の「小河」までの史料を包括する。また、後期は、「小河保」と記される『三宮古記』から『政所賦銘引付』、『大永神書』を含んでいる。

今次の調査によって検出された遺構・遺物は大半が15世紀後半から16世紀後半の所産とみられ、白山神領としての小河、あるいは白山神の所在する小河に関わるものとみられる。本遺跡の範囲[28]は13万平方メートルにも及ぶもので、調査はその一端を窺伺したにすぎない。ただし、規模からみて、本遺跡が手取川扇状地の中世遺跡のなかで有数のものであることは確認しておく必要があろう。

最後に、中世前期、同後期における小河と交通路、白山宮の関わりを整理しておこう。

中世前期では、小河に神符社あるいは小白山社とよばれる神の所在が知られる。神符社は12世紀後半に白山宮の惣門が立つところとなっており、白山宮との強い関係が窺われる。また、国の八社に含まれる有力な神であったことがわかる。14世紀前半の史料では、惣門の鳥居が神符社の前にあり、これに近接して北陸道が通っていたことも知られる。

『遊行上人縁起絵』では「宿の長吏」とみられる集団が描かれており、「小河」の渡しの権利に関与したのではないかと推論されている。この「宿の長吏」は白山宮との関わりをもつもので、直接的には神符社に帰属するものではなかったか。このことと、往反の人々を畏怖させた白山宮惣門の存在を考え合わせると、神符社が河および道の管理に関わっていた可能性が指摘できる。「宿の長吏」はこの実務を担う集団として存在したものとみられる。国の八社の所在地に安宅や宮腰といった幹道沿いの地名がみえるのは、河や道の他に、神社が要津とも関わったことを想定させる。

中世後期の小河は、16世紀前半に、九所小神の一つ「白山」社の鎮座地としてみえる。後期の史料が少なく、この時期の小河を復元することはむずかしいが、幹道の延長上にあった宮腰を含む大野庄関係の史料によって、15世紀代の状況を知りうる。

15世紀の大野庄は臨川寺の所領で、年貢算用状[29]は中世後期における加賀の一庄園の姿[30]をよく伝

えている。ここには、「砂成」「川成」「水損」といった表現が多くみられ、天候不順によって大きな被害をうけたことがわかる。とりわけ、砂丘の移動による被害は大きかったようで、村の機能を殆ど奪っている。大野庄に含まれる普正寺遺跡は14世紀前半から営まれているが、15世紀中葉には砂の被覆によって廃絶[31]している。小松砂丘に接する今湊、藤塚も16世紀前半には機能を失っている。

15世紀の日本列島は、飢饉、洪水、霖雨、大風が多発し、冷涼・多雨という小氷期気候に覆われていたといわれ[32]ており、大野庄にみるように加賀も例外ではなかった。

このように宮腰、今湊、藤塚などが被害をうけるに及んで、海沿いの幹道は機能を失ったものと思われる。これによって『越後下向日記』にみえる内陸を行く道が幹道として機能するものとみられ、その時期は14世紀末～15世紀初頭[33]と考えられる。

中世前期における神符社の役割の一つが、前述のように、河や道の管理にあるとみれば、近接する幹道が機能を失うことは、必然的に神符社の相対的位置を低下させることにつながる。中世後期に小神分として位置づけられていることは、このことを端的に表している。

砂丘の移動は、15世紀から16世紀初頭にかけて、多くの集落の機能を奪ったが、小河は近くに砂丘が形成されておらず、それによる被覆を免れている。ただし、中世前期のように幹道に接した展開とは考えられず、後期における存続がどのような理由によるものか、質的な検討が必要となろう。

註

(1) 扇頂部の北陸鉄道石川線鶴来駅と扇端部の松任市徳光町を結んだ線を指す。藤・則雄・蔵　国晴「川北村の自然環境」『川北村史』　川北村役場　1970　石川県川北村。

(2) 拙稿「中世米光の検証」『米光萬福寺遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1987　金沢。

(3) 川北村史編さん委員会編『川北村史』　川北村役場　1970　石川県川北村。

(4) 加能史料編纂委員会編『加能史料』平安Ⅳ　石川県　1989　金沢。

(5) 宮　次男・角川源義編『遊行上人縁起絵』　新修日本絵巻物全集　第23巻　角川書店　1979　東京。

(6) 小葉田　淳「冷泉為広卿の「越後下向日記」と加賀の旅路」『日本歴史』第472号　吉川弘文館　1987　東京。

(7) 山本光正・小島道裕「永禄六年北国下り遣足帳」『国立歴史民俗博物館研究報告』第39集　国立歴史民俗博物館　1992　佐倉。

(8) 笠原一男・井上鋭夫校注『蓮如　一向一揆』　日本思想大系17　岩波書店　1972　東京。

(9) 前掲註(3)書に蔵国晴氏の詳細な研究がある。

(10) 前掲註(3)書。

(11) 前掲註(4)書。

(12) 瀬戸　薫「半井家本『医心方』紙背文書とその周辺一善勝寺流藤原氏を中心に一」『加能史料研究』第4号　石川史書刊行会　1989　金沢。

(13) 前掲註(4)書。

(14) 松任市宮保町地内の宮保光明寺遺跡の発掘で「木曽街道」を検出している。拙稿「宮保光明寺遺跡」『宮保遺跡群』　石川県立埋蔵文化財センター　1991　金沢。

(15) 地名の表記は『医心方』を除いて、中世前期には「小河」とみえることより、小稿ではこの表記を使用する。

⑯　中世人の裹頭・覆面姿については次の論考に詳しい。黒田日出男「こもる・つつむ・かくす―中世の身体感覚と秩序―」『日本の社会史』第８巻　生活感覚と社会　岩波書店　1987　東京。

⑰　前掲註⑯黒田論文。

⑱　黒田日出男「史料としての絵巻物と中世身分制」（同氏『境界の中世　象徴の中世』東京大学出版会　1986　東京。所収）

⑲　東四柳史明「武家の世の地頭と村落」『図説石川県の歴史』　河出書房新社　1988　東京。

⑳　森田平次『加賀志徴』下編（復刻）　石川県図書館協会　1969　金沢。

㉑　木下　良「近年における計画的古代道研究の成果と課題」『人文地理』40―４　人文地理学会　1988　東京。

㉒　富樫氏が台頭し野々市に守護所が設置されたことも、内陸部が求心力を強めた要因の一つであろう。

㉓　この記事については、大宮以下は小河所在の堂社とみる山岸共氏の所論がある。同氏「白山神領小河に関する一考察」『加能地域史』第９号　加能地域史研究会　1983　金沢。

㉔　石田文一氏の教示による。

㉕　日本海文化研究室編『白山史料集』上巻　石川県図書館協会　1979　金沢。

㉖　『石川県史資料』　近代篇(1)　石川県　1974　金沢。

㉗　柏野加治他『宮保の歴史』　松任市宮保公民館　1971　松任。

㉘　第１次調査の対象とした小川新遺跡の範囲である。なお、隣接する小川遺跡は中世以外も含むが約２万平方メートルの広がりをもっている。

㉙　室山　孝「臨川寺領加賀国大野庄年貢算用状について」『加能史料研究』第４号　石川史書刊行会　1989。

㉚　浅香年木氏の次の論文でよく復元されている。同氏「一向一揆の展開と加賀国大野庄」『中世北陸の社会と信仰』　法政大学出版局　1988　東京。

㉛　垣内光次郎編『普正寺遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1984　金沢。

㉜　山本武夫『気候の語る日本の歴史』　そしえて　1976　東京。

㉝　14世紀後半から15世紀初頭には大野庄内で災害の記録が散見される（前掲註30浅香論文）。

参考文献（五十音順）

浅香年木・田川捷一他編『角川日本地名大辞典　17　石川県』　角川書店　1981　東京。

小林健太郎「加賀国」『古代日本の交通路Ⅱ』　大明堂　1978　東京。

谷口正幸編『鶴来町史　歴史編』原始・古代・中世　1989　石川県鶴来町。

中井安治『笠間郷土史』　松任市笠間公民館　1986　松任。

若林喜三郎・高沢裕一『石川県の地名』　平凡社　1991　東京。

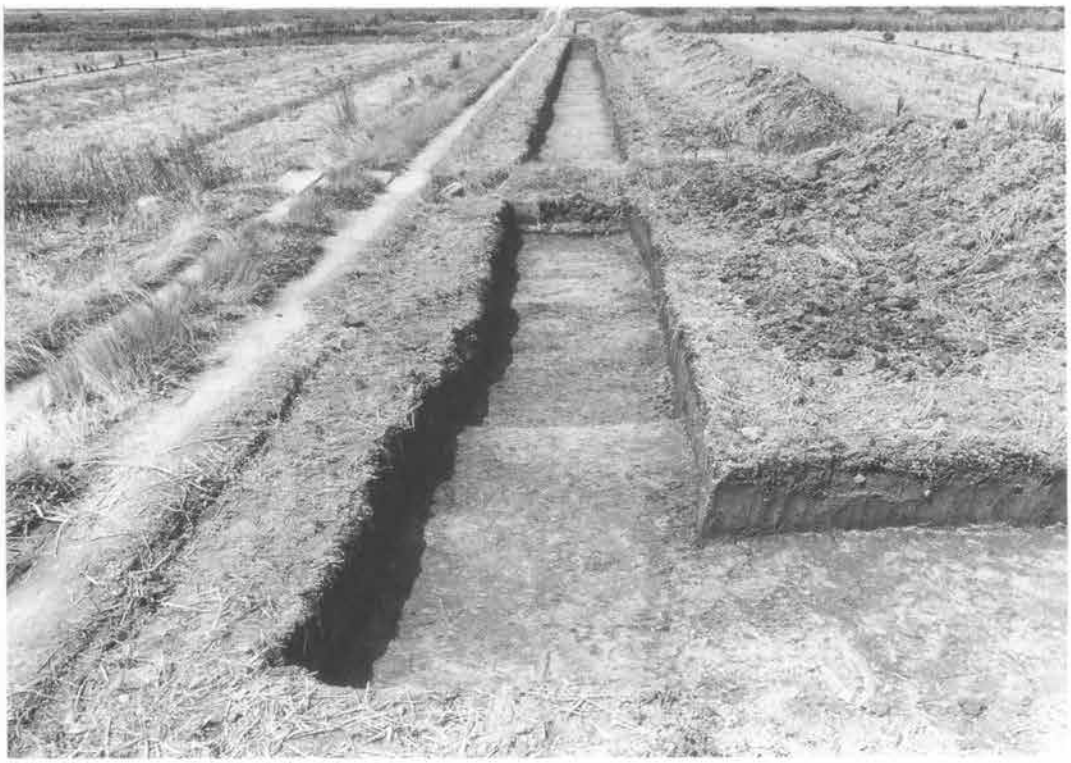
図　　版

(1)　1969年10月14日撮影（S＝1/10,000）

(2)　1988年4月15日撮影（S＝1/10,000）

図版2　第1、2トレンチ　遺構1

(1)　第1トレンチ完掘状況（西から）



(2)　第2トレンチ完掘状況（南から）

(1)第1トレンチ表
土除去作業風景
（東から）

(2)第1トレンチ
第1～3号溝（東から）

(3)第1トレンチ
第4号溝（東から）

図版4　第3トレンチ　遺構1

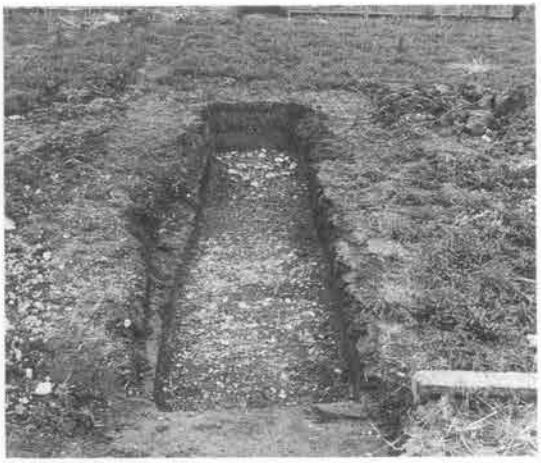
(1)　調査前風景（東から）

(2)　1区完掘状況（東から）

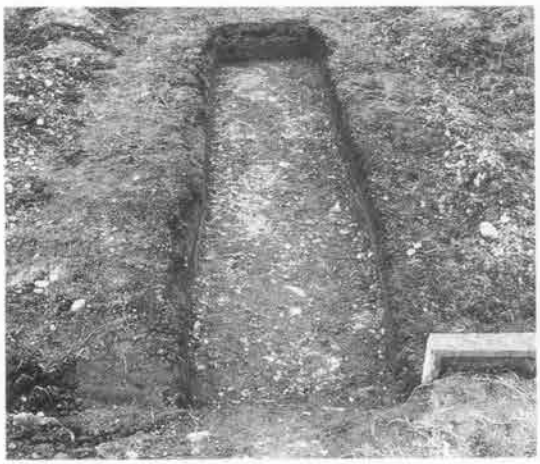
(1)　1区第1号堀（東から）

(2)　1区第2号溝（東から）

(1)　2区完掘状況（西から）

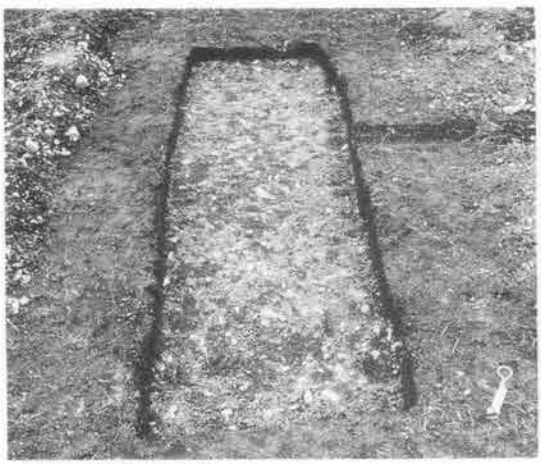


(2)　3区完掘状況（東から）

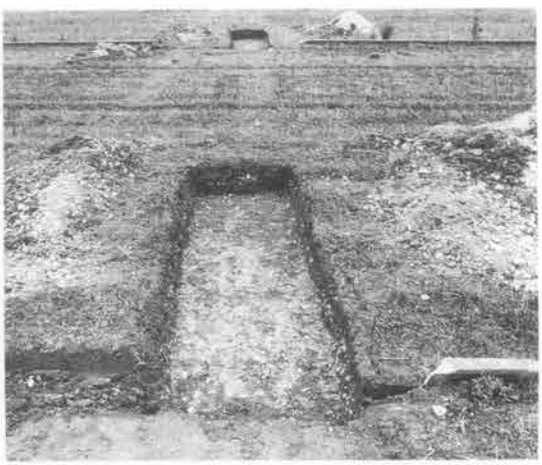


(3)　4区完掘状況（東から）

(4)　5区完掘状況（東から）



(5)　6区完掘状況（東から）



(6)　7、8区完掘状況（東から）

(1)9区完掘状況
（東から）

(2)10区完掘状況
（東から）

(3)調査風景

(1)　13区完掘状況（300m付近より西を望む）

(2)　13区完掘状況（330m付近より東を望む）

(1)　13区完掘状況（330m付近より西を望む）

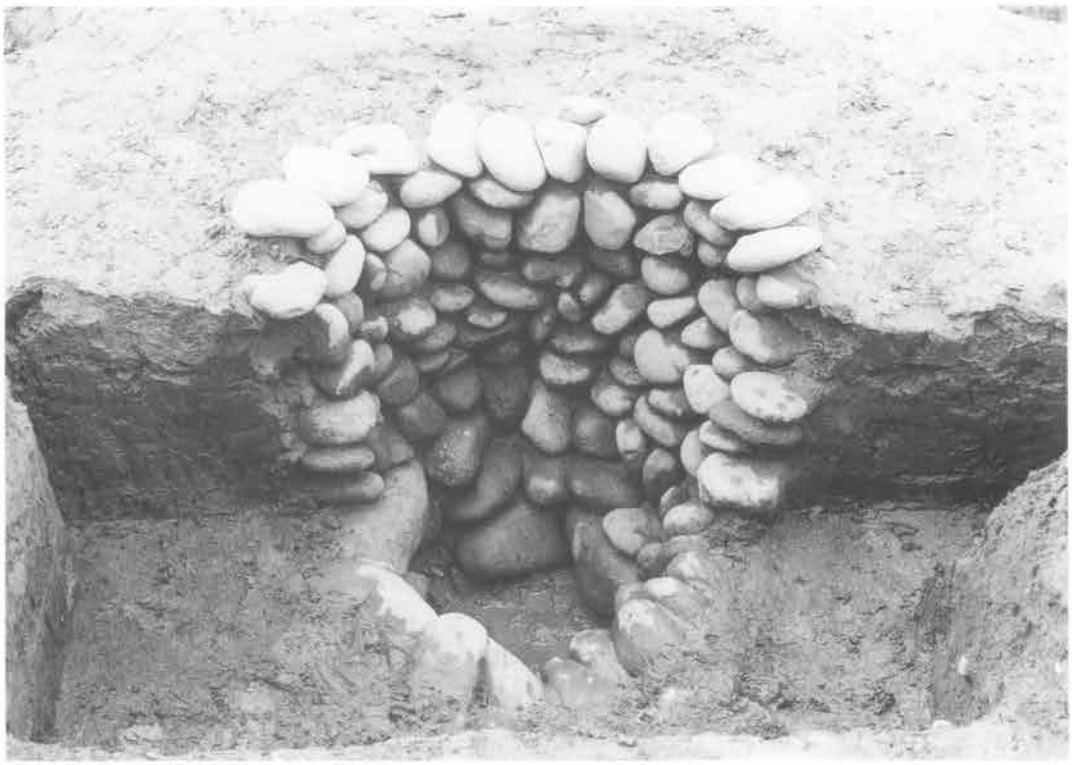
(2)　13区完掘状況（西から）

(1)　14区完掘状況（東から）

(2)　14区完掘状況（420m付近より西を望む）

(1)　第1号竪穴状住居（西から）

(2)　第1号竪穴状住居炉状石組（東から）

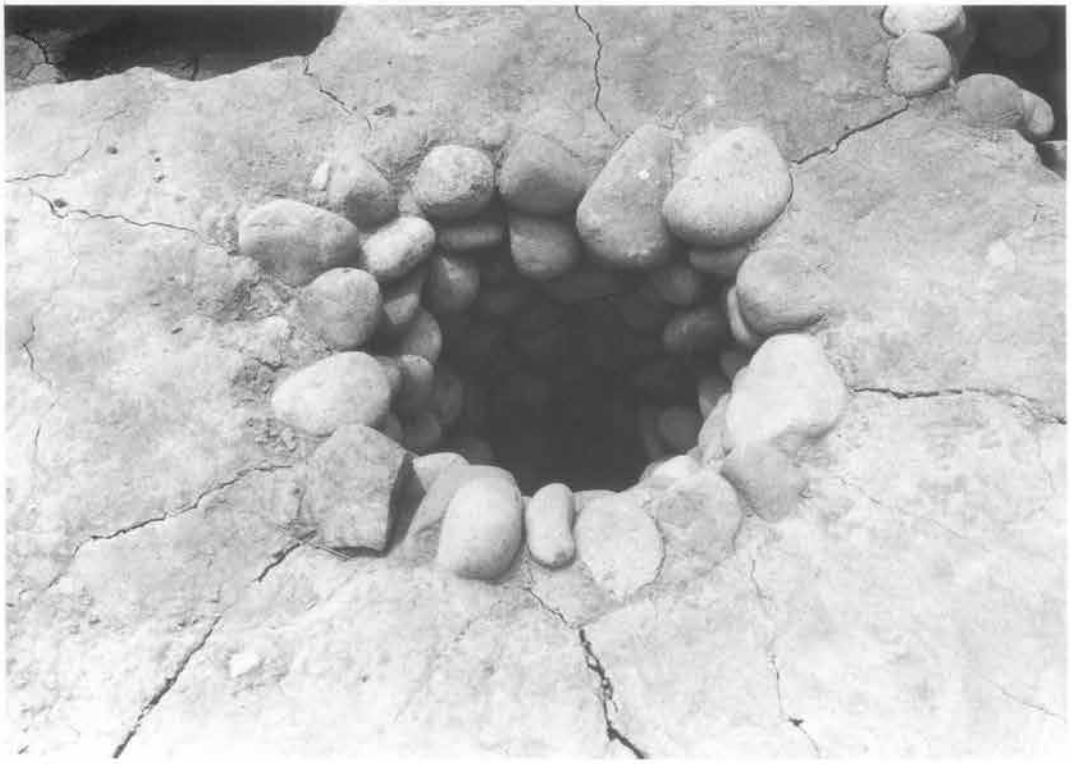


(1)　第1号井戸（南から）

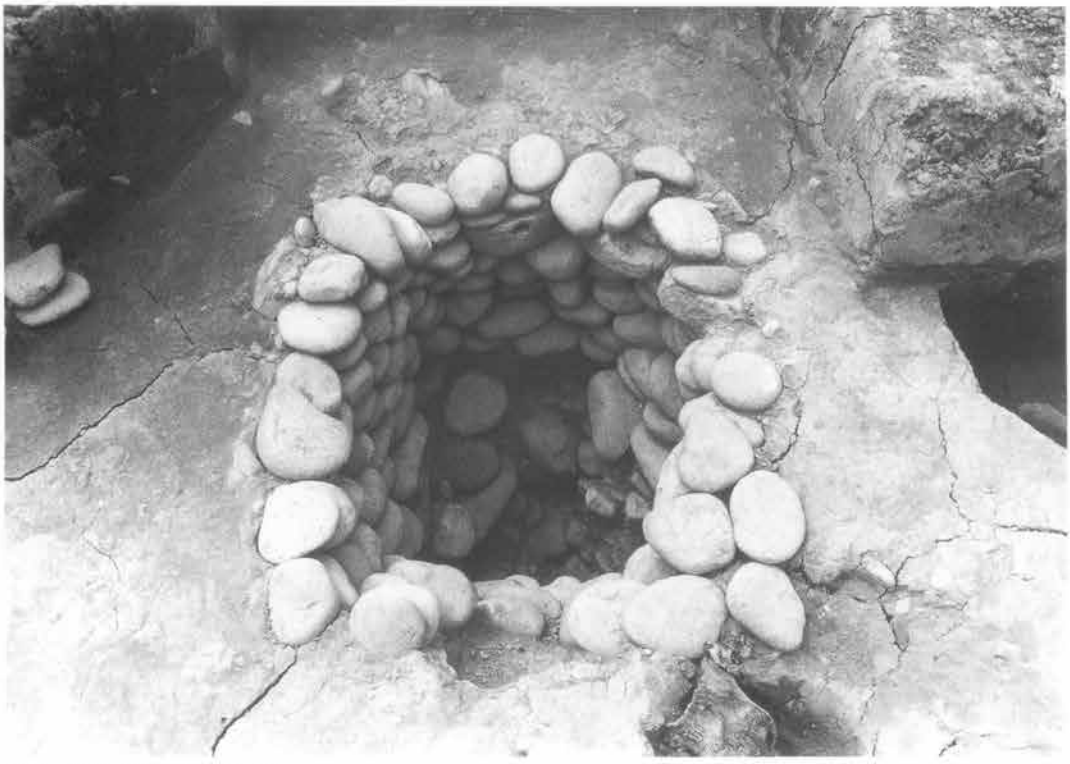
(2)　第3号井戸（南から）

(1)　第4号井戸（北から）

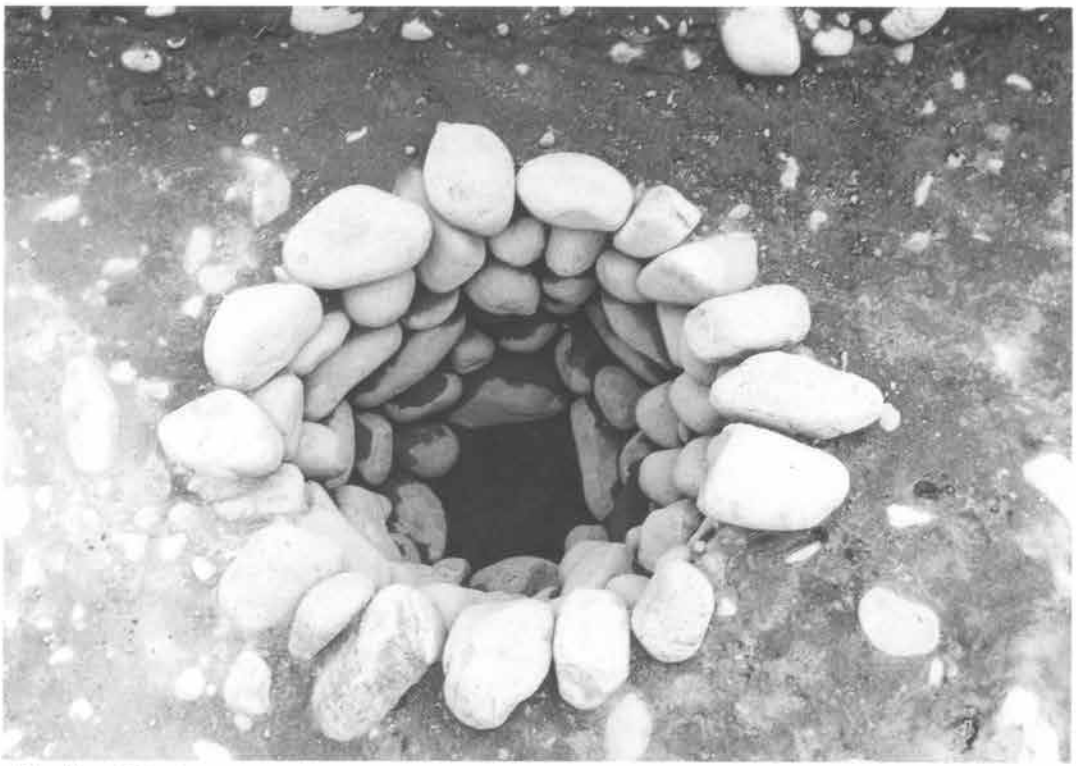
(2)　第5、6号井戸（南から）



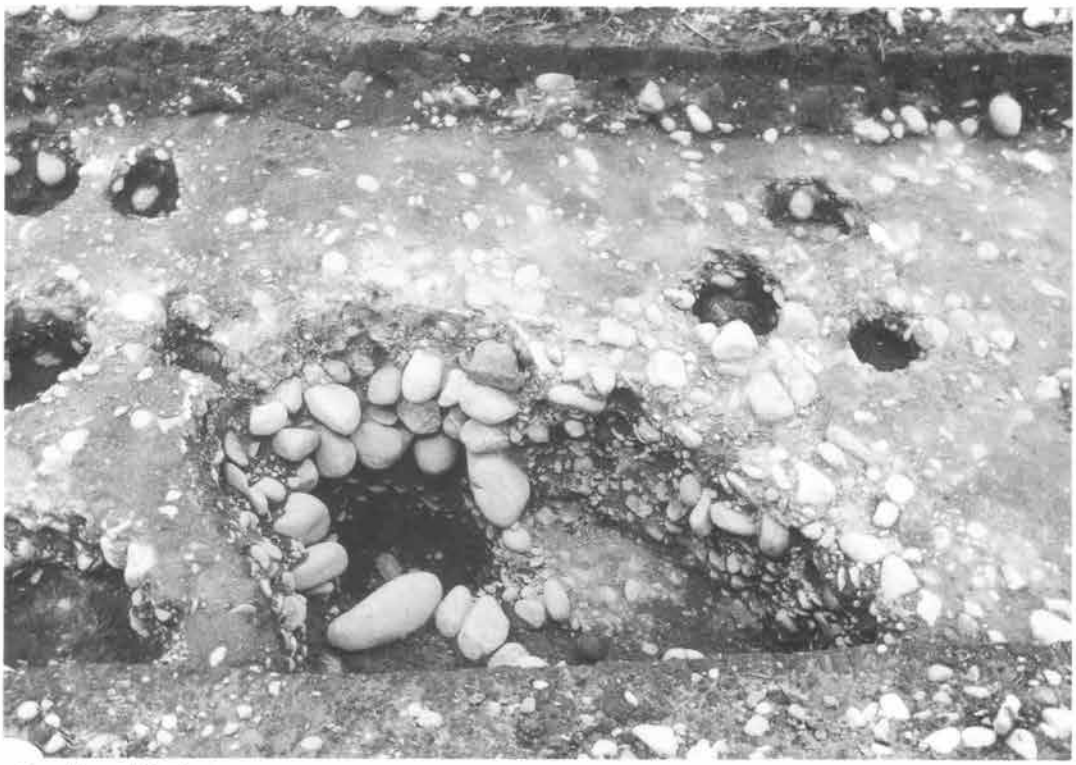
(1)　第5号井戸（北から）



(2)　第6号井戸（北から）



(1)　第8号井戸（北から）

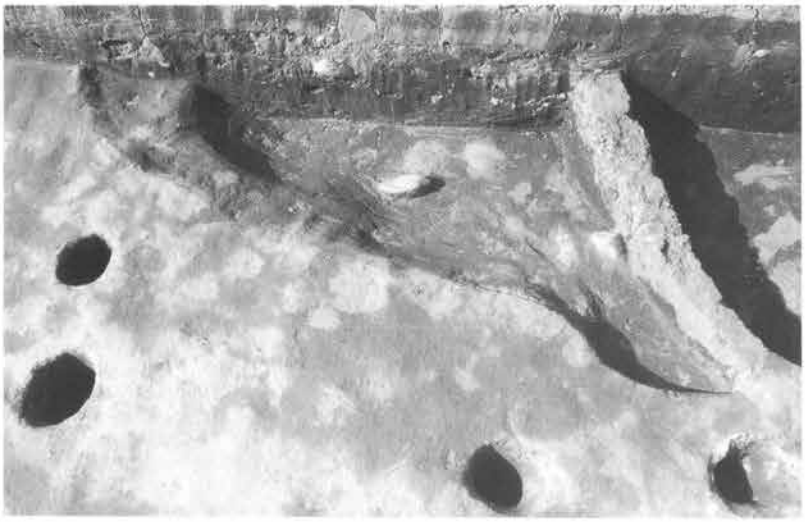


(2)　第9号井戸（南から）

(1)第1号土坑（南から）

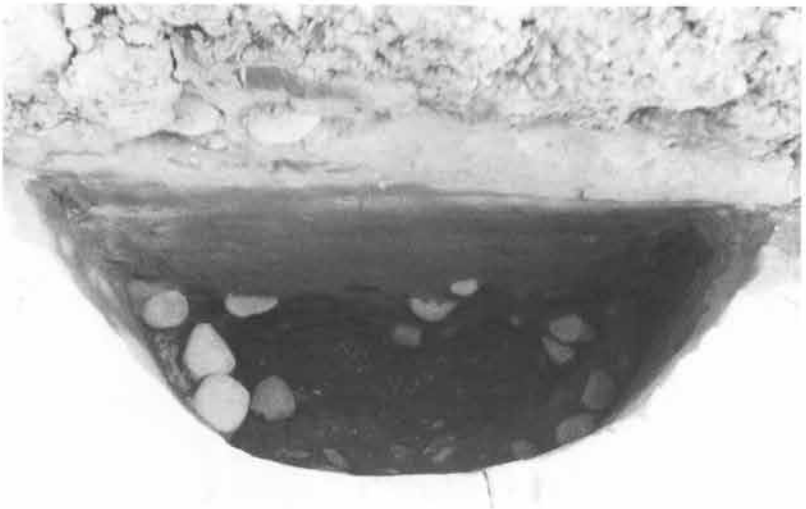
(2)第5号土坑（南から）

(3)第6、9号土坑（南から）



(1)第７号土坑（南から）

(2)第８号土坑（南から）



(3)第10号土坑（北から）

(1)　第11号土坑（北から）

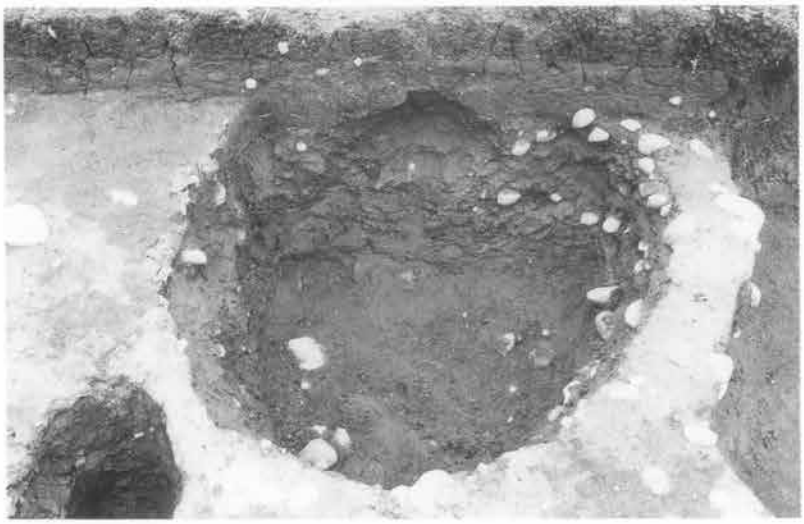
(2)　第18～20号土坑（西から）

(1)第16号土坑（南から）

(2)第17号土坑（南から）

(3)調査風景

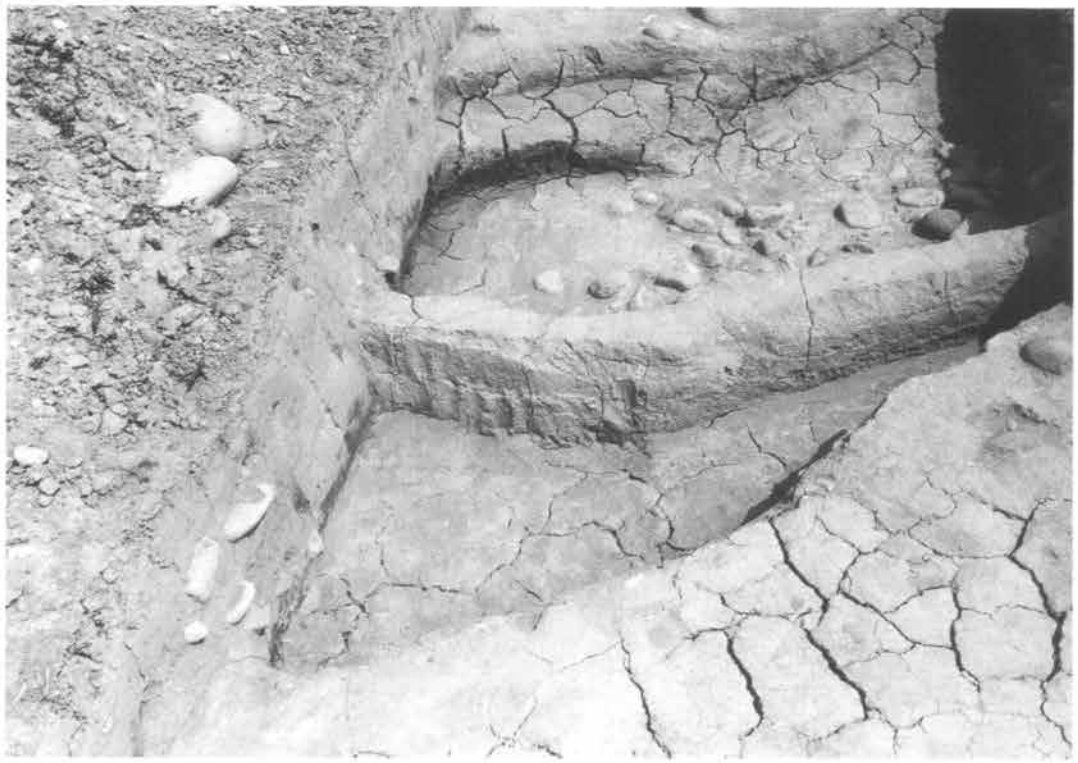
(1)第21号土坑（南から）



(2)第22号土坑（南から）

(3)第24号土坑（南から）

(1)　第4号溝（北から）



(2)　第5、6号溝（西から）

(1) 第5号溝遺物出土状況（南から）

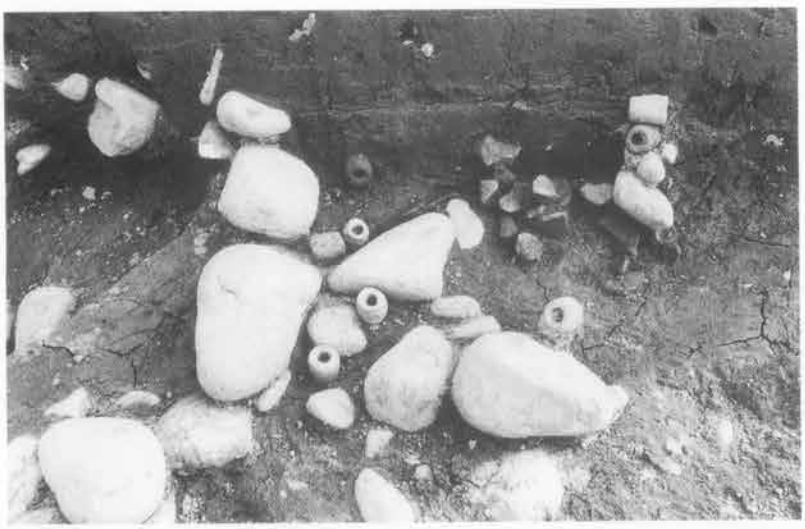
(2) 第7号溝遺物出土状況（南から）

(3) 第7、8号溝（東から）

(1)　第1号落ちこみ状遺構（東から）

(2)　第2号落ちこみ状遺構（東から）

(1)第1号落ちこみ状遺構遺物出土状況（南から）



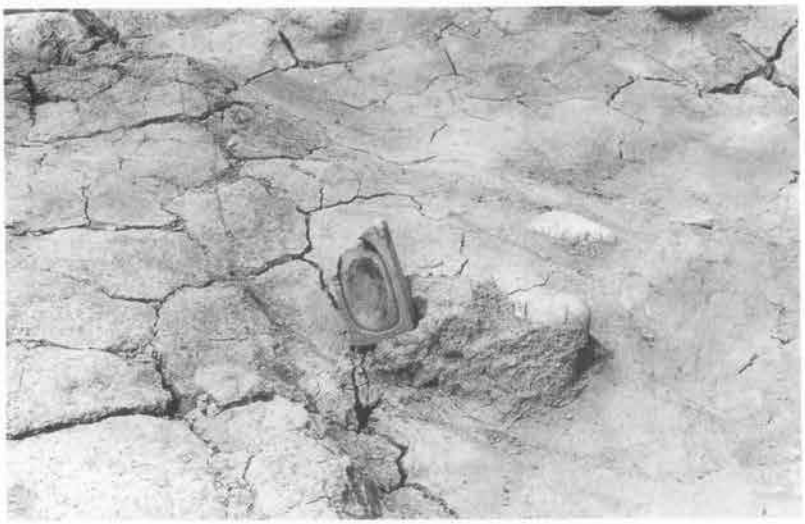
(2)第2号落ちこみ状遺構管状土錘出土状況（北から）

(3)第3号落ちこみ状遺構（南から）

(1) 第4号落ちこみ状遺構東端（西から）

(2) 第4号落ちこみ状遺構西端（東から）

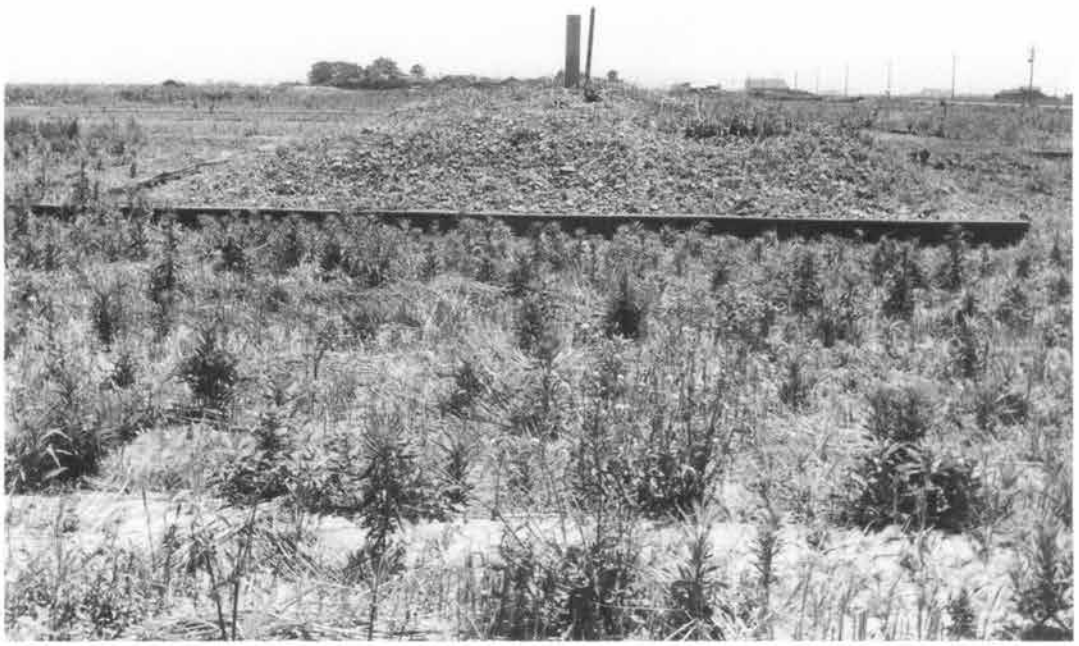
(1)第4号落ちこみ状遺構東端田下駄出土状況（西から）



(2)13区石砚出土状況

(3)14区五輪塔水輪出土状況

(1) 全 景（東から）



(2) 全 景（西から）

(1) 第1、2トレンチ完掘状況（南から）

(2) 第1トレンチ完掘状況（東から）

(1)頂部の石柱

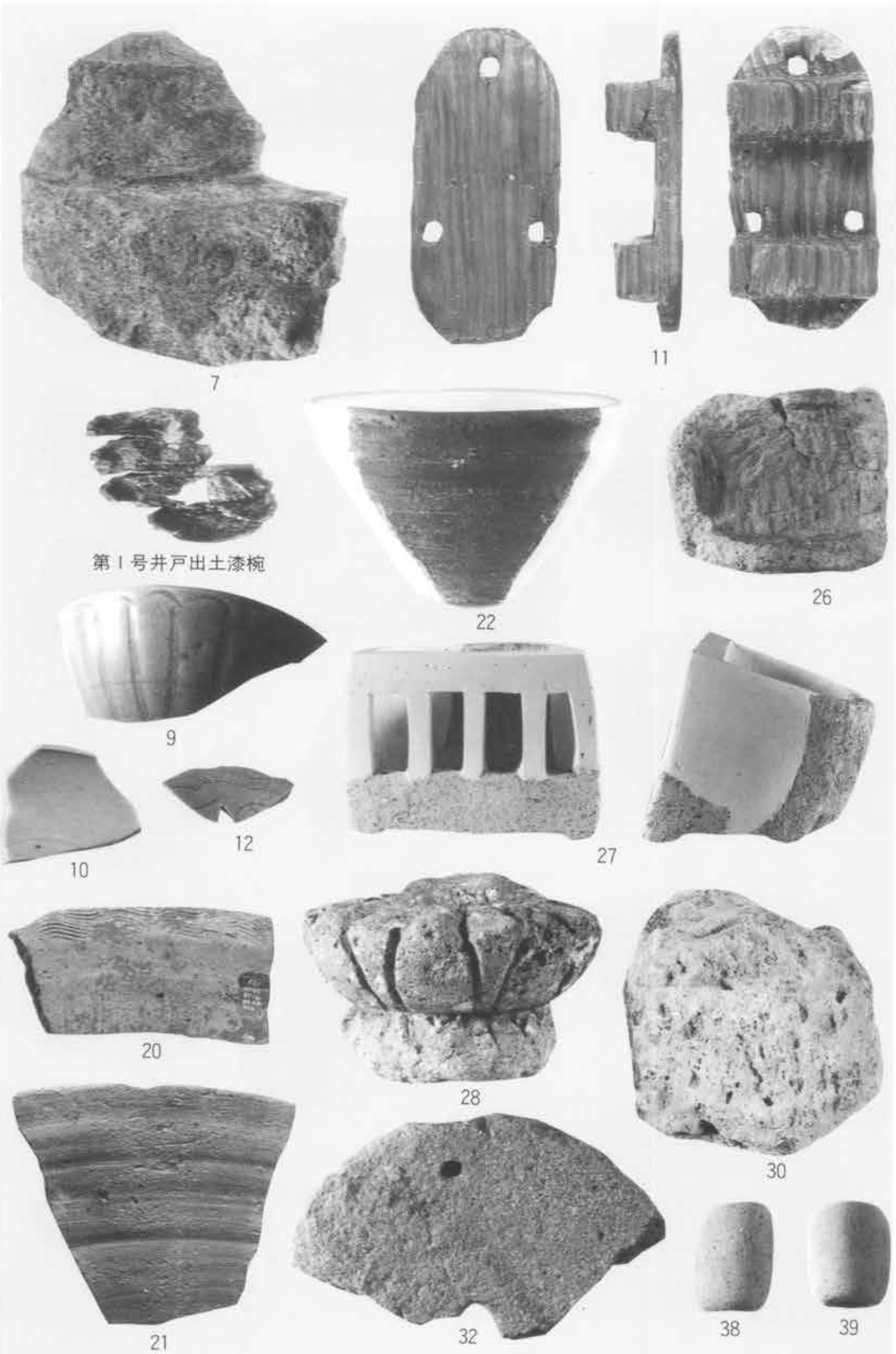
(2)第１、２トレンチ
完掘状況（北西から）

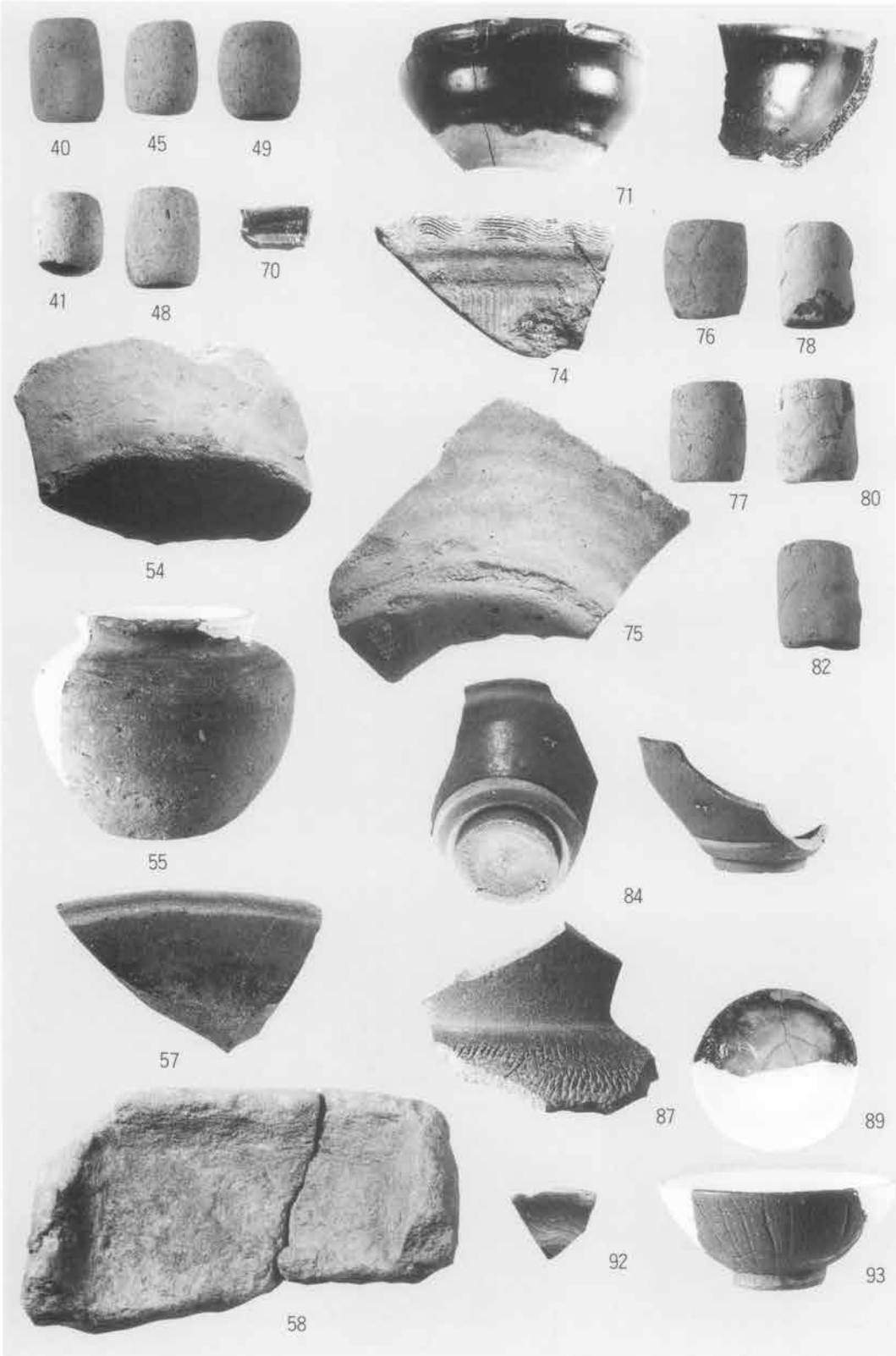
(3)調査風景

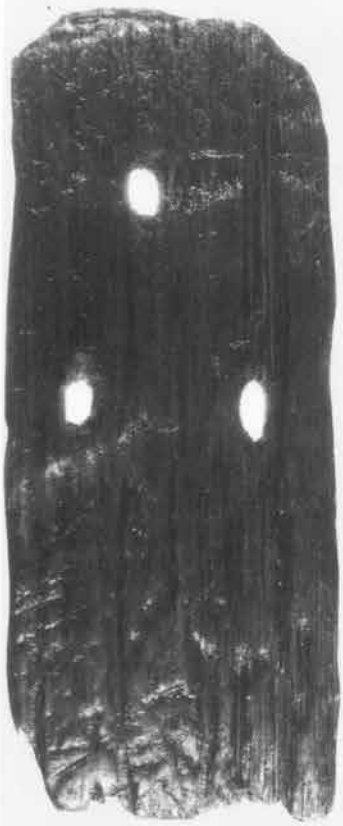
(1)第3トレンチ
完掘状況
（東から）

(2)第4トレンチ
完掘状況
（北から）

(3)第5トレンチ
完掘状況
（西から）


7
11
第1号井戸出土漆椀
22
26
9
10
12
27
20
28
30
21
32
38
39


40
45
49
71
41
48
70
74
76
78
54
77
80
75
82
55
84
57
87
89
58
92
93


96

104

118

127

107

130

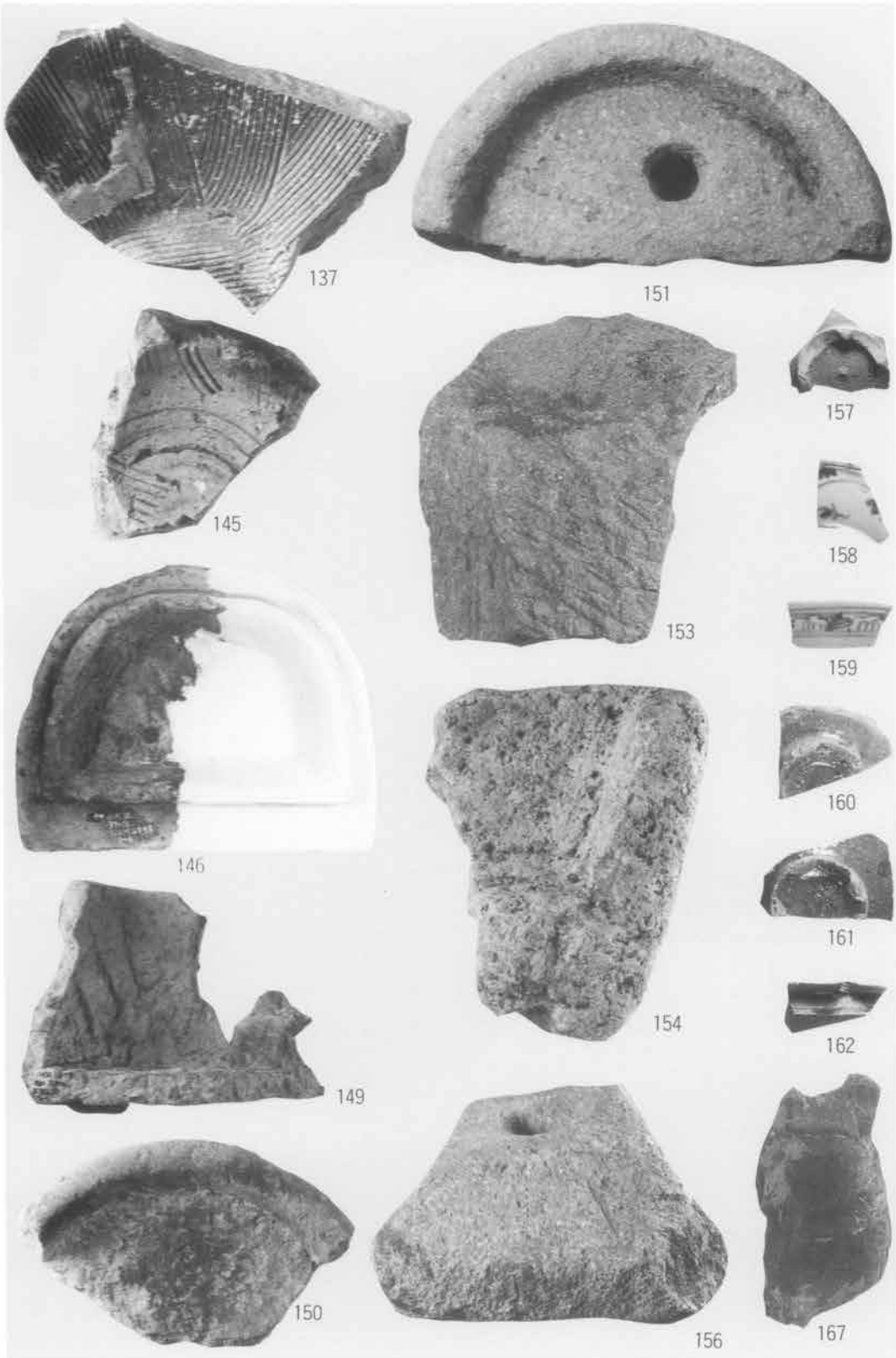
135

98

109

99

110


137
151
145
153
157
158
146
159
154
160
161
149
162
150
156
167

169

172

174

180

185

190

191

192

193

198

202

203

204

210

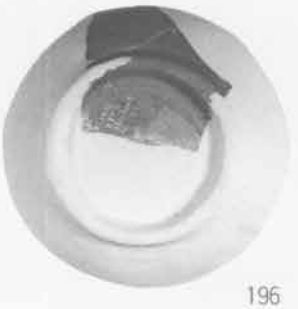
211

213

223

197

232


196

238

242

259

276

268

279

272

283

275

291

調査区
周辺表採

(1)　調査風景（西から）

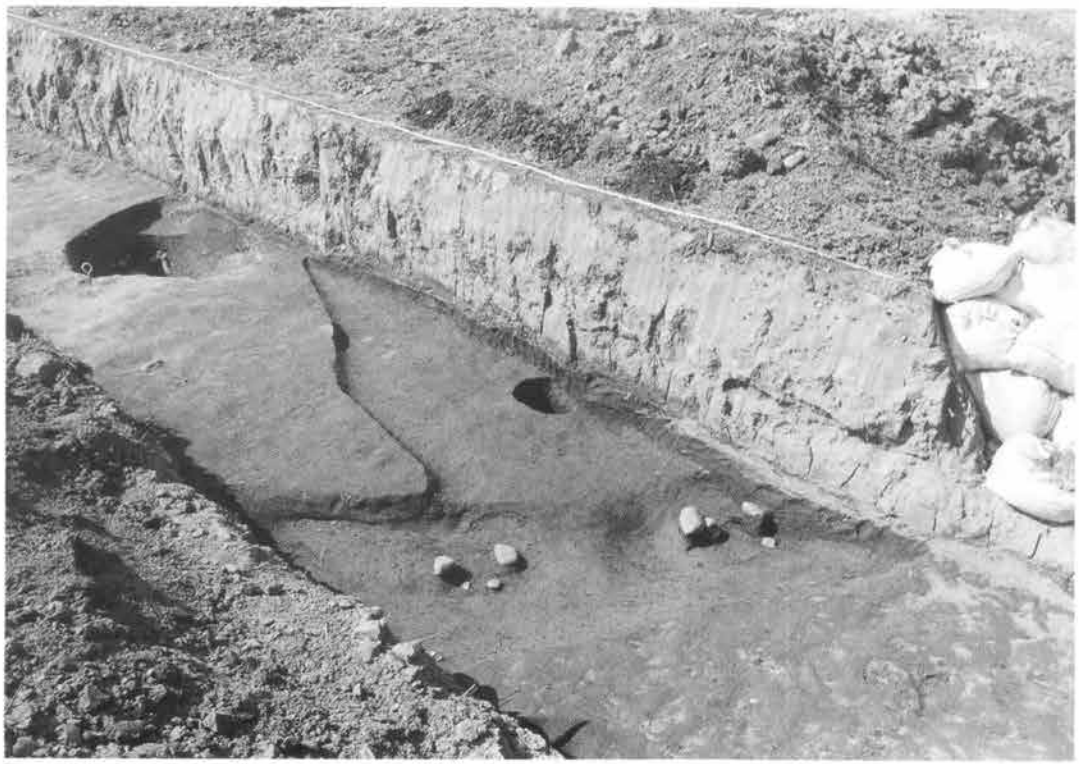
(2)　調査風景（東から）

図版38　ブシャデン地区　遺構2

(1)　西部の遺構群（手前は第6号溝）

(2)　第5号溝（底部が礫層となる）

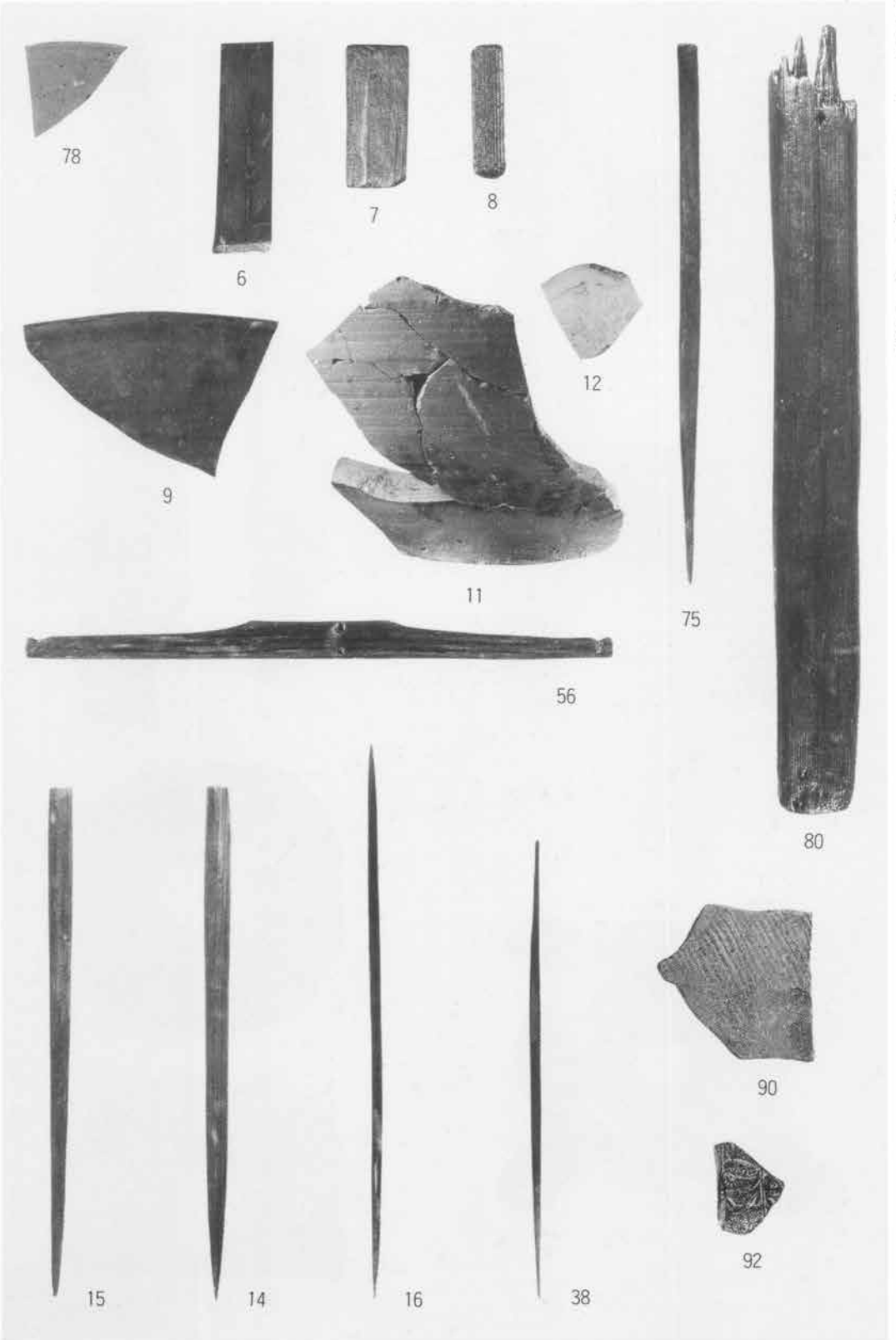
(1)　東部の遺構群

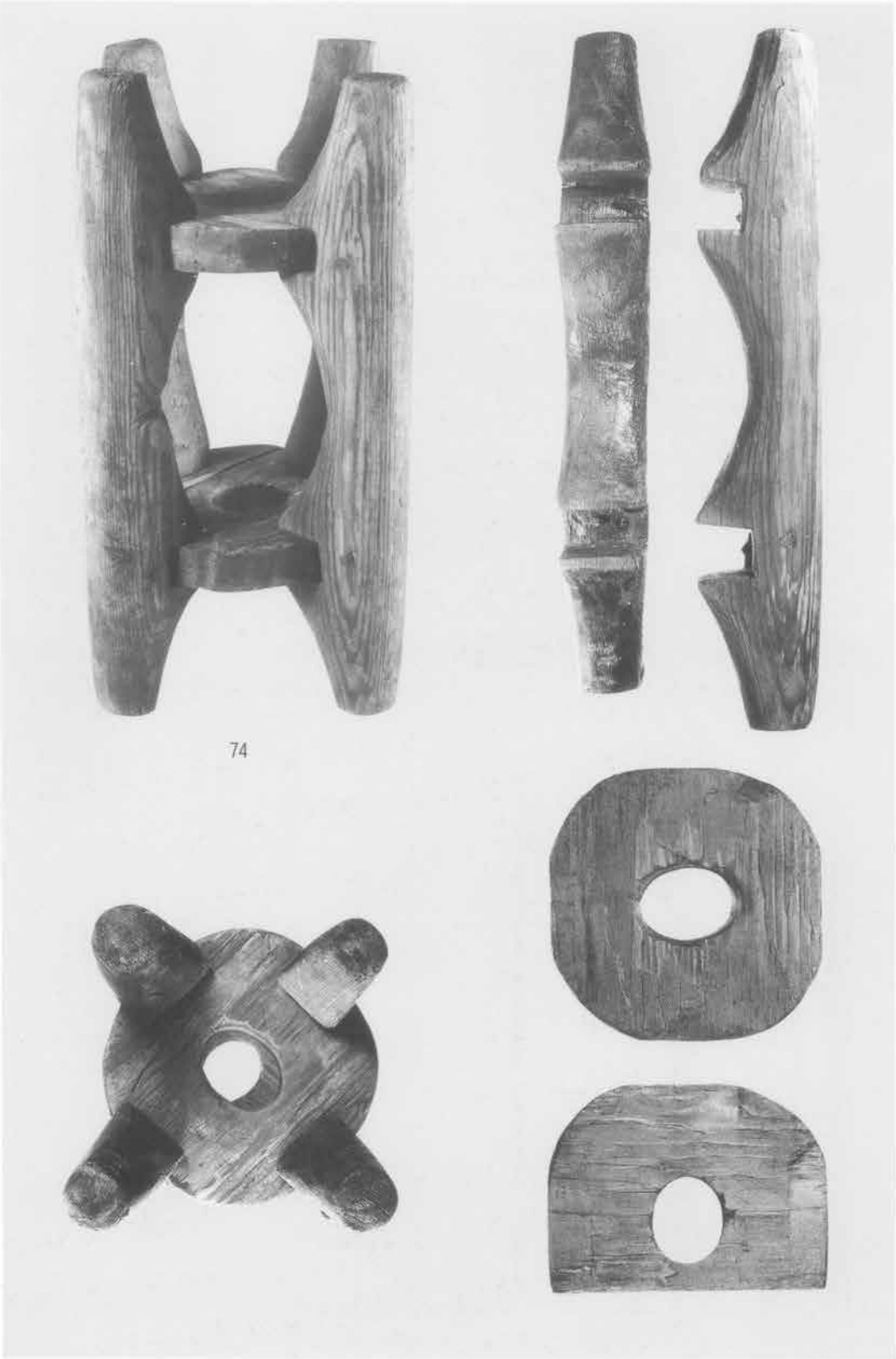


(2)　第２号溝・第１号落ち込み・第１号土坑（手前から）

(1)　調査風景（南から）

(2)　調査区全景（南から）


78
6
7
8
9
11
12
75
80
56
15
14
16
38
90
92



74

小　　川

平成 4 年 3 月 30 日 印刷・発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町 4 丁目133番地
〒921　電話（0762）43－7692番(代)

印　　刷　北國書籍印刷株式会社

©石川県立埋蔵文化財センター　1992